

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Texts of tape-recorded conversations in Japanese dialects (Volume 4)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002273

方言談話資料(4)

—福井・京都・島根—

国立国語研究所資料集 10-4

国立国語研究所

1980

方言談話資料(4)

——福井・京都・島根——

国立国語研究所

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所では、昭和49年度から同51年度にかけて、「『各地方言資料の収集および文字化』のための研究」という題目の下に、全国各地で方言による談話を録音し、その文字化（標準語訳・注つき）を行った。この研究は、急速に失われつつある方言を現時点で録音・文字化し、国語研究の基本的資料とすることを目的としており、当研究所地方研究員の協力を得て実施された。

その成果は、機を得て、順次刊行する予定であり、昨年度までに、『方言談話資料(1)―山形・群馬・長野―』『方言談話資料(2)―奈良・高知・長崎―』を刊行した。本年度は、その第三集および第四集（本書）を刊行する。

本書に収めた録音・文字化資料は、もっぱら、佐藤茂（福井県担当地方研究員・福井大学教授）・加藤和夫（同協力者・当時福井大学学生）、佐藤虎男（京都府担当地方研究員・大阪教育大学教授）、広戸惇（島根県担当地方研究員・京都家政短期大学教授）の四氏の尽力によるものである。また、話者もしくは司会者として、加藤久子、山本仁太郎（以上福井県）、坂本アイ、坂本ヨシノ、渋谷計二、山室二郎、山室富江、渡辺信一、渡辺久子（以上京都府）、渋谷徳右衛門、杉原清一、長瀬マス子、藤原安太郎（以上島根県）の各氏の協力を得たほか、有志の助力があった。記して深く感謝の意を表する。

昭和55年 1月

国立国語研究所長 林 大

方言談話資料作成のための担当者

国立国語研究所言語変化研究部長

飯 豊 毅 一

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室

徳 川 宗 賢 (現在, 大阪大学教授) 佐 藤 亮 一 (室長) 真 田 信 治 (研究員)

沢 木 幹 栄 (研究員) 白 沢 宏 枝 (研究補助員)

国立国語研究所地方研究員 (五十音順)

秋 山 正 次	愛宕 八郎康隆	五十嵐 三 郎	井 上 章	井 上 史 雄
今 石 元 久	岩 井 隆 盛	上 野 勇	遠 藤 潤 一	大 島 一 郎
大 橋 勝 男	岡 野 信 子	奥 村 三 雄	笥 大 城	加 治 工 真 市
加 藤 信 昭	加 藤 正 信	金 沢 直 人	川 本 栄 一 郎	神 部 宏 泰
剣 持 隼 一 郎	後 藤 和 彦	小 松 代 融 一	斎 藤 義 七 郎	迫 野 虔 徳
佐 藤 茂	佐 藤 虎 男	清 水 茂 夫	杉 山 正 世	田 尻 英 三
種 友 明	玉 井 節 子	近 石 泰 秋	土 居 重 俊	日 高 貢 一 郎
日 野 資 純	広 戸 惇	廣 濱 文 雄	北 条 忠 雄	本 堂 寛
馬 瀬 良 雄	松 本 宙	三 浦 芳 夫	虫 明 吉 治 郎	村 内 英 一
室 山 敏 昭	谷 開 石 雄	矢 作 春 樹	山 口 幸 洋	山 本 俊 治
和 田 實				

「方言談話資料」(4) 編集担当者

飯 豊 毅 一 佐 藤 亮 一 真 田 信 治 沢 木 幹 栄 白 沢 宏 枝

収録・文字化担当者 (協力者)

福井…佐 藤 茂 (加 藤 和 夫) 京都…佐 藤 虎 男 島根…広 戸 惇

目 次

刊行のことば	3
まえがき	7
凡 例	10
I 福井県武生市下中津原町	
解説	13
1. 薬師如来の信仰	24
2. お地藏様の話	36
3. 道具持ちの話	42
4. 祝儀の話(1)	49
5. 同 (2)	67
6. 精勤章(軍隊での)の話	74
7. 幣貨改正	81
8. 戦友の話	91
9. 娘の結婚	97
10. 酒屋の話	126
II 京都府綾部市高槻町字観音堂・桜	
解説	151
1. 黒谷の紙すき	166
2. こどものころの衣服	173
3. 小学校とこどもの遊び	189
4. こどものおやつ	209
5. こどものころ	222
6. 家族のこと	239
7. 結婚当時のこと	253
8. 祭りの日のこと	268
9. 農家の主婦の苦しみ楽しみ	273

III 島根県仁多郡横田町大字大馬木

解説	283
1. いつも襦袢を着て欲のなかった人の話	291
2. こってのにへい	304
3. 田植・草取	308
4. 盆と祭	337
5. 稲刈	350
6. 亥の子さん	366
7. 膝塗り餅・とろへん・ほとほと	370
8. どんど焼・ひとひ正月・こと祭	376

まえがき

研究の経過

この研究は、昭和49年度から同51年度にかけて行った。

昭和49年度は準備期間とし、全国47都道府県で各種の実験的録音・文字化を行い、その結果に基づいて、次年度以降の計画を立案した。

50年度は、全国的視野のもとに重点地域を定め、23の府県から各1地点を選定して、老年層の男性と同女性との対話、もしくは、男女を含む老年層話者3人の会話を録音し、文字化することとした。

録音・文字化を実施した府県は次の通りである。

青森^{*}、岩手、宮城^{*}、山形、群馬、千葉^{*}、新潟、石川、福井、長野、静岡、愛知、京都、奈良、鳥取、島根、広島、愛媛、高知、長崎、宮崎、鹿児島^{*}、沖縄

51年度は収録地点を4地点減らし(*印の県を割愛した)、19の府県について、原則として50年度と同一の地点で、(a)目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話、(b)老年層の男性と若年層の男性との対話、もしくは、両者を含む3人の話者の会話、(c)場面設定の会話、の3項目についての録音・文字化を行い、なお、このほかに収録可能な地域では、付録として、民話の収録・文字化も実施することとした。(c)については、「品物を借りる」「(旅行などに)誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の八場面を、全地点共通の場面として設定した。

以上の録音・文字化資料は、すべて国立国語研究所で整理し、保管しているが、当研究所では、このうち、50・51両年度分について逐次刊行していく予定である。本書は、50年度に収録・文字化を行った老年層話者による談話資料のうち、「福井県武生市下中津原町」「京都府綾部市高槻町字観音堂・桜」「島根県仁多郡横田町大字大馬木」の3地点分についてのものである。

話者の条件

話者には次の条件の人を選ぶこととした。

1. 老年層話者による談話(50年度)

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が比較的短い人で、日常生活ではもっぱら方言を用い、また、録音機を前にしても方言色豊かなおしゃべりが可能な人。したがって、よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が得られないときには、近隣地から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言の違いが認められない場合は可とする。話者の年齢は、原則として収録時において60歳以上とし、やむをえないときは、55歳以上も可とする。発音その他の障害がなければ、高齢者で

も差し支えないが、話者相互の年齢が離れすぎるのは好ましくない。また、話者相互の地位・身分関係も、ほぼ対等であることを原則とする。

2. 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話 (51年度)

話者の年齢は上記1に準ずる。この項は、改まった表現や種々の敬語形式などを得ることをねらって設定したものであり、対話の具体的な人物像として、たとえば、旧地主階層の人物対旧小作階層の人物、僧侶対その壇家にあたる人物、その土地出身の教員(校長など)対その土地の一般的職業(農業・漁業など)に従事している人物などを候補として示したが、地域の事情もあると思われるので、この点は各地の担当者(地方研究員)に一任した。なお、目上にあたる人物として、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあると考えられるので、在外歴に厳しい条件はつけないことにした。

3. 老年層男性と若年層男性との談話 (51年度)

老年層については原則として60歳以上、若年層については原則として20～30歳台とする。話者相互の地位・身分関係は、ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。在外歴については1に準ずる。

4. 場面設定の会話 (51年度)

上記1に準ずる条件を備えた老年層の男女に、場面に応じて、種々の演技的対話をしてもらった。

5. 民話

特に条件はつけず、その土地で生まれ育った民話の語り手であれば可とした。

司会者

主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が同席することとした。司会者はこの研究の主旨を理解し、かつ、司会役としての能力を有する地元方言の話し手が望ましい。司会者の年齢・居住歴等に、特に条件はつかなかった。

録音量・文字化量

50年度・51年度ともに各約60分程度の録音量(51年度については、各項目平均20分、合計60分程度)について文字化を行うこととした。また、内容の豊かな文字化資料を得るために、文字化すべき録音量の数倍を録音し、その中から適切な部分(話がとぎれず、しかも発言が特定の話者にかたよっていないこと。話の流れ、話題の展開が自然であること、など)を選択して文字化することとした。

文字化原稿の作成・表記

1. 将来のオフセットによる複製印行に備えて、一定の様式の文字化用紙を作成し、担当地方研究員に配布した。
2. 文字化は原則として表音的カタカナ表記によることとした。これは、利用者の便宜、文字化

作業の能率などを考慮してのことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記も可とした。なお、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲・内容については、各担当者が「解説」の中で説明することとした。

3. アクセント、文末イントネーションの記述の有無は、その表記法を含めて担当者の判断にまかせた。
4. 聴き取りが困難な箇所や、言いよどみ、言い重なり、言い直し、笑い声などについては、これらを一定の符号で表わすことにした（凡例参照）。

文字化には、標準語訳、および、場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注をつけることとした。なお、標準語訳はあくまでも内容理解のための手がかりの一つと考え、訳が問題となるような箇所については、できるだけ詳しい注をつけることを担当者に求めた。

収録方言・表記・収録内容についての解説

文字化原稿とは別に、収録方言・表記・収録内容についての解説を担当者に求めた。解説には、原則として次の事項を記すこととした。

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名
2. 収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）
3. 収録した方言の特色
 - ①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係
 - ②音声・音韻上の特色
 - ③文法上の特色

B. 表記について

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲、特殊な表記についての説明など。

C. 収録内容の概説

1. タイトル
2. 録音年月日
3. 録音場所
4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴など
5. 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

凡 例

1. 場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注は各章の末尾にまとめて記し、該当箇所を本文のそれぞれの位置に番号（かっこつき）で示した。
2. 発言や録音が不明瞭なため聴き取りが困難な箇所には~~~~~線をつけた。
例 クズレル カンシテ <27ページ 3段>
3. 最終的に聴き取り不能の箇所には~~~~~線のみを記した。
4. 言いよどみは、その末尾に-----線をつけた。
5. 複数の発言が重複した場合には、重複部分に_____線をつけた。
例 Y オワンテナ (K ヒトリデワ オガマレン) <27ページ 7段>
6. 言いかけて、それを言いなおした場合には、言いかけた部分に××××××××をつけた。
例 クサ クサラント <26ページ 6段>
×××××
7. 笑い声、咳ばらいなどは、(笑)、(咳)のように示した。
8. 同席者の短い発言や突然の訪問者のことばなどは文字化していない場合がある。その際や、録音テープを編集して談話内容の一部を削除した際には、該当箇所に*の符号をつけた。

I. 福井県^{たけふ}武生市^{しもなかつ}下中津原町^{はらちよう}

収録・文字化担当者 佐 藤 茂
同 協力者 加 藤 和 夫

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名

福井県武生市下中津原町

2. 収録地点の概観

- a) 位置：福井県嶺北地方の南西にある武生市、その武生市の市街地より南西へ約15Km(道のり)のところにある武生市坂口地区のほぼ真中に位置する。南は山を境してすぐ南条郡河野村に接する。
- b) 交通：武生の市街地よりバスで約30分、1日に4往復しかないそのバスで湯谷町(坂口地区の行政上の中心地)下車、東に徒歩約15分で下中津原町に着く。道路は同町から東に向かう県道が武生市春日野町を経て国道8号線に通ずる。しかしこの道は途中が舗装されておらず、ひどいつづら折りの急坂のため同地区以外の人にはあまり利用されない。また同町から西に向かう県道は上述の湯谷町で南北に別れ、南は武生市中山町(坂口地区)を経て海岸の南条郡河野村甲楽城に通じ、北は武生市勝連花町、同市広瀬町などを経て武生市街地へと通じている。10年程前までは下中津原町もバスが通ったが路線変更のため現在は全く通らない。従って殆どの家庭が、このような交通の不便を補うため自家用車を所有している。
- c) 地勢：南から西にかけての海岸山脈を越えればすぐ越前海岸という位置にありながら、標高約150mに位置し武生市中心部より約100m高い山合いの地であるため、夏は涼しく冬は武生市でも一帯の積雪地帯で雪の少ない年でも1mを下ることはまずない。四方をすべて標高300~500mの山系に囲まれており、その山合いの小盆地に水田・畑をわずかに有す。中央を、武生市の北で日野川に合流するところの吉野瀬川の支流が流れている。
- d) 行政区画の変動：江戸時代における旧藩領は、福井県史及び福井県南条郡誌(いずれも署名)によると、西尾藩(三河・松平氏)領(隣接の坂口地区内の下別所町、勾当原町、湯谷町と同様)

とになっている。明治三年の廢藩置県により、最初西尾県の所管に属すが、その後敦賀県の所管に属し、また明治17年7月の地方官選任の事と共に、敦町村以上に一戸町を置く事になり、その当時は現在の坂口地区六ヶ村として一行政区画を成さず、中津原・下別所・湯谷とともに現在の武生市王子保地区3ヶ村、南条郡河野村1ヶ村と計8ヶ村で1つの役場の下にあった。しかし明治21年4月の市町村制発布により、丹生郡より中山・勾当原両村が南条郡坂口村に編入され、現在の坂口地区六ヶ村の姿を形成するに至った。そして戦後の昭和26年3月に、下中津原は他の5つの部落と同時に武生市に編入され現在の武生市下中津原町に至っている。

e) 戸数・人口：明治期以来過疎化の進んだ坂口地区の中では珍らしく当下中津原町は戸数及び人口の変動が少ない。これは下中津原町が坂口地区の中でもほぼ真中に位置し、水田、畑などにも恵まれて生活が安定していたためと思われる。

以下、明治以後の人口及び戸数の変動、ならびに現在の状況を示す。

(下中津原)

年度	明治11年	大正9年	大正14年	昭和5年
戸数	38 軒	40	36	36
人口	197 名	188	149	130

(現在)	
昭和36年	昭51年 ^{1月} 現在
37	31 軒
165	143 名

f) 主な産業：殆どが農業或は農林業を営む。しかし最近の社会事情や山合いの小盆地という土地条件を反映して、全くの専業農家は一軒もなく殆どどの家庭は夫婦ともに近くや武生市の中心部などの会社、工場に勤めている。土建業などの日雇い人夫も何人

かおり、また大工・左官・水道工事などの専門職に従事する者、公務員も多い。ここ数年来水田の耕地整理が進み、農業の大型機械化による省力化が更にその傾向を押し進めているようである。その点では農家とはいながらも当の農業は全く副業化していると言えようである。水田における水稻栽培のほかは、畑で自家用の野菜を作る程度で特に目だつ産業はない。ただ一部の家庭で営利を目的としたレタス栽培、しいたけ栽培、粟栽培が行われているが、まだまだ軌道には乗っていない。山地の利用は、戦前は炭焼きが盛んであったが現在は全く見られず、杉や松の植林が行われる程度で特に目ぼしいものはない。

3. 収録した方言の特色

① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

まず方言区画上の位置について、方言区画上の位置を言う場合、その方言区画の方法自体に諸説あるので問題は残るが、一心ここでは平山輝男氏の区画に依りたいと思う。それによればこの武生市下中津原町方言は、本土方言の中の西部方言、そのうちでも北陸方言に位置する。福井県は木之芽峠を境に同県でありながら、若狭地方は近畿方言に区画される。従って、武生市下中津原町方言は北陸方言のうちでも、最も南よりの地域に入る方言とすることが出来る。この区画上の位置は、東条操氏の方言区画（東条操編『日本方言学』昭和28年、33頁）においても同じことが言える。

隣接諸方言との関係について、木之芽峠を境して南の若狭地方、滋賀県地方は近畿方言に入るので、いろいろな面でかなり異なる所もあるが、同じ西部方言として共通点（特に音韻・文法面）も見られる。東の岐阜県は東部方言に入り、その違いは前者よりもかなり明らかになる。さてそれでは同じ北陸方言の中での関係はどうであろうか。その1つの手がかりとしたい。これまでになされた平山輝男氏や柴田武氏の報告によると、当武

生市下中津原町方言は一型アクセント地域に入る。この一型アクセントは武生市のほか、それより北の鯖江市・福井市・足羽郡と丹生郡の一部にあると報告されている。それでは武生市の南の南条郡はどうかという、平山氏は武生市の東、今立郡上池田とともに京阪式アクセントの色彩が強いとしている。その他、武生市の北の丹生郡の一部と坂井郡、それに吉田郡・今立郡の一部には曖昧アクセント、また大野郡石徹白（現在岐阜県）や同郡下穴馬・上穴馬には東京式アクセントが、その西の大野市・勝山市などでは東京式と京阪式アクセントが混在していると報告されている。つまりアクセントのみを考えると福井県嶺北方言は非常に複雑な姿を示していると言えようである。（つけ加えれば、石川県（能登半島の一部を除く）と富山県は京阪式アクセントである）。しかし語彙・文法面ではある特定の地域を除いては、ほぼ同系であると考えるように思う。

② 音韻上の特色（モーラ表・音声的特徴）

〔モーラ表〕

u	o	a	e	i			
ku	ko	ka	ke	ki	kju	kjo	kja
gu	go	ga	ge	gi	gju	gjo	gja
ɲu	ɲo	ɲa	ɲe	ɲi	ɲju	ɲjo	ɲja
su	so	sa	se				
zu	zo	za	ze				
ʃu	ʃo	ʃa	ʃe	ʃi			
ʒu	ʒo	ʒa	ʒe	ʒi			
	to	ta	te				
	do	da	de				
tʃu	tʃo	tʃa	tʃe	tʃi			
tʂu	tʂo	tʂa	tʂe	tʂi			
nu	no	na	ne				
ɲu	ɲo	ɲa	ɲe	ɲi			

	ho	ha	he				
ɕw	ɕo	ɕa		ɕi			
Fw		fa	fe				
pw	po	pa	pe	pi	pju	pjo	pja
bw	bo	ba	be	bi	bjw	bjo	bja
mw	mo	ma	me	mi	mju	mjo	mja
ju	jo	ja					
rw	ro	ra	re	ri	rju	rjo	rja
		wa	we				
N	Q	E					

〔音声的特徴〕

1. 4つがなの区別なく、ズーズー弁でもない。
2. 語中・語尾のが行子音は〔リ〕である。
3. セ・ゼの子音は〔ジ〕,〔ズ〕である。
4. 〔kw〕,〔gw〕はない。
5. 1音節語の長音化が見られる。例)〔ki:](木)
6. 長音節の短音化もしばしば現われる。例)クンショー→クンショ(勲章)
7. 〔r〕と〔d〕の混同現象がある。例)〔dazio〕(ラジオ)
8. 連母音〔ai〕は、全般に〔ai〕がみられるが、〔e:]に変化したものも多い。例)〔ere:](エライ),〔ne:](ナイ)。
9. 連母音〔au〕>〔o:]、〔ei〕>〔e:]も一般的。

③ 文法上の特色

1. <という>にあたる部分は殆ど全て<クッキー>か、または短音化した<クッキ>になる。

2. 断定の助動詞「ダ」は「ジャ」、「ニャ」、「ヤ」に変わる。前の3つは、同一人物でも併用の状態にあり、丁寧断定の助動詞「デス」に対するほどの待遇的差異はないと思われるが、若干の差異が認められる。「エ」も稀に使われる。そしてこれらに続くとき、全般に撥音化が起る。
3. 打消の助動詞「ナイ」は「ン」となることが多い。「書ケナンダ」のように使われて、可能や能力の否定を表わす。
4. 尊敬の助動詞「ナサル」は「ナハル」または「ナル」になることが多い。
5. 軽蔑の意の助動詞として「サラス」が使われる。「ヤガル」と同意。
6. 補助動詞としては、継続体「テイル」が「テル」、その否定形が「テイン」となる。また敬体継続は「テナハル」、「テナル」となる。完了態では「テシマウ」が「テマウ」、「テシマッタ」が「テモタ」に。予備態「テ・オク」は「トク」、供与態「テ・ヤル」は「チャル」となる。
7. 格助詞「カ」や「ヲ」は省かれることが多い。
8. 準体助詞と考えられる「ノ」は「ン」に変わることがある。
9. 接続助詞は「テモ」も「デモ」も使われるが、「タツテ」「カッテ」も併用されている。例) スミヤキ(炭焼き)シタカッテ。また「ケレド」は「ケド」となっている。「カラ」は「サク」(「サカイ」の訛音)となる。「ノデ」は「ノ」が省かれて「デ」となる。
10. 副助詞では、「バカリ」が「バッカ」、「クライ」が「クレー」となっている。
11. 文末助詞のうち、疑問の「カ」は「ケ」なる場合がある。また念を押す意で「ガ」や「ゲ」が使われる。例) キタンヤケ、ナフランノデスガ
12. 動詞「スル」は「シル」になる傾向が強い。
13. 代名詞については、「ワタシ」の常体「ウラ」または「ワ

テ」が一般的。対象では常体における「オメー」, 「オメエ」が特徴的。

14. 「ソノ」, 「ソウ」, 「ソシテ」などの「ソ」は「ホ」となりやすい。
15. 文末において断定の助動詞などが省かれて、その前の音節（ノダのノにあたる部分が多いように思われる）が撥音化することがある。例）アルラジン, コシラエタルン。

4. その他（地点選定の理由、協力者の氏名、協力内容など）

地点選定の理由には、まず協力者である加藤和夫（福井大学学生）の生地（武生市下中津原町）であつたということがあげられる。調査地点が協力者の生地であるということは、調査段階および調査結果の整理段階でいろいろ有利な点が多い。まず話者（被調査者）の選定でそのことが言える。協力者は同村（下中津原）の老人を一人ひとりよく知っており、また今回の調査内容・目的も前もって理解していたので、2名の老人に協力を依頼する時点で、出来るだけ方言をよく残していて、かつ、マイクの前に出ても相手と気楽に話しの出来るような人を選ぶことが出来る。また、当日の司会も加藤が担当したが、2名の老人にとって司会者が同じ村の者で、かつ青年であり、調査場所の加藤宅も旧知の場所であるので、会話も特に滞ることなく思いのほか順調に進み、4時間分の収録を無事に終わる。その後の調査結果の整理段階でも、地名・人名をはじめ家号などの純ローカルのものについては加藤の知識がこれを助け、その他の文字化、標準語訳等々についても、その都度あらかじめ被調査者に問い合わせるという煩雑さを多く避けることが出来た。

更に言うなら、調査地であつた武生市下中津原町は一志市に属しているものの、最も山間部の僻地であるので、方言の保存度もかなりいいと予想されたことも、地点選定の理由である。

B. 表記について

1. 仮名表記について

- (1) [sæ] [dæ] [næ] …はサエ, タエ, ナエのように表わす。
- (2) 小さく、かすかに聞こえる音は、小さな仮名で表わした。(例) ソレマタ, ホンテ, ナブランノテスカなど。注: 但し拗音表記は別。
- (3) [ɛ]については、だいたい三種の表記をした。例えば [de] についてみると、デア, デエ, デ(デー)。注: しかし概してこちらの方言では [e]が[ɛ]に変わることが多い。
- (4) こちらの方言では、格助詞「ワ」がそのまま正確に発音されることはあまりなく、[wa]の[w]が無声化している。従って格助詞「ワ」にあたる部分は、小さい「ア」を書いた。(例) デルトコァ, サンゾァ, ヨメァなど。
- (5) [ʃe] [ʒe] はシェ, ジェと表わす。
- (6) 「皆」の意の「ミンナ」[minna]の[mi]が聞こえないものはンナと表わす。
- (7) 文末に断定の助動詞の意で小さく「エ」のつく場合があるので、それは小さく「ェ」と表わす。(例) シンテモタンェ, アルイタンェなど。

2. 音声符号表記について(但し、注記における音声符号表記のみ)

※上で説明したことはここでは省略する。

- (1) 特に強く発音される音節の前に [l] をつける。(例) [neenjaltsute]
- (2) 「コァ」にあたる部分は [ko^o] と表わす。
- (3) 途中で急にことはが途切れた場合、[ʔ](声門閉鎖音)で表わしたものがあつた。(例) [sainanʔtʃu:] など。[k^a]の例もある。
- (4) 同じ「デー」でも、単なる長母音の場合は [de:] と表わすが、時折 [dee] と二重母音に表わす時もある。なるべく後者の場合は「デエ」或は「デエー」と表記した。

(5) 仮名表記での(2)の説明部分は具体的には、[morotake^odo]のように小さな音声記号で表わした。

3. イントネーション表記について

(1) 上昇調イントネーションか下降調イントネーションかで「,」の表わし方をした。特にこの方言の場合、独特のイントネーションのゆれ(文末に多い)があるので、注記において出来るだけ示しておいた。(例) [kedo^o'], [itswakameniⁱ'], [jo^o'tari^o'], [jo^o'zwni^o']。その他非常に多い。

C. 収録内容の概説

1. タイトル

1. 「薬師如来の信仰」 ～ 10. 「酒屋の話」

2. 録音年月日

昭和50年8月19日

3. 録音場所

福井県武生市下中津原町第50号6番地、司会者加藤和夫の自宅の屋敷。

4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴

- ・1人は山本仁太郎氏で男性、明治37年生れ。職業はずっと農業である。(但し、冬季は京都方面の酒屋として出かせぎに出る)特に役職歴はないようだが、現在、武生市坂口地区の老人会の会長をしているようである。生まれてこの方、当下中津原町に住んでいるが、兵役で昭和12～15年の3年間外地(満州方面)にいたことがあるとのこと。話し好きで、72歳という年にもかかわらず仕事も盛んにする人で、この日も自分の過を懐しめうに次々と話して、もっぱら相手の加藤久子さんを聞き手にまわしてしまっただ。少々早口で、言いよどみの場面も多く、文字化の際苦労した。方言の保存度は普通であろう。ただ同じ会話の中で「ワタシ(私)」と「ウラ(私)」を併用していたりして標準語がつい出てしまうという場面も見られた。独得の文末におけるイントネーション(「フ」)のゆれも加藤さんに比べると少ないようである。
- ・1人は加藤久子氏(協力者加藤和夫の親戚に当たる)で女性、明治45年生れ。職業はやはりずっと農業。役職歴も特になし。現在の加藤家へは嫁いで来たわけであるが、生家も同じ下中津

原町の道端家で、結局生まれてより下中津原に住んでいること
になる。(但し15歳, 17歳の時に、2年ばかり武生の今の中心
部に住んでいたことがあるとのこと) この人も、元來が話し
好きの人で、この日もよく話してはくれたが、何しろ相手の山
本氏があまりに積極的に話すので、終始リードされた形。(しか
し、加藤氏の場合、山本氏と年齢が8つ違うのに加えて、15か
16で嫁いで以来、家庭の主婦として家にとじこも、たまたまこ
まで来ているので、山本氏の話題の豊富さについて行けないの
は仕方のないことかも知れぬ。また加藤氏の場合、口調が丁寧
で、聞いていてたいへんわかりやすかった。しかし、先にも書
いたように、文末の独得のイントネーションなどについては、
山本氏よりもさらに方言の保存度が良いと見ることも出来る。

5. 録音環境

同席者は、担当研究者佐藤茂と協力者(司会者)加藤和夫、そ
して2人の話者、山本仁太郎氏と加藤久子氏の4名である。初
めのうちは、話者2人とも佐藤に話しかける(説明する)よう
な口調が目立ったが、慣れるに従って2人の会話に入って行く。
山本氏が非常に話し好きであったために、加藤氏が聞き手にま
わったことが多かつたが、それでも話しが滞るということは殆
どなく、司会者は全くといってよい程、口をけさむ必要がなか
った。時期が盆過ぎの過ぎしやすい頃だ、たので、屋敷で庭か
ら入ってくる風を受けながら、落ち着いて会話が進んだ。周囲
がたいへん静かな所で、録音状態も良好のようである。4時間
という長時間の録音であったが、2人の話者とも熱心に話して
くれ、順調に進行した。

1. 薬師如来の信仰

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y マア マア ワタシノ ムラデフ ソレダケガ⁽¹⁾ イチバン ホコリ
 x...xxx まあ 私の 村では それだけが⁽²⁾ 一番の 誇り
 ヤネ。 タタリアリ ッチュート⁽³⁾ ソレマタ⁽³⁾ メーシンジャトカッテ
 だね。 祟りがあると言うと それまた 迷信だとかと言って
 ナモカモ⁽⁴⁾ ユーカモ シランケド⁽⁴⁾ マ カナラズ⁽⁵⁾ ソレワ⁽⁵⁾ アルラ
 誰もかれも 言うかも 知れないけれども まあ 必ず⁽⁶⁾ それは あるらし
 シ。 カナラズ⁽⁷⁾ ソレワ。 オタカイニ トシノイッタ モンワ⁽⁶⁾
 い。 必ず⁽⁷⁾ それは。 おたがいに 年をとった 者は
 ソレガ⁽⁸⁾ ヤカマシー⁽⁸⁾ イーツタワッテ キタンヤゲ。 アンマリ
 それか⁽⁹⁾ うるさく⁽⁹⁾ 言い伝わって 来たのですよ。 あまり
 ナブ⁽¹⁰⁾ ランポーニ⁽¹⁰⁾ シタポーカ⁽¹⁰⁾ イートユー。 モー ナブリマシエ
 さわらないように したほうが⁽¹¹⁾ いいと言う(ぶくに)。 もう さわりません。
 ン。 ホンデ⁽¹²⁾ トニカク⁽¹²⁾ マー ハルマツリニ⁽¹²⁾ イッペン チョッ
 それで とにかく まあ 春祭りに 一度 ちよつと
 ト アケテ⁽¹³⁾ オカマシテ⁽¹³⁾ モラウダケデ⁽¹³⁾ モー ジェットアイ ナブ
 (御堂を)あけて 拝まして もらうた(けて) もう 絶対に さわ
 ラン⁽¹⁴⁾ ン⁽¹⁴⁾ カ。 ホヤケド⁽¹⁵⁾ イマダニ⁽¹⁵⁾ ウツクシージデス。 イー⁽¹⁷⁾
 らないのですよ。 けれども 今だに 美しい地(色)です。 美しい

ヒトデッシャ ナガ-イコトタッテモ。 ダ⁽¹⁸⁾エ-ブ アノ オヤフ
 人ですよ 長いこと たっても。 大分 あの お薬
 シサマフ フルイラシ⁽¹⁹⁾ン。 ニッポン⁽²⁰⁾ニ~~ニ~~ サンタイシカ⁽²¹⁾ ネエン
 師様は 古いらしい。 日本に 三体しか ないん
 ジャツテ⁽²²⁾。
 だって。

K ウーン ホ-ケ。 ウーン。 * オ-キー ヒトヤネ⁽²³⁾。
 そうですね。 大きい 人ですねえ。

Y トニカフ フルイワ⁽²⁴⁾ フルインデスワネ。 (K ア- ホ-ケ)
 とにかく 古いことは 古いんですねえ。 (ああ そうですね。)

ナントカタイシキュー⁽²⁵⁾ ヒトカ⁽²⁶⁾ ホンナシタンヤケド⁽²⁶⁾ ホノ ウシ
 何とか大師と言う 人が 彫られたのですか その 後に

ロニ ソノ カイタ⁽²⁷⁾ ナイラ⁽²⁸⁾ ソノ-~~ア~~ メエ- ツフレタ⁽²⁹⁾
 その 書いたものを (何です) その 目が つぶれた

ッキュー⁽³⁰⁾ ヒトカ⁽³¹⁾ ヌリカエタトキ ソノ- ジオ ケシテモ
 という 人が 塗りかえた時 ~~ソノ-~~ その字を 消して

タラシ⁽³²⁾ン (K ア-ア) エ-⁽³³⁾
 しまったらしい。 (ああ) ええ。

K ナンカシラン⁽³⁴⁾ ホノトキニワ⁽³⁵⁾ カンテ- ハイラナンダッテ- ホ
 何か知らないが その時には 鑑定が 入らなかったとは そ
 レダケワ⁽³⁶⁾ キ-テ-.....。
 れだけば 聞いて……。

Y ソリヤノ ジオ ケシタデ マ- カンテ-ガ ハイラナンダンニ
 それはね 字を 消したから まあ 鑑定⁽³⁷⁾が 入らなかったのだ
 ヤノ。 アンデ マ- ソノ ジ-サエ ワカレバ ナントカユ-
 ね。 あれで まあ その 字さえ わかれば 何とか言う

タイシ⁽³⁸⁾ツキューコトダケワ ワカルン。⁽³⁹⁾ ソノ~~xxxxxx~~ ソノ アレ ケヤ
大師と云うことだけは わかる。 その あれは 櫛

キノ ヒトツノ モンデ⁽⁴⁰⁾ ホツタルデスデ。 ケヤキ イッポンデ。
の ひとつの もので 彫っておりますから。 櫛 一本で。

ナニモ ホカノモンデネー。 モ タダ ケヤキ イケー^(41A) ケヤギオ
何も ほかの物ではない。 もう ただ 櫛 大きい 櫛を

イッポンデ^(41B) コシラエタルン。 ホンデ ソノ トキノ オイデタ
一本で 作ってある。 それで その 時の いらっしや

ノ ナントカユー タイシノ^(41B) マー シエンネンカ マエノ コツテ
たの 何とかいう 大師の まあ 千年くらい 前の ことで

ショー。 ホヤケド ケヤキヤデ⁽⁴²⁾ アーユー マダ~~xxxx~~ クサラ
しょう。 けれども 櫛 ばかり ああいう(風に) まだ 腐らな

ント⁽⁴³⁾ アーヤツテ リッパニ アルンデ。 アリヤー 又リカエタ
いで ああして 立派に あるので。 あれは 塗りかえた

トキニ⁽⁴⁴⁾ ウシロニ ナマエオ ソノ⁽⁴⁵⁾ ヌッシガ ドーカ シタンデ
時に 後の 名前を その 塗師が どうか したので

ソナケナ アレエ~~xxxx~~ コノ~~xxxx~~ キョノ~~xxxx~~ コノ センド⁽⁴⁶⁾ イッタ トキ
そうでなければ あれは この 前回 行った 時に

ニ⁽⁴⁷⁾ カンテーニ マ コクホーン ナルンデショ。⁽⁴⁸⁾ コクホーニ
鑑定に まあ 国宝に なるのでしょ。 国宝に

ナルツキエタンデスケド ソレオ ウシロノ ジオ ケシタツタン
なると云ったのですけれども それを 後の 字を 消してあつたの

デ モー ワカラノエ。 ホンナケナ アリヤ モー~~xxxxxx~~
で もう わからないんです。 そうでなければ あれは もう

ン~~xxx~~ アンナモン コンザイショニ⁽⁴⁹⁾ トットカレンノエネ。⁽⁵⁰⁾ アリヤ
あんなものは この在所には 置いておかれないうんですよ。 あれは

ー モー コクホーン ナル シナモンニヤケニ。⁽⁵¹⁾ アリヤ メズ
もう 国宝に なる 品物だからねえ。 あれは 珍ら

ラシン。 コー ヤッテ ウケマシテンニエ。⁽⁵²⁾ (K ウン) カタ
しい。 こう やって(手)受けましてるんです。 片ー

イッポワ クスレル カンシテ⁽⁵³⁾ コー シテナハンデネエ。 ホイテ
方は 薬を入れる 感じで こう(う風)していらしゃるのです。 そして

オカンテナハルン。 オガンダ⁽⁵⁴⁾コト ネエ。

拝んでらっしゃる。 拝んだこと ないですか。

K ウ ウ イヤ チラト オガンダ⁽⁵⁴⁾コト アルケド⁽⁵⁴⁾ ヨー オボエテ
xxxx xxxx いえ ちらっと 拝んだこと あるけれども よく 覚えて

エンワネ(笑)⁽⁵⁵⁾。

いませんねえ。

Y テ テデエ コーユー マルイー オワンテナ⁽⁵⁶⁾ オワンテナ (K
xxxx xxxx 手で こういう 丸い xxxxxxxxxxxx お椀みたいな)

ヒトリデワ⁽⁵⁶⁾ オカマレン ヤッパリ(笑)) コーユー マルイー
ひとりでは 拝まれない やっはり) こういう 丸い

コー クスリ ウケマス ナンヤワネ。⁽⁵⁷⁾ ホイテ コーヤッテ ウ
こう 薬を 受けます なんですよ。 そして こうして

ケナシテエー-----。

お受けになって……。

K ナンカ タマオ モッテナハルンデ ネンケネ。⁽⁵⁸⁾
何か 玉を 持っていらしゃるので ないですか。

Y イヤ タマッテ ソリヤ クスリ ウケマシテクル⁽⁵⁹⁾ タマヤネエ。
いや 玉と言うか それは 薬を 受けましている 玉ですねえ。

K ア アー ホーケ。
xxxx ああ そうですか。

Y デー アレダ⁽⁶⁰⁾ケガ マー コンザイショ / ホコリジャネ。 (K
これで あれた⁽⁶⁰⁾けが まあ この在⁽⁶⁰⁾所の 誇りですね。

ウン) ナーモ ユーコト ネーモ^{xxxx} モー コンザイショ ソレ
ええ) 何も 言うことは ない もう この在⁽⁶⁰⁾所は それ
ダ⁽⁶¹⁾ケエア ジマン デキルトコヤ。
だけは 自慢 出来るところです。

K ホヤネ。
そうですね。

Y モー ホカノ コトワ アンマリ ジマンワ デキンシ…… (笑)
もう ほかの ことは あまり 自慢は 出来ないし……。

K ナーモ デキンシ カワツタコトモ ネーシー⁽⁶²⁾。
何も (自慢) 出来ないし 変わったことも ないし。

Y モー ソレカラ モー ワタシラ マー メー ジウマレテ⁽⁶³⁾ ナ
もう それから もう 死ぬなどは まあ 明治生まれて 何
ーモ ムカシノ コツチャデ トシヨリヤケド マー ソレカラ
にしても 昔の ことだから 年寄り だけれども まあ それから
コツチャー カワツタコトモネーシ。
以後は 変わったことも ないし。

K サイナンチュ⁽⁶⁴⁾コトワ ネーデネー⁽⁶⁵⁾。
災難という事は ないですからねえ。

Y オー マー ヨケ サイナンテワ ネーデスワネ。 ホイデ⁽⁶⁶⁾ ヤ
まあ 多くは 災難というのはいないのでよね。 そして やは
ッパ アノヒトノ⁽⁶⁶⁾ イナハラントキニヤ ヤッパ カジガ オキルンニヤノ
り あの人の いらっしゃる時には やはり 火事が 起るのですね
ドーモ。 (K ウーン……) ⁽⁶⁷⁾ ホイデ アノ タンナカサンラノガ
どうも。 (K ウーン……) そして あの たんなかさんの(家)が

ヤケナシタトキラニモ ヤッパ アノ ヤクシニョライサマカ テ
焼けられた時などにも やはり あの 薬師如来様が 天
ニエ アカッテナシタ⁽⁶⁸⁾ トキヤツチュンニヤター。 (クウーン)
へ 上っていらした 時だ"と言うからねえ。

コニヤツテウケマシテ⁽⁶⁹⁾。 クスリ モライニ アガンナシタ ト
こうして (手紙) 受けまして。 薬を もらいに 上られた

キヤ。 ヤッパ アガルトキニヤ ミエルツチュンデスワネ。 ジ
時です。 やはり 上る時には (如来の姿が) 見えると言うんですね。

エシジエン⁽⁷⁰⁾ ウララ ミタコト ネーデスケド。
全然 私は 見たことが ないですけれども。

K ネエーナー。⁽⁷¹⁾
ないですねえ。

Y ホヤケド ソンナトキニヤ⁽⁷²⁾ ワタシラー モー サカヤエ イッテ
けれども そんな時には 私は もう 酒屋へ 行って

マスモンヤデ" ソーユー ソノ スガタオ ミルツチュウコトワ⁽⁷³⁾ デケナ
ますものですから そういふ その 姿を 見るということは 出来な

ンダンデスケド ヤッパ アガルトキヤ アガルンヤツテコトワ
からたのですけれども やはり 上る時には 上るんだ"と言う事は

ワカルンニヤツチュコトワ⁽⁷⁴⁾ (Kヤッパ) コノ ダンナンガ⁽⁷⁵⁾
(その姿が) わかるんだ"と言う事は (やはり) この(家の) 旦那が

ソー ヨー イーナシタワネ。 ホリヤ フシギナンジャソ" ナー
そう よく おっしゃったね。 それは 不思議なんだを" なあ

キンニョモンチュター⁽⁷⁶⁾ ワタシニ アノ ダンナン ヨー イー
金右衛門と言っでは 私に 旦那が よく お

ナシタンデスガ。

しゃったのですよ。

K アノー オマワシサマワー⁽⁷⁷⁾ アノ コツキネ マエー コツキネ コ
お薬師様は 前は

コデ⁽⁷⁸⁾ ウマレタ ヒトワー シンコーシテナハルンニャア。 ウー
ここで 生まれた 人は 信仰していらしゃるのです。⁽⁷⁹⁾

ン。⁽⁸⁰⁾ タサエモンノー アノー マチンキョノノ⁽⁸¹⁾ イマノ オババノ
太左衛門の まちんきよのね 今の お婆さんの

アネサンデー⁽⁸²⁾ トーキョーカラ マインナシテ⁽⁸³⁾ イマデモ ヤッ
姉さんで 東京から (お薬師様に) 参られて 今でも やはり

バ シンコーシテナハルッキユマシタ。 ウン。
信仰していらしゃると言いました。

Y ホンナモン ホントノカラダ⁽⁸⁴⁾ ワルイヒトワ モー アソコエ
そんなもの 本当に 体の 悪い人は もう あそこへ

モー マエイニチ⁽⁸⁴⁾ マイッテルワノ。
もう 毎日 参ってるよ。

K ホイテ アレ ガンガケット⁽⁸⁵⁾ クギオ ツツツンケノ。⁽⁸⁶⁾
そして あれは 願掛という くぎを 打つのですかねえ。

Y ウン (ノー) ソリヤー⁽⁸⁷⁾ ソーユーコトシタ ヒトモ アルシ
ええ (ねえ) それは そういうことをした 人も あるし

ー ソリヤ マー ナンシルヒトモ⁽⁸⁸⁾ アルカシランケド-----。
それは まあ そうする人も あるかもしれないけれども……。

K コノゴロワ ナカナカ ホンナ ヒト ネエーケドノ ナカナカ。⁽⁸⁹⁾
この頃は だかだか そんな 人は ないですけれどもねえ。

Y モー イマ ソンナコトシル ヒト ネーモ。
もう 今は そんなことをする 人 ないですもの。

K ネエーナー。⁽⁹⁰⁾
はいねえ。

Y ジャケド コノ ヨンジューネンマ⁽⁹¹⁾ エニヤ
けれども この 四十年前には ソーユー ヒトモ
アツタンエノ。
あったのですからねえ。

K アー ナンカシラン⁽⁹²⁾ チョット チラットー フギオー イチ ヤッパ
ああ 何か(よく)知らないか ぐぎを やはり
イチ⁽⁹³⁾ オマエリシルタンビニ イッポン モッテッテ ウツンカノ。
お参りするたびに 一本 持っていて 打つのですかね。

Y ウン ホラ ミツケラレタラ モー アカンノヤ。 ヒトニ ミラ
それは (人に) 見つけられたら もう 駄目なのです。 人に 見ら
レタラ……。
れたら……。

K アー ミツケラレルト モー アカン。 アー ホーケ。 ガシガ
ああ 見つけられると もう 駄目。 ああ そうですか。 願掛
ケツキューモンワノ ヨカ アケンマニ。⁽⁹⁴⁾ ウーン。
と言うものはね 寂か 明けないうちにね。

Y トモカフ シロイ ショーゾクデネ イクニヤデ。 ソリヤ モ
とにかく 白い 装束でね 行くのですから。 それは も
チロン フギウツタルノ ミタコトモ アリマス。 ホラ コー
ちろん ぐぎを打ってあるのを 見たことも あります。 それは まあ
ソーユー ヒトモ アツタンニヤロイ⁽⁹⁵⁾ コノザイショニワ。 マー
そういう 人も あったのでしょうか この在所には。 まあ
ソーユーフーニ イッショーケンメーニナル ヒトモ アツタフケ
そういう風に 一所懸命になる人も あったわけ
~~ええ~~⁽⁹⁶⁾ ホヤケド イマワ ソーユーコト シルヒトワ……。 モ
ですわね。 けれども 今は そういうこと する人は……。 も

Y - ヨノナカ カワッテシマイマシタ デネー。 アー。 ムカシト
う 世の中 変わってしまいましたですからね。 ああ。 昔と
チゴテ……。
違って……。

注記

- (1) 薬師如来をさす。 (2) タタリアルツチュートの言い誤りであらう。文字化部分には出ないが、他の所で「タタリアルツチュート」と言っている。 (3) 「ソマタ」とも「レマタ」とも聞こえる。「ソ」も「レ」も非常に短い音になっている。
- (4) 本来は「何もかも」の意であるが、ここでは「誰もかれも」の意か、或いは、迷信をさして言う「何もかも」か。 (5) 祟り。
- (6) 「モンニワ」の言い誤り。 (7) 「ヤカマシク」の「シク」が [i:] となる。 (8) 「ケ」 [je] は相手に念を押したりする時使う終助詞。 (9) 「ように」と「ほうに」の混同。
- (10) 前の「イーツタワツテ」の部分にかかって行く。倒置。
- (11) は、きり聞きとれないが間違いはないだろう。 (12) この村で毎年3月に行われる豊作祈願の祭り。 (13) 薬師如来の姿を。
- (14) は、きりしれないが「テス」が短かく小さく聞こえる。「カ」は「ケ」と同様の働きの終助詞。 (15) 「そうだけれども」の意。
- (16) 薬師如来に塗られてある色の意。 (17) 美しい、きれいの意。
- (18) [dæ:bw] (19) [fɯrwiraʃiN] (20) [ni] と [ne] の中間。
- (21) 三体しかないというのは話者がそう信じ込んでいるだけである。
- (22) [neɛŋaʔtsute] (23) 小さくひとり言のように言う。
- (24) 「フルイノワ」の「ノ」が省かれた。 (25) 薬師如来を彫った人は不明。 (26) 薬師如来像の。 (27) 「ノ」があいまいながら聞こえる。 (28) 特に意味のないつなぎ言葉。「なんですねえ」くらいの意。 (29) [mee:] (30) 昔、薬師如来の色を塗り変えた塗師が、像の眉間にあつた宝玉を盗んだら、祟りでめくらになつてしまつたという言い伝えがある。 (31) 誰が像を彫つたかという彫師の名。 (32) [raʃiN] (33) ため息をつくように。 (34) 自分に確信がない時などに使う。 (35) 当村の薬師如来像がかなり古いものとして伝わっているので、専門家が鑑定しに来る予定だつたらしい。 (36) 「いました」の省

略。 (37) [ʒi:ʒæ] (38)彫師は僧と言い伝わっているよ
うである。 (39) [wakarun] (40)榊の一木造りの意。

(41A)「タダ」から「ケヤキオ」まで一気に言う。「ケヤキオ」とな
ったのは、その後「使って」というようなことを言おうとした
か。 (41B)「タイシノ」まで言いかけてまた話の転換。

(42)「フーニ」の省略。あとの「アーヤッテ」と同様の意。

(43)言いかけ。 (44)「オショー」とも聞こえる。[ʊʃo:]か。意
は「後の」であろう。 (45)薬師如来の色を塗りかえた塗師の
意であろう。 [nuʃʃi] (46)「先度」の意で、一度像を鑑定
のために村から持ち出したことがあるので、そのことをさす。

(47)「ネ」に近い。 (48)このあたり語順が混乱。 (49)「コ
ノザイショ」の転。在所は村の意。 (50)「トットク」は「と
って置く」と同意で保存する意。 (51)「ケニ」がついて「～
ねえ」の意を添える。 (52)「受けます」は「受ける」の敬体。

ここでは主語が薬師如来だからこうなる。 (53)「ワズレル
カンジデ」とも聞こえる。意味ははっきりしないが「薬を入れる
感じで」と解釈した。 (54) [ne] 問い直す感じ。 (55)照

れ笑いの気味。 (56)恐れ多くてという。 (57)前のことを
受けて相手に言いかける。 (58)小さくかすかに。 (59)「

ウケマストキノ」とも。 (60) [aredakeŋa] (61) [dake]

(62) [neʔiʃiʔ] 独特のイントネーション。 (63)薬師如来を鑑定の
のために持ちだして、それが戻ってから。 (64) [sainanʔtʃu:]

(65) [neʔiʃideneʔiʃiʔ]. 独特のイントネーション。 (66)薬師如来の
擬人化。 (67)加藤久子氏の家の家号。 (68)薬師如来が年

に一度、天へ薬をもらいに上ると言われている。 (69)は、き
りしないが、こう聞こえる。 (70)「ソレ ソンナ」とも。

(71) [ne:naʔiʃiʔ] (72) [ne] (73)「テケナ」は関西的。普通
は「テキナ」 (74)言いさかすようにくり返し言う。 (75)

協力者加藤和夫の祖父を言う。 (76)「ホリヤ～キンニョモ
ン」は加藤の祖父の言葉。「キンニョモン」は山本仁太郎氏の家

の象号。 (77) [samawa¹] (78) [sitowa¹] (79) [pa¹]
 (80) 自分の言、たことを頭の中で反復するような口調。 (81) 象号。
 (82) [anesande¹]。独特のイントネーション。 (83) [site¹]
 (84) [mæinitʃi] (85) 「ガンカケトイウト」の省略形 (86) 「ウ
 ヅツン」とも。 (87) [sorja¹] (88) 「ソーユーコト」に対
 して、特に一つのことをさすのではなく、「別のこと」とでもい
 う意か。 (89) 弱く付け足す。 (90) [ne¹na¹] (91) 「四十年
 ばかり前には」の意。 (92) 確信ない時によく使う。 (93) 「イ
 と「エ」の中間の音。 (94) 夜が明けぬうちにしなくてはいけな
 いんですね、というような意。 (95) [njaroi²] で「い」はかすか
 に聞こえる程度。 (96) この「ヤネ」は次の「ホヤケド」にすぐ
 続くのでは、きりせず。

2. お地蔵様の話

話し手

(略号) (氏名) (性別) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

K ホイテ アノ オジゾ⁽¹⁾サンカッテ ヤッパ アノー ホカノ ザイ
 そして あの お地蔵様だって やはり ほかの 在
 ショノ ヒト シンジテナルッテ⁽²⁾。 メイガ……アノ⁽³⁾ カラノ⁽⁴⁾⁽⁵⁾
 所の 人 信じていらっしゃるってね。 目が 明くの 上の

オジゾサン。

お地蔵様。

Y オー ホイテ コノ コノ コノ オジゾサンモ ナカナカ フシ
 ああ そして この お地蔵様も なかなか 不思議
 キナ オジゾサンヤ。 コンザイショノ オジゾサン。 アラ ア
 議な お地蔵様です。 この在所の お地蔵様。 あれば
 ノー アンナトコニ ヒョコント タツテナハルケド アレ ワレ
 あんな所に ひこりと 立っていらっしゃるけれども あれば
⁽⁶⁾ ワレワレマ ⁽⁷⁾ オネガイシテ ヒョイト カタテデー ラワーニ カ
 私が お願いして ひよいと 片手で 衆に か
 タゲルンニヤザ。 オネガイシテ カタテデァ……。 ホカノ ヒ
 つけるのですよ。 お願いして 片手で……。 ほかの 人
 ト カタテデ ジェツタイニ ウゴカンワノ ミナサエー。 イフ
 片手で 絶対に 動かないですよ 見なさい。 いくら

ラ カタテデモ⁽⁸⁾ ドンナ キカラカケテモ。⁽⁹⁾
片手でも どんな 力を入れても。

K アレ イツノ タイフーヤツタマロー アノ キズイキナハラ
あれは いつの 台風だったかねえ 傷つかけなから
ナンダヤノ⁽¹⁰⁾。 オドームシラ⁽¹¹⁾ トーント⁽¹²⁾ タンボエ テックフリカ⁽¹³⁾
たのですねえ。 お堂ごと とんと 田んぼへ ひっくり返
エッテモタンニエノ。
てしまったんですよ。

Y ミナ ジェンブ ファイテッテモタゲノ。 ホヤケド オジゾサン
皆 全部 吹いていってしまったんですよ。 けれども お地藏様⁽⁴⁾
ダケ ヒョコント タツテナハル。 ホイテ ウラ キノドクナデ⁽⁴⁾
だけ ひっくりと 立っていらしゃる。 それで 私は 気の毒だから
ウラ アンナモン オータモ。⁽¹⁵⁾ ホイテ アト ヒョット⁽¹⁶⁾ マタ
私は あれを 背負いました。 そして あとを ひょっと また
ウエマシタモ⁽¹⁷⁾。 ホヤケドー モー ソノ ホカニヤア モー ド⁽¹⁸⁾
上に乗せましたもの。 けれども もう その ほかには もう ど
ンナコトシテモ ウゴカンデノ。 ホンナモン カヤツタリシルモ
んなことをしても 動かないですからね。 そんなもの 倒れたりするもので
ンデワ ネンニヤデノ。 ナンカ ソリヤ ヤッバ ムカシノ ナ
は ないのですからね。 何か それは やはり 昔の
ンケユカネ⁽¹⁹⁾ コノ サカミケカラ⁽²⁰⁾ キタヒトガ ココデ マヨ
何と言うかねえ この 坂道から 来た人が ココで 迷って
テ タオレテ シンダトカナントカ エンデ ソノー オジゾサン
倒れて 死んだとか何とか 言うんで その お地藏様
オ ナンシタラシンニヤワネ。⁽²¹⁾ (^Kアー) オオサカノ⁽²²⁾ ムカシ
を 何したらしいんですよ。 (ああ) 大坂のね 昔は
(建てた)

マ- コノミチワ ホレ コンネ イー ミチデ ナカッタゾノ。
この道は ほら なんとに 良い 道で なかったよ。

コンナ ⁽²³⁾ オソイ ⁽²⁴⁾ ミチデ グリ-ット マワッテ ホンナモン ワ
なんと ひどい 道で ぐるっと 回って そんなもの
レワレガ ⁽²⁵⁾ モ マチ イクカッテ ⁽²⁶⁾ ザ-ット マワッテ ⁽²⁷⁾ デエテイクノ
我々が もう 町へ 行くにしても ずうっと 回って 出ていくのに。

ニ。 ⁽²⁸⁾ ホイテ イマ コツゾエ トンネルヲ アルデ。 ムカシヤ
そして 今こそは トンネルが あるから。 昔は
トンネルヲ ネンデス-----。
トンネルは ないんです……。

K ヒロシエノ ⁽²⁹⁾ ホーエ デタデエエ。 ヒロシエエ ⁽³⁰⁾
弘瀬の 方へ 出たからねえ。 弘瀬へ。

Y ⁽³¹⁾
~~ヒ~~ ~~ヒ~~ ヒロシエエ デルツタッテ ホンナモン デルトコァ ⁽³¹⁾ ネ
弘瀬へ 出ると言っても そんなもの 出るところは な
ー ⁽³²⁾ コトハラノ ⁽³³⁾ ホシエー ミチ ヨー イツタンニヤシ。 ホン
い 勾当原の 細い 道を よく 行ったのだし。 そんな
ナモン ⁽³⁴⁾ カブラヤカイドー ⁽³⁵⁾ バッカヤデー。
なもの 甲斐城街道はわかりです。

K ⁽³⁶⁾ オーサカヤマエノ-。 (Y ウン) ⁽³⁷⁾ オーサカヤマエ イツタデー。
大坂山へねえ。 大坂山へ 行ったからねえ。

Y オーサカヤマバッカ ⁽³⁸⁾ ト-ツタデー。 ⁽³⁹⁾ ホイテ コノ オーサカカラ
大坂山はわかり 通ったから。 大坂(山)から
デテキテノ ⁽³⁹⁾ オーユキ ⁽³⁹⁾ マヨーテ ココエ ドッカ ユキミチノ
出てきてね 大雪に 迷って ここへ どこか 雪道の
ナンカデ ⁽³⁹⁾ タオレテ ⁽³⁹⁾ ココデ シンダンヤノ。 ホンデ ソレノ
何かで 倒れて 二こで 死んだのですね。 それで それの

Y ナンデ⁽⁴⁰⁾ ココエ オジゾサンオ タテタヤ。⁽⁴¹⁾
何で こゝへ お地蔵様を 建てた。

注記

- (1) 村の上の県道端にある地蔵。 (2) [narutteno:] (3) [me]> [mei] (4) 盲目の人の目が開くという地蔵様の御利益のことである。 (5) 「川原」という村内の字名。そこに地蔵堂がある。 (6) 複数の言い方であるが、ここでは単数の意で使われる。 (7) 「お願いしてかつがせてもらえげ」という気持か。 (8) 「いくら片手でかつごうとしても」の意。 (9) 前文「ホカノ ヒト」から、この「チカラカケテモ」まで早口で一気に話す。 (10) [jano:] (11) 「～ごと」との意でよく「ムシラ」を使う。 (12) 擬声語。 (13) 「ひっくり返る」の強調。 (14) 地蔵様に対して恐れ多いという気持であって、一般に言われる「かわいそう」とは少しニュアンスが違う。 (15) ぞんざいな口調。 (16) 擬態語。簡単に衆、た感じを与える。 (17) このように聞かえるが、意味ははっきりしない。たぶんこうであろう。 (18) [hokanjæ:] (19) 次に出ることばの思いつかない時などに使うつなぎことば。 (20) 現在の県道から、昔の街道へ通ずる道が、地蔵堂の前から山に向かってあった。 (21) こういふ言い伝えがあるらしい。 (22) 現在の武生市湯谷町から同市当ヶ峰に抜けた旧甲斐城街道の途中にある山の名で大坂山。京都と近江の境にある逢坂山と同起源の名か。 (23) 昔の街道をさすのであって、今の道ではない。 (24) 「ひどい」とか「古ぼけた」、「役に立たない」の意でよく使われる。 (25) 現在の武生の市街地をさす。 (26) 「グリーツ」と同様、擬態語。 (27) [dete] (28) 「コンドァ」とも「コッソァ」とも。 (29) [detade:]、独特のイントネーション。 (30) 町名。武生市広瀬町。 (31) [derutok^oa] (32) 町名。武生市勾当原町(坂口地区) (33) [ho:ε:] (34) 南条郡河野村甲斐城(カブラキ)から坂口地区内を抜けて武生市当ヶ峰へ通じていた旧街道。この街道は江戸期まで、南条郡河野村の港河野と府中(現武生)を結ぶ重要な街道として栄えた。 (35) 「デー」はあい

まい。(36) [jamae^{no}:] (37) [ittadeⁿⁱ] (38) 「何かの原因
因で」という意か。(39) 主語はある旅人。[jan^{no}] (40) 「そ
の(死んだ)旅人の供養で。」の意か。(41) [tatetaa]。この
あとにかすかに「ラシンニャ」と聞こえるようお気もする。

3. 道具持ちの話⁽¹⁾

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y イヤ ムカシワ⁽²⁾ (笑)
いや 昔は。

K キンニヨモサンノ トーチャン ウタ シッテナハルンニヤ ナカ
金右衛門さんの 父さん 歌を 知っていらっしゃるんです 長持
モチウタ⁽³⁾
歌。

Y ~~ニニヤ~~ イヤ ソンナモンワ……(笑)
いや そんなものは……。

K ナガモチウタ ジョーズデネーケノ⁽⁴⁾ ノーオ。 ジョーズデネン
長持歌 上手ではないですか。 ねえ。 上手ではなから
ケノ。
たのですか。

Y イヤ ホーヤケド⁽⁵⁾ (^K ダァーブ ⁽⁶⁾ イキナシタヤロノ) オー ド
いや そうだけれども (大分 行かれたでしょう。) ああ

ーワモチヤ ~~ジョ~~ ジョーサン⁽⁷⁾ イッタノ。 オー マー コンデ
道具持ち たくさん 行ったね。 ああ まあ これで

ザイショエモ モー イカントコァ⁽⁸⁾ ネエーノ。
在所へも もう 行かないところは ないね。

K ホヤロノ⁽⁹⁾。
そうだろうねえ。

Y タイカイノ ウッチャ モー イツタワノ。 マー コレダケワ
大概の 家は もう 行たね。 まあ これだけは
シアワシエヤノ⁽¹⁰⁾。 コリヤ ヤッパ⁽¹¹⁾。
幸せだね。 これは やはり。

K アカーイ テヌグイ カブツテエ⁽¹²⁾。
赤い 手ぬぐい かぶって。

Y ウーン カカラダ⁽¹³⁾ カトナケナ アカンノヤワノ。
体が 丈夫でなければ 駄目なのでよね。

K ホイテ アノー コノ ヒトワノ オサケー ノミナシタカッター⁽¹⁴⁾
そして この 人はね お酒を 飲まれても
ホシナ アノ ヨータリー⁽¹⁵⁾ ホシナ シナハラン。 ジョーズニ⁽¹⁶⁾
そんな 酔ったり そんなことは なさらない。 上手に
モー ナカナカ フロテワ⁽¹⁷⁾ ウタウトテワ ナンシタサケ⁽¹⁸⁾ ホイ
もう なかなか 笑ってはね 歌っては 何したから それで
テ⁽¹⁹⁾ ミンナガ ノー タノミナシタンニヤワノ⁽²⁰⁾。 ウーン。 ダ
皆が ねえ 頼まれたのですよ。 大分

ーブアン ナニ モー ホントニ イキナハラン ウチャ ネーヨーナ
何です もう 本当に (道具持ちに) いらしゃらない 家は ないような
モンヤロノ⁽²¹⁾。
ものでしょうね。

Y マー タイカイノ トコロワ ヨシテモロタノ。
まあ 大概の 所は 寄せてもらったね。

K ノ ムカシャ⁽²²⁾ フルマヤワノ。 ホン ムカシャ⁽²³⁾ ニノタンニヤ⁽²⁴⁾
ねえ 昔は 車ですよええ。 ごく 昔は 背負った

ケド。 ウーン。 タンス ナガモチ-----。 イマ ナガモチツ
けれども。 箏 竽 長持 今は 長持というの

⁽²⁵⁾ ムノワ アリマシエンワネー。 ⁽²⁶⁾ イツゴロカラ ナガモチャ ネー
は 有りませんよねえ。 いつ頃から 長持は ないで

カネー。 アレ ヤクブロン ⁽²⁷⁾ ナツツノワ。
すかねえ。 あれが 杖具風呂に なたのは。

Y ホンデ ワタシガ マー イチバン サイショニ ドーク モッテ
それで 私が まあ 一番 最初に 道具を 持って

ツツノワ オクボサンノ アノ マルカ イツツノワ ⁽²⁸⁾ ⁽²⁹⁾ (^K アーア)
行ったのは おくぼさんの あの 丸岡へ 行った(時)の事 ああ

ワタシ アノトキ ジュークカナ。
私は あの時 19かな。

K アーア ソーカ。 モット イツテルヤロイノ。
ああ そうですね。 もっと (年)とっているでしょうが。

Y ジュークカ ハタチャ。
19か 20です。

K イヤー ニジュー ⁽³⁰⁾ (^Y ナニシエ モ) ⁽³¹⁾ サンクグレエーヤロ。
いや 23くらい (何しろ) もう... でしょう。

Y アジチ ⁽³⁴⁾ キタ ヨメガ マダ キテエンノヤケノ。 (^K アー ホ
あじちへ来た 嫁が まだ 来ていないんですからね。 ああ そう

ーケ) ⁽³⁵⁾ ホイテ アノ ヨメガ ー ウラ ウトテツタラ フロテ
ですか) そして あの 嫁が 私が 歌って行ったら 笑って

タンヤデノ。 ⁽³⁶⁾ (^K アーア ホーケ ウーン。) ⁽³⁷⁾ ナカツハラノ
いたのですからね。 ああ そうですね 中津原の

アンチヤン ⁽³⁸⁾ フカイモンガ ウトテキタツチエテ フライヨツタン ⁽³⁹⁾
兄ちゃん 若い者が 歌って来たと言って 笑いやからたんだ

ヤデノ。 ⁽⁴⁰⁾ ホリヤニ ヨワツタンニヤ。 ⁽⁴¹⁾ アレ ⁽⁴²⁾ ヤマオクニ マッ
からね。 それは たいへんだった。 あれ 山奥に あ

テノ。 イッチバン オクニ アツタンヤデノ。 ⁽⁴³⁾ アツコエ。 イ
てね。 一番 奥に あったんですからね。 あそこへ。

マコソ ⁽⁴⁴⁾ ミチベエリエ デ テテ イー ウチ タテナシタゲド。
今こそ 道端へ 出て いい 家を 建てられたけれども。

K シンルイジャモノ ⁽⁴⁵⁾。 イトコケノ。
親類 たものねえ。 いとこでしたかね。

Y オフボサントケ。
おくぼさんとですか。

K アノ マルカノ ⁽⁴⁶⁾ー アノ シニナシタ アジチ ⁽⁴⁷⁾ー (Y ウー ウー
丸岡の 死なれた あじちの

ン ⁽⁴⁸⁾ ウ ウケノ テテ) アノ ハジメサンノ ⁽⁴⁹⁾ オッカチャンフ
私の 父親 あの 肇さんの お母さんは

イトコヤンノ。 ⁽⁵⁰⁾ イ ハジメサンノ オッカチャント。 イトコデ
いとこでしょう。 肇さんの お母さんと。 いとこで

エア ネンケノ。
はいんですか。

Y ハジメノ カーチャントケ。 (K ウン) ウ ウケノー テテオ
肇の 母さんとかい。 ええ) 私の 父親と

ヤト アソコノ オジジト キョーダイジエノ。
あそこの おじいさんと 兄弟だよ。

K ウン ホンデ イトコヤノ ⁽⁵¹⁾ ウーン。
それで いとこですよ。

Y ホリヤ ⁽⁵²⁾ ヨー ヨワツテモタンエ。 モソリヤ ⁽⁵³⁾ イチバンサキ。
それは 奥に 困ってしまったのです。 もうそれが 一番先。

ソレカラ アト スー ツト オヤノ カワリエノ。⁽⁵⁴⁾
それから あと すうっと 親の かわりですよ。

K ⁽⁵⁵⁾ ホイテ ナガモチウタ イッペン ウタイネノ。(笑) チョッコ
それで 長持歌 一度 歌いなさいよ。 少し

ウタノ⁽⁵⁶⁾ ウタノ ヒトツモ ハイラナ アカン。(笑)
歌の ひとつも 入らなくては いけない。

Y ホンナモン ウタウト ア⁽⁵⁷⁾ アノ オンサン ナニ ユーヤラト
そんなもの 歌うと あの おじさん 何を 言うやらと
オマウサゲ。
思うから。

K ホンナコト ネー。
そんなこと ない。

注記

- (1) 結婚式の時、近所の男子が嫁入り道具を運ぶ役目をした。
(2) 司会者加藤の「昔の結婚式はどんな様子だ、たんですか」という質問に答えて。 (3) 道具を運びながら歌う歌。 (4) [ɲɲja]
(5) [noːʔo]. 独特のイントネーション。 (6) [dæ:bw] (7)
「仰山」の訛音。 (8) [tokə] (9) [hojaronoːʔ] (10) おめでたい結婚式にいつも間接的にではあるが参加できるから。
(11) 「ヤッパ」のあとに「シアワシエヤノ」に類した語が省略されている。 (12) [te'eʔ] (13) 「体がかたい」で「体が丈夫(健康)だ」を意味する。 (14) [çitowan̄o] (15) [joːʔariːʔ]
(16) [ʒoːʔzuniːʔ] (17) [warotewaːʔ] (18) 「道具持ちに行った」ことをさす。 (19) [hoide] (20) 道具持ちを頼まれた。
(21) [jaron̄o] (22) この車は昔の大八車をさすのだろう (23) 「ホン」は「ホンノ」の転か。 (24) 「ニナウ」は「両肩で背負う(かつぐ)」の意。 (25) 「ツ」とも (26) [senwaneːʔ] (27)
「ヤフフロニ」の「ニ」が「ン」に。ふとんなどを入れる木製の戸棚。 (28) 家号。 (29) 地名。武生市丸岡(まるか)町。 (30)
山本氏の言う19歳が少し若すぎるのではと疑っている様子。
(31) [hataːtʃa] (32) 19か20だということを証明しようとするが加藤氏の声にさえぎられる。 (33) 山本氏の言葉がまた信じられたいという口調。 (34) 家号。山本氏の親戚。 (35) 道具持ちに行き、長持歌を。 (36) [aːʔaː] (37) 下中津原のこと。 (38)
「アンチャン」と言ってまた別の「フカイモンカ」と言い直す。「アンチャン」を方言と意識したか。 (39) 「～シヨル」は関西的。
(40) 「ホラー」とも聞える。 (41) ここの方言では「ヨワル」は、「疲れる」とか「困る」とか「弱くなる」などいくつかの意に使われる。ここでは「困る」の意に近い。 (42) 嫁の実家。
(43) 「アコエ」とも「アゴエ」とも聞える。 (44) 「エ」と後の「デ」がひと続きで「デエ」とも。 (45) 下降調のイントネーション

ョン。 (46) [no^h] (47) [no^h]。独特のイントネーション。
(48) 加藤氏の声でけっさり聞きとれず。 (49) 人の名。 (50) 「イ
トコヤロノ」の転。 (51) 自分で得心した感じの「ウーン」。
(52) 「ヨク」が「ヨー」に変わった。程度がそれによって甚だしく
なっている。 (53) 「道具持ち」に関しての最初。 (54) 親のか
わりに「道具持ち」に行った。 (55) 「ホイテ」は普通「そして」
の意で使われるが、時折りこういう使い方も見られる。 (56) お
どけて笑いながら、テープに「長持歌」を録音しろと言っている。
(57) [omow] > [omaw]

4. 祝儀の話(1)

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y トニカワ ワラジ ハイター⁽¹⁾ キター⁽²⁾ ホイテ シンヤケド⁽³⁾ オヤ
 とにかく 草鞋 はいてね 来て そして (祝儀を)するのだけれど"
 ジャー⁽⁴⁾ ミッカクレワ カオ⁽⁵⁾ ミンノヤソノ。 ヨメサンノ カオ
 親父は 三日くらいは 顔を見ないのですよ。 嫁さんの 顔は。
 ワ。 * イヤー デルッテ⁽⁶⁾ ソリヤ ミュートサカ
 いや (祝儀に) 出るといっても それは 夫婦 盃は
 ズキワ シルケド マ ミッカクレェァ モー ナモン アワン
 するけれども まあ 三日くらいは もう そんなもの 合わな
 モノ。(笑) * ミッカクレーフ ナンジャソノ⁽⁷⁾ ヨソ イッテモテ。
 いのですよ。 三日くらいは 何ですや よそへ 行ってしまて。
 ウン ホイテ ムラジュ ヨンデ⁽⁸⁾ ムラジュ ムラシューキ⁽⁸⁾-----。
 そして 村中 呼んで 村中 村祝儀……。
 キタヒワ⁽⁹⁾ ソイテ⁽¹⁰⁾ マー ズビ シューキヤシ アクルヒワ ム
 来た日は それで まあ 旅(の人)の 祝儀だし 明日は
 ラシューキデスワノ⁽¹¹⁾。 ムラシューギ スンデ⁽¹¹⁾ ホイテ マー ア
 村祝儀ですよね。 村祝儀が すんで そして まあ 明
 ケタ⁽¹²⁾ ヒーグレニワ⁽¹³⁾ カオ ミルカナ。(笑)
 けた 日くらいには 顔を見るかな。

K ホリヤ ミタヤロゲノ (笑)。 ホンナモン ドコ イッテルッタ
それは 見たでしょうよ。 そんなもの どこへ 行っていると言

ッテ ヨソ イッテ トマツタンデワ ネーヤロデ。(笑)
ても よそへ 行って 泊ったのでは ないでしょうから。

Y ぬジャケド⁽¹⁴⁾ー ウチノ ヨメラ⁽¹⁵⁾ キタトキ ドノ ヒトガ オヤッ
けれども うちの 嫁などは 来た時に どの 人が 旦那さ
サンヤラ シラナンダツキユモ。 (^Kウーニ) ソリヤ ソーヤ
んやら 知らなかつたと言うもの。 それは そうです
ソノ。
よ。

K ダエーブ オッカチャン ウツナツタンニヤモ⁽¹⁶⁾ノ。 ノー。
大分 興さん 初心だったのですよね。

Y ウーニ。 ンナモン ジューハチグレイヤサケエ ンナ モー。
そんなもの 18くらいだから そんなの もう。

K ホリヤ ホーヤ。 ミンナ ンナ ホーヤケド⁽¹⁷⁾ー。
それは そうです。 みんな 皆 そうですけど。

Y ワカイサケエニ。
若いから。

K ワタシラー アノ オッカサン⁽¹⁸⁾ イナハラナンダテノ。 (^Yアー)
私などは お母さんが いらしゃらなかつたからねえ。 (ああ)

イナハラナンダテ⁽¹⁹⁾ー。 シュギ^キ シュギノ アイダグレア ナーモ
いらしゃらなかつたから。 祝儀の 間くらいは 何も

ンナモン オニヤフ⁽²⁰⁾ ウーニ。 ホイテ ムカシワ ゴカニチッ
そんなもの 何ですよね。 そして 昔は 5ヶ日という

キューノ シタシイ。
のを したし。

Y ホーデス。
そうです。

K イツカメニイ ⁽²¹⁾ アノ ~~アノ~~ オヤモトエ カエリマスン。 ⁽²²⁾
5日目に 親元へ 帰ります。

Y デ マタ イツカ ヤスンデ カイツテフルン。
(それで) また 5日 休んで 帰って来る。

K ホイテ トーカ ~~ジュッカニチュテ~~ ⁽²³⁾ トーカメニ ネ カエッテキ
そして 104日と言って 10日目に ねえ 帰って来ます。
マスン ウン。

Y ムカーシカラ ソリヤマー マ ナンデモ イッショヤケド イマ
昔から それはまあ まあ 何でも 同じだけれども 今

トァ ⁽²⁴⁾ ナナモン (K ホリヤ カタイデノ) ⁽²⁵⁾ カタイデー ナカナ
とは そんなもの (それは 真面目だからね 真面目だから なかな

カ ⁽²⁶⁾ ナナモン ナカナカ ムツカシーデ ナカナカ ヨメ モラウ
か そんなもの なかなか 気むずかしい(人間)だから なかなか 嫁を もらう

ッテ ミアイモ シタコト ナケナ……。 ワタシラ ナンデスモ
と言って 見合いも したことは なければ……。 私などは 何ですよ

ソノ ヨメ モラウッタッテ ドンナ ヨメサン クルヤ コノ ⁽²⁷⁾
その 嫁を もらうと言っても どんな 嫁さんが 来るか この

ヨメサン クルヤ シランノヤモ。

嫁さん 来るか 知らないんですもの。

K アー ホンデァ トショリシューガ ⁽²⁸⁾ アノ ミテキテ キメナシタ
ああ それでは 年寄り衆が (嫁と) 見て来て 決められた
⁽²⁹⁾
ンニャ。
んですわね。

Y ホヤ ホヤ シランノヤモ。 ⁽³⁰⁾ ホイテ サカヤー イッテタデシヨ。
そうです 知らないんですもの。 として 酒屋へ 行っていたでしょう。

サ サカヤカラ シカツツイタチニ キタニヤデノ。 ホイテ サ
酒屋から 4月1日に (帰て) 来たのですからね。 として

カ サカヤオ アンテ⁽³¹⁾ サケダシツ シット ヤッパ アンテ⁽³²⁾ ニ
酒屋を あれで 酒出しを すると やはり あれで

カツノ ハツカゴロンナケナ カエレンノヤ。 アゲダ⁽³²⁾ルテ⁽³³⁾ カエ
4月の 20日頃でなければ 帰れないんです。(それ)上げ樽で 帰

ッテキタンヤ。 ホイテ ウチカラ ナンデモ ダンネ シカツツ
て来たのです。 として 家から 何でも いい 4月1日

イタチニ カイッテコナ ウチャ ドーモナランノヤケ⁽³⁴⁾ ドーテモ
に 帰ってこなければ 家は どうにもならないんだから どうでも

カイッテコナ アカン。 ナニオイテモ ダンネ ヒマ モッテ
帰ってこなければ 駄目だ。 何を おいても いい 暇を もらって

カイッテコイッテユ。 ナモ ヨメトルトモ ナンモ ユワンモ
帰って来いと言う。 何も 嫁をとるとも 何とも 言わないも

ノ。

のね。

K ⁽³⁵⁾
ウーン。 ホンナンヤッタヤロノ。
そんなことだったのですか。

Y ヨメモラウトモ ナンモ ユワンモ (^Kウーン) ソリヤ ヨメ
嫁をもらうとも 何とも 言わないも それは 嫁

モラウトモ ナンカ ユヤー マー コッチモ ソノ カクゴシテ⁽³⁶⁾
をもらうとか 何とか 言えば まあ こちらも その 覚悟して

カイッテクル。 (^Kウーン) ナンニモ ユワンノヤモ。 (^K
帰て来る。 何にも 言わないんですもの。)

ホーン) タダ シカ ツツイ タチニ ャー モッテ ⁽³⁷⁾ ジヒィ ⁽³⁸⁾ カイツ
ただ 4月1日には 帰って 是非 帰って

テコナー (クウン) ウチー ヨーカ° アルンニヤサケー モー
ニおければ 家に 用が あるのたから もう

カカサレンノヤ。 ⁽³⁹⁾ ホンテ モー サトツタケドー。 アー
馬目たと言うことは出来ないだ。 それで もう 悟たけれどね。 ああ

コリヤ ヘータイカラ カイツタデ° ヨメテモ トレッチェンニヤ
これは 兵隊から 帰たから 嫁でも とれと言うんだな

ナー マー ホンナコッチャワイト オモテ マー イッテワ ⁽⁴⁰⁾ イ
まあ そんなことだろうと 思って まあ 行ては い

タワイ。 (クウン) ホイタラ エキエ アノー シンヤノ ⁽⁴¹⁾ オ
ましたよ。 そしたら 馬へ しんやの

ツツァガ ⁽⁴²⁾ ムカエニ キタワイノ。 (クウン) ンテ オンサ
親父が 迎えに 来ましたよ。 (それで) おじさ

ン ⁽⁴³⁾ ナンカ ワルイコツカイツタラ ナンヤ ワルイコトツテ シ
ん 何か 悪い事かいと言たら 何だ 悪い事って

ランノカツタデ° ~~シ~~ シラン ンナモ シツテタラ ワルイコツカ
知らないのかと言たから 知らない そんなもの 知てたら 悪い事かって

ツテ トワン。 イヤ ホンネンニヤ コンバン ヨメサ
聞かない。 いや そうではないんだ 今日 嫁さん

ン クルンテナツテ。
が 来るのでねと言って。

K コンバン ヨメサン。 ⁽⁴⁴⁾ ホンナンヤツタンケノ。(笑)
今晚 嫁さん。 そんなことだったのですか。

Y ~~ダ~~ ~~ダレノエ~~ ⁽⁴⁵⁾ ダレノエノツタラ アンチマンノヤーツテ ユーサケ バカナ
誰のだいと言たら 兎ちゃんのたって 言うから 馬鹿な

コト ユエマ⁽⁴⁶⁾ ナーモ ユワントイテ ンナモン コンバン ヨメ
こと 言え 何も 言わないでいて そんなもの 今晚 嫁

サン クルツタツテ ウラ シランジャ。 ンナモン カオモ シ
さん 来ると言っても 私は 知らないよ。 そんなもの 顔も 知

ラナ ナモ シランモン ホンナ ヨメサンテ アルケツテラヌニ
らなければ 名も 知らないもの そんな 嫁さんなど あるかいってまあ

ユ一テ ソーユ一テ カラコーテイタン⁽⁴⁷⁾。 ドレカ ニモツ
言て そう言て からかっていたのです。 どれか 荷物が

アルンナラ ニモツ モツテクワイノツテ。 ホイタラ マー サ
あるのなら 荷物 持って行きますよって。 したら まあ 酒

カヤカラ コーリモ アルシノ サケノカヌモ ナモカモ ミナ
屋から 行李も あるしね 酒の粕も 何もかも 皆

アツタシ ホイデ^レ ヨメデモ トルツチユンナラ モット サケ
あつたし それで 嫁でも 取るというのなら もっと 酒を

コーテ カイルンニヤケドノ ホンナコト シランシノ。 (^Kア
買て 帰るのただけどもねえ そんなこと 知らないし。

一ア) ホヤイノ。 (^Kホーヤ) サケデモ ドント コーテ
そうでしょうよ。 (そうです。) 酒でも どんと 買て

カイルン。 ソンナコト シラン。 (^Kウー) タダ カイツ
帰るのに。 そんなこと 知らない。 ただ 帰て

テコイチユデ⁽⁴⁸⁾ ホーイッテ カイツテキタダケノコト。 ホイテ
来いと言うから はいと言って 帰て来たただけのこと。 したら

エキ ムカエニ キタン。 (^Kウン) ケツナー⁽⁵⁰⁾ イツモ ホン
駅に 迎えに 来た。 おかしい いつも そんな

ナモン ムカエニ キタコター ネーノニ (^Kウン) キョーニ
なもの 迎えに 来たことは ないのに 今日に

カキッテ ムカエニ キタ。 ナンカ コリヤ ワルイコツチヤ⁽⁵¹⁾
限って 迎えに 来た。 何か これは 悪いことだ"な

ロクナ コツテネーワイ。⁽⁵²⁾ オンサン ナンカ ワルイコツカーツタ
ろくなことではないだろうよ。 おじさん 何か 悪いことか"って言ったら
ラ イヤ ベツニ ワルイコツテネンニヤ。 トテモ イーコツチヤ。
いや 別に 悪いことではないんだ。 とても いいことだ。"

(^Kウー) ホーカ (^Kアア)⁽⁵³⁾ ホイタラ アンチャンノ
そうか。 したら 兄ちゃんの

ヨメサン キョー コンバン クルンテ (^Kウン) ドーデモ
嫁さん 今日 今晚 来るので どうでも

キョー カイッテコナ モー アカンノヤ (^Kウー) キョー
今日 帰ってこなければ もう 駄目なんだ" 今日

ワ ドーデモ カイッテコナ アカンノヤ ヨサリマテ⁽⁵⁴⁾ (^Kウン)
どうでも 帰ってこなければ 駄目なんだ" 夜までに

) ナンシエナ アカンノヤッタ。 (^Kウー) ナーソーヤッ
何しなければ 駄目なんだ"と言った。 それなら そうして

テ ヒトコト ユーテクレナ アカンモッテ ユータラ イヤ ソ
ひと言 言ってくれなければ 駄目だ"って 言ったら いや そ

レ ユート アンチャン モー カイッテコト オモタサケー
れを 言うと 兄ちゃん もう 帰ってこないと 思ったから

(^Kアア) イワンノヤロツテ -----。 ソーカノ ソレモ アル
言わふんだ"ろうって……。 そうかね それもある

カモシランケト⁽⁵⁷⁾ -----。 ウラ エー ヨメサン アルニヤカイッ
かも知れないけれど……。 私は いい 嫁さん あるんですよ"って

テ ホーユーテ カラコータンエ。 (^Kオー) ナニ グダン⁽⁵⁸⁾
そう言っ からか"ったんですよ。 なに 具谷に

ニ ホントニ エーコガ⁽⁵⁹⁾ アツタンエ。 (^Kウン) (笑) グ
本当に いい娘が あったのです。

ダンカラ モラウンニヤデ⁽⁶⁰⁾ インナモン アカニッテ ウラ ユーテ
具谷から もらうんだから そんなもの 駄目だって 私 言って

カラコーテ イタンエ。 (^Kウーニ) ベ^{xxxx} ベツニ ダンネ マ
からかって いたんです。 別に いい まあ

ー ナンジャフイッテ⁽⁶¹⁾ ユーテ マー シカタネー タケフニ 久
何だよって 言って まあ 仕方ない 武生に (嫁に)

ルモン⁽⁶²⁾ アツタエ マー ビンボニン キテフレル ムヌメ アレ
来る者が あったら まあ 貧乏人に 来てくれる 娘 あれば

バ ホンデ イーワイ ユーテワ マー トニカク ビンボニンニ
それで いいよ(と) 言っては まあ とにかく 貧乏人だから

ヤケ ドーデモダンネ⁽⁶³⁾ ターデモ キテフレルモン アツタラ モ
どうでもいい 誰でも 来てくれる者が あったら もう

ー オカヨーシエ シテフレリヤ インニヤッテ マー シンヤノ
仲よくさえ してくれれば いいんだって まあ しんやの

オツツァン カラコーテ カイツタ。 ホイタラ アノ マンジュ
親父を からかって 帰った。 そしたら あの 饅頭屋

ーヤ アル^{xxxx}ロノ (^Kウン ウン) オガワノ⁽⁶⁴⁾ コッチニ⁽⁶⁵⁾。
あるでしょう 小川の こっちにねえ。

K キントキトーヤロ⁽⁶⁶⁾。
金時糖でしょう。

Y ウン キントキトー。
ええ 金時糖。

K ウン イマモ アルカシランケト⁽⁶⁷⁾。
ええ 今も あるかもしれないけれども。

Y アッコデー オメエ (^K ココワ ニナ ⁽⁶⁸⁾) マンジュヤナンカ ンナ ツム
 あそいで あなた (ニニは 皆) 饅頭や何か 皆 積む
 ンニエー。 (^K アーア) (笑) ホンデ⁽⁶⁹⁾ エア ウソデ⁽⁶⁹⁾ ネンニヤ
 んです。 (それでは うそではないんだ)
 口。 ホイテ ナーニヤ ホノ アソコデ ⁽⁷⁰⁾ ウマソニ ⁽⁷¹⁾ ヨブモン
 ろう。 そして 何です その あそいで うまそうに 呼ぶ者の
 ノ ンナ ゴツツォ モー ツムンニエノ。 マー ホンナトキニ
 皆 ごちそうを もう 積むんですよ。 まあ そんな時には
 ヤー マー ジョーサン コータッテ ヤスイコッチャワイノ。
 まあ たくさん 買ったって 安いんですよね。
⁽⁷²⁾ カー コリヤ モ サカヤカラ ⁽⁷³⁾ モロテキタノ ナンシタコッチャ
 ああ これは もう 酒屋から もらって来たのは 何したことかわか
 ワカラシ。 コリヤ ンナ ジエン イッテマウンカシラン。 ソ
 らない。 これは 皆 お金 なくなってしまうのかもしれない。
 ー オモタシノー。 ⁽⁷⁵⁾ ナンジャシラン ⁽⁷⁶⁾ ヨソカ ヒキテナラン ゴ
 そう 思ったしねえ。 何か知らないか よそが 出来ない ゴ
 ツツォ シンニヤッ チュサケ ホレ ンナモ ナニヤー ⁽⁷⁷⁾ ゴツツォ
 ちそうを するのだ"というから それ そんなもの 何故 ごちそうを
 シエナ ⁽⁷⁸⁾ ナンジュッテ。 イヤ ソーユワケニ イカンノヤ モ
 しなれば(いけない) なんだって。 いや そういう訳には いかないんだ" もう
 アルテード" ゴツツォ シエナ アカンノヤ。 タノムワ トニカワ
 ある程度 ごちそうをしなければ いけないんだ。 頼むよ とにかく
 ンナ ツンデ" カイルンニヤケ。 ホー……。 モー シカタネー
 皆 積んで 帰るのだから。 ほう……。 もう 仕方ない
⁽⁷⁹⁾ オメエ サカヤカラ カインノ マタ コンダ" シャツ イチマイ
 あなた 酒屋から 帰るのに また 今度は シャツ 一枚に

ン ナッテ ⁽⁸⁰⁾ コンナ イーミチデナシノー アノ キューナ サカ
なつて こんな いい道ではないしねえ あの 急な 坂を

オ アッコオ ガラガラ ガラガラト カナグ⁽⁸¹⁾ルマデ アカッテキ
あそこを ガラガラ ガラガラと 金車で 上つて来た

タンヤツノ マタ アノ キューナトコ。 イマコソ アンネ ミ
のですよ また あの 急な所。 今こそ あんな 道

チャ アルケド ウララ ヨメモロタ⁽⁸²⁾フンド ナーモ ミチャー
が あるけれども 私が 嫁をもらったけれど 何も 道は

ナカッタンヤデノ。マンブ^o デタトコノ アノ キューナトコ オリテキタンヤデノ。
なかつたのですからねえ。トンネルを 出た所の あの 急な所を 下りてきたんだからね

K ウン シタノホーガ アッタ アソコ アソコ-----。
ええ 下の方(の道)が あつた あそこ……。

Y オー キュードーノ アレ。
旧道の あれ。

K アッコ ⁽⁸³⁾ ナカイサケエー。
あそこ 近いから。

Y アノ キュードー アカッテキタンヤ ⁽⁸⁴⁾ ミナ。 (^K ウーン) ソ
あの 旧道 上つて来たのです みんな。

レカラ ⁽⁸⁵⁾ アトエ アノ イーミチャ テキタンヤデノ。
それから あとへ あの いい道が 出来たのですからねえ。

K ホヤ ホヤ。
そう そう。

Y アノー ⁽⁸⁶⁾ コザエーモン ヒトガ ソンチョー シテタンデ⁽⁸⁷⁾ ホイデ
あの 小左衛門の 人が 村長を していたので それで

アノ ヒトガ カネ トッテキテ ホイテ マンブカラ アツチエ
あの 人が 金を もらつてきて そして トンネルから あちらへ

ミチツケナシタン。 アン~~テ~~-----。
道をつけられた。 あれで.....。

K アレカラ アトヤツタンカノ。 ホヤケド (Y モー ゴジュー
あれから 後だからなのでおねえ。 けれど (もう 50年....。

(89)) ネン-----) ワタシラ ホノトキニワ ホンナ モー イナ
私ほど その時には そんな もう いら
(90) (91) (92)

ハランゴノ コザエーモンノ アノー イマノ オアンサンノ オ
っしゃらないですよ 小左衛門の 今の 旦那さんのお

トツツァンワ イナハラン。
父さんは いらっしゃらない。

Y イヤー ソノヒトガ ⁽⁹³⁾モロテキテ ミチオ ツケナシタノ。 カネ
いや その人が もらってきて 道を つけられたのですよ。 金を

オノ。イナハランケド。 ⁽⁹⁴⁾ホヤ~~ケド~~ ⁽⁹⁵⁾ソノ~~ヒト~~ ⁽⁹⁶⁾ソノトキラニ ウララ
ね。 いらっしゃらないけれど。 けれど その時ほどに 私達は
(97)

マー アンナ シタミチ オリタケド ホンナケナ モー ソー
まあ あんが 下道 下りたけれど そうでなければ もう そう

⁽⁹⁸⁾ワク~~ツ~~ツ~~ツ~~テ オリラレル ミチデ ナカッタニエ。
くぐらって 下りられる 道で 行ったのですよ。

K ホリヤ ホーヤノ。
それは そうですね。
(99)

Y ⁽¹⁰⁰⁾カッコーダケ デキタダケデ。 ホレカラ ズーット アト ナオ
形だけ 出来ただけで。 それから ずうと あとに 直し

イタデ イケルヨシナツタン。 (K アーア) ホリヤ オゾカッ
たから 行けるようになった。 それは ひどかった

タンヤデノ。 ~~ソ~~ ソレモマタ ニーツンダツテ カナアルマニ イ
んではからね。 それもまた 荷を積んでも 金車に

ケー バイオ ソエテ フジデ ヨッテ キッキリコー キッキリ
大きい 棒を そえて 藤で 繕って ききりニー ききりニー

コーッテ⁽¹⁰¹⁾ ナラカイト アノ キューナ マワリオ オッテキタン
と言って 鳴らして あの 急な まわり(道)を 下りて来たの

ヤデノ。 ウン グリグリ マワッタンヤ……。 マ ムカシア
ですからね。 ぐるぐる まわったんです……。 まあ 昔は

マダ⁽¹⁰²⁾ タイ⁽¹⁰³⁾ニ ヤヤコシトコオ アルイテイツタンニヤワノ。
まだ 大概 めんどうな所を 歩いて行たのですよねえ。

ホイテ マ ゴッツォ ツンデ カイツタワインニヤケド。 ホイタラ
そして どちらかを 積んで 帰たはいいんだけれども せしたら

ナント ミンナ ジョーサン キテルジャロイノ。⁽¹⁰⁴⁾ ドーモ アン
何と みんな たくさん 来てるでしょう。 どうも 兄ちゃ

チャン カイツテキトフレタンカッテ。 ウーン カイツテコイツ
ん 帰ってきて下されたのかと言って。 うーん 帰って来いと言う

キューサケ カイツテコナ ドーシンニヤッテ ユーテァ カラコー
から 帰ってこなければ どうするんだって 言っては からからて

テイタンニヤケド。⁽¹⁰⁵⁾ ホレカラ ソノ ママデ アンデ ミョート
いたんだけれど。 それから その ままで あれで 夫婦 盃

サカズキシテー ホレカラ モー コンナトコニ イタッテ オモ
して それから もう 二んな所に いたって 面白

ッショナー ドツカイッテ アソンデ⁽¹⁰⁶⁾コォーオモテ。(笑) ミョ
くない どこか 行って 遊んで こようと思つて。 夫婦

ートサカズキシテカラモ トード アスビニイッテモテ モ ワカ
盃してから とうとう 遊びに行つてしまつて もう 若い

イシュントコエ イッテモテ アスビニイッテ カイツテコンノ ヤ
衆の所へ 行つてしまつて 遊びに行つて 帰つて来ないんですもの。

モ。 ホイテ フタバノホド カイツテコナンダヤロ。 ホイタラ
そして ニ晩ほど 帰ってニおかたでしよ。 したら

一 アンデ ミッカメワ ムラシユキ スンデ アクルヒカ -----
あれで 三日目は 村祝儀か すんで 明る日か

チクオンキ ナライテ ウチノ オジボワ⁽¹⁰⁷⁾ リキンデ オジボワ (
蓄音機 鳴らして 私の 弟は 頑張って 弟は

笑) シェンソーイッテ シンダ オジボワ イッショケンメー
戦争に行て 死んだ 弟は 一所懸命

チクオンキ コンナ イッケー ラッパツイタネー。 ムカシノ
蓄音機 こんな 大きい ラッパのついたねえ。 昔の

チクオンキヤデ マー フルクシェーコトワ フルクシェーノ。
蓄音機だから まあ 古くさいことは 古くさいね。

⁽¹⁰⁸⁾
ソレオ チクオンキ ナライテ コー オジボワ イッショケンメ
それを 蓄音機を 鳴らして こう 弟は 一所懸命

ヤッテルトコエ⁽¹⁰⁹⁾ ヘー ヨメサン ソレ シラント ミッカメヤ
やっている所へ 嫁さん それ 知らないで 三日目だ

サケ ソレ デテミタンヤテ⁽¹¹⁰⁾。 ホイテ サンゾ⁽¹¹¹⁾ ムコサンカト
から それ 出て見たんだって。 して 三蔵か 婿さんかとは

バツカ オモタンヤテノ。 (⁽¹¹²⁾ アーア (笑)) ウラノ オトト⁽¹¹³⁾
かり 思たんだってね。 私の 弟か

カイノ。 ソイデ⁽¹¹⁴⁾ チョード アウシノ。 ウラト ムッツ チー
ねえ。 それで 丁度 (耳か) あうしねえ。 私と 6つ 小さ

シェンニヤケ⁽¹¹⁵⁾ ホイデ⁽¹¹⁶⁾ ヨメヤ ホンデ ウラト ココノツ チカ
いんだから それで 嫁は それで 私と 9つ 違う

ウンニヤケノ。 ヨメヤ ソンデ⁽¹¹⁷⁾ ヨーニアウト オモトニヤロイ⁽¹¹⁸⁾
んだからね。 嫁は それで よく似合うと 思たんでしよ

ノ。(笑) ホイテ ウラー (笑) ヒョコント カイツテキタモ
よ。 せして 私が ひょこりと 帰って来たもの

ンジャケ……。 ホイタラ ナカド(119) アノヒトア アンタノ ト
だから……。 したら 仲人は あの人は あなたの 父

一チャンヤジニノー ムコサンヤツテ ユータンツテ。 ホイ
ちゃんですよ 婿さんだって。 言ったんだって。 せし

テ マー ヘータイカラ カイツタシ ゲンキャイーシ(120)。 オー
て まあ (私は) 兵隊から 帰、たし 元気はいいしねえ。 おお

カオワ コロツ(121)チかうサケ ホー アノヒトカ トーチャンケ
顔は まるきり ちかうから ほう あの人が 父ちゃんですか

ノツテ。 ソヤツテ アノヒトカ ソヤツテ ユータンニヤツテノ。
って。 そうだて あの人が そうだて 言ったんだってね。

ホイテ マー アイテ ナットワシタラシンニヤ。 モー タツタ
それで まあ あれで 納得したらしいんです。 もう てきり

モンニ ソノ オトトオ ソノ ヨメサン(122) ムコサンカトバッカ(123)
その 弟を その 嫁さんでは 婿さんかとはばかり

オモタラシンニヤ。 ウケノ ヨメデア……。 ウラ ソー オモ
思ったらしいんです。 私の 嫁では……。 私は そうは 思わ

ワンシノ。 カタッポワ リキンデ チフオンキ ナラシテ キカ
ばいしね。 片一方は 頑張って 蓄音機 鳴らして 聞か

ショトオモテ イツショケンメ ヤツテンニヤ(124)ンジャサケ。
せよと思っ 一所懸命 やってるんだって言うんだから。

ウラ。 オメ アスビニイッテモテ マ……。 アホラシ テレフシ
私は あなたの 遊びに行っちゃって まあ……。 あほらしいし 照れくさ

エーシ ムカシノモンワ ~~イチゲニアツタシノ~~(125) カタカ
いし 昔の者は 一概あったしね 固かった

ッタシ。 ホリャ ⁽¹²⁸⁾ ホンナモン ナカッタンニヤフネ。 テー ハー
 し。 それは そんなもの ねからたんですよえ。 (それで) 兵
 タイカラ カエリダ⁽¹²⁹⁾チャ キビシカッタテノ。 ホレモ ナカッ⁽¹³⁰⁾
 隊から 帰りがわは 厳しかったですからね。

カネ。 (^K カタイ カタイモノ) ~~ニナモン~~ ニナモ モー
 固い 固いものねえ そんなもの もう

ハータイカラ カエッテカラ カンカンニヤサケ ニナ モー (笑
 兵隊から 帰ってから かんかん だから そんなもの もう。

)-----.

注記

- (1) [haitee¹] (2) [kitee¹] (3) 「シルンヤケド」とも。
 (4) 父親の意ではなく、嫁に対する「夫」の意。 (5) 嫁の(顔を)。
 (6) 司会者加藤の「だんぽさん (=夫) は祝儀に出ないんですか」の
 問いに答えて。 (7) 特に意味はない。 (8) 村祝儀の説明をし
 ようとしてやめる。 (9) 嫁が来たその当日。 (10) 遠くから来
 た人達のためにやる初日の祝儀。 (11) 二日目には村内の人に来て
 もらったの祝儀。 (12) [si:ri^ure:niwa] (13) 嫁の(顔を)
 (14) 「ホヤケド」と同様、断定の助動詞「ダ」の部分が「ヤ」から
 「ジャ」に転じている。ここでは語頭の「ホ」は聞こえず。
 (15) 「ラ」は「等」の意で複数を表わすのではなく、「～などは」
 という意で謙そんした気持ちを示す。 (16) 「ウブダッタンニヤ
 モノ」の混乱か。 (17) [kedo¹] (18) 「お姑さん」。 (19)
 [dade¹]。 (20) 「特にどうということはないからですよ」ぐ
 らいの意か。 (21) [itsukameniⁱ]。独特のイントネーション。
 (22) [masun] (23) 「10ケ日」は「5ケ日」で初めて里帰りした嫁
 が、実家で5日休んで、結婚式から10日目に嫁ぎ先に帰ることを
 言う。 (24) [imato^o] (25) 人間が硬い。 (26) 当時の兵役後の
 男子の性格を言っている。 (27) 特に意味のない不定代名詞。
 (28) 山本氏の両親のこと。 (29) 「ニヤ」が弱く聞こえる。 (30) 杜
 氏で酒屋へ行っていた。 (31) 新酒の酒出し。 (32) 酒出しの1
 つ前の行程。 (33) 「タンネ」は肯定的にも否定的にも用いられ
 る。ここでは肯定。 (34) 結婚式が出来なくなること。 (35) 語
 形は肯定だが、意味は疑問形。言い誤りか。 (36) 覚悟というの
 は少し大げさ。「つもり」ぐらいの意であろう。 (37) 漢文調の
 言い方。 (38) [gisi]。 [gesi]とも聞こえる。 (39) 「欠か
 されんのヤ」の「欠く」は用を、つまり結婚式を止めることを言
 うのだろう。 (40) 酒屋から「帰る」ことを「行く」と言うか。
 (41) 家号。 (42) 普通は蔑称であるが ここでは単なる親しみをこ

- めた意ととっていいだろう。(43) 実際に呼ぶ時の言い方。
- (44) 少しあきれたという口調。(45) 誰の嫁さんだいの意。(46)
- 「ユウ」の命令形に助詞のついた形。(47) 「カラカウ」は一般に悪い意味で使われるが、ここの意味にはそれはない。(48) [ho ja'ino]。「だってそうでしょう」の意。(49) 「ホーイ」は返事そのもの。(50) 「妙な」の意。[ketʃun̄a:] (51) はっきりしないがこう聞こえる。(52) [neʃi'wai]。(53) [aʃi'a]。独特のイントネーション。(54) こう聞こえる。「ヨサリ」は「夕方」の意。(55) 「帰ってこなければ」という内容だろう。(56) [ina:]。(57) 「そう言われれば、そういうこともあったかもしれないが」の意。(58) 地名。南条郡河野村具谷。(59) 「エー」は関西的。(60) 「親が勝手に決めても駄目だ」の意。(61) 特に意味はない。(62) 「武生に、私の所へ嫁に来る者があたら」の意。(63) [do:demo]。(64) 武生市内にある魚屋の名。(65) 上昇調のイントネーション。(66) 饅頭屋の店名。(67) [ʃirankedoʃ]。(68) 「この村では、皆饅頭はあそこで買いました」と言いかけた。(69) [hondeo]。(70) 「ウマソナ」の言い誤りか。(71) 「お客さん」の意。(72) 「これは困った」という感じの声。(73) 「給料」のこと。(74) 「結婚式の金として、どこかへ行ってしまってもいけない」の意。(75) [omotaʃin'o:]。(76) あいまいではっきりしない。(77) [nana:]。(78) [nangetʃte]。前の「ゴツツォシエナ」も「ナンジエツテ」も言いかけで、意味がはっきりつかめない。(79) 特に「あなた」と言うのではなく、相手に対しての呼びかけの意をもつ。(80) 急に話しが転換する。(81) 車輪が金属で出来た大八車か。(82) [morotake'do] (83) [sakeʃi:]。独特のイントネーション。(84) 「ン」と「ミ」の中間。(85) [atø]。(86) [kozæ:mon]。家号。(87) 「ホ」が短かく入る。(88) 「ノ」は弱い。(89) 「50年も前のことだ」とでも言おうとしたか。(90) [ano'o]。(91) [imano'o] (92) 旧家の主人などを呼ぶ言い方。(93) [ʃitogaʃi:]。(94) 「道をつけてその人」は

いないけれども。(95)「ケド」は「は、きりせず。あいまい」。
 (96)「ソノトキ」とは「道路のつく前」のことか。(97)「新しい
 道が出来なかつたら」の意。(98)「体を曲けても」の意で道の
 ひとさを表現する。(99) [ho:ja^hn^o]。(100)「道の」形。
 (101)擬声語。(102)「ケノ」とも聞こえる。(103)「複雑な」から
 「めんどうな」の意に派生。(104)「結婚式」に。(105)一般に
 言う「からかう」のニュアンスはない。(106) [k^ojo:] (107)
 「オジボ」は弟のこと。(108)蓄音機をさす。(109)ため息を
 つくように。(110)どこから出て来たのか。どこか同じ家の中で
 じっとしていたのだろう。(111)山本氏の弟の名。(112) [a^h:^ha]
 (113)「弟」を「オジボ」から「オトト」に言いかえる。(114) [so
 i^hde]。(115)「ホ」短かい。(116) [jome]。(117)「似合いの夫
 婦」の「似合い」の意。(118)「オモテタンニャロイ」または「
 オモテタンヤロイ」とも。(119) [nakada] (120) [i^h:^hjin^o].
 (121)「コロリト」の転か。(122)「て、きり」の意か。(123)
 連体詞「ソノ」。(124)「単なるつなぎことば」。(125)「エ」と
 も。(126) [k^use^h:^hji]。(127)「度量」あるいは「器量」の意
 か。(128)「そんなものでは」の意か。(129) [dat^hε] (130)こ
 う聞こえるか、意味はわからず。[fiaremo]。

5. 祝儀の話 (2)

話し手

(田舎号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y ホイテ ウチラノ ヨメ⁽¹⁾ ヨリモ ゴリモ アルトカ⁽²⁾ クルンニ
 として 私の 嫁は 四里も 五里も ある所から 来るんだ
 ヤケ トーイワイノ。
 から 遠いですよ。

K ヨワッテマウワノ。⁽³⁾
 疲れてしまうよね。

Y モー ココマデ クンノニ ヘトヘトンナッテマウ。 (K ホーヤ
 もう ニニまで 来るのに ヘトヘトになってしまう。 そうです
) ホンデ ワラジデモ ハイテヤコナ コラレン。 * ⁽⁴⁾ ウンウン
 それで 草鞋でも はいておけば 来れない。

ンナモ アッコカラ ホコヤ。⁽⁵⁾ (笑) アソコニヤ⁽⁶⁾ ソンナ モー
 そんなもの あそこから そこだ。 あそこへは そんな もう

ジュッポンホド アルキャー イッテマウサケ。
 十分ほど 歩けば 行ってしまうから。

K ホイテ⁽⁷⁾ ユキナカヤツタサケニ⁽⁸⁾ ユキナカヤツタサケニ。 サンガ
 それでも 雪中だったから 雪中だったからね。 三月

ツノ アレ ジュークンチヤツタケド ヨーケ アノトシモ ユキ
 の あれば 十九日 だったけれども たくさん あの年も 雪が

ヤ フリマシタンニヤフネ。 ウーン。 アッデー ~~ゴタイ~~ ゴタイ
降りましたのですよ。 あれで

イソーノトシヤツタンヤノー。⁽⁹⁾
御大葬の年だったんですねえ。

Y タイショー -----。
大正……。

K ゴタイソーノ⁽¹⁰⁾ アノー -----。
御大葬の あの……。

Y ~~シヨウワノ~~ ショーフノ。
昭和の。

K ウン タイショーテンノーガ⁽¹¹⁾ シニナシタトキノジャツタンニヤロ
ええ 大正天皇が お七くになりになった時だったんだらう

ト オマウガネ。 *⁽¹²⁾ ハーン ソノトキ オーユキヤツタ
と 思いますかねえ。 ええ その時 大雪だった

ンデスネ。 タケフネ イマシテ タケフネモ アノ マドカラ
んですね。 武生に いまして 武生でも 窓から

デハイリシマシタンデス。 アー⁽¹³⁾ (Y アー ホーカ) アノ ト
出入りしましたのです。 ああ (ああ そうか) あの

シモ オーユキヤツタンニヤフネ。 ヒドカツタンニヤフネ。 ン
年も 大雪だったんですねえ。 ひどかったんですよ。

デ マー ムカシノコッチャデネー。⁽¹⁴⁾ アノ ホンナジブンワ マ
それで まあ 昔のことだからねえ。 あの そんな時分は まあ

ー ゴチソーケユマシタカッタ⁽¹⁵⁾ ニシンヤトネ ダイコント タイ
ごちそうと言いましても にしんとね 大根と 里

モオネ ニタ オカズト⁽¹⁶⁾ ホシテ カズノコッチュノワ ホンナジ
芋をね 煮た おかずと して 数の子と言うのは そんな時

ブン ヤスゴザンシタデネー (17) ナンカシラン (18) ウチノ シ フタシ
分には 安うございましたからねえ 何かしらん うちの 私が

か ヨシテモロタトキワ カズノコガ ヨケ アツタンデ (笑)
(嫁に) 寄せてもらった時は 教の子が たくさん あたので

ミンナカ (19) カズノコ タベテモロタンジャツテ イーマスカー。 (20)
みんなに 教の子を 食べてもらったんだって 言いますかね。

ウーン シント (21) ボータラノニツケトネ ホンナ ゴッツオデシタ
それと 棒鱈の 煮付けとね そんな ごちそうでしたの

ンニヤフネ。 ウーン ホンデー マー リョーリヤナンカラ ト
です。 それで まあ 料理屋などから (料理と)

ルナンテ ホンナコトワ シマシエンサケネー。 (22) ウン ナニシエ
とるなんて そんなことは しませんからねえ。 何しろ

カズノコト ボータラト ニシントノ ゴッツオヤツタンヤノ。 (23)
教の子と 棒鱈と にしんとのごちそうだったんですね。

Y ホイテ マチカラキタ オカシグレータケ。
そして 町から来た お菓子くらいだけ(です)。

K ホヤ オカシワ (24) ヤッパ マンジューワ (Y ウン) カザツタン
そう お菓子は やはり 饅頭は (ええ) 飾ったん

ヤネ。 マンジューワ。
ですね。 饅頭は。

Y マチカラ キタデネ。 (25) オカシルイワ ミンナ アツタスケドー。
町から 来たからね。 お菓子類は みんな あったけれども。

モー ツクリヤツテ (26) ンナ リョーリヤツテ ネーシネー。 ホイ
もう 刺身だって そんな 料理屋というのは ないしねえ。 もし

デ モー ウチラノ ウチャー コノ サカナヤ マー ナンシタ
て もう 私の 家は この 魚屋は まあ 何した

(27) カシラシゲド ウチノ オツァー ハデモンヤッテ サカナリョ
か知れないけれど 私の 親父は はで着でして 魚料理
ーリ ツクンナツタサケ カブラケ イッテ サカナオ コーテキ
を 作られたから 甲斐城へ 行って 魚を 買って

クワイノ。 ジョーサン。 (^K ヤッパ サカナワ.....) ホイデ
来たよね。 たくさん。 やはり 魚は

ホ ⁽²⁹⁾ ホイデ ツクリワ クワイ リョーリシテ シテ..... (^K キ
そして 刺身は ます 料理して... き

レーノ リョーリノシル ジョースナヒト タノンデ ホイデ シ
れいに 料理をする 上手な人を 頼んで として

テモロタンデスワネー。 ⁽³⁰⁾ ウーン。) シテ クワシタゲド。 ホ
してもらったのですよねえ。 して 食べさせたけれども。

ンデ ⁽³²⁾ ゴツツオワ ンナ ウチマカシエヤネ。 ホンネ ソンネ
それで ちそうは みんな 内まかせですね。 それで そんなに

ワリー カネカカラナンダンデスワネ。 イマ ミナサイノ ホン
割に 金が かからなから たんですよ。 今 ごらんねさいよ そんな

ナモン ⁽³³⁾ チョーットシタツテ モー ツクリヒトサラ モロタツテ
なもの 少ししても もう 刺身一皿 もらっても

ナンジェンエンテ ⁽³⁴⁾ カカッテマウン ニヤロイノ。 ンナモン ンナ
何千円と かってしまうんでしょう。 そんななもの みんな

カスナ ⁽³⁵⁾ ハナシンナツテモタンジャカイヤ ⁽³⁶⁾ モー。 マエワ オメ
たいへんな 話になってしまったものですよ。 もう。 前は あなた

シェンエンモ ⁽³⁷⁾ ニシェンエンモ ジェン モッテナ カスナ ダン
千円も 二千円も 金を 持っていたら たいへんな 金

ナンショヤッテ ⁽³⁸⁾ ユタンニエ。
持ちだって 言ったんだ。

K ホリヤ ホーヤノー。
そりゃ そうだよねえ。

Y イマ ミナシエーノ イツシエンヤ ⁽³⁹⁾ ニシエン ⁽⁴⁰⁾ モッテルモンナン ⁽⁴¹⁾
今は ござんばさいね 千円や 二千円 持っている者は

マ- ダンナンショヤッテ ユワン……。
まあ 金持ちだつては 言わない……。

注記

- (1) [jome] (2)「アルトコロカラ」の省略形。 (3) [mauwan^o] (4)司会者加藤の「おばちゃん(加藤ス子氏)ときは、どうや、たの問いに答えて。 (5)加藤氏の生家が嫁入り先のすぐ近くであることを言う。 (6)加藤氏の嫁入り先を言う。 (7)「ソイデモ」>「ホイデモ」の「モ」が消えた。 (8) [jattasake^{ɾ:}]。独特のイントネーション。 (9) [jattanjan^o:]。 (10) [gotaiso^{ɾ:}n^o]。独特のイントネーション。 (11) [sininaʃi²ta]。 (12)研究担当者佐藤の声が入る。 (13)自己のうなずき。 (14)「昔のことで大変だった」の意のことを言いかけている。その後自分の祝儀に話しをもどす。 (15)「ニシンヤ ~ヤ」と言いかけて「ニシントネ」と言い直す。それの続いた形。 (16)副食の意。 (17)このあたり、ことばが少し丁寧になっている。佐藤に話しかける口調。末尾上昇調のイントネーション。 (18)「うちの祝儀には」の意。 (19)「みんなが 数の子を食べる」と「みんなに 数の子を食べてもらう」の混乱で「か」になったのだろう。 (20) [i:masuŋa^{ɾ:}] (21)こう聞=える。 (22) [sakene^{ɾ:}] (23) [gottso]。 (24) [okaʃi¹wa]。あとの「マンジューフ」も「ワ」が強い。 (25)「アツタテステドー」の省略形。 (26) [ne^{ɾ:}ʃi¹ne^{ɾ:}]。 (27)具体的に何をさすのか不明。 (28)「スタイリスト」の意ではなく、「田舎者らしくない、いろんなことをやった人」というような意か。 (29)「ダイイテ」>「ダイチ」。「第一に」の意。 (30)上昇調のイントネーション。 (31)客に。 (32)自分の家の中だけで用意する。他人の世話にならぬ。 (33) [tʃo^ɾit^o]。 (34)小さくて最後聞=えず。 (35)「かすね」は「ひどく」とか「大変だ」の意で使われる。 (36)いかにも最近の物価高騰にあきれたという様子。 (37)「モツテナ」この様は「ナ」の使い方は珍しい。 (38)「旦那所」からか。金持ちや昔の地主などを言う。 (39)はっきりしないが、こう聞=える。 (40)「エ

ン」が省略されたか。(41)「モッテルモンワ」の変形か。或は
「モッテルモンナンゾワ」の意。

6. 精勤章 (軍隊での) の話

話し手

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
Y	山本仁太郎	男	明治37年生れ
K	加藤久子	女	明治45年生れ

Y ナン⁽¹⁾ マジメイッポーデ ショーネンハーシエーキンショー⁽²⁾ モ
 何の 真面目一方で 初年兵 精勤章を
 ロタンヤデノ。 ココエ シエーキンシエ⁽³⁾ モー イッペン モロ
 もらったのですからね。 もう 一度 もら
 タンヤデ ショーネンハーノ ハチカツツイタチニ。 ⁽⁴⁾ ホラ ⁽⁵⁾ モー
 ったのだから 初年兵の 八月一日に。
 ハリヤモ⁽⁶⁾ マジメイッポーヤッタヤ。 ホンナモ チュータイ⁽⁷⁾
 それけもう 真面目一方だったのです。 そんなもの 中隊で
 デ ヒトリシカ アタラナンダンヤデ⁽⁸⁾。 ソレ モロタンヤデ⁽⁸⁾ シ
 ひとりしか もらえなかったのですから。 それを もらったのだから
 エーキンショー⁽⁹⁾。 ホイタ⁽¹⁰⁾ モー ニネンハーモ モー ナンニモ
 精勤章。 したら もう 二年兵も もう 何にも
 ユフナンダデノ モ ソレカラ。 ホラ ワタシダケ オコラナン
 言わなかったからね もう それから。 それは 私だけは おこらなかつ
 タノ。 (^K ウー) ジェットアイ⁽¹¹⁾ オコラナンダジャ。 ホンナ⁽¹²⁾
 たね。 絶対に おこらなかつたんだ。 そんなもの
 モン タタキモシエナ モー オコリモシエナンダ。 ホリヤ ア
 の たたきもしなければ もう おこりもしなかつた。 それは あ

1 シェーキンショーノ トクデノ。(13) (K ウン) シェーキンシ
の 精勤章の 得でね 精勤章を

ヨー モロテンモンワ ヤッパ シカフ ネーンニヤデノ。(14) (15) (K
もらってない者は やはり 資格が ないんですからね。

ウン) ウーン。 マ シェーキンショーチュノワ ヨカッタヤ。
まあ 精勤章と言うのは よかったんです。

コライラ (16) ホラ イッパン バツウケテモ ソノ シェーキンショ
それは 一度 罰を受けても その 精勤章が

ー アレバ バツ (17) ノー ナッテマウンニヤデノ。(K アーア)
あれば 罰が なくなってしまうんだからねえ。

バツ バツソク ノガレルンニヤデ。 ホイデ アレ シヨネン
罰則を 逃れるんだから。 そして あれ

ショネンハーノ アイデ ジューガツカ ジューイチガツノ ジュ
初年兵の あれで 十月か 十一月の 十九

ークニチノ シアイニ デェテエ ユーショーシタヤンノ。(18) (K
日の 試合に 出て 優勝したでしょうね。

アーア) アノ ヒトニ (19) チカラ アツタサカエー ンナモ ドン
あの ----- 力が あったから そんなもの どん

ナモン ミムナ カチオッテモタンヤサケ。(20) ジューニン マカサナ
なものも 皆 折ってしまったのだから。 十人 負かさ

アカンノヤケノ。(21) (K アー) (22) ホンナモン エラカッタジャ。
なければいけないですよ。 そんなもん 大変だったんです。

ホン ホンナモン デナカッタ ジャ。(23) (K ウーン) イチバンアトニ
そんなものではないからですよ。 一番あとには

ワ トクサンガ デンニヤ トクムソーチョーチュノ。 (24) ハータイ
特さんが 出るんです 特務曹長と言うの。 兵隊

エレン イチバン エレー トクサンヤデノ。 (25) (K アー) ソレカ
達の 一番 偉い 特さんだからねえ。 () それから

ラ マー ショーイン ナルンニヤケド ソノ トクサンオ マカ
まあ 少尉に なるのだからねえ。 その 特さんを 負か

サナ マカンノヤケナ。 アンナ オメエー イッペーソツカラ
さなければいけないんだからねえ。 あんた あなた 一兵卒から

アガツタ トクサンオ マカサナ アカンノヤケ (K アーア)
上ってきた 特さんを 負かさなくては いけないんだから。 ()

モー カエスツキューマデ ムコー ウツテマワナ アカンノヤケ
もう 返すと言うまでに (26) むこうを 打ってしまったら いけないんだから

ホンナモ カエスツキューマデ モー バートン (27) モー ムコーノ
そんなもの 返すと言うまでに () もう ばーんと もう むこうの

モクジユ カチオツテ ウラ オツテモタン。 (28) (29) (K アーア)
もくじゅを 折って 私 折ってしまった。 ()

) ヌラ ヨッシャーチュテ テー アゲンニヤ。 (30) (31) オメエラ
お前ら よしっ と言って 手を 上げるんだ。 ()

アカン コノ ヘータイニヤ イクラ カツテモ カタレンノヤッ
駄目だ この 兵隊には (32) (33) いくら 打っても 勝てないんだと

テ ヨッシャー。 イヤ ソノトキノ ウレシカッタノー。 ホヤ
言て よしっ。 いや その時には 嬉しかったねえ。 けれ

ケド ジュッポン ヨー マカイタト オモウワノ。 (K ホージ)
ども 十本 よく 負かしたと 思うね。 () そうで

ヤノー) コンナ メタル アルンデスワ (K ウーン) サンロ
すねえ こんな メダルがあるんですよ () 三六

ワツテ カイタネ メダル。 (34) (K ウーン) (35) イマ ワタシ
と 書いたね メダル。 () それは 今も 私の

ノ キネンニ ダイジニ トツタルシテ、 ショネンハノネ。 ⁽³⁶⁾
記念に 大事に 残してあるんです 初年兵のねえ。

⁽³⁷⁾ ソラ アタランノヤ。 ⁽³⁸⁾ ヒトリシカ アタランノヤ。 (^K
だって それは もらえないんだ。 ひとりしか もらえないんだ。

アア) ⁽³⁹⁾ ホンナモン 千カラマカシエヤモ モ ホンナモン タ
そんなもの かまかせだもの もう そんなもの 誰

レモ ⁽⁴⁰⁾ ヨーシャシエンノヤモ。 ンナ ネレエーモンヤトオモテ
にも 宥赦しないんだもの。 そんな 偉い人だ"と 思って

ヨーシャシテタラ ⁽⁴¹⁾ コツチャ マケンニヤデ。 カマエツツテ ユ
宥赦していたら こちらが 負けるんだから。 構えつ、と

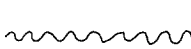
一マデニ ⁽⁴²⁾ パート ムコーノ モクジュ ケシオツテモタンヤデ。
言うまでに ぼーんと むこうの もくじゅを へし折ってしまったんですから。

(^Kウーシ) ⁽⁴³⁾ 千カラマカシエヤツテ ンナモ モー カマワンノ
かまかせだって そんなもの もう かまわすん

ヤデ。 カマエツツテ ユ一マデニ ムコーノ モクジュ ぼーん
だから。 構えつ、と 言うまでに むこうの もくじゅ ぼーん

ト オツテモタンエ。 ⁽⁴⁴⁾ (^Kウシ) ヨツシャー。 ソーシエナ
と 折ってしまったんだ。 よし、。 そうしなければ

カテンノヤモ。 ⁽⁴⁵⁾ モ マトモニ ムコータラ ムコーガ ハエーン
勝てないんだもの。 もう まともに 向かたら むこうが 早いんだ

ニヤケ ⁽⁴⁶⁾ ナンジューネンテ フローシテルンニヤ。
から  何十年で 苦労しているんです。

ホンナモンニ ⁽⁴⁷⁾ カト一ツタラ マケヤデ コーリヤ コレ ヨシ
そんな着に 勝とうと言ったら 負けたから これは これ よし

マテ アンナモンワ モー ケシオツテヤラナ アカンノヤ。 モ
待て あんなものは もう へし折ってやらなくては いけないんだから。

一 オラレタラ ツイテコラレンノヤサケ ⁽⁴⁸⁾ カマエツツチュマデニ
もう 折られたら 突いてこられないんだから 構えつ。 と言うまでに
バート キシエオ ⁽⁴⁹⁾ オツテモタン。 ⁽⁵⁰⁾ ハタシテ チカラワア
はーんと ヘし折ってしまった。 なるほど 力のある

ル オトコヤッテ ユータモンテ ホリヤ チカラ アツタンヤテ
男だつて 言ったくらいで それは 力が あつたんだから

ホナモン ニジュツカンノ イシナ ポイト ウケタンヤサケ
そんなもの 二十貫の 石を ほしいと 受けたんだから

デニヤ チカラ アツタンヤテ。 ⁽⁵¹⁾
手には 力が あつたんだから。

K コメ ニヒョーモ オイナシタツチュンニヤデー ⁽⁵²⁾ チカラ アンナ
米を 二俵も 背負われたというのですから 力が お有り
シタンニヤノー。 ⁽⁵³⁾ ⁽⁵⁴⁾ ウン。
におつたんですねえ。

Y チカラ ダケワ ⁽⁵⁵⁾ デタンニヤノー ドダイガ。 ⁽⁵⁶⁾ シナモン ホンナケ
力だけには 出たんだねえ ともそもが。 そんなもの そうでな

ナ ヤッパ ⁽⁵⁷⁾ メタル トレナンダノ。 (^K ホーヤ) ホイテ ソ
ければ やはり ⁽⁵⁷⁾ メタル 取れなかつたからねえ。 (^K そうです) として そ

ーヤッテ ⁽⁵⁸⁾ カンカンナッテ カイツテキタトキヤンノ。 シンデ ヨメ
うして ちかちかになつて 帰つて来た時でしょう。 それで 嫁

モロタカッテ ソレヤ ナンヤシラン テレクサカッタワイノ。 (^K
をもらつても それは 何か知らないか 照れくさかつたですよ。)

笑) ホイテ マダ トロート オモー テナンダシノ。 (^K ウー
として まだ (嫁を) とうとう 思つていなかつたしねえ。)

ン) ウン。

注記

- (1)「真面目一方で」の程度を強める働きをしている。(2)発音があいまいではっきりしないが、「ショーネンヘー」は「ショネンヘー」の言い誤りであろう。(3)このように聞こえるが、はっきりわからない。(4)倒置的表現。山本氏はこういう表現が多い。
- (5)「ハ」とも「ホ」とも聞える。(6) [harjamo:] (7) 単隊での。(8)「あたる」は「人から貰える」の意。(9) [se:kinʃo:]
- (10) [hoitara] (11) このあたり語気強い。(12) 特に意味のないつなぎことば。(13) [tokuden^o]. (14) [morotein] > [moroten].
- (15)「特別の扱いを受けるだけの資格」とでもいう意か。(16) あいまいで聞きとれず。(17)「バツ」とも。(18) [ʃitaʃanno]
- (19) 聞きとれず。「アンナ ヒトイキ」で「あの頃 一時は」の意か。(20)「折る」の強調。(21) [jaken^o]. (22) ここの方言では「エライ」は「偉い」の意と「つらい」、「疲れた」、「大変だ」などの意と併用されている。この場合は、試合で10人抜きをするのは大変だったの意。(23)「何も知らない人が考えるように、そんな簡単なもんじゃ無い」の意であろう。(24) 単隊階級名。兵隊の中での一着上の階級。(25)「エライ」の訛音。ここは文字通り「偉い」の意。(26) 試合中の号令かかけ声だろう。
- (27) 棒で相手を打つ時の擬声語。(28) いわゆる「木銃」か。(29) このあと「～しまわなくてはいけないんだ」の意のことばが続くらしく、「それで私は折ってしまっただ」と後に続く。(30) 審判の判定の声であろう。(31) 審判が勝着の方に手を上げるのか、それとも、直接手を握ってあげるのか。(32) これも審判の声だろう。(33) [tokinezɛ]. (34) 鯖江36連隊。(35) あいまい。
- (36) [non^e]. (37) はっきり聞こえない。こう聞こえる。(38) [atʃarannoʃa]. (39) 棒試合でカマかせに相手を打ったことを言う。
- (40)「手加減を加える」意。(41) 試合はじめの号令か。(42)「折る」の強調。(43) 相手のことなど(構わない)の意。(44)

これも審判の号令か。(45)相手の打ってくるのが(早い)の意。
(46)相手の上官が軍隊で何十年も苦勞しているの意。(47)「コー
リャ」も「コレ」も「ヨシ」も「マタ」もともに、当時山本氏が
試合の時に思、たことそのままの表現。あと「アカンノヤ」まで
続く。(48)「相手が棒を折られたら、もう自分を突いてこられ
ないから」の意。(49)「ケシ」とも聞こえる。(50)特殊な使
い方。(51)このあたり、思いつくままに言葉を並べてる感じ。
(52) [pade⁷] 独特のイントネーション。(53) [pano⁰]。上昇調
のイントネーション。(54)自己のうなずき。(55)「土台か」
の意。(56)特に意味のないうなずきことば。(57) [met⁰ru]。
試合で優勝した時のメダル。(58)「兵隊での訓練を受けて」の
意。

7. 幣貨改正

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

K アー オボエテエンケドー⁽¹⁾ アノー ヘーカカイシエーンナツタト
 ああ 覚えていないけれど あの 幣貨改正に当たった時に
 キニ⁽²⁾ アノー アノ オカネガ ミンナネ カヨイニ アツテモ
 お金が みんなね 通帳に あっても
 アレー イチジ^三 ニンズ^二ー ニヨツテネー アノー ギンコーナ
 あれが 一時 人数によってね 銀行なり
 リ ノーキョーナリ アズケタツタ ソレガ⁽³⁾ ニンズ⁽⁴⁾ー ニヨツテ
 農協なりに 預けてあった それが 人数によて
 ダサレタデ。 イクラ ヨケー アツタカッテ ジブンガ ホシー
 出されたから。 いくら たくさん あっても 自分が 欲しい
 ダケツチユテ ダサレマセナンダンニエ。 アレ ヘーカカイシエ
 だけと言って 出されませんでしたのです。 あれは 幣貨改正の
 ーノトキヤツタンヤノー。⁽⁵⁾ (Yウーン。 ウン ホリヤー -----)
 時だったんですねえ。 (それは……)
 モー ケツコンシキヤ ナンカ^三 ショート オマウト エレコ⁽⁶⁾
 もう 結婚式や 何か しようと 思うと たいはん
 ッチヤツタンニヤ。 ミンナネ ヤッパリ ホレ カシテモラワナ
 なことだったんです。 みんなに やはり (手ら (金) 貸してもらわな

ネエ⁽⁷⁾ デキマシエンデネエ⁽⁸⁾ ウーン。 アトモ オゾイコトヤツタ
くてはね 出来ませんからねえ。 あれば たいへんなことだった

ンジャ アレモ⁽⁹⁾ オゾイコト オータノ⁽¹⁰⁾。 (Yホーデス) ウー
んです あれも ひどい目に 会ったね。 (そうです)

ン。 (Y マ……) オカネノ キリカエヤツタデー。
お金の 切り替えだったから。

Y アンナトキネ ヤッパ ジェンガ アツタヒト⁽¹¹⁾ ヤッパリ⁽¹²⁾ ンナ
あんな時に やはり 金が あった人は やはり みんな
ソレデ……。
それで……。

K ミンナ ダシマシタンデスデネ オカネオ。 アリマシテモ。 ホン
みんな 出しましたのですね。 お金を。 ありましても。 それ
デモ アンナジフンニ⁽¹³⁾ ジューエンアルト⁽¹⁴⁾ ダエーブ⁽¹⁴⁾ イケー カ
でも あんな時分に 十円 あると 大分 大きい 金
ネノヨーニ オモタガノ⁽¹⁵⁾。 (Yホーデス) ジューエンサツツチ
のように 思ったかねえ。 (そうです) 十円札と 言うのが
ユーノガ⁽¹⁶⁾ アリマシタンニヤ。
ありましたのです。

Y ホイデ アノ カンナカッツアラノ シンニヨモンチユノアー (⁽¹⁷⁾
それで あの 上中津原の しんによもんと言うのは

K ウン) アッコニ イチマン⁽¹⁸⁾ シカ イチマン⁽¹⁹⁾ ナンジエンエンカ
あそ二に 一万(円) か 一万何千円かを

キョキンシタツタンエ。 ソレ ンナ モー ⁽²⁰⁾ フーサンナツテモタ
貯金してあったんです。 それか みんな もう 封鎖になつてしまつた

ヤンノ⁽²¹⁾。 ホレ キョウシエンナツテモタヤロノ。 モー ソノ
でしょう。 ほら ⁽²²⁾ 旧 銭に なるてしまつたでしょう。 もう その

トキニ⁽²³⁾ ナー ソンナトキノ⁽²⁴⁾ イチマンエンチュト ホレ イカ
時に ねえ そんな時の 一万円と言うと それは 大
カッタラシーワノ。⁽²⁵⁾
きかららしいですよね。

K ホーヤロー。
そうでしょう。

Y ソレガ モー ニシエンエンカ ソコラシカ トレナンダンニヤ。
それか もう 二千円か そこいらしか もらえなかつたんだ。

(^Kウーニ) ホイデ⁽²⁶⁾ マー オッカ ボケテモタンヤデノ。⁽²⁷⁾
それで まあ 母さんは ほけてしまったんだからね。

K アーア⁽²⁸⁾ ホーケ) ホンデ アレカラ モー アイノコ シンデ⁽²⁹⁾
そうですか) それで あれから もう まもなく 死んで

モタンエ。 ソラ モー ジェンガ⁽³⁰⁾ クレントナルト ボケテマウ
しまったんだ。 それは もう 金を くれなないとすると ほけてしまい

ワイノ。 ニナモン アタルモンモ アタランノヤデ。⁽³¹⁾
ますよ。 そんなもの もらえるものも もらえないんだから。

K アノトキモ コマッタワノ⁽³²⁾。 アノ オカネガ アノー フーサ
あの時も 困ったよねえ。 お金か 封鎖

ンナッタトキモ⁽³³⁾。
に悩んだ時も。

Y フーサンナツタンケ⁽³⁴⁾ ナサケネー モンジャモ。 モー アッテ
封鎖に悩んだんだから 情けないものですよ。 もう (金か)あつて

モ クレニノヤケ。 (^Kホーヤ) ウチラ イッシエンモ ダ⁽³⁵⁾
も くれなないんだから。 (そうです) 私の家ほど 一銭も 出

シテモラエナシタ。 ヒトガ スケナカッタデ⁽³⁶⁾ アカン。 モー
してもらえなかつた。 人が 少なかつたから 駄目だった。 もう

フーサンナツタキリヤツタエン。ホイテ" マー フワイギンコイ⁽³⁷⁾
封鎖になつたきりだったんです。 それで まあ 福井銀行に

ニ チョッコ ジェン アツタデ" ソレ トンニイッたら ソレモ
少し 金が あつたから それを 取りに行つたら それも

アカンチュンニヤロ。 マー アンナ オモッシエ コトモ⁽³⁸⁾ ナカッ
駄目だつて言うんでしよう。 まあ あんな 面白くないことも ほか

タノ。

たね。

K ⁽³⁹⁾ ホントヤーノー。

本当だ"ねえ。

Y アレアー フワイギンコアー⁽⁴⁰⁾ クスノギチョーニ⁽⁴¹⁾ アツタンエ。
あれは 福井銀行は 榎町に あつたんだ。

アノフキンニ コーネー。 (^K ウーン) アノ ギンコー イマ
あの付近に こうねえ。 あの 銀行 今は

コ^{xxxx} コツチェ サクラチョーノ⁽⁴²⁾ ンナ カワッテ イーノ タテタ
こっちへ 桜町の(方へ) 変わって いいのを 建て

ケド。 (^K ウーン) マエヤ ムカイガワニ⁽⁴³⁾ アッテ⁽⁴⁴⁾。 (^K
たけれども。 前は 向こう側に あつてね。

ウン) アノ サクラチョーノ ムカイガワニ アツタ チーシエ
あの 桜町の 向こう側に あつた 小さい

ー ギンゴガ⁽⁴⁵⁾ イツケンガ。 ソコエー アズケタツタノ⁽⁴⁶⁾ トンニ
銀行が 一軒が(あつた)。 そこへ 預けてあつたのを 取りに

イッたら モー ホンナモン⁽⁴⁷⁾ アカンノヤツ。 アカーンチュコト⁽⁴⁸⁾
行つたら もう そんなもの 駄目なんだ。 駄目ということは⁽⁴⁹⁾

ネーワ ンナモン アズケタモン チョッコダケデモ クレツテ
ないよ そんなもの 預けたもの 少しだ"けて"も くれて

モ チョッコ モラフナツタラ アカント。 ⁽⁵⁰⁾ ホカ マー アカン
もう 少しは もらわなくてはと云たら 駄目だ。 ⁽⁵¹⁾ そうか まあ 駄目な

モンナラ アキラメルワ ⁽⁵²⁾ ナ カエ モヤイテマウワ。 ホヤケ
ものばら 諦めるよ そればら 返せ 燃やしてしまうよ。 けれど

ド ⁽⁵³⁾ モヤサントキナシエ マタ アトネ ~~マダ~~ マダ キクコトモ
燃やさないで"おきなさい また あとに また 使えることも

アルサケッテ。 ⁽⁵⁴⁾ ホイテ アレ モー ~~ジュ~~ ジューネンホド"タッ
あるからって。 として あれで"もう 十年程 たってから

テカラ ⁽⁵⁵⁾ (^Kウー ン) イッタニヤ (^Kア - ア) ホイタラ
行ったんだ" したたら

クレタモ。 ⁽⁵⁵⁾ (^Kウー ン) アレホ リソク ダイブ" ツケテ ク
(金)くれました。 あれで 利息 大分 つけて く

レタ。 ⁽⁵⁶⁾ ヨー モヤサント ホットキナシタワノッテ。 オー ホ
れた。 よく 燃やさないで" 放っておかれましたよね。 ああ

ヤッテ モー アカンサケ ⁽⁵⁷⁾ モヤイテマオト オモタンヤケド" マ
だって もう 駄目だから 燃やしてしまおうと 思、たんだ"けれど" 待

テ コナモン ⁽⁵⁸⁾ マタ ⁽⁵⁹⁾ モヤイテモタッテ ナンニモナランデ" マ
て こんなもの また 燃やしてしまっても 何にもならないから ま

ー ⁽⁶⁰⁾ モッテテミー マタ ⁽⁶¹⁾ アクカ イッペン メーツアト オモテ
あ 持っていてみる また きくか 一度 思、て

ホイテ トイニイッタラ ⁽⁶²⁾ マー ソレナラ モー モ ニッポンモ
として 開きに行、たら まあ そればら もう 日本も

ナンシテキタシ ⁽⁶³⁾ フクイギンコーモ ナンシテキタサケー オアケ
何してきたし 福井 銀行も 何してきたから 差し上

シマスツキユサケ ⁽⁶⁴⁾ オー ホーカ ⁽⁶⁵⁾ ホンナラ クレツキユテ モロ
けますと言うから ああ そうか そればら くれと言、て もら、

タ。 ヤッパ ソノトキ モヤイテモタラ モー ソンテ アカン
た。 やはり その時 燃やしてしまったら もう それで 駄目な

ノエ。 ソヤケド ワタシナンカ コノ シェンソニ イッテ コ
んだ。 けれど も 私なんか この 戦争に 行って(もらった)
(61)

クサイ ニナモエ タダ アカンワノ。 シェンソニ イッテ ナ
国債 みんな もう 全く 駄目なんだ。 戦争に 行って

ガエーイ (62) アイダ ハタライテキタ ナンシタコッチャ ワカラン。
長い間 働いて来たのは 何した事か わからない。

アタツタ コクサイ。 (^Kウン) イッシェンモ アカンノヤ。
もらった 国債。 一銭も 駄目なんだ。
(63)

ンナ ムコー ナツテモタ。 ワンショニ サガッテキマシタネ。
みんな 無効に なってしまった。 勲章に 下がって来ましたね。

ソノ コクサイガ モー アカンヨンナツテモタ。 ロッピャクエ
その 国債が もう 駄目におてしまった。 六百円と言

ンテ マタ ソノトキノ ロッピャクエン イケーゾ。 * (^Kホー (64)
うが また その時の 六百円は 大きいよ。 (そう

ヤ) ウーン。 サンジューゴネンノサキノ ロッピャクエンタラ
です) ああ。 三十五年 前の 六百円 と言うのは

イケーデッシャ。 ホンナコト ユート ミナ フラウケド オカ
大きいですよ。 そんなこと 言うと みんな 笑うけれども
xxxx

シ オカシモ ナーモ ネンニヤモ。 ソノトキル (65) ロッピャクエ
おかしくも 何とも ないんですもの。 その時の 六百円は

ンッ (66) マタ ホンナモン イケー ショタイヤツタンエ。 ホイデ
また そんなもの 大きい 所帯 だったんです。 として

ソレ サカグチノ ユービンキョク オクツチユア アカンチュニ
それ 坂口の 郵便局へ 置と言えは 駄目だって

ヤ。 ホンテ カナサエ オフッテモタンエ。 (^K アーア) ホ
言んだ。 それで 金沢へ 送ってしまったんです。 (ああ)

イタラ コレー シェンソニ マケタデショ。 (^K ウン) ホンテ
そしたら これ 戦争に 負けたでしょう。 (それで

モー アカンテ ソノ シェンソニ イッタ ソノ コクサイノ
もう 駄目だつて その 戦争に 行った その 国債の

カネワ ムコーヤツチュンニエ。 イッシェンモ アタラン。 (68)
金は 無効だつて言うんです。 一銭も もらえない。 そ

テ ロッピャクエン ソノトキ (69) サンネン ショーフ ~~ニジューゴ~~
れで 六百万 その時 昭和 (70)

ジューゴネン ジューロクネンヤ サカッテキタンヤテノ クンシ
15年 16年だ 下がって来たんですからね 勲章

ョト イッショニ。 ソノカリ (71) イッシェンモ アタラン。 ンナ
と いっしょに。 そのかわり 一銭も もらえない。 みんな

ムコーエ。 ホヤテ ヤッパ イケー ソンシテルフノ。 ホイデ
無効です。 だから やはり 大きい 損をしてるよね。 それで

(72) ナンシテキタコツチャラ。 (73) ホイテ ウラ コレー アノ タケ
何をしてきたことか。 それで 私は これで 武生

(64) フ イッテ フフッシエンター イッテ コレ ナントカナランノ
へ 行って 福祉センターへ 行って これは 何とかならないの

(75) カツキュータラ ダマッテルサケ モー ユワンモ。 モー ユ
かって— 言ったら 黙っているから もう 言わないもの。 もう 言

一タツテ アカンノヤ マー イノチダケ オイテモロテ マー
っても 駄目なんだ まあ 命だけでも 与えてもらって まあ

タツシャテ イルサケ ダンネワイ ホンナモン モウワンカッテ
元気で いるから いいよ そんなもの もらわなくても

ド-カッ チェンテ"ナエ-シト⁽⁷⁶⁾ オモテ モー タ"マツ テルカ-.....。
どうかと言うのではなしと 思っ て もう 黙っているのですかね…。

注記

- (1) [kedo:ʔ]. 独特のイントネーション。 (2) [tokini:ʔ] (3) 貯金してあったお金。 (4) 家族の人数によって。 (5) [tanja no:ʔ]. 上昇調のイントネーション。相手に問いかける感じ。
- (6) [oməwto]. (7) [nɛ]. (8) [nɛ] (9) 幣貨改正をさす。
- (10) [o:tano:ʔ]. (11) [ɕitə]. (12) 「ヤ」がかすかに聞こえる。
- (13) [ɟw:en]. (14) [dæ:bw]. (15) [nɔ]. (16) [paʔa]
- (17) 家号。 (18) 「エ」がかすかに聞こえる。 (19) こう聞こえる。
- (20) 幣貨改正を「貨幣封鎖」とも言った。 (21) [jannɔ]. (22) 現行で通用しない金ということ。 (23) [tokini:ʔ]. (24) 初めこう言うつもりだったのに、先に「ソノトキニ」と言ってしまったので言い変えた。
- (25) 「大金」の意。 (26) 「ホンテ」とも。
- (27) 「頭がおかしくなった」の意。 (28) [a:ʔa:ʔ]. (29) 「あいなく」の変化した形か。「簡なく」で「まもなく」と解釈。 (30) 助詞は「オ」であるべき所。時折り「を」と「か」が混乱している。
- (31) 「当然もらえるはずの金も」という気持ち。 (32) [wano:ʔ]. (33) [tokimo:ʔ]. 独特のイントネーション。 (34) はっきりしない。
- (35) 弱く、ささやくように。 (36) [swkena]
- (37) [ginkɔini]. (38) 「面白い」はこの場合、「妙な」の意。
- (39) 小さい声であいまい。 (40) 地方銀行名。 (41) 町名。武生市楠町。
- (42) 町名。武生市桜町。 (43) 桜町のちょうど道をけさんで向こう側に楠町があった。 (44) 倒置表現。 (45) 「山本氏が福井銀行に預けてあった金」の意。 (46) 特に意味はない。
- (47) [akannojaʔ]. (48) [aka:ntɕwʔkoto]. (49) この前までか山本氏の銀行員に対することは。これが銀行員のことか。 (50) 小さく。 (51) [kaeɕe] の [ɕe] が無声化。 (52) [atone]. (53) [hɔdo]. (54) 早くで下降調のイントネーション。 (55) 「捨てておく」の意ではなく、「手をつけずに残しておく」とでもいう意。
- (56) 「使えるようになるか」の意。 (57) このように聞こえるか。

意味はわからず。(59)「景気もよくなつて来た」とでもいう意か。(60)「お金を」差上げます。(61)無効の意。(62) [naŋæ:i]。(63)兵役の報酬として国から下がって来た。(64)小さくかすかに。(65) [sonotokin^on]。(66) [en^oa]。(67)「財産」に近い意。(68) [iʃi^oenmo]。強勢の前で短い休止。(69)「その時の六百円は大きかった」というようなことを言いかけたか。(70)言いよどみというより言い誤り。(71) [sonok^ori]。「戦争に行つて働いてきたかわり、今になつて」という気持ちか。(72) [na^o:n]。(73)「(何をしてきたとか)わからない」の意。(74)市の福祉センター。(75)国債が無効になつたことに対して、何の処置もとれないということ。(76) [næ^o:ʃi]。(77) [ŋa^o:ʃ]

8. 戦友の話

話し手

(田名号) (氏名) (性) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y ホヤケド⁽¹⁾ モー タケフ イッテモ モ ワタシト イッショニ
 けれどもう 武生へ 行っても もう 私と いっしょに (戦争)

イッタノワ サンニンシカ インノエ。 (^K アーア) アノー
 に)行ったのは 三人しか いないんだ。 (ああ)

アノ ショーワチヨーニ⁽²⁾ タナカッテ カミドンヤ アッテショ。
 あの 昭和町に 田中という 紙問屋が あるでしょう。

(^K ウーン) タナカッテ (^K ウーン) イケー カミドンヤ
 田中という 大きい 紙問屋が

アルゲノ。 (^K ウーン) ニシシヨカッコノ (^K ウーン) チョッ
 あるじゃないか。 西小学校の 少し

ト マエニ。 アソコノ オヤジガ ウラト イッショエ。 (^K
 前に。 あそこの 主人が 私と いっしょです。)

アーア) コナイダモ ヒョコント オータラ ソリヤー メズラ⁽⁴⁾
 この間も ひょこりと 会ったら それは 珍しい

シーモン オータノ。 ナーンヤ カタカッタンカッテ。 イヤ
 人と 会ったね。 どうだい 元気だったかいって。 いや⁽⁵⁾

カタインニヤ。⁽⁶⁾ ホンナ イッペン ノミニイコサツタテ⁽⁷⁾ イヤー
 元気なんだ。 それなら 一度 飲みに行こうと言ったから いやあ

オツツァラト⁽⁸⁾ ノミニイクト ンナ イケー ショタイノモント
 親父と 飲みに行くと そんな 大きい 所帯の者と
 イナカノ⁽⁹⁾ ヒヤフヒ~~xxxxxx~~ ショーツレノ オツツァ ンナモン ツ
 田舎の 百姓 なんかの 親父が そんなもの
 ッキヤイ ナンシンノ イヤヤ ンナ アカン アカン マタ コ
 おつき合いなど するの いやだ" そんなの 駄目だ 駄目だ また 今
 ンドヤッテ。 イヤ コンドッテユワント イッペン イッテコサ
 度だ。 いや 今度と言わないうで 一度 行ってこよう
 ッチュー。 アンナモント ツキアイシット ナンカ イッケー
 と言う。 あんな者と つき合いすると 何しろ 大きい
 ショタイヤシ ンナモン (^クウン ホーヤ ~~ホ~~ イッケー カミ
 所帯だし そんなもの ええ そうです 大きい 紙
ドンヤヤノ⁽¹⁰⁾) イッケー ザイバッチャシ ~~xxxxxxxxxxxxxxxx~~ ザイバッチャシ ンナ
 問屋だおえ) 大きい 財閥だし そんな
 モン コンナモンニ アイテンナルト コリヤ (笑) イナカ
 なもの そんな者に 相手になると これは 田舎から
 デタモン ネコソギ⁽¹¹⁾ トラレテマウト アカンワト オモテ オクッ⁽¹²⁾
 出た者は 根こそぎ とられてしまふといけないなと 思って やめる
 チュテ オイタニ~~ニ~~⁽¹³⁾ ニヤカ。 (^クウン) ホヤケド" ホンナモンヤ
 と言って やめたんだが。 しかし そんなものだ
 ッテ (^クウン) イマ⁽¹⁴⁾ サンニンシカ イン。 (^クウー)
 って 今はまだ 三人しか (戦友は) いない。
 アノ⁽¹⁵⁾ カミチノ スギタニッテ マタスケネ⁽¹⁶⁾ (^クアー) スマシ
 あの 上帝の 杉谷という 又旦那 (^クアー) 醤油
 ヤノ オトト。 (^クアー) アニキデナシニ オトトンカタ。
 屋の 弟。 兄きではなくて 弟の方。

アノ ヒトモ イッショニ シェンソニ イッタ……。
あの 人も いっしょに 戦争に いった……。

K アノ ヒトァ ドッカ ミシエ ダイテナハルンケ。
あの 人は どこかへ 店を 出してらっしゃるんですか。

Y スマシヤ シテルケノ。
醤油屋 してますよ。

K アーア ホーケ。
ああ そうですか。

Y マタスケノ⁽¹⁷⁾ (K アーア) スギタニマタスケ シンナハラノカ
又助の(醤油屋) 杉谷又助は 知りませんか

アノヒト。
あの 人。

K マタスケサン アンナハルノ。
又助さん ございます。

Y ウン アソコノ オトト。
ああ あそこ 弟です。

K アー ホイテ アニキサンテ⁽¹⁸⁾ ナシニ オトトサンガ (Y アノ
ああ すると 兄さんでなくて 弟さんが あの

ミシエ) ミシエシテナハル。
店) 店を やってらっしゃる。

Y ソノヒニ⁽¹⁹⁾ ミシエ イッテ マー アニキノ テットテンニャロケ
毎日 店に 行って まあ 兄きの(仕事を) 手伝っているんだらう
⁽²⁰⁾
ド。
けれど。

K アー ホーケ。
ああ そうなの。

Y アッコニバカリデ スマシ ハイタ ツシテルンニヤ。 (^K アー
 あそこにはかりいて 醤油を 配違してるんだ。 ああ
 ホーケ) ジデン シャンノッテヤ。 ソレモ コナイダ ホーラ ⁽²¹⁾
 そう) 自転車に 乗ってねえ。 その(人)も この間 孫達を
 ツレテ エーガ ミニイコト オモテ ホーラ (^K ウーン) サ
 連れて 映画を 見に行こうと 思って 孫達 (^K ウーン) ミ
 ニニン ヨッタリ ツレテ (^K ウーン) (笑) エーガ ミニ
 人 四人 連れて (^K ウーン) 映画を 見に
 イッタニヤ。 (^K ウーン) ホイタラ エーガカン / マエテ
 行ったんだ。 (^K ウーン) したら 映画館の 前で
 ヒョコト オーテノ (^K アーア) スマシニ。 (^K ウーン)
 ひんくと 会ってね (^K アーア) 醤油(屋)に。 (^K ウーン)
⁽²²⁾
 ナンジャ ミタコト アルンヤナ エー ナンジャイッテ。 ナン
 なんだ 見たこと ある(人)だ(な) (こんな所(で)一体)なんだ(い)って。 何
 デ オメー ホーラ ツレテ モー トシヨッタシ エーガ ミニ
 お前 孫達を 連れて もう 年とったし 映画を 見に
 イコト オモウンニヤッタラ (^K ウーン) ハハー イナカニ
 行こうと 思っ(た)だ"と(言)った(ら) (^K ウーン) ほう 田舎に
 イテ ソンナ ノンキナコタ デキルンカッ ⁽²³⁾ ~~テ~~ ⁽²⁴⁾ ~~ツ~~ ~~テ~~ ~~ニ~~ ~~キ~~
 いて そんな のんきは(な)ことが 出来るのか(っ)て。 だって のんびり
 ナシエオアカシ (^K ウーン) トシヨッテカラ ンネ ヨクシエン
 しなくて(は)い(け)ない (^K ウーン) 年とって(か)ら そんなに(欲)びる(こ)
 ナランコトネー ⁽²⁵⁾ ~~ケ~~ / ~~ッ~~ ~~テ~~ ユーテ カラコーテイタ。 ホイテ
 と(な)い(じ)ゃ(な)い(か)って (^K ウーン) 言(っ)て (か)ら(か)って(い)た。 (^K ウーン) として
⁽²⁶⁾
~~イ~~ ~~カ~~ ~~ニ~~ (^K ウーン) ホナ イッペン ドツカ イッテコサーッ
 (^K ウーン) それ(な)ら 一度 (^K ウーン) どこ(か)へ 行(っ)て(こ)う(っ)て

テ。 イヤー コリヤ アカン コンナ コドモガ イルンニヤ
(言う)。 いや これは 駄目だ こんな 子どもが いるんだ(から)

アカン アカン。 ンナ アカンノヤ。 ンナ アンタラト イッ
駄目だ 駄目だ。 そんなのは 駄目なんだ。 そんな あつたと いっし

ショニー イカレンノヤ コドモー イルンニヤケ。 モ イカレ
よには 行けないうんだ 子どもが いるんだから。 もう 行け

ン イカレン。 (^kウー ン) ナニショ モ コノトシンナルト
ない 行けない。 何しろ もう この年になるとね

ノ (^kウ ン) ソノ ナツカシサケ ⁽²⁷⁾ ソノ イッペー ノミニ
その 懐しいから その 一杯 飲み

イコッテ テナフンノエノ。 (^kウー ン) ドッカ イ
行こうと言って かなわないうんです。 ドッか 一

⁽²⁸⁾ ッペ イッテ ノンデコサッチュエテ (^kウー ン) ウン。 イク
杯でも 行って 飲んで二ようと言って うん。 行

ンナー イーケド (^kウ ン) ヒトリントキネチャー イーケドノ
くのは いいけれども ひとりの時はねえ いいけれどね

(^kウ ン) コドモ ツレテテァ ンナモン ノンダッテ オモシ
子どもを 連れていては そんなもの 飲んだって 面白く

ロネーシ (^kホリヤ ----- ウ ン 。) アカン アカニチュニヤ。
ないし それは…… 駄目だ 駄目だって言うんだ。

ホイテ コドモ ツレテルトキバツカリ アウンニヤッテ イジノ
そして 子どもを 連れてくる時はばかりに 会うんだって 意地

ワルイ。 (笑) コドモ ツレテイントキネチャー カマワンノヤケ ⁽²⁹⁾
の悪い。 子どもを 連れていない時には 構わないうんだけ

ド。
れども。

注記

- (1)「ホ」は短かい音。(2)町名。武生市昭和町。(3)よく知らないという感じの返事。(4)力をこめて言う。(5)「かた」は「元気」,「丈夫」の意。(6) [katæ'ŋpa]。(7)「テ」は弱い。このあたり山本氏と相手のことはが交互に来る。(8)軽蔑の意が少し加わる。「う」も複数を表わすのではなく、「～などと」という意で見下した感じを与える。(9)「ツレ」は「連中」の意か。(10) [jajanō]。(11)「金を(とられる)」つまり使わされるということ。(12)「おく」は「止める」,「よす」の意。(13)「ジャ」とも聞こえる。(14)「イ」は短くかすか。(15)町名。武生市上市町。(16)醤油屋の屋号。(17) [mataswkeno:¹]。独特のイントネーション。(18)「サン」と「テ」の間に小休止。(19)「その日,その日に」の意で「毎日」ということであろう。(20) [kedo:¹]。(21)普通は「ボー」は「坊」の意で「子ども」のことであるが、ここでは山本氏の孫である。(22)ここからしばらく、山本氏はいかにも相手と自分が話した時に似せて話す。(23)「出来るのかって(言う)」の意。(24)前のことはにすぐ続いているが、この部分はあとにかかって行く。発音はあいまい。(25) [ne:¹geno]。(26)「エーカニ」とも聞こえるが、あいまい。(27)「昔の友人に会うのが(懐しいから)」の意。(28) [ippe]。(29)「いっしょに飲みに行っても(構わない)」の意。

9. 娘の結婚

話し手

(略号) (氏名) (性別) (生年)

Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ

K 加藤久子 女 明治45年生れ

K ホラ ムカシモ ケッコンシキツチュト ヤッパ オゾイコト ナ
それは 昔も 結婚式と言うと やはり ひとつい目に
⁽¹⁾イマシタンネ イマモ ヤッパ ⁽²⁾ホーデスネ。 ケッコンシキツチ
あいましたけれども 今も やはり そうですね。 結婚式と言うと
ユト ヤッパシ イロンナ ネー オカネガ カカリマスゲネ ム⁽³⁾
やはり 色々ねえ お金が かかりますよねえ 娘
スメ モツタ オヤワネー。 ⁽⁴⁾デ ムカシワ ヤッパ イナカグレ
を 持た 親はねえ。 (それ) 昔は やはり 田舎ぐらい
ーヤト オカネガ ⁽⁵⁾ネー。 ホンネ ハイリマシエンサケ ヤッパ
たど お金が ない(です)。 そんなに (金) 入りませんから やはり
オゾイコッタヤツタヤロナート ⁽⁶⁾オモイマス ウーン。 イマー---
たいへんなことだらた"らうねと 思います ええ。 今とは
トァ マタ アノ イショーモ チカイマスシネー。 ナ ヨー
また 衣装も 違いますしねえ。 そんな 洋
フクナンカー ムカシ ⁽⁷⁾ハヤリマシエンデー。 ナ ヨーフクナ
服なんかは 昔は はやりませんから。 そんな 洋服など
ンチャ イチメーモ アリマシエンケドネ。 ウーン。 ヤッパ
と言うのは 一枚も ありませんけれどもね。 やはり

ケッコシキヤ イッショニ ⁽⁸⁾ イテレーヤツチュマスケド イマモ
結婚式は 一生に 一度 たって言いますけれども 今も

ムカシモ ヤッパ オヤワ オゾイコト ナイナシマシタンニヤワ
昔も やはり 親は ひどい目に あったんですよ。

ネ。 ウーン。

Y ホンナ モー ⁽⁹⁾ ヨメインノ ハナシシルト モー ホシオモ
そんな もう 嫁入りの 話をすると もう

ホンナモン カスナモンジャモ。 (^Kウーン) ワタシャー コ
そんなもの たいへんなものですもの。 私は こ

レ オンナ ヨツタリ ヨメニ ダイタンニヤカ オゾイコツチャ
れで 女を 四人 嫁に 出したのですが たいへんなことだ

ツタワネ。 (^Kホヤー) ⁽⁹⁾ イヤー ホンナコトユート マター
ったねえ。 (そうですね) いえ そんなことを言うと また

ワガコノ ハジオ タダ ダイタニヤケド ⁽¹⁰⁾ ホリヤ ⁽¹¹⁾ メーロ ヨッ
自分の子供の 身を ただ だしたようなものだけでも それに 女が 四人

タリ アルト ホリヤ ホントネ アタマ アカランワネ。 * ⁽¹²⁾ アー
あると それは 本当に 頭が 上らないね。 ああ

メーロ ヨツタリ ヨメン ヤツテ ンナ コドモ マゴ ン
女を 四人 嫁に やって みんな 子どもが 孫が みんな

ナ アルワ。 (^K ジョーズニ ンナ コドモ サン シアワシ ⁽¹³⁾
な あります。 (上手に みんな 子どもさんは 幸せか

イーデノー。) ⁽¹⁴⁾ イマ アルサケヤケド。 (^Kウーン) オゾイ
いいからねえ。) 今 (子どもがあるから) だけだけれども。 ひどい

コト ナエンシタワノー。

目に あいましたわねえ。

K ホリヤ オゾイコッチャフ / オヤワー。⁽⁴⁵⁾
それは たいへんなことですよおえ 親は。

Y ホリヤ イチバン アトラノ ヨメニ ヤットキラニヤー ホン
それは 一番 あとの(娘)を 嫁に やった時などには 本当
トニ ヤッパ モノ⁽⁴⁶⁾ カヤー アルニヤシ (^K アー) マー
に やはり 物を 買えば あるんだし まあ

ヒトトリ ソロエテヤランナランッテ ヤッテ サー イナカヤ
ひと通り (嫁入り道具を) そろえてやらなくてはいけないうて (そろえて) やって さあ 田舎だ

サグッテ コメ イッピョー カワキシエテ アンナ (^K アー)
からって 米の 一俵も 上皮をかぶせて あんぱに

ワザニノ カワキシエテ (^K アーア) トーントシテ ノシテヤ
わざわざ 皮をかぶせて どんとして 乗せてや

ルニヤー。⁽⁴⁸⁾ ソラ マチェ マルト ソンナモンニヤカ。 ^{ホヤ}
るんだ。 せりゃ 町へ (嫁に) やると そんなものだからねえ。 けれど

⁽⁴⁹⁾
ど ヨー ウラ ヤッテキタト オモイマスガ。
も よく 私も やって来たと思えますがねえ。

K ホントヤ エラカッタノー。⁽²⁰⁾
本当に 立派でしたおえ。

Y ウーン ホリヤ -----。
うーん それは……。

K ナカナカ オゾイコッチャデー⁽²¹⁾ ヨメニ -----。
なかなか たいへんなことだから 嫁に……。

Y デョーツタカト マ ソラ カスナ ダンナンショ マカシエノ コ
(嫁への) 出る様子と言っても まあ それは たいへんな 金持ちの(嫁が) するような 準
シラエモ デキンケド マー ヒトトリダケワ シテヤッタヤサ
備も できないが まあ ひととおりだけは してやったのだから

ケ。 ホンデモ コドモラ ヨロコンデ。 ホイテ マタ コドモ
それでも 子ども達は 喜んで(いた)。 そして また 子ども

ラ ナ シエ... (^K シア ワシエカ イーデノー) ネー ヨッ
達は みんな (幸せが いいからねえ) ねえ 四

タリトモ ナ (^K ウーシ) リッパナ ウチオ タテテ (^K
人とも みんな (立派な 家を 建てて

ホヤー) ヤシキ コーテ ウチタテタテ (^K ホヤー) マ ソ
そうです) 屋敷を 買って 家を建てたから (そうです) ま そ

レデ イーワイト。 (^K ナ シヤシエ...) モ コ
れで いいねと。 (みんな 幸せ...) もう 今

トシラ イケー ソンジャソノ フタリトモ ウチタテサラスター。
年ほど 大きい 損ですよ (娘が)二人とも 家を建てやがるから。⁽²³⁾

K アー フタリ フタリジャツタンケノ。
ああ 二人(とも) だったのですかねえ。

Y アネト イモートト。
姉と 妹と。

K アー イケダノモ ホヤツタンケノ。
ああ 池田(へ嫁に行った人)も そうだったのかいねえ。

Y イケダノ フタリ。 (^K アーア) イケダ イッタ フタリトモ。⁽²⁴⁾
池田の 二人。 (池田へ 行った 二人とも。

K アーア イケダノガ フタリジャツ⁽²⁵⁾ タテナシタンケノ。
ああ 池田(へ行った娘さん)が 二人だ 建てられたんですか。

Y アー イー ウチ タテタワイノ。 ナ イケー (^K アー)⁽²⁶⁾
ああ 立派な 家を 建てましたよ。 みんな 大きい(家)を

ロクハチノヤツ⁽²⁷⁾。

六間に八間のですよね。

K アー ホンテ⁽²⁸⁾ ヒデー イケーケノ。
ああ それでは ひとつ 大きいですよ。

Y イケー (^Kウー ン) ロクハチノ ヨツツメニ⁽²⁹⁾ ホイテ コー
大きい 六間八間の 四つ目に そして こう

ンナ カッテガ アルンテショ。 (^Kウー ン) ホイテ コノ
みんな 台所が あるのでしょうか。 そして この

オーシェツマ アンテショ。 (^Kウー ン) ~~ニナ~~ ニナ モー
応接間が あるのでしょうか。 そんなもの もう

ジェータクナモンジャワイノ。 ⁽³⁰⁾ ニナー ヨツポド ジェンカ^タ タ
せいにくはもんですよ。 みんな よほど 金か

マツツヤナー (^Kヤマトコヤサケ ヤッパ キガ アンナハ...
たまたんですねえ 山所だから やはり 木が おおりに...

...) ~~キガ~~ キガ アルシノ。 (^Kオ ン) キオ フロニ⁽³¹⁾ ナンジ
木が あるしね。 木を(切るの) 苦労はないんだ

ヤケ ナンカ (^Kキガ アンナハルテノー) ニサンゲン タテ
から 何か 木が おおりになるからねえ 二・三軒(の家を) 建

タツテ アルツチュンニヤサケ テナワンゲノ。 ⁽³²⁾ (^Kオ ー ン)
ても あると言うんだから かないませんよ。

⁽³³⁾ ヌ イモートントコラ ホンナモン (^Kウー ン) ジブンノ ~~カ~~
そんなもの 妹の所ねえ そんなもの 自分の

~~マ~~ ヤマノキ サンゲンモ シケンモ タテルキ アルツチュンニ
山の木は 三軒も 四軒も 建てる木が あると言うんだか

ヤケ (^Kウー ン) ソラ モー イバツタモンジャモ。
ら。 それは もう 威張ったものですもの。⁽³⁴⁾

K ホントヤノー。⁽³⁵⁾
本当だねえ。

Y アイデ イモトノウチャ ~~トニシテ~~ アンナ イケー ショタイニ
 あれで 妹の象は どうして あんなに 大きい 所帯に

シタンヤロト オモウカノ。
 したんだらうと 思いますかね。

K アーア ⁽³⁶⁾ ホーケノー。
 ああ そうかねえ。

Y ソレー イママデ⁽³⁷⁾ オツツァ シンデカラ ヤット ウラニ イー
 それを 今まで (向うの) 親父が 死んでから やっと 私に 言い
 ニカカッタニエ。
 始めたんです。

K ウン。 アー イマ モー ア ~~ヒトオヤ~~ ~~ヒト~~ (^Y $\frac{\text{ヒト}}{\text{ヒト}}$) ヒ
 ああ 今ほ もう
⁽³⁸⁾
 トオヤ シニナシタ……。
 ひと親 亡くなられた……。

Y ウン キョネン オトトシカノ。 (^K アー ホーケ) シニナシ
 ええ 去年 おととしかねえ。 ああ そう 亡くなられた
 タニエ。 (^K ホーン) ~~ソニ~~ ⁽³⁹⁾ マデワ (^K ウン) ⁽⁴⁰⁾ イッ タাকা
 んです。 それまでは (^K ウン) ⁽⁴¹⁾ (家) 行っても。

ッテ ソノ ヤマータラ ナンタラッテ ウラニャー ヒトコトモ
 その 山とか 何とからて 私には ひと言も

ムスコワ ユワナンダケド⁽⁴⁰⁾ (^K ウー) オヤ シンダラ⁽⁴¹⁾
 息子は 言わなかったけれど (^K ウー) 親が 死んだら (

^K ウン) トーチャン コーユトコニ コーユーヤマモ アンニャ
 父ちゃん こういう所に こういう山も あるんだ

シノ (^K ウン) トーチャンニモ ユートカナー ワタシャー
 しね 父ちゃんにも 言っておかなければ 私ほ

ヤッパ ワカイトキ カジエテ オシネニカシテ⁽⁴²⁾ アーヤッテ ジ
やはり 若い時 風邪で 何年間も ああして 自

ドーシャンノッテ ナンシテンニヤサケー⁽⁴³⁾ (^ク アーア) ソレダ
自動車に乗って 何しているのだから それだ

ケフ チョット ニキワルテ⁽⁴⁴⁾ タムムッテ ユーフーニフ (^ク ウ
けは ちょっと 頼むって 言うふうに(言った))

ーン) アー マー コレテ ケッコナコッチャナ ソンナコト
ああ まあ これで 結構なことだな そんなことを

ユーフレレルダケテモ マ エーフィナト⁽⁴⁶⁾ コー オモテ……。
⁽⁴⁵⁾ 言ってくれるだけでも まあ いいなと こう 思っているんです。

K イマモ スミヤキシテナハルンケ。
今も 炭焼きをしていらっしゃるんですか。

Y イマ シェンノヤ。
今は しゃいんだ。

K ア マ エ ショーバイ カエナシタン。
ああ もう 商売を 変えられたのですか。

Y アー。
ええ。

K アー ミンナ シャフシェカ イーテノ。
ああ みんな 幸せが いいからねえ。

Y アー。 ホンテ スミヤキシタカッテ ンナモー ツキニ ニハン
ああ。 それで 炭焼きをしても そんなもの 月に ニ回

モ サンベンモ ダスンニヤケ ンナモン タイシタ カネヤザ。
も 三回も (炭を) 出すのだから そんなもの たいした 金ですよ。

(^ク アーア) ウン。
うん。

K ホンデワ テバヤナンニヤノ。
それでは(仕事が)手早やんだね。

Y ハエンニヤ。シナモ ホイテ ナンジャモ ヒトト チャウモ。
早いんだ。そんなものそして 何ですも 人と 違うもの。(48)

K ウーン。 タイカワカ インニヤロシ。
うーん。 体格が いいんだろし。

Y ウン インデス。(^Kオーン) スミ ヤケテマウデショ
ええ いいんです。(ああ) 炭が 焼けてしまうでしょう (

^Kオン) ホイト カマカラ ナ ジェンブ ドーット モー
ええ) すると 釜から みんな 全部 どーっと もう

(^Kオン) カマ ナ ジェンブ ヒョーニシエント ナ ダ
釜を みんな 全部 俵にしないうで みんな 出

行モテ 行 キー ターット ナ ルテモテ(^Kア) ヒーツケテ 行 ヒーツケテ バンシガテラネン
にはして して 木をざーとみんな入れてして 火をつけて して 火をつけて 番をしなうらぬ ぬ

ナ ヒョーシテルワネ。(^Kアア) ナモ チョットモ カ
な 俵をしてるよね。() そんなもの ちっとも 釜

マモ ヤスマシエニ。(^Kウーニ) ホンテ (^Kデー...) ソ
も 休ませない。() して () そ

レデモ ヒマツカラ デンニヤデ イケージャ。ホヤクトー
れでも 百から (俵が) 出るんだから 大きいですよ。けれどもね (

^Kイケーコトヤー) ソンナコトバツカ シテルト カラダ ヨワ
大きいことですよ) そんなことばかり していると 体が 弱る

ルサケツテ (^Kオン) コンダ シゴト カエタン (^Kア
からって () 今度 仕事を 変えた。(ああ

ヤメナシタン アーア。) ホンデ イマ シドーシャン ノッター
やめられたの ああ) それで 今 今 自動車に 乗って (54)

マエニチ⁽⁵⁵⁾ ヒトオ ジューナンニンツテ ニンブオ ノシエテー
毎日 人を 十何人って 人夫を 衆せて

ドツカ (^K アー カヨテナハルン) サバエノ⁽⁵⁶⁾ ホーエ イクンデ
どこか (ああ 通っていらしゃる) 鯖江の方へ 行くんで

スガ サバエノ ナンタラユー カイシャ イクンデスガ。 (^K
すか 鯖江の 何とか言う 会社に 行くのですねえ。 (

アーア) ホンデ⁽⁵⁷⁾ ラクヤテネ。 (^K ウン) カラダガ。 (^K
それで 楽だっけね。 (体が。 (

ウーン ソーヤンノ⁽⁵⁸⁾) アンマリ アツイダ アツ--- ヤ ヤッパ
ああ そうでしょうね) あまり ~~アツイダ~~ ~~アツ---~~ ~~ヤ~~ ヤぱり

アンナシット アツイシノ カラダガ。
あんた(炭焼きを)すると 暑いしね 体が。

K ジカンニ カインナハラレルデ⁽⁵⁹⁾ (^Y ウン) カイシャワノ。⁽⁶⁰⁾
(決まった)時間に 帰られますから (会社はねえ。

Y インデ ウチー ハヤメニ カイルシー⁽⁶¹⁾ (^K ウーン) ホイテ ヒ
それで 家へ 早めに 帰るし (として 百

ヤクショーモ シェナアカンシー。⁽⁶²⁾
姓(仕事)も しなくては いけないし。

K ウン。 タンボモ ツクツテナハルデー。
ええ。 田んぼも 作ってらっしゃるからねえ。

Y アー。 ホンデ ヤマバツカ イッテルト ソノ ヒヤクショー
ああ。 そして 山ばかり 行ってるよ その 百姓(仕事)が

オロソカンナンニヤツテネ。⁽⁶³⁾
おろそかになるんだってね。

K ウーン ソヤロー。⁽⁶⁴⁾
ああ そうでしょう。

Y ウー。ン。 ンデ モー ヤッパ カマデルト キネャ イーナアカン
それで もう やはり 釜から(炭が) 出る時には (側に) いなく

シ (^Kウー) キー キラナアカンノヤシ。
てはいけな () 木を 切らなくては いけないんだから。

K ソー ソー キー キラナ -----。
そう そう 木を 切らなくては……。

Y キー ヨシエナアカンノヤシ。 (^Kホー ジャ ホー ジャ) ンデ
木を 集めなくては いけないんだし。 (そうです そうです) それ

モ ホンナコトシテルト カラダバッカ モネテ (^Kウー)
でも そんなことしていると 体ばかり ----- (ええ)

アトニャ カラダ ワコーテ ヨワシテマウサケッテ (^Kウー)
後には 体を 若くて 弱くしてしまうからって (ええ)

コンダ ヤメタンエ (^Kアー ホーケ) キヨネ キヨネンカラー。
今度 (炭焼きを) やめたんです (ああ そうか) 去年から。

(^Kウー) アンマリ アツイ シコトバッカ カマ アツイシネ。
あまり 熱い 仕事ばかりは 釜が 熱いしねえ。

(^Kホー ャッテノー) ホイテ ヤメタンニエ。 (^Kアー ホー)
そうだってねえ () それで (炭焼きを) やめたんです。 (ああ そう)

ケ) タラ ジブンノ ヤマ モー サンネン ヨネン ゴネン
か) したら 自分の 山では もう 三年や 四年 五年

ヤイタッテ ヤケワシエンノヤッ チュンニャケ (^Kウー) エ
焼いても (全部の木は) 焼けはしないんだからって言うんだから (ああ) ね

ー ヤッパ ダイズ イケーコト アンネャ チガイネー。 (^K
え やはり 大分 たくさん あるには 違いない。 ()

ホヤノー) ウー。ン ホンナコト ユンデワ。 (^Kウー) ホ
そうだねえ) うーん そんなことを 言うんでは。 ()

ンテ⁽⁶⁷⁾ マー イーワイ マ ダンネ ナントカナルゲッタラ
れで まあ いいよ まあ いい 何とか行るよと言たら

~~~~~  
(68) (69) (70)  
モーチョット トショツテカラ ボチボチ  
もう少し 年とってから ほつほつ

ト ヤコカート オモテ。 ( <sup>k</sup>ウーニ ) マ イマ ワカイアイ  
と炭を焼こうかと思つて(いると言)。 まあ 今 若い間は

が アンマリ カラダ ムリシテ イタメテマウト…… ( <sup>k</sup>ウニ  
あまり 体を 無理して 痛めてしまうと思つて )

) ヤメタンニヤツケン。  
やめたんだと言。

K ヤマドコ イキナシタデノ<sup>(71)</sup>。 ウニ<sup>(72)</sup>。  
山所へ いらっしゃ、だからねえ。

Y イヤー コンダ~~xxxxxxx~~ コンダ<sup>(73)</sup> フケイ タテテモタンエ。  
いや 今度 家は) 口の方へ 建ててしましたんだ。

K アー ウチ。 バシヨ カワツテ。  
ああ 家を。 場所を変れて。

Y ウーニ コンダ マタ ベツノ ヤシキオ トーット フケイ デテ  
うーん 今度 また 別の 屋敷を(買つてね) ずーっと (村の) 口へ出  
モテ。

てしまて。

K ア<sup>(73)</sup> ア ムラノ ベンリイートコ デナシタンニヤ。  
ああ 村の 便利のいい所へ 出られたんですね。

Y ウニ ホン ミチノ トーリバタノ<sup>(74)</sup>。 ( <sup>k</sup>アア ) ムラノ  
ええ (ほんの 道の 通り端の(所へ)。 ) 村の

マンナカエ デテモタンエ。 トーットフケイ。 ( <sup>k</sup>アア ホーケ。  
真中へ 出てしましたんです。 ずーっと 口の方へ。 ) ああ そうですか。

ウー ン) イヤ ヨー アンナト コエ エー ヤシキ タテタト  
 いや よく あんほ 所へ いい 屋敷を 建てたと

オモウカネ。 ( <sup>K</sup>ウー ン ) ヤッパ ジェンカ アルサケエ カ  
 思うけれどむね。 やはり 金が あるから 買

エンニヤケド。 ( <sup>K</sup>ウー ン ソーヤ ) アノ カ カミノ ソネ  
 えるんだけれどむ。 うーん そうです。 あの 上(中津原)の

ーモサンカラ <sup>(77)</sup> キナシタノー ( <sup>K</sup>アー ハー ) ソネモサンエ  
 そねえ門さんから いらっしゃたねえ ああ けあ そねえ門さんへ

( <sup>K</sup>ハー ハー ) イケダカラ キナシタ ( <sup>K</sup>ウー ン ソーソー )  
 けあ けあ 池田から いらっしゃた ええ そうそう

ソノヒトカ <sup>(78)</sup> ダイブ オクヤケド ソノ マタ クチエ デテモタ  
 その人(家)が 大分 興たけれど その また 口へ 出てしま

ンヤデノ。 ( <sup>K</sup>オー ン ) トーット クチエ デテモタンエ。  
 ったんだね。 へえ ずっと 口の方へ 出てしまんだ。

( <sup>K</sup>ウー ン ) デ アンナトコデ <sup>(79)</sup> ヨー アンナ エー ヤシキ  
 それで あんほ所で よく あんほ いい 屋敷を

カワレタトオモテ。 ( <sup>K</sup>アー ア ) ソレガ ニケンクレア タデ  
 買えにと思って。 ああ それが ニ軒くらい (家)建て

ルバ アンニヤジャゾ。 ( <sup>K</sup>アラー ホー ン ) イケー ヤシキオ  
 る場所があるんだ。 あら へえ 大きい 屋敷を <sup>(80)</sup>

コーテモタンエノ。 ( <sup>K</sup>ウー ン ) ンデ-----。  
 買ってしまんだよ。 として

K ホイテ タンボ ツブシナシタトコエ タ-----。  
 として 田んぼを うめ立てた所へ 建てた...

Y イヤ ソンネンニエ ソノ ----- ( <sup>K</sup>ヤッパ ヤッパ ウー ン ) ア  
 いや そうではないんだ その... やはり

ンデー ソコニ ダレカ イタ ヒトガー アレチニシタツタンヤ  
れて、 そこに 誰か(知らないが) (誰か)居た人が 荒地にしてあ、たんですね

ノー ( <sup>(81)</sup>  $\begin{matrix} \text{ア-ア} & \text{ア-ア} \\ \text{ああ} & \text{ああ} \end{matrix}$  ) ハタケヤ アキチンナツテモテ (   
え 畑ヤ 空地になつてしまつて

$\begin{matrix} \text{ア-ア} & \text{ホリヤ} & \text{イ-トコエ} & \text{-----} \\ \text{ああ} & \text{それは} & \text{いい所へ} & \text{....} \end{matrix}$  ) ソノ デタヒトニ カイニ  
その(土地を)出た人の所に 買いた

イッタンヤツテネー (  $\begin{matrix} \text{ア-ア} & \text{ウ-ン} \\ \text{ああ} & \end{matrix}$  ) ホイタラ アンタナ  
行つたんだってわえ そしたら あつたな

ラ ウツテヤルット。 ホイタラ コータツチュテ テーウツテ  
ら 売つてやると(言う)。 そしたら 買ったと言つて 契約をして

ジェン ウツテモタンエ (  $\begin{matrix} \text{ウ-ン} \\ \end{matrix}$  ) ウン ダイブ タカカッ  
金を 渡してしまつたんだ” 大分 高かつた

トラシケド。 ソラ マー ホンノ ミチノ イー リッパナ ミ  
らしいけれども。 それはまあ ほんの 道の いい 立派な 道

チノ トーリバタノ (  $\begin{matrix} \text{ウ-ン} \\ \end{matrix}$  ) ホンヨコエ モノ タテタン  
の 通りはたの すぐ 横へ 家を 建てたん

<sup>(82)</sup> ヤサケ (  $\begin{matrix} \text{ウ-ン} & \text{ウ-ン} & \text{ホ-ケ} \\ \text{う-ん} & \text{う-ん} & \text{そうか} \end{matrix}$  ) コツデ ヤッパ ホデ  
だから これで やはり それで

イマ シアワシエヤ。 (  $\begin{matrix} \text{ウ-ン} \\ \end{matrix}$  ) マダ イチドモ オクニ  
今は 幸せですよ。 まだ 一番

イタンヤ オクニ イルンニヤデノ (  $\begin{matrix} \text{ア-ア} \\ \text{ああ} \end{matrix}$  ) ホレカ ト  
奥に いるんだからわえ それが ず

ーット クチー デエテ ホンノ ミチバタノ イー トコエ デ  
うと 口の か 出 すぐ 道 端の いい 所へ 出

タンニヤデ。 (  $\begin{matrix} \text{ホ-ケ} \\ \text{そうか} \end{matrix}$  ) イケエ ウチ タテテ コナイダ  
たんだから。 大きい 家を 建て て この 間

ボンニ キター モー カベ ツケテモタンヤシノ カワラモー  
盆に(知)新米で もう 壁も 塗ってしましたしね 瓦も

ンナ ノシエテモタンヤシノーッテ。 ンナ オジジニ ナンシエ  
みんな のせてしまったんだしねえと言って。 それではおじいちゃんに 何しに

ニ テッテニ コイツンニヤッテ マー ( <sup>K</sup>ウン ) コンダ  
手伝いに 来いと言うんだって まあ ( <sup>K</sup>ウン ) 今度

ヤドカエシットキニ イッペン テッテニ キテモラワナ。 ア  
びこしする時に 一度 手伝いに 来てもらわなくては(と)言) ああ

ホーカ ( <sup>K</sup> ア-ア <sup>(87)</sup> ホ-ン ) ソー ユーテ イマ イッショケ  
そうか ( <sup>K</sup> ア-ア <sup>(87)</sup> ホ-ン ) (と)そうと言って 今は一軒懸命

ンナ シテンニヤサケ ンナ イッタッテ アカン。 ( <sup>K</sup>ウン )  
建てているのだから そんなもの 行っても(知)田役に立たない ( <sup>K</sup>ウン )

タテマエヤナンカニ イッテキタンデスケドー。  
建て前やなんかには 行って来たんですけれども。

K ア- ヒチカツネ タテナシタンケ。 ( <sup>K</sup>ウン ) ア-ア ホ-  
ああ 七月に 建てられたんですか。 ( <sup>K</sup> え-え ) ああ そう  
ケ ウ-ン。  
か。

Y ~~~~~ <sup>(88)</sup> ~~~~~ モ- フタリヤ ツズケテ.....  
まあ 二人が 続けて(建てるから).....

K ア-ア コトシャ ホンナニ イッショナ ニケン タテマエ シ  
ああ 今年には そんなに いっしょに 二軒の 建て前を な  
ナシタンニヤ。  
さ、たんですね。

Y アン ア- ヨ- ヨワッテモタンエ。 アネントコヤ モ- ジ  
ああ ひどく まいてしましたよ。 姉のところは もう 十

ユーイッカッテ <sup>(89)</sup> イッタンニヤ。 ( <sup>K</sup> アー ) <sup>(90)</sup> キソカラ ニナ  
何日って 行ったんだ。 ( ああ ) (家の基礎作りから みんな

ヒッパラレテモタンエ。

呼ばれてしまったんだ。

K アーア タウエ ~~スグ~~ スンデカラ スゾヤノ。  
ああ 田植え すんでから すぐですね。

Y ウン。 ホーリヤ ヨワツタンエ。 ホリヤ ナンシニコイ <sup>(91)</sup> カ  
ああ。 それは まいったんだ。 せら 何をしにこい あ  
ンシニコイッテ ( <sup>K</sup> ウー ) デンワ カカッテフル。 ホーテ <sup>(92)</sup>  
れをしにこいて 電話か かけてくる。 それでも

又 ( <sup>K</sup> ウー ) ヤッパ ワカコァ カワイサケ イカナアカン  
やはり 我が家は かわいいから 行かなくてはい

ト オモテ。

けないと 思って。

K ホーヤ。 ホリヤ ホーヤ。 ( <sup>Y</sup> 笑 ) ウーシ ホーケ。 ホンデ  
そうです。 それは そうです。 ああ そうですか。 それでは

モー ホントニ <sup>(93)</sup> タノシミヤワノー。  
もう 本当に (皆さん) 楽しみだわねえ。

Y ホンデ マー ~~イマ~~ イマ イツナンドキ イッテモ ウレシヤ  
それで まあ 今は いつ何時 (お娘の所へ) 行っても(大丈夫だから) 結構

ト オモテ。 ( <sup>K</sup> ウー ) マー フクイラモ アデ マ アン  
だと思て。 まあ 福井の(お娘の家)なども あれで まあ あれ

デ フクイラモー <sup>(94)</sup> ハジメ <sup>(95)</sup> タテツタメニ ホーシ イッケンヤ  
で 福井の(お娘)なども はじめ 建てた時には ただそのあたりに一軒だホ

ツタンエノ。 ( <sup>K</sup> ウー ) モー ソノアタリ E ヨンジュッケ  
んだよ。 ( <sup>K</sup> ウー ) (それが)もう (今では) そのあたり もう 四十軒くらい

ングレ タテタエ。 (<sup>K</sup> アーア ) デ ソコノ ホニチャンエノ<sup>(96)</sup>  
が (家を)建てたよ。 (ああ) (これ)で (その)

(<sup>K</sup> アーア ) ウチワラエ<sup>(97)</sup> デンフ タツテノ (<sup>K</sup> アーア ) モ  
(ああ) 電話が 立ってね (ああ) も

ー ナ ソレ ナ リッパナ ウチァ・ タツテモタンヤデ マ  
う みんな それは みんな 立派な 家が 建ててしまったんだから ま

ー アソコエ デッダケカ イチバン ハヤカッタサケーヨ。<sup>(98)</sup> ヤシ  
あ あそこ(の場所)へ 出ただけが 一番 早かったから。 (その辺)の屋

キ ダレモ ナ イナンダサケー。

敷に(ば)誰も そんな いなかったから。

K ソレ<sup>(99)</sup> マエヤツテ ヨカッタワノ<sup>(100)</sup>  
これは (そんな)前で よかったよええ。

Y ホイテ ホニノ ミチバタノ (<sup>K</sup> ウン ) ホニノ <sup>(101)</sup> エートコエ<sup>(102)</sup>  
そして すく 道端の ( ) ひとく いい所へ

タテテモタンヤケ アレデ ウマイモンジャモ。<sup>(103)</sup> (<sup>K</sup> ウン ) ホ  
建てたもんだから あれで うまいもんだよ。 ( ) そ

イデノ マエノエ ジョーサン コー ナンゲンモ タツタ ソノ  
れでね 前の方へ たくさう こう 何軒も (家が)建った その

シタエ<sup>(104)</sup> (<sup>K</sup> ウン ) アノ テツカン ウズメテ ホイテ ヤマノ<sup>(105)</sup>  
(家の)下へ ( ) 鉄管を うめて - そして 山から

デル キレーナ ミズ ソレガ コンコント (<sup>K</sup> アーア トツテ  
出てくる きれいな 水 それが 濁々と (ああ (その水)とて

--- ) ウチー ヒッパットケツテ ユータンエ。<sup>(107)</sup> (<sup>K</sup> オーン )  
... ) (お前の)家へ 引いておけと 言ったんだ。 (ああ)

ホジジ ウマイコト ユーノッタラ ホンナラ ソーシルカノ。

おじいちゃん うまいことを 言うねと言って それなら そうするかね(と言う)。



ウー ン ダンネ ジェンカカッテモ ソーシトケ アトカラ ラク  
あ あ いいよ 金がかかっても そうしておきたい あとで 楽だ

ヤデナ ( <sup>K</sup>ウー ン ) コンナ チョビチョビノ ミズワ ( <sup>K</sup>ウ  
からね ) こんな 清んだ 水は

ン ) ナカナカ トロツタッテ トレンノヤ ソリヤ スイドーワ  
なかなか とろうと思っても 手に入らないんだから そりゃ 水道は

スイドーヤ ナニヤ クルケド ( <sup>K</sup>ウー ン ) トットケ マ コ  
水道だ 確かに(水は)来るけれども ( <sup>K</sup>ウー ン ) 引いておけ まあニ

ンナ ンナモン ダーレモ マダ ハイランノヤシ ヤシキヤ ウ  
んな そんなもの 誰も また(もの道に)入っていないのだし 屋敷は 売

レテエンノヤ ソノ シタ クアッテ ダエートクノワ ニンナラ  
れてないんだから その 下を くぐって (水を)出しておくのは かまわな

ンサケツタラ ( <sup>K</sup>アーア ) ダンネヤロカッテ ダンネクレーノ  
いんだからと言ったら ( <sup>K</sup>アーア ) いいだろうから言うから いいよ (その)

シタ クアッテテ ンナ ニンナランエ。 ホカナ。  
下を くぐっていて そんなもの かまわれないよ(と言ったら) そうかな(と言って)。

K ンテァ ( <sup>113</sup> ) イー ( <sup>114</sup> ) ジキン ( <sup>115</sup> ) カイナシタモノー。  
それでは いい 時期に 買われましたよねえ。

Y ホイテ テッカシ クアイト シタ トーシタンニヤ ( <sup>116</sup> ) ( <sup>K</sup>ウー ン  
そして 鉄管を 通して 下を 通したんです。

) ホイテ ソレオ ( <sup>117</sup> ) ソノ ミズデ コー シェンスイ コシエテ  
そして ( <sup>117</sup> ) その 水で こう 泉水を 作って

ソレニ キンギョ ( <sup>118</sup> ) コイガ ( <sup>119</sup> ) イルンニヤ。 ( <sup>K</sup>ウー ン ) ( <sup>120</sup> ) ホリ  
それの中に 金魚や 鯉が いるんだ。 ( <sup>K</sup>ウー ン ) それほ

ヤ イーモンジャワノ。 ( <sup>121</sup> ) ニ又ニ又 モー アケテクレテ ナカレ  
いいもんですよ。 庭には もう 明けても暮れても(水が)流

テクニャケ。 (<sup>K</sup>ア-ア) ホイテ ナカイアイダ<sup>xxxx</sup> フワル  
れてくるんだから。 (ああ) そして 長い間 (土地の下を) くぐ

サケエ ホンネ <sup>(122)</sup>キフトネンニエ。 (<sup>K</sup>ア-ア) ソノ ヘンモ  
るから そんなに 冷たくはないです。 (ああ) その 迎も

コンダ<sup>(123)</sup> ウチャ-ンナ タツテモタンヤサ。 (<sup>K</sup>ア-ア) ソノ<sup>xxxx</sup>  
今度は 家が みんな 建てしまったのだからね。 (ああ)

<sup>xxxx</sup>ソノ (<sup>K</sup>オン) ジメンノトコエ- (<sup>K</sup>ウ-ン) ズラ-  
その (ええ) 地面の所へ ( ) ずらり

ット ウチャ-ンナ タツテモタンエ。 コナイダ イッタラ マ  
と 家が みんな 建てしまったんだよ。 この間 行たら ま

タ <sup>(124)</sup>ゴウツクリシテモタンエ。 ホ- ハエ- タチニカカッ  
に びっくりしてしま、たんだよ。 (ほう) (はあ) 建ら始めると

ハエ-モンジャト オモテマウンニャ。 <sup>(125)</sup>ホット<sup>(126)</sup> ヨメニ ヤルト  
早いもんだと 思うんだ。 (けれども) 嫁に やる時

キニャ オゾイコト ノ-タケド ヤッパ イマンナット ラクヤ  
には たいへんな目に 会いましたけれども やはり 今になると 楽だ

ト オモウ。  
と 思う。

K ウ-ン イマ イ-デノ。 <sup>(127)</sup>シャフシエ <sup>(128)</sup>イ-ヒトヤデー。  
ええ 今は いいからねえ。 幸せが いい人だから。

Y <sup>(129)</sup>イヤ- <sup>(130)</sup>ヒトイキア オゾイコト ナエンシタエノ。 コ ヨメニ  
いや 一時は... ひといい目に 会いましたんですよ。 子は 嫁に

ヤランナランシ ヨメ トランナランシ コリャ コマツタコッチ  
やらなくてははいけないし (息子には) 嫁を もらわなくてははいけないし これは 困ったことだわ

ヤナ-ト オモテ シンパーシテタンヤケド <sup>xxxx</sup>ンデモ ヤッパ  
あと 思って 心配したんだけどけれども それでも やはり

ドーカコーカ ナ<sup>ナツ</sup> ナントカナッテキタ。

どうかこうか 何とか来て来た。

K ホントヤノ<sup>(131)</sup> シャフシエ ヨカッタンニマフノ。 ウン。  
本当だね 幸せか よからんだね。 ええ。

Y コリヤ アンマリ シャツキンワ シトナカッタンテノ。 シャ  
コリヤ あまり 借金 は したくはないからねえ。 借

ツキンシルト コリヤ モー ドーモ コモナランシ ~~トモニ~~<sup>(132)</sup> カオ  
金すると これはもう どうにもこうにもならない (本当に)もう 顔

モ アケラレンシナート オモテ ドーカシテ<sup>(134)</sup> シャツキンシエン  
も あげられないしなあと思っ っ っ どうかして 借金をしないで

ト ハナイテヤロツテ<sup>(135)</sup>。 アンテ オソイコト ノーテ ハタラ  
(嫁に)出してやろうと(思っ)。 あれで ひといい日に あって 働い

イタワイノ。 イマジョーノ ヤマオクニ ナンネンテ イタンヤ  
たよね。 今の 山奥に 何年て いたんで

ゾノ。 ( <sup>K</sup>ウン ) スミヤイテ。 ホリヤ ソノトキネヤー ダ  
すよ。 ( ああ ) 炭を焼いて。 それは その時には 大

イフ ジエンモ モーカッタケド<sup>(136)</sup> ンナ ドコヤ ソラ<sup>(135)</sup> コドモニ  
分 金も もうからたけれど みんな どこえやら せら 子どもに

ンナ フィテッテモタン。 (笑) ンナモ イクラ ジエン タ  
みんな 飛んでいってしまった。 そんなもの いくら 金を た

メテモ アカナンダフノ。 ( <sup>K</sup>ウン ) モー イマワ ムスコ  
めても 駄目だからですよ。 ( ) もう 今は 息子が

ヨメ モロテ ムスコニ マゴァ アルサケ モー ラクジャ。  
嫁を もらって 息子に 孫か あるから もう 楽だ。

モー コデ ムスコ コンダ<sup>(137)</sup> ヨメニヤルジブンニヤー ムスコ  
もう これで 息子が 今度(自給)嫁に出す時分には 息子

ァ ドーデモ シルサケ シナモ一 マゴノ コタァ カンカエン  
ガ どうでも するから そんなもの 孫の ことは 考えなくて  
デイーサケ。  
いいから。

K ウーン ホリヤ ホーヤ。(笑)  
うん それは そうです。

Y 主 ホンデ ムスコニ シャッキンシェー<sup>(438)</sup> ノコサナイト コニ  
もう それで 息子に 借金さえ 残さなければいいと こう  
オモテンニモ。<sup>(439)</sup> ウララ オヤカラ シャッキン モロタンヤサケノ。  
思ってるんです。 私など 親から 借金を もらったんですからね。

(<sup>K</sup> ウーン (笑) ) ホンデ オソイコッチャッタワイノ。  
それで ひどいことだったんですよ。

K アノ キンニョモンノ オジジァ<sup>(440)</sup> サケガ スキヤッタデー。<sup>(441)</sup>  
あの 金右衛門の おじいさんは 酒が 好きだったからねえ。

Y アー モー ドコイッテモ サケバッカ ノンデタンヤ ンナー。  
ああ もう どこへ行っても 酒ばかり 飲んでたんだ そんな(人だった)。

K サケ スキヤッタデー ( <sup>Y</sup> ホンデ アカンノヤ ) サケ スキヤ  
酒が 好きだったからねえ ( それで 駄目なんだ ) 酒が 好き  
ッタサケ。  
だったから。

Y ホヤデ ハヨ シンダワイノ。  
だから 早く 死んだよね。

K ホヤー ワリト ハヤカッタノ一。  
そうだ 割に 早かったねえ。

Y ロクジュー。 ロクジューデ シンデモタンエ。  
六十だ。 六十(歳)で 死んでしまったんだ

K ログジュージャットケンケノ。<sup>(142)</sup> (Y ウン) ホンテ イケー オニサンヤッタシ ナ  
六十だったかね。 (ええ) それで (体格の) 大きい おじさんだったし け  
ンヤケド コシヤ<sup>(143)</sup> チョット カカンテ"タワノー。  
けれど"も 腰は 少し 曲かっていたよねえ。

Y ウン コシヤ フタヨヤ。<sup>(144)</sup> (K ノー<sup>(145)</sup>) モ ホンナモン ツェバ  
ええ 腰は 二重だ。 (ねえ) もう そんなもの 杖を  
<sup>(146)</sup>  
イ ツイテェアー ドコテモ アルイテァー ホイテ テ-----。  
ついては どこでも 歩いては として て……。

K ホンテァ イマノ カーチャント<sup>(147)</sup> ナンネンモ ホンネ ナンネン  
それでは 今の 母さんとは 何年も そんなに 何年とは  
<sup>(148)</sup>  
テ ソワナンダンヤノ。  
いっしょにいれたんだね。

Y サンネンホド イタンカネー。  
三年ほど (いっしょに) いたのかねえ。

K ウー ン ホンナモンカノ。<sup>(149)</sup>  
ああ そんなものかね。

Y ウー ホンナモンジヤ。  
ああ そんなもんだ。

K トショリラシュー ミエタカノー (Y ホリヤ トショ -----) □  
年寄りらしく 見えたかねえ (それは 年寄り……)  
ワジュージャットケンケノ。 マダ<sup>(150)</sup> ワカカッタニヤノー。  
六十だったのかねえ。 また 若かったんだねえ。

Y ハハオヤガ コージューヒチケナ。<sup>(151)</sup>  
母親が(死んだのは) 五十七か年。

K ホーヤ オバサンモ ハヤカッタノー。<sup>(152)</sup>  
そうです おばさんも 早かったねえ。

Y ナナ ワカジニヤ。 ナナ ウラ ヒトリ イキノコッテンニヤモ。  
みんな 若死にた。 そんなもの 私 ひとり 生き残ってるんだもの。

モ キョーダイモ シニャー ナーモ インノヤモ。 モー オラ  
もう 兄弟も 死んでしまて 誰も いばいんだもの。 もう ね  
ヒトーリ。  
ひとり(だけです)

K ウン キョーダイシュー <sup>(154)</sup> ハヤカッタデー。  
兄弟 舞 <sup>か</sup> (死んだのか) 早かったから。

Y ウン キョーダイア <sup>(156)</sup> モー ~~xxxxxx~~ モー サンジューネンマエニ ナナ  
ええ 兄弟は もう 三十年前に みんな  
シンデモタンヤデ。 <sup>(157)</sup> サンジューネンマエツテ モー ヨンジュー  
死んでしま、たんだから。 三十年前って もう 四十年くら  
ネングレ・タツヤロ ナナ シンデカラ。  
い たつたろう みんな 死んでから。

K ウーシ ロクジューヤツタンカノ オンサン。 ( Y アーシ ) タ  
あめ 六十たったのかねえ おじさん。 ( ええ ) 大  
イブ トショリラシュー ミエタンニヤノ。 <sup>(158)</sup>  
分 年寄りらしく 見えただね。

Y ホリヤ トショツタツテ モー コリヤ ジクダレシナツタ <sup>(159)</sup> ツエ  
それは 年とって(何年?) もう これは 杖  
バイ ツイテ アルイタンエ。 ( K ホヤ ) ホラ オゾカッタ <sup>(160)</sup>  
を ついて 歩いたんだ。 ( そう ) それは みまほらしからた  
エ。  
んだ。

K ウーシ ロクジューデ イマノ ロクジューデア マダ <sup>(161)</sup> ワカイワノ。  
六十では 今の 六十では まだ 若いものねえ。

Y ホイデ イマノ ロクジューノ ヒトワ ホンネ コシ カガンデ  
それに 今の 六十の 人は そんなに 腰の 曲がって  
アルイテル、ヒトア ネーモノ。  
歩いている 人は はいむの。

K ホヤ ヨケー ネーノ。 ~~コシカガン~~ オトコノ ヒトデ コシ  
そうだ たくさんは はいね。 男の 人で 腰  
カガンデル ヒトツデ ヨケー ネーワノ。 ウーン。  
が曲がっている 人と言うのは 多くは はいですよ。

Y ホイデ ウラ コレデ ナイラ オヤノ カワリ コンデ ジュー  
それで 私は これで 何ですよ 親の かわりに これで 十二。  
~~ニ~~ニサンネン ナカイキミタンニエ。 ウラノ トシニヤ モー  
三年 長生きしたんです。 私の 年には もう  
ジューニサンネンサキニ シンデモテンニエ。  
(親は) 十二三年前に 死んでしまってるんです。

K マエワ ホイデ ナナジューッサイマデニ シンダワノ。 <sup>(63)</sup>  
以前は それに 七十歳までに 死んでしまたねえ。

Y ウーン ンナ シンデモタニエ。  
ああ みんな 死んでしまたんだ。

K ウーン ハチジューマデ <sup>(64)</sup>ノコルモンテ ヨケー インサケー。 <sup>(65)</sup>  
ええ 八十(歳)まで 残る者などは(そう)たくさんは いないから。  
ウン。

Y ンナ タエーカイ ロクジュー……。 ( <sup>K</sup>ヒチジュー ナルマデ  
みんな 大概 六十……。 七十(歳)に なるまで  
ニ シンデモタノ ウン ) アン ロクジューノ ヤクドシ コシ  
に 死んでしまたね ああ 六十の 厄年が 越

エルカ コシエンカ。 マ ヤクドシ コスト チョット ナカイ  
せるか 越せないかね。 まあ 厄年を 越すと 少し 長生

キシルケド ヤクドシ コシエント ンナ ロクジューノ ヤクド  
きするけれども 厄年を 越せないと みんな 六十の 厄年  
シマテニ <sup>(166)</sup> シヌノ。 シンテモタノ一。 <sup>(167)</sup>  
までに 死ぬね。 死んでしまったねえ。

K ハエー ヒトァ シジューニグレエテノ。 ( Y アー ) ウン。  
早い 人は 四十二くらいだね。 ( ああ )

Y テ イマヤカッテ コテ オトコワ モー イング。 モ ンナ  
それで 今だって これで 男は もう いませんよ。 もう みんな  
シンテモタニ。  
死んでしまったんだ。

K ホヤ ホヤ モー ハチジュー コシテイル ヒト ンナンテ ナイ  
そう そう もう 八十を 越している 人なんて ない  
ーデー <sup>(168)</sup> ( Y アー ) モ ハチジューニサン ナルト ンナ ~~シ~~  
から ( ああ ) もう 八十二・三に なるよ みんな  
ノ一 マチンキョノヤラー <sup>(169)</sup> タライモンノ <sup>(170)</sup> オジジラ ンナ ハチ  
ねえ まちんぎよのや 太郎右衛門の おじいさん達は みんな 八十  
ジュ チョット コシタラ シンテ マイナシタデー。 <sup>(171)</sup>  
を 少し 越えたら 死んでしまいましたからねえ。

Y ヤッパ ナカイコト イラレンノヤ。 <sup>(172)</sup>  
やはり 長いことは(お)いられないんだね。

K ヤッパシ オトコノヒトワ 千原ラシゴトオ シナハルサケ ドー  
やはり 男の人は 刀仕事を なるから どう  
シテモノ。 ( Y ナカイコト…… ) オンナヨリ ハヤジニシナハン  
してもねえ。 ( ~~xxxxxxxxxxxx~~ 長いこと…… ) 女より 早死になるん



ニヤノ。<sup>(173)</sup>  
にね

Y ナカイコト イラレンノヤノ カニカエテミット。  
長いこと (生きて) いられないんだね 考えてみると。

K イナカテァ<sup>(174)</sup> ノー。 ウン。  
田舎では ねえ。

注記

- (1) 「ナウ」は [kotoni aw] > [kotonaw] となつたものであろう。  
 (2) [ho:deswne<sup>h</sup>ː]. (3) 倒置。 (4) [ojawanε<sup>h</sup>ː]. (5) [ne<sup>h</sup>ː]. (6) [masw<sup>h</sup>ː]. (7) [sende<sup>h</sup>ː]. (8) 「一例」か。 (9) [ija<sup>h</sup>ː].  
 (10) 発音があいまい。こう聞こえる。 (11) 「女」を言う。今では蔑称に近い。(12) 「苦勞ばかりで顔を上げられない」というような意か。(13) 山本氏の娘さん達をさす。(14) [jakedo<sup>h</sup>ː].  
 (15) [ojawa<sup>h</sup>ː]. 独特のイントネーション。(16) 嫁入り道具のこと。  
 (17) 嫁入りの時、道具といっしょに車か何かに米俵を積んでその上に飾り皮を乗せて、持っていっただらしい。(18) [pa<sup>h</sup>ː]. (19) 「ホヤケド」に近くも聞こえる。(20) 「おえ」にあたる部分は上昇調のイントネーション。(21) [tʃade<sup>h</sup>eː]. (22) 「(いいなと) 思つて」の意。(23) 「～さらす」は相手を見下げた言い方。ここでは、自分の子どもらが生意気にも家を建てた、というような気持ち。(24) 「建てた」が省略。(25) 言い切つたかに見える。また続ける。(26) 驚いたかのような返事。(27) 家の敷地が縦横六間と八間の家ということ。(28) [ike<sup>h</sup>:jεno]. 途中で上昇したイントネーションは最後まで下らず。(29) 家の中の四つの部屋がちょうど田型になっている意。(30) [jæppodo]. (31) 心聞いて書いてみたかは、きりせず。(32) 「テナワン」は「手に合はん」から。つまり「手におえない」の意。[teni awan] > [tenawan]. (33) かすかに聞こえる。(34) 「おこいものだ」, 「立派なものだ」の意。(35) [no<sup>h</sup>ː]. (36) [ho<sup>h</sup>:keːno<sup>h</sup>ː]. 独特のイントネーション。(37) 「(今まで) 言わなかつたのに」の意。(38) 片親。(39) 「ソレ」とも。(40) [kedo<sup>h</sup>ː]. (41) [sindara<sup>h</sup>aː]. (42) こう聞こえるが、あいまい。(43) 注(42)の部分からここまで何のことを言っているのかわからない。(44) 意味つかめず。(45) 自分(山本氏)の娘婿に対して言う。  
 (46) 発音少しあいまい。(47) 「手が早い」つまり「上手」だとい

うこと。(48)特に意味のないつなぎことば。(49)釜の中の焼けた炭を。(50)いかにも感心したという声。(51)「大きい金になりますよ」の意。(52) [kaeten]。(53)「イ」は小さく短かい。(54)「notte<sup>ε:1</sup>」。(55) [mæ:nitsi]。(56)地名。武生市の北にある人口5万の市。(57)「体が(楽だ)」の意。(58) [so:jannō]。(59) [rerude<sup>ε</sup>]。(60) [kaisawanō]。(61) [si:<sup>1</sup>]。(62) [si:<sup>1</sup>]。(63)「(仕事か)十分に出来ない」意。(64)最後小さくなる。(65)聞きとれず。(66) [atšwisin<sup>ε</sup>]。(67)「マー」から「ナントカナルケ」まで山本氏が娘婿に対して言、た言葉。「そんなに炭焼きの方はあわてなくても何とかなるよ」というような気持ちか。(68)ことばがあいまいでわからず。(69)ここから娘婿のことば。(70) [tošotte]。(71) [no:<sup>1</sup>]。(72)小さく自己のうなずき。(73) [a:<sup>1</sup>a:<sup>1</sup>]独特のイントネーション。(74) [batano:<sup>1</sup>]。(75) [ε:]。(76)これは土地のことではなく「家」そのものと言う。(77)家号。 [sonε:mosan<sup>2</sup>kara]。「カラ」は「エ」の間違いか。(78)「その人の実家が」の意。(79) [jo:]。(80)この「屋敷」は土地のこと。(81) [a:<sup>1</sup>ā]。(82) [sake<sup>ε</sup>]。(83)まだ今は家が完成していないから、村の奥の方にいるということ。(84) [tatete:<sup>1</sup>]。(85)「おじいさん」に対する最も一般的な呼び方。(86)「宿がえ」。つまり元の家から新しい家に移ること。(87) [a:<sup>1</sup>a:<sup>1</sup>]。(88)は、きり聞こえず。(89)「十幾日」の意。(90)「基礎工事」の意。(91) [nanšiniko:<sup>1</sup>i] (92)発音あいまい。意味はこうであろう。(93) [no:<sup>1</sup>]。「将来が(楽しみ)」の意。(94) [hagimæ]。(95)「ッ」は聞こえないようにも。「建、た目」でこの「目」は「三ヶ目」というような時の使い方だろう。(96)こう聞こえるが、意味は、きりせず。(97)(96)と同様意味つかめず。(98) [sake:<sup>1</sup>]。(99)「ンデ」とも聞こえる。(100)上昇調のイントネーション。(101)この「ホン」はいろいろな意味に使われる。強調の意で用いられると考えられる。(102) [ε:tokø]。(103)「うまいことや、たもんだよ」

の意。(104) [ʃitæ]. (105)「ヤマノ ミズ」と言うつもりで「ノ」を使ってしまうたのでは。(106)言いかけ。(107)「鉄管で水を(引いておけ)」の意。(108)「非常に量の少ないこと」をこの「チョビチョビ」で表現することもあるが、ここでは「清んだきれいな」の意であろう。(109) [naʃ:njə]. (110) [dæ:tʰkw]. (111)「ニンナラン」で「関係ない」、「かまわれない」の意を表わす。(112) かすかに聞こえる。(113) [ndæ]. (114) [ʃikinj]. (115) [noʃ:]. (116) [paʃa]. (117) 庭の小さな池。(118)「キンギョ」も特に鯉などと区別しないで、鑑賞用の魚一般を言うこともあるので、ここも鯉のつもりかも。(119) [npaʃ:]. 独特のイントネーション。(120) 感心したという声。(121) とう聞こえるが、あいまい。(122)「冷たい」を「チフター」と言う。(123)「最近」の意か。(124)「ビックリ」の「ビ」が「フ」に近く聞こえる。(125) このあたりかなり早口で発音がつかみにくい。(126) [hoʃado]. 「ホヤケド」と同じ。(127) [iʃ:ʔdenʰo]. 独特のイントネーション。山本氏の娘さん達をさす。(128) [i:ʃitojadɛʃ:]. (129) ここからのことば、山本氏が昔を振り返って感慨無量という感じの静かな口調。(130) [koʰ]. (131) [janʰo]. (132) [ʔtonimo:ʃ]. (133)「恥ずかしくて(顔も上げられない)」の意。(134)「どうかして」の意。(135)「離して」の音便化。「親の手元から離す」つまり「嫁にやる」の意。(136)特に意味のないことば。(136)嫁にやるのに金のたくさんいることを言う。(137) [neə:] (138) [ʃe:]。[sae:]の転か。(139) 声が小さくて聞き取りにくい。(140) [oʃizjæ]. (141) [dɛʃ:ʃe]. (142) 驚いたような声。(143) [ko siwa]の[iw]が無声化。(144)「ふたよ」は「二重に重なった」の意。腰の曲がっていることの形容。(145) [noʃ:]. (146)「杖棒」の意。「木の棒」は「バイ」になる。[tsebai]. (147) 山本氏の奥さんをさす。(148)「添う」。「連れ添う」の意。つまり姑といっしょに暮らすの意。(149) [nʰo]. 疑問の意を表わす。(150) [panoʃ:]. 独特のイントネーション。(151) 山本氏の母親。

(152) [ɕitɕikæna]. (153) [no<sup>1</sup>]. (154) 人に対して「何も」という  
 ような使い方をしている。 (155) [dɛ<sup>1</sup>:ɾ:]. (156) [da<sup>1</sup>æ].  
 (157) 少し考えて訂正する。 (158) [nān<sup>0</sup>]. (159) こう聞こえる。  
 意味はは、きりしないが、「腐りかかった」とでもいう意か。  
 (160) 人間の形容に「おぞい」を使うことは稀。特にこう意味では、  
 「下らない(役に立たない)人間」では割に使われる。 (161) [wak<sup>0</sup>aiwa<sup>1</sup>no<sup>1</sup>]. 独特のイントネーション。 (162) [ne<sup>1</sup>:wa<sup>1</sup>n<sup>0</sup>].  
 (163) [si<sup>1</sup>n da<sup>1</sup>wano<sup>1</sup>]. (164) 「生き(残り)」の意。 (165) [ke<sup>1</sup>].  
 (166), (167) 上昇調のイントネーション。 (168) [na<sup>1</sup>ide<sup>1</sup>]. (169)  
 家号。 (170) 家号。 (171) [dɛ<sup>1</sup>]. (172) [no<sup>1</sup>a]. (173) 上  
 昇調のイントネーション。 (174) [inakade<sup>5</sup>].

## 10. 酒屋の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)  
 Y 山本仁太郎 男 明治37年生れ  
 K 加藤久子 女 明治45年生れ

Y モー ホンデ コレカラ ラクシター<sup>(1)</sup> アンマリ エレーコトナワ  
 もう それで 二れから 樂をして あまり つらい目にあわ  
 ント コリヤ サカヤ イッター<sup>(2)</sup> ラクシター<sup>(3)</sup> ケッコ<sup>(4)</sup> ジェ  
 ないで 二れは 酒屋へ 行ては 樂しては 結構 金  
 ン モロチャ<sup>(5)</sup> ホイテ ホイテ ラクシテンナラ  
 を もらては 二して 樂をしていなくては  
 ント コー オモテルンニエ。  
 と 二う 思てるんだ。

K ホーヤ ホントニ。(笑)  
 そうだ 本当に。

Y ホラ サカヤ ラクナネンジェノ。<sup>(6)</sup>  
 二れは 酒屋は 樂はんですよ。

K イーワノ<sup>(7)</sup> ( Y ウーン ) ココランテナ<sup>(8)</sup> アノ サブネーシネー。<sup>(9)</sup>  
 いいですね ( ええ ) 二のあたりみたいに あの 寒くはないねえ。

Y ホイテ ウケニ イテ ソツダケ ジェン アタランモ。  
 二して 家ニ いて 二れだけ 金 もらえないもの。

K ウン ホリヤ アタラン。 ホリヤ アタラン。 ンナ ナーモ  
 ああ 二れは もらえない。 二れは もらえない。 二んばもの 何も

シゴトカ<sup>(40)</sup> シナ マウ シゴトカ ナエデノー ココラデワ。 ト  
仕事か そんな(自叙)合う 仕事か ないからねえ このあたりでは。 年  
シニ オーダ。  
に あった(仕事か)。

Y ウチネ イテ ヤッパ ツキニ ジューゴマンエン モーケラレン  
家に いて やはり 月に 十五万円は もうけられな  
モ。  
いもの。

K ホリヤ モーケラレン。 ホンナン モーケラレン。  
それは もうけられない。 そんなもの もうけられない。

Y アー。 ヤッパ コレ サカヤ イキャー ゴシエンエン アタル  
ああ やはり これで 酒屋へ 行けば(白)五千円は もらえる  
ンニヤフ。 ソレ ヤッパ コヲシテ モロテ イケー ジエン<sup>(11)</sup> ……<sup>(12)</sup>  
んだから。 そら やはり たくさんの 金……。

(<sup>K</sup>ウーシ) ウーシ。 ヤッパ ムスコァ ドンダケ モーケル  
やはり 息子は どれだけ もうける  
カ シランケド ソレー ヤッパ ヒトツダケ<sup>(13)</sup>  
か 知らがいけれども それは やはり

K ホリヤ ヤッパ<sup>(14)</sup>ー アノ カラダカ<sup>(15)</sup> タツシャナラノー。  
それは やはり 体が 健康 ほうねえ(出来るけれども)。

Y シ イヤ タツシャヤサケ コ コンナコト ユーテラレルンニヤ  
あ いや 健康だから そんなことを 言っているんだけ  
ケド ヨワカッタラ ヤッパ コイツテモ イカレン。  
れども(体が)弱かったら やはり(向うか)来いと言っても 行けな。

K イカレンワノ ウーシ。  
行けなよね

Y モー コトシ イチネン イッテオカンナランノエ。 ニジューネ  
 もう 今年 一年は 行っておかなくては いけないんです。 二十年(勤続)  
 ンノ サカズキ モロテオカンナランノエ。  
 の 盃を もらっておかなくては いけないんです。

K アー アーア アノ キンゾクテ サカズキガ テナハルン<sup>(17)</sup> ノミ  
 ああ ああ 勤続で 盃が いただけるの 組合  
 アイカラ。  
 から。

Y コトシ コトシ イキマストー。  
 今年 行きますとね。

K アー ホーケ。 ホンデァ<sup>(18)</sup> ノ サカズキダケァ<sup>(19)</sup> モライナハラ  
 ああ そう。 それでは その 盃だけ いたたかなく  
 ナ アカン。  
 ては いけない。

Y モー カエルトキァ<sup>(20)</sup> ダンナン<sup>(21)</sup> テー ニキッテ ハナサンノヤ。  
 もう 帰る時には ご主人が 手を 握って はなさないんだ。  
 ( <sup>K</sup> ウン ) マー モー イチネン キバツテ<sup>(22)</sup> コイヤ<sup>(23)</sup> ナツ ナ  
 ( ああ ) まあ もう 一年 頑張って 来いよ 夏に 何  
 ーモ シゴト シェントナ ケユテー。  
 も 仕事を しないでな と言って。

K アーア。 ナレタ ヒトワノ<sup>(24)</sup>ー ヤッパ イーサケニ。  
 ああ。 慣れた 人はねえ やはり いいから。

Y ウン カエルトキ カエルトキ ソー ユーテー<sup>(25)</sup> ( <sup>K</sup> ウーン ) モン  
 (酒屋から)帰るときに そう 言って  
 モンマデ オクツテ テテキタンエ。 ( <sup>K</sup> ウーン ) ホンナコト  
 門まで 送って 出てきたんです。 せんばことを



シタコト ネンニヤッチュンニヤノー。 (<sup>K</sup>ウン ウン) <sup>(26)</sup> ニヤ  
したことは (今私) はいんた"って言うんだねえ。 だけ

ケド (<sup>K</sup>ウン) ホヤッテ ナガイコト イルツチュモンワ ヤ  
ども そうして 長いこと (私氏) いるという者は ヤ  
ッバ カワイヤラ <sup>(27)</sup> ぬ。  
はり (私主人) かわいいやらね。

K ホイテ ワカイ ヒトワ ホンネ モ テナハラシ <sup>(28)</sup> ンター。  
そして 若い 人は そんなに もう (私氏) 出られないから。

Y イヤ モー ワカイモンバツカヤゾノ ウラントキュー。  
いや もう 若い者はかりだよ 私のところ(酒屋)は。

K アー イマ。 (<sup>Y</sup>ウン) アー ホーケ。 千カイトコノ ヒト  
ああ 今。 ああ そうか。 近い所の 人

ヤ。

かい。

Y イヤ カブラ <sup>(29)</sup> ケヤラ <sup>(30)</sup> シラヤマヤラ。  
いや 甲斐城やら 白山やら。

K アーア ハマノ <sup>(31)</sup> ヒトカノ。 ウーン。  
ああ 浜の 人がね。

Y カブラケ マカ <sup>(32)</sup> シラヤマ (<sup>K</sup>ウン ウン アーア) ンナ ワ  
甲斐城 糠 白山 ああ) そんなもの若

カイモン バツカヤ。 (<sup>K</sup>アー) ウラ ヒトリジャノ トシヨ  
い若 はかりだ。 ああ) 私 ひとりだもの 年寄

<sup>(33)</sup> リア。 (<sup>K</sup>ウーン) ンナ ゴジューグレーノ モンバツカヤ。  
りは。 みんは 五十くらいの 若 はかりだ。

(<sup>K</sup>アー ホーケ ウーン) ンナ モント <sup>(34)</sup> シゴトシザカリノモ  
ああ そうか) そんなもの 本当に 仕事し盛りの若

ンバックヤサー。<sup>(35)</sup> ( <sup>K</sup> アーア ) ソーユモンニ マケントコト  
ばかりだよ。 ああ そういう者に 負けないでおこうと

オモンニヤケ エレーワイノ。

思うんだから たいへんだよ。

K ホリヤ イレー。<sup>(36)</sup> ホリヤ イレー。 ( <sup>Y</sup> ウン ) ウーン ホリヤ  
それは たいへんだ。 それは たいへんだ。 それは たいへ

イレー。

んだね。

Y ニナモン キューシエン タンクガ アルンニヤ。 キューシエン  
せんばもの 九千(九)の タンクガ あるんだ。 九千の

タンクキュータラ イケー ゴーシ シコム タンクヤガ ソレ アラ  
タンクと言ったら 大きい こうじを 仕込む タンクだが それを 洗

イニ <sup>(38)</sup> <sup>(39)</sup> ハイニヤカー ホレ ナーモ モタント ポーイト トン  
いに 入るんだが それに 何も もたずに ほーいと 飛ん

デ アガッテコナ アカンノヤケノ。 ( <sup>K</sup> ウン ) スベル タン  
で 登ってこなくては いけないんだからね。 すべる タン

ク。 ( <sup>K</sup> ウーン ) <sup>(40)</sup> グレモ アガッテコレノヤデ。 ( <sup>K</sup> ウ  
クを。 誰も 登ってこられないんですから。

ーン ) <sup>(41)</sup> <sup>(42)</sup> ソレー ウラ ポーイト アガッテクンニヤゾノ。 ( <sup>K</sup>  
それを 私は ほーいと 登ってくるんですよ。

ウーン ) <sup>(43)</sup> <sup>(44)</sup> ホンデモ ワカイシユア ドンナモンモ ア アガラレ  
それでも 若い衆は 誰も 登れな

ンノヤ。 ハシゴ サイテクレッキュンニエ。 ( <sup>K</sup> ウーン ) ウ  
いんだ。 はしごを さしてくれて言うんです。 私

ラ ハシゴ ササント アガッテクンニヤケ。

は はしご(はしご) ささずに 登ってくるんだから。

K ホー キツインジャ。(45) ホヤケド ヨージンシテ(46) ハジゴ サシナ  
 ほう 強いんだ。 けれど も 用心して ほしごを さしな  
 サイ コトシワ。(笑) コンダ イキナシタラ。 ノー。(笑)  
 さい 今年は。 今度(酒屋へ)いらっしゃったら。 ねえ。  
 笑)

Y イヤー モー ホンデ ホンナトツカラ アカレンヨンナツタラ  
 いや もう それで そんな所から 登れないようになつたら  
 イカントカンナラン。  
 行かないでおかなくてはいけぬい。

K ウーン ヤンナルテ。  
 (あははははかかか) やり手だからねえ。

Y ンナモン コツチャッテ。 ソラ ミンナ アカラレンノワ スベ  
 そんなもの 二つたつて。 そら みんなが 登れないのは すべ  
 ッテ アカラレンノヤケノー(47) ンナモン コツカ(48) ナケナ アカラ  
 って 登れないんだからねえ そんなもの 二つか(49) なくては 登れ  
 レン ( <sup>K</sup>ウーン ) ジェツタイ。(50) ヤッバ ~~テニニ~~ ウテニ 千  
 ない。 絶対に。 やはり 手に 腕に カ  
 カラ ナケナ アカッテコレンノヤ。 ポーイト トビツイテ シ  
 か(51) なくては 登ってこれないんだ。 ほーいと とびついて す  
 ャット アカッテコレナ アカンノヤデノ。( <sup>K</sup>ウーン ) ンナモ  
 っと 登ってこれなくては いけないんだから。(52) そんなもの  
 タカインニヤソノ マタ コノ(53) コノ(53) コノ ウエトワ タカイン  
 高いんだよ また この 天井とは 高いん  
 ニヤソノ マタ。  
 だよ。

K ウーン サカヤノ ワタシモ チョット ミシエテモロタカ<sup>(53)</sup> アノ  
うん 酒屋の(中は) 私も 少し 見せてもらっただけども

ナニガ<sup>(54)</sup> ナランデルモネー ギョーサン。 チョット……。  
何が 並んでるものねえ たくさん。 ちょっと……。

Y ウチノ クラ キューシェンノ<sup>(55)</sup> ハコエ<sup>(56)</sup> シコミノ タルガ ジュー  
私の 倉は 九千(九)の 箱が 仕込みの 樽が 十三

サンボン ナランデルンニヤ コレ<sup>(57)</sup> ガーット。 ソノウエデ ウ  
本 並んでるんです こうして すうと。 その(タンク)の上で 歌

タウトタノガ<sup>(58)</sup> ノッテルンニヤ コンダ<sup>(59)</sup>ノ。 ( K アーア アーア  
を歌ったのか 出てるんだ 今度の(テレビには) ) ああ ああ

) ジエンブ ソノ タンクニ<sup>(60)</sup> ンナ ヒトリズツ カイ モタシ  
全部の その タンクに みんなが ひとりずつ(衆記) 權を 持た

テ ( K ウニ ウン ) ホイテ ワタシワ コツチデ ウツテルノ  
せて ( ) として 私は こちらで 歌っているの

ガ ( K アーア ) ワタシノ ウタニ アワシテ カクゴシテルト<sup>(61)</sup>  
が ( ああ ) 私の 歌に あわせて 準備していると

コガ ウタニ デ<sup>(62)</sup>テルン。 ( K アーア ホーケ ) ホイデ ウラ  
二ろが 歌に(あわせ) 出ている。 ( ああ そうか ) それで 私

ー ハチマキシテ ウタウトテットコガ デタンニエ。 ( K ウー  
は はちまきして 歌を歌っている所が 出たんた。 )

ン ) ナーント コーゴシイ オツツァヤツテ。  
( ) 何て 立派な 親父だって(みんなが言た)。

K ホンテァ ウチニモ シャシン アンナハンニャンロノ。  
それでは 家にも (その時の)写真が おありになるんでしょう。

Y アリマス。  
あります。

K アンナ<sup>ル</sup>。 ( <sup>Y</sup> ウン ) ウーン。 ホノトキネ<sup>(63)</sup> ナカモチウタオ  
 おありになる。 ええ ああ。 その時に 長持(5)歌を  
 ウタイナシタンカ。 ( <sup>Y</sup> ウン ----- ) ホレワ サケノウタカ。  
 歌われたんですか。 ええ... (それ比)それは 酒屋の歌ですか。  
 ( <sup>Y</sup> ウン サカヤノウタオ ) サカヤノウタオ。 アーア ウー  
 ああ 酒屋の歌をね 酒屋の歌を(歌われた)。 ああ  
 ン。

Y モ サカヤノウタモ ウタウモン ネンジャフノ。 ( <sup>K</sup> アーン )  
 うう 酒屋の歌も 歌う者が いないんだよ。  
 ンナ ワカイサケ ソンナコト モ-----。  
 みんな 若いから そんなこと(する人がいない) もう...。

K ウタワレンノヤ。 ( <sup>Y</sup> オン ) イチネンヤ ニネン イタツテ  
 歌えないんだね。 ああ 一年や 二年 (酒屋へ) 行ても  
 オボエラレンシ。  
 覚えられないし。

Y ナロテインサケ オボエラレンノエ。  
 習ってないから 覚えられないんですよ。

K ウーン。<sup>(65)</sup> コエカ<sup>(66)</sup> イーサケノ。  
 (あはれ)声か いいからね。

Y ホヤ コエ-----。  
 そう 声...。

K キンニョ モンサン コエカ<sup>(67)</sup> イーサケノ。  
 金右衛門さん 声か いいから。

Y イヤ コエカ イーッテ ソデ マ コエダケワ マ ナカモチ  
 いや 声か いったい それで まあ 声だけは まあ 長持(5)(歌を)

ウタウダケヤサケー ホテ コンダ タケフデ ナンカ <sup>(68)</sup>  
 歌うだけだから それで 今度 試生で 何か  
 アツトラ テレビニ <sup>(69)</sup> デンナラント オマウンヤケドー。 <sup>(70)</sup> トシヨ  
 あつたら テレビに 出なくてはいけないう 思うんだけれどもね。 年とった  
 ッタモンガ テルト <sup>(71)</sup> ワラウジャロ <sup>(72)</sup> ホヤケド。  
 者が 出ると 笑うだろう けれども。

K ワラワン <sup>(73)</sup> ワラワン。 テレビラデモネー アノ トシノ イッタ  
 笑わない 笑わない。 テレビなんかでもねえ あの 年の とった  
 ヒトガ <sup>(74)</sup> デナハルト ヤッパ ニンキ アリマスゲネ。 ウーン。  
 人が 出られると やほり 人気が ありますかね。

Y イッペン デンナラント オマウン ニヤ。  
 一度 出なくてはいと 思うんだ。

K ト トショリラノ イッペン ホノ ウタオ ウトトクレノ。 (   
 年寄りなどの(もまたいい) 一度 その 歌を 覚えて下さいね。

笑) ナカモチウタオ (笑)。 <sup>(75)</sup> ダレモ シランヤロ ウタワレン  
 長持歌を 誰も 知らないだろう 歌えないだ  
 ヤロー <sup>(76)</sup> \* イマ <sup>(77)</sup> ノー。 ダレモ .....  
 ろう 今は ねえ。 誰も .....

Y ホリヤ マー <sup>(78)</sup> チョット ウタワレンノー。  
 それけ まあ ちょっと 歌えないねえ。

K ノー。 <sup>(79)</sup> タダッサン ダレカニ ナロタンカ チョット ウタウカ  
 ねえ 正さんは 誰かに 習ったのか 少し 歌うかも

シランケド ( Y アーン。 モー モー ..... ) ヤスダッサンノワ  
 しれないけれどもね ああ もう もう..... 安田さんの(御歌)は

ウタウカ。  
 歌いますか。

Y アノ ヒトモ チットワ ウタウデショノ。 マー マネゴト グレ  
 あの 人も 少しは 歌うでしようね。 まあ 真似事 ぐら  
 ーワ。 ナカナカ ウタワレンノヤトコトイ。 ソノ ハジメ <sup>(80)</sup> オ  
 いは。 はかなか 歌えなはいんだって。 その はじめの 音  
 ントカ ナケナ。  
 頭が なくては(歌えない)。

K モンクカノー。 ( Y ア ) モンクカ シラナ ウタワレンテ<sup>(82)</sup>。  
 ことばかねえ。 ことばか わからなくては 歌えなはいから。  
 ( Y ア ) ヤスダサンワ <sup>(83)</sup> コエカ イーケドノー。 <sup>(84)</sup> モ チョット  
 安田さんは 声か いいけれどねえ。 まだ ちょっと  
ヤッパ <sup>(85)</sup> ワカイデー。 <sup>(86)</sup> ダレカニ オシエトイトクレナ アカンワ  
 やはり 若いからねえ。 誰かに 教えておいてくれなくてはいけなはいよ  
 ホリャー。(笑)  
 それは。

Y ホヤノー。 ( K ノー ) アノー <sup>(87)</sup> タライモンノ トカミネ <sup>(88)</sup> イッ  
 そうだねえ。 ねえ あの 多郎右衛門の(か) 当ヶ山峰に(嫁に)  
 タトキラナー ミチカラ モー ドーグ ンナ オロイテモテ (   
 行(た)時(た)には 道(の)所(か)ら もう 道具を みんな おろしてしまて  
 K ウン ウン ) クルマニ ツメカエテノー <sup>(89)</sup> ( K アー ) クルマ  
 車に 積みかえてねえ ( ああ ) 車  
 ヨダイニ 毛 ツンテ ( K オン ) ホイテ アノー シンニョモ  
 四台に 積んで ( ああ ) そして あの しんによもん  
<sup>(90)</sup>  
 ンキュー アソコ イッタ ンヤケノー トカミネノ。 ( K ウン  
 とさう あそこへ 行(た)ん(た)からねえ 当ヶ山峰の。 (   
 ウン ) ソコマテ<sup>(91)</sup> コー ウトテクンニャ ソンナモン ( K ウン )  
 を二まで ころ 歌(う)て 行(く)ん(た) けん(た)もの

ホレカ モー キンニョモンノ<sup>(92)</sup> トーチャン シェントーヤッテ  
 それか もう 金右衛門の 父ちゃんか 先頭たって(言うから)  
 ウラ サキンナッテ<sup>(93)</sup> ウトテ<sup>(94)</sup> ホイ... ウラ オメー ソノ トキ  
 糸か 先頭にたって 歌って として... 私は あたに その 時  
 アッコエ<sup>(95)</sup> ハイルノニ<sup>(96)</sup> サケ ナンジョーッテ ノンデモタンヤゾ  
 あそこへ 入るのに 酒を 何升って 飲んでしまったんだ  
 ノ. ( <sup>K</sup>ア-ア ) ミナ テテキテ ノムンデ. ( <sup>K</sup>ア-ア )  
 よ. ( ああ ) みんなか 出てきて (酒を) 飲むんで. ( ああ )

モ タンボネ イルモン ンナ アガッテキテモテ。  
 もう 田んぼに いる者も みんな あがってきてしまって。

K ウーン。 ウタ ウタイナ ハルサケネ ミンナ ヤッパ ヒキヤラ<sup>(99)</sup>  
 歌を お歌いになるからね みんな やはり

.....

Y ホイテ ウタ ウン ウタ ウテテルモンヤケ。 ホイテ ウラ  
 として xxxxxxx 歌を 歌ってるものだから。 それに 私は  
 アワテニノヤロ。 ( <sup>K</sup>ウン ) ウタ ウタウンニヤケ。 ( <sup>K</sup>ウ  
 あわてないのでしょう。 歌を 歌うんだから。 )  
 ン ) ホイテ テヌクイ カブッテアー ヒヨキシテエニ<sup>(100)</sup> ナーン<sup>(101)</sup>  
 として 手ぬぐいを かぶっては 何  
 オモッシェーコト ミテルモンヤサケ ( <sup>K</sup>ウン ) ミナ ソレー  
 面白いことを してるものだから みんな それを  
 ミテァ サケ ノンデァ<sup>(102)</sup> ワロテルン。 ニモツヤ タンスワ ソ  
 見ては 酒を 飲んでほ 笑っている。 荷物や タンスは せ  
 コニ インニヤケド<sup>(103)</sup> ハヨー イケッテモ ユワン。 ソリヤ<sup>xxxxxxx</sup> ソ  
 ニに いるんだけれども 早く 行けども 言わない。



リヤ ゴツツオヤサケ<sup>(103)</sup> ( <sup>K</sup> ホヤー ) ハヨ イケッテワ ユワレ<sup>(104)</sup>  
それが ちそうたから ( そう ) 早く 行けとは 言えな

ンノヤ。 テ<sup>(105)</sup> ウラ ウゴカナ クルマ テテコラレ<sup>ニエ</sup> アッテ  
いんだ。(それが 私か 働かなくては 車か 出てこれないの) あれて

モー ヤッパ オシロノモニモ ウタウミノ。 ソレカ ゴツツオ  
もう やはり 後の 昔も 歌うしね。 それが ちそうた

ヤサケ。 ( <sup>K</sup> ホヤ ホヤ (笑) ) ホヤケド ダイクサンノ<sup>(106)</sup>  
から。 ( そう そう ) けれども たいくさんの(人)が

アノ オームシ イキナシタトキニ ( <sup>K</sup> ウン ) アノ ダイクノ  
あの 大虫へ 行かれた時に ( ) あの たいくの

オトツツァン<sup>(107)</sup> アンナトキヤー ゴムクルマヤッタニヤ ( <sup>K</sup> ウー  
親父さん あんた時には ゴム車 たった

ン ) アレ ヨダイ イッタニエ。 ( <sup>K</sup> アーア ) ホイデ<sup>(108)</sup> アノ  
あれ 四台で 行、たんです。 ( ああ ) それで あの

ー ホレーノ アタシヤノ<sup>(109)</sup> イワマツツァンモ イタシ タライモ<sup>(110)</sup>  
ほら あたしゃの 岩松さんも いたし 多郎右衛

シノ ムスコラモ<sup>(111)</sup> ニナ イタンニヤ。 ( <sup>K</sup> ウーン ) ホイデ<sup>(112)</sup>  
門の 息子らも みんな いたんだ。 ( ) それで

コッチカラ ヨッタリ イッタニエ ソイデ<sup>(113)</sup> ウラモ イッタニヤ。  
こちらから 四人 行、たんです それで 私も 行、たんです。

イヤー ホーヤケド<sup>(114)</sup> オームシ イッタトキラ イマ カーチャン<sup>(114)</sup>  
いや けれども 大虫へ 行、た時ほど 今は 母ちゃんも

モ トシイッテモテ イケー マゴカ アルケド。 ( <sup>K</sup> ホヤ ホ  
年とてしまて 大きい 孫か あるけれども。 ( そう そ

ヤ ) ニナー アンナトツカラ イッテンニヤケ ソレ マー タ<sup>(115)</sup>  
う ) そんな あんた時から (道具持ちに) 行、ているんだから それは まあ 大

イブ コデ ナンジャワノ一。 (116) ホイデ オームシ ハイノニー (117) (118)  
命 これか 何ですよええ。 それで 犬虫へ 入るのに

オミヤサンノ マエカラ モー イカシエンノヤゾノ。 (K ウー  
神社の 前から もう 行かせないんですよ。)

ン) ホラ マー ジョーサンノ モンカ タンボカラ アガッテ  
えら まあ たくさんの 者が 田んぼから あがって

キテ サー サケ ダシエッテ (119) イーネカカッタンエ。 (K ウー  
来て さあ 酒を出して 言い始めたんです。)

ン) サケダスンナラ ンナ ウタウサケ サー ンナ ウタデ  
酒を出すのなら それなら (私か) 歌うから さあ みんなも 歌で

ナンシトクレノ一 サケモ ノンドクレレ イーシ ウタネ ツケ (120)  
あわして下さいね 酒も 飲んで下されば いいし 歌に あわ

テ ウトトクレノ一ッテ。 (K ウン) ソノ アノ ウケワノ (121)  
して 歌って下さいねって(言た)。 その あの 家はね

コンダ コノ オミヤサンカ コー ココギッテ コー ホソイ  
今度は この 神社が(あるところ)こう 横ぎって こう 細い

ミチ ハイッテカナ アカノ一エ。 (K アーア) ホイデ マ  
道を入って行かなくてはいけいんですよ。 (ああ) それで まあ

ンナ ジェンブ (122) ヨダイ クルマデ イッタサカイ一 マー ハイ  
みんな 全部 四台の 車で 行つたから まあ 入

ッテ イッタニヤガ一。 (124) アレ ヨータンニヤ。 ホイタラ ウ  
て 行つたんだか。 あれは 酔つたんだ。 もしたら 私

ララ (K ウン) サンニヤ ヨーテモテ ウラ ドーシテ カ  
達 (三人は 酔つてしまって 私は どうして 帰

イル。 ナンカ ナニ ジドーシャ アルンデナシノ一。 (126)  
る(こゝか出来る)。 何か かに 自動車か あるのではないしねえ。

K ホヤ イマワル シドーシャデ<sup>(127)</sup> ナ オフルケドノー。<sup>(128)</sup> マエワ  
 そう 今はねえ 自動車で みんな 送るけれどもねえ。 以前は  
 ホンナ…… ( Y ムカシヤデノー<sup>(129)</sup> アルイテ ヤッパ カインナ  
 そんぱ…… ( 昔たからねえ ) 歩いて やはり 帰られた  
 シタンニャロテ<sup>(130)</sup>。 クルマ ヒッパッテ カイランナランゲノ )  
 んだろうから。 車を 引っぱって 帰らなくてはいけないですよ  
 ー。<sup>(131)</sup>  
 ねえ。

Y クルマ ムコーノ クルマ エッテキタンエ ニナ。  
 車は おこりの 車を 持って来たんだ みんな。

K アーア ホーケ。 アー ムカイニ オイデタンニャ。 ウーン。  
 ああ そうか。 ああ 迎えに いらしゃったの。

Y ホンテ ホレ コッチカラ ツンテ イッタンニエ。 ( <sup>K</sup>ウーン )  
 それで ほら こちから (荷物を) 積んで 行ったんだ。

イヤ オゾイコト ノータワノ。  
 いや ひどい目に 会いましたよ。

K デ ダエイブ ソコラジュー イッテナハルモノ。 ホイテ ウト  
 それで 大分 そこいら中へ 行ってらっしゃるものねえ。 そして 歌  
 テー……<sup>(132)</sup>  
 て……。

Y ホテ ナシヤモ キューサクノ<sup>(133)</sup> オッカチャン クルトキネ<sup>(134)</sup> ア  
 それで 何ですもの 久作の 母さんが 来る時に あ  
 リヤー アデ<sup>(135)</sup> シロサキテ<sup>(136)</sup> スズキサンテ<sup>(137)</sup> ウケトッテキタンヤテ  
 れは あれで 白山崎で 鈴木さんで 受けとってきたんだからね  
 ノ。 ソノトキラモ アノ カワカミノ<sup>(138)</sup> オツツァヤラ ンナ ア  
 え。 その時なども あの 川上の 親父や あ

ーユー トショリノ ジェン<sup>(139)</sup> ホソカワノ<sup>(140)</sup> アノトキモ アデ  
あ言う 年寄りの 糸田川のや。 あの時も あれで

コッチカラ ハチニン イッタンニャー<sup>(141)</sup> ( <sup>K</sup> アー ホーケノー<sup>(142)</sup> )  
こちらから 八人が 行ったんだ。 ( ああ そうかねえ )

ソレ ウラー ヤッパ シェントーヤ ワカイケド。 イチバン  
それも 私が やはり 先頭だ" 若いけれども。 一番

アンナトキネァ ワカイヤノ ンナモン。 ( <sup>K</sup> ワカイ ) ンナ  
あんな時には 若いでしょう そんなもの。 ( 若い ) みんな(おけ)

トショリバツカリニャー。 ( <sup>K</sup> ホージャ ホリヤ ワカイ ) ウラ  
年寄りばかりだ。 ( そうだ" それは 若い ) 私

ニ オッツァニ イケツタンニエ<sup>(143)</sup> ( <sup>K</sup> ウン ) オッツァ ア  
は 親父に 行けと言ったんだよ。 ( するよ ) 親父は 駄

カンノヤ オッツァワ サケ ノムト イッペン ウダクダ" ユー  
自分だ" 親父は 酒を 飲むと すぐに くどくど" 言う

サケ アカンノヤー モー アンチャン コナ アカンノヤーッテ  
から 駄目なんだ" もう 兄ちゃんか 来なくは 駄目なんだ"て

ミンナ ユーンニエ。 ( <sup>K</sup> ウーン ) イヤ ウラ ワカイモンガ  
みんなが 言うんだ。 ( いや 私(のような) 若い者が"

モ トショリジャカイツテ ユー。 ( <sup>K</sup> ワカイモノー<sup>(144)</sup> ) キュー  
お(おの人はみんな)年寄りに"からって 言う。 ( 若いものねえ ) 久作

サノ オッカサン キナシテカラ イクラ タツ ヨンジューナ  
の 母さんが (お家に) いらしてから 何年 たつ 四十何年に

ンネンタツ イマ ムスコガ シジューイツ ナッテンジャロテ<sup>(145)</sup>  
つよ 今(もう) 息子が 四十いくつに なってるんだ"ろうから。

( <sup>K</sup> ホヤ ホヤ ) <sup>(146)</sup> ウー。 ( <sup>K</sup> ホージャ ) ソンナトキネ ドー  
( そう そう ) ( そうです ) そんな時に 道

♪ モッテッテンニヤケ ヤッパ ダイブ マエカラ イッテルッ  
具を 持、て、い、っ、て、い、る、ん、だ、から やはり 大分 前から 行、て、る、と、言

チュコトガ ワカル。 ( <sup>(447)</sup> K ホーヤノー ) ホイデー <sup>(448)</sup> アントキラ  
うととか わかります。 ( そうに"ねえ" ) それで あの時は

モ ホンテ アンテ スズキサンテ ウタウトテ。 ホイデー ウタ  
ども それで あれて 鈴木さんで 歌を歌って。 だって 歌を

ウタワナ ワタサンチュサケ。 ( <sup>(449)</sup> ミンナ トショリノ ) オッツアラ  
歌わなくては (道具を) 渡さないと、言、う、か、ら。 みんな 年寄りの 親父ら

ウタエンノエ ウタイサラサンノエ。 (笑) ワカイモンガ……。  
歌えないんだ 歌いやからないんだよ。 若い者が……。

K ホソカフノ オンサンワ アホダラキョーヤッタンケノ。 ( <sup>(450)</sup> Y エ  
糸田川の おじさんは あほだら経 たらたのかね。 ) ( え

ー ) (笑)  
え )

Y アノ オッツァ マタ オモッシエコト ユーテワ……。 (笑)  
あの 親父は また 面白いことを 言、て、は、……。

アノ オッツァモ マタ アノ ドーグ テルマエネフノー ( <sup>(451)</sup> K  
あの 親父も また あの 道具の 出る前はねえ )

ウン ) オモッシエー ヒョータン <sup>(452)</sup> ダイテノー。 ( <sup>(452)</sup> K ウン )  
面白い 瓢箪を 出してねえ。 )

ドッカラ ヒョータン……。 ヤッパ カクイテ モッテッタンヤ  
ど、こ、か、ら 瓢箪 (出したのか)…。 やはり 隠して 持、て、い、た、ん、だ、

ノーアレ。 ( <sup>(453)</sup> K アーホーケ ) アホダラキョー ネーカッ  
ねえ あれは。 ( ああ そう ) あほだら経 は ないかと言、

ンエ <sup>(453)</sup> ホイトラ マタ クルマ テルノ オソナルゲノ ホンナ  
んだ。 そんなものあると また 車の 出るのが 遅くなるかね そんな

モン ( <sup>K</sup> ウー ン ) ナンカ ヒトイキショークッテ ユーテァ オ <sup>(54)</sup>  
もの ( ) 何とか ひと息入れようかって 言、ては あ

メー <sup>(55)</sup> モンク ユーンニャサケ。  
な、た 文句を 言、うんだから。

K ホソカワノ オジジワ <sup>(56)</sup> アーユー アホダラキョーオ ( <sup>Y</sup> アー )  
細川の 親父は ああいう あほだら経を ああ  
シューキョープレ <sup>(57)</sup> アルト アノ <sup>(58)</sup> ウトタワノ。 <sup>(59)</sup> ウー ン。  
祝儀ぐらい あると 歌、たよね。

Y ホイテ マー キューサクラノ ナンベンモ イッタノ。 ホンボ <sup>(60)</sup>  
そして まあ 又作の(祝儀には) 何回も 行、たね。 本保へ

モ イッタシノ ( <sup>K</sup> アー ホー ケ ) <sup>(61)</sup> ホンボイサ。 アレモ コ  
も 行、たしね ( ああ そう ) 本保へさ。 あれも 国

ワドーカラ モー オロイテ ( <sup>K</sup> アー ) クルマカラ オロイテ  
道の所から もう(荷物を)おろして ( ああ ) 車から おろして

ハイッテッタンニャ。 ( <sup>K</sup> アー ア ) ホリャ モー ニギヤカヤ  
入、て行、たんた。 ( ああ ) それけ もう にぎやか

ッダ。 <sup>(62)</sup> ( <sup>K</sup> アー ア ) <sup>(63)</sup> ホーニテ モ コテ ジョーサン イッテ  
たんた。 ( ああ ) それで もう これで たくさん(道具持ち)行、て

ルノ コテ。 <sup>(64)</sup> リャー ヤッパ ダイブ イッテルノ。  
るね これで。 これは やはり 大分 行、てるね

K ウー ン ダイブ ン ダイブ ン タイテ ー イッテ アノ イッテ ナ  
xxxxxxxxxxxxx 大分 大抵(家の道具持ちに) 行、てら、

<sup>(65)</sup>  
ハルヤロー。  
しゃるでしょう。

Y ダエイクサンカラ アノー <sup>(66)</sup> アワノ <sup>(67)</sup> イッタッタケノ アワノエ…。  
た、い、く、さん、から 粟野へ 行、た、の、で、した、の、ね 粟野へ

アワノ イッタ ヒトヲ シンナハランカ。  
栗野へ 行った 人は ござらないですか。

K アノ アワノデ<sup>(68)</sup>ネー……。 アワノデ<sup>(68)</sup>ネー……。  
あれは 栗野じゃない……。 栗野じゃない……。

Y アノ シラヤマノ アワノツチユートコ アルケノ ドコヤラ。  
あの 白山の 栗野と言う所 あるじゃないですか どこだったかに。

K マキデ<sup>(69)</sup>ネンケ<sup>(70)</sup>。 ( Y マキツチユンケナ ) ウニ。  
牧では ないですか。 ( 牧っていったかねえ ) ええ。

Y アノー コトハラ<sup>(71)</sup> アソコエ キテル コー ソーヤデノー。 (   
 勾当原の あそこへ 来ている 娘か ” そうですからねえ。 (

K ウン ) アノ アノトキモ ドークモチニ アッコ イッタ  
あの時も 道具持ちに あそこへ 行ったん

ニヤデノ。  
だからね。

注記

- (1) 酒屋へ杜氏に行くことが楽だととらえられているとは意外。  
 (2),(3) はともに [te:]。 (4) 「かなりの」の意。 (5) 聞きとれず。  
 (6) 「ラクナネン」の「ネン」は、関西で「あの人が」と言うのに「あの人もねん」と言うのと同じか。 (7) [i:˦wan˦o]  
 (8) なくは武生（或いは福井）、狭くは下中津原を言うか。 (9) [sabune˦˦˦i˦˦˦]。独特のイントネーション。 (10) [nae˦˦˦de˦˦˦no˦˦˦]  
 (11) は、きり聞こえず。お金を小さい金に両替することをここでは「こわす」と言うから、そのことか。 (12) (11) よりもややはっきり聞こえるが、意味はあいまい。 (13) 「グケ」は聞こえないようにも思う。意味は不明。 (14) [jappa˦˦˦]。 (15) 語尾は上昇調のイントネーション。「達者なら」の意。 (16) [no˦˦˦]。  
 (17) 「お出になる」の意。酒造組合から勤続20年の盃が出ることを言う。 (18) [de] (19) [ke] (20) [tokiə]。 (21) 「旦那」で「酒屋の主人」のこと。 (22) 「気張って」。 (23) [kōijā]  
 (24) 上昇調イントネーション。 [no˦˦˦]。 (25) [ju˦˦˦te˦˦˦]。独特のイントネーション。 (26) こう聞こえる。 (27) 「こそ」と聞こえるような気がする。 (28) [de˦˦˦]。 (29) 地名。前出。  
 (30) 地名。武生市白山地区（坂口地区の北西にある）。 (31) これは前の「甲斐城」を受けて言う。「海岸」あるいは「漁村」などに対して「浜」を使う。 (32) 地名。丹生郡越前町糠。甲斐城の北にある漁村。 (33) [toʃoriə]。 (34) 「ホント」の言い誤りか。  
 (35) 末尾の「サー」は少々せんざいな言い方。 (36) [ire:]  
 (37) 「コージ」の言い誤りか。 (38) [paŋa˦˦˦]。 (39) 「9千のタンク」をさす。「ソレ」 と 「ニ」 が かすかに 聞こえる。  
 (40) [de]。 (41) はっきりしないが、こう聞こえる。 (42) 擬態語。  
 (43) [wakaiʃuə]。 (44) 「どんは若も」の意。 (45) 山本氏の年に似合おめ行為を誉めて言う。 (46) 「けかをするといけなから」という気持ち。 (47) 末尾こう聞こえるがあいまい。



(48) この「コツ」は「カ」の意に近い。(49) [gettāi]. (50) [te:]と長音化。(51) すばやく登ることを言う擬態語。(52) 司会者加藤の家の天井(座敷の天井)を見て言う。(53) [morotajaɽ:]. (54) 酒のタンクのこと。(55) 酒屋のことを「倉」と呼ぶ。(56) このように聞こえる。(57) 擬態語。(58) 「テレビに映る」ということを「テレビにのる」という言い方をする。(59) 山本氏が酒屋で歌を歌っているのが、その春にテレビで放映されたらしい。(60) 酒の原料をタンクの中で混ぜるための櫂。(61) 「覚悟している」が文字通りの意味だが、ここでは、山本氏の歌に合わせて櫂を動かせるように「用意する」、「準備する」というような意であろう。(62) 「神々しい」であろうが、ここで使うには一般的な意味ではあまりに大げさすぎる。山本氏がカメラの前で歌っているその「立派さ」をこう表現したのだろう。(63) [ne] (64) 山本氏に尋ねる口調。(65) 末尾が上がる。(66) [iɽsakenoɽ:]. 独特のイントネーション。(67) [sakeɽ:]. (68) のど自慢のようなものか。(69) 「ビニ」の発音があいまい。(70) [kedoɽ:]. (71) 上昇調のイントネーション。(72) 倒置。(73) 「いやせんばことばないですよ」という口調。(74) [siton̄aɽ:]. (75) [siranjaroɽo]. (76) [renjaroɽ:]. (77) [darem̄oɽo]. (78) [utawarennoɽ:]. (79) 同じ村の人の名。(80) 「とても出来るわけがない」というような確信をこめた言い方をする場合、語尾に「トコトイ」をつけることがある。(81) 「節付け」の意か。(82) [ndeɽe]. (83) 人の名。家号でもある。(84) [noɽ:]. (85) [wakaidεɽ:]. (86) 長持歌を敬える。若い若に伝え残すこと。(87) 家号。(88) 地名。武生市当ヶ峰町。前出。(89) 「ツミカエテ」の言い誤りか。嫁ぎ先の村の道が狭いので、何か大きい車では入ることが出来ず、小さな大八車にでも積みかえたのだろう。(90) 家号。(91) 山本氏が長持歌を歌って行く。(92) 山本氏の家の家号。前出。(93) 「先になつて」の意。(94) 言いかけ。(95) 嫁入り先の家。(96) 「入るまでに」の意。(97) 口の中にこ

も、た発音。(98)これは「飲ませる」の誤りのようにも思う。  
 (99)こう聞こえるが、意味はは、きりしない。「ヒキヤラ」の「ヒ  
 キ」はもしかすると「引き出物」の「ヒキ」か。つまり、長持歌  
 を歌いながら嫁入りの一行が村に入ると、田にいた人達が何か「  
 引き出物」(といっても茶碗酒かするめのようなもの)をもらお  
 うと寄ってくるという意ではと想像する。(100)こう聞こえるが  
 意味はわからず。(101)特に意味はない。(102)[nondε]。  
 (103)長持歌が1つのごちそうだと言うこと。(104)長持歌を歌っ  
 ている山本氏の後の若が(言えない)。(105)「前へ進む」意。  
 (106)家号。(107)ここで話が急転する。(108)[h'ide]。(109)  
 家号。(110)。(109)の家の人の名。(111)家号。前出。(112)道具  
 持ちで行った時に(いた)。(113)ここで少し話が変わるが、こ  
 こまでは後の「アンナトッカラ〜」に続く。(114)大虫へ嫁に行  
 ったという人をさすか。(115)['na:]。(116)「随分以前から  
 行ってますよわえ」という気持ち。(117)地名。武生市大虫地区。  
 (118)[noni:']。(119)[i:ne]。このあたり、いかにもめきれた  
 という口調。(120)[utane]。(121)代名詞。(122)同意のことば  
 で言い直す。(123)[ittasakā:'ε]。(124)[jana:']。(125)  
 [sannin'ε]。(126)特に意味はない。(127)[sade'ε]。(128)  
 [kedono:]。(129)。(131)とともに上昇調のイントネーション。  
 (130)[de'ε]。(132)[utote:']。(133)家号。前出。(134)[ne]  
 (135)地名。武生市白崎町。(136)人の名。「ススキ」に近く聞こえ  
 る。(137)「嫁入り道具」を受け取って来た。(138)家号で  
 あり、かつその家の苗字でもある。(139)言いかけ。(140)屋  
 号でかつ苗字。(141)道具持ちに行った。[ittanja:']。  
 (142)[ho:'keno:']。独特のイントネーション。(143)末尾あいま  
 い。(144)[wakaimono:]。(145)このあたり早口。(146)[w:]。  
 相手に「そうだろう」と同意を求める調子。(147)[ho:'jano:']  
 (148)[hoide:']。(149)年寄り達への軽蔑のこもった表現。(150)  
 「あほだら経」とはどういうのと言うのか不明。何か念仏のよう

なものか。(151) [noʔː]. (152) [noʔː]. (153) - 応訳したか、  
意味は、ぎりせず。(154) [ju:tɛ]. (155) 「苦情」の意。  
(156) [ozigiwaʔː]. (157) [arutoʔː]. (158) [nō]. (159) 自己  
のうはずき。(160) 地名。武生市本保町。(161) [honboisa].  
(162) [jattʰa]. (163) 発音あいまい。(164) [korjaː]. (165) [ha  
rujaroʔː]. 独特のイントネーション。(166) 地名。武生市粟野  
町。(167) [nō]. 加藤氏に尋ねるよう。(168) 考えながら、  
小さい声で言う。(169) 地名。武生市牧町。上の粟野町と同じ白  
山地区にある。(170) [nɛnʔkɛ]. (171) 地名。武生市勾当原町。  
坂口地区内。前出。

II. 京都府<sup>あや</sup>綾部<sup>べ</sup>市<sup>たか</sup>高槻<sup>つき</sup>町<sup>ちやう</sup>字<sup>かんの</sup>観音<sup>のん</sup>堂<sup>どう</sup>・<sup>まくら</sup>桜

収録・文字化担当者 佐 藤 虎 男

## A 収録地点とその方言について

### 1 地点名

京都府綾部市高槻町字観音堂・桜

### 2 収録地点の概観

高槻町は、綾部市々街区から北々東へ約12kmのところにある。農村である。交通は不便で、国鉄の舞鶴線の「梅迫」(うめざこ)駅から車で入る。昭和25年に、綾部市に編入されるまでは、東八田村(ヒガシヤツタムラ、約200戸)に属していた。現在58戸、約240人の集落をなす。今回の収録地点は、この高槻町の桜と観音堂の二つの小字である。一本の道路でつながっていて、両字は言語上なんらの区別を要しないと見られる。

宗教は、真言・禅宗が多く、旧東八田村全体で六か寺ある。産業は農産物、とくに大根が高槻大根の名で通っているという。

### 3 収録した方言の特色

#### (一) 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

奥村三雄氏『近畿方言の統合的研究』によれば、当該方言は、奥丹波言葉とされる。地理上の名が、そのまま方言区画をあらわす名とされている。概略は、やはりそのとおりであろう。奥丹後方言に直接してはいないものの、沓形丹後弁に間近な地の方言だけに、丹後弁によく続くような、合自然と思われる方言状態を呈している。その具体相は、以下に述べる当該方言要記のうえにうかがうことができよう。

#### (二) 音韻上の特色

##### 《モーラ表》

|     |    |    |    |    |     |     |     |
|-----|----|----|----|----|-----|-----|-----|
| ア   | イ  | ウ  | エ  | オ  | ヤ   | ユ   | ヨ   |
| /a  | 'i | 'u | 'e | 'o | 'ja | 'ju | 'jo |
| カ   | キ  | ク  | ケ  | コ  | カ   | ク   | コ   |
| /ka | ki | ku | ke | ko | kja | kju | kjo |
| ガ   | ギ  | グ  | ゲ  | ゴ  | ガ   | グ   | ゴ   |
| /ga | gi | gu | ge | go | gja | gju | gjo |

サ シ ス セ ソ シャ シュ ショ  
/sa si su se so sja sju sjo /

ザ ジ ズ ゼ ゾ ジャ ジュ ジョ  
/za zi zu ze zo zja zju zjo /

ツァ チ ヅ ツェ ヅャ チュ チョ チェ  
/ca ci cu ce co cja cju cjo cje /

タ テ ト  
/ta te to /

ダ デ ド  
/da de do /

ナ ニ ヌ ネ ノ ニャ ニュ ニョ  
/na ni nu ne no nja nju njo /

ハ ヒ フ ヘ ホ ヒャ ヒュ ヒョ  
/ha hi hu he ho hja hju hjo /

バ ビ ブ ベ ボ ビャ ビュ ビョ  
/ba bi bu be bo bja bju bjo /

パ ピ プ ペ ポ ピャ ピュ ピョ  
/pa pi pu pe po pja pju pjo /

マ ミ ム メ モ ミャ ミュ ミョ  
/ma mi mu me mo mja mju mjo /

ラ リ ル レ ロ リャ リュ リョ  
/ra ri ru re ro rja rju rjo /

ワ  
/wa /

ン  
/N /

ッ  
/Q /

-  
/R /

## 《発音上の特色》

### ① [g]と[r]

前接音節に連続して現われる /gV/ は、主に老年層において、[r-]となることが多い。人によって、また場合によって、[r-]が現われないこともあり、どういう場合とこのを明確に言うことが困難でもある。要するに法則的でない。であるから、[r]の音価も、文字通りの[r]から[g]にむしろ近いかと思われるものまで幅広く認められるように思う。

### ② [r] < [d]

○…… コドモア モロツタラ……(子供が戻ったら)  
のようなのが開かれたが、多くはないようである。

### ③ [d] < [z]

これも多くはないが、スガワラノ ミチダネヤ ナイ……」のようなのが開かれた。

### ④ [h] < [s]

「ヒサカハン」(久子さん)と言い、「アラハソ」(ありほし)と言い、「ホイテ」(そして)と言うなど、これらはかなり盛んであるが、特定語句のうえにのみ現われ、一般法則的ではない。なお、「ス」を「フ」に言うことはまずないし、「シ」が「ヒ」となることも少ない。「シヤナイトモタンデヒョカイト。」(しやがないと思っただんぞ(ようかほ。))のようにある一方で、「シト」(人)、「シトツ」(一つ)のように言うことが通常とされる。

### ⑤ 母音

無声化とは対立的な発音傾向にある。

「メージデス カ。(明治ですか。)」における「ス」の母音は、明瞭な丸口の[u]であって、「ス」は前後の音節と完全に張りあう一音節であった。

### ⑥ [ai] 連母音

相互同化しない。一般に[i]母音は変化しにくいようである。ただし、たとえば下例のように、[aɛ]のような発音が、ときどき聞かれ

るのは、注意すべきである。[oŋaɛ](小貝<地名>), [oaesən](おあいさん<人名>), [—sakaɛde](～さかいで)

#### ⑦ [oi] 連母音

相互同化しない。「良い」も「ヨイ」である。「エー」もかなりよく聞かれるが、「ヨイ」が落ち着きのよい言い方である。

#### ⑧ 長呼

「チー」(血)、「ミー」(実)、「ケー」(ケ)のように、共通語で一音節に言うのを長呼する。「グーミ」(ぐみ<植物名>)は単純な長呼とはな(がたいか)。

#### ⑨ 短呼

「ワロタ」(笑うた)、「モロタ」(貰うた)のような短呼が優勢である。「ゾリ」(草履)のような短呼は、まれである。

○カキ(柿)オ ヨー クタ モンジャ ケード……。 (老男)

のようなのは、促音の脱落ではあるが、音効果としては、長母音の短呼と似ていよう。

#### 《アクセント》

京阪アクセントとは異なるアクセントが現われて注目される。二音節語のアクセントについてみるのに、たとえば、自然な会話の中に、

チチニ (父に)、カタデ (肩で)、ワラデ (藁で)、ゲタワ (下駄は)、コマワ (独楽は)、エキエ (駅へ)

カフミタイニ (皮)、ヒルモ (蛭も)、タビハイテ (足袋)、イマ (今)  
アル (有る)、ナル (成る)、キル (切る)、マク (播く)。

のようなのが聞かれる。奥村氏が「垂井式」とされるのは、このような事象をおさえてのことと思われる。

ところで、このようなアクセントの行なわれる反面、たとえば、

イマノワ (今のほ)、アツタンジャ。

のようなのが、現実形として現われもするのである。ここには、当六言のアクセントの単純でない事情がうかがわれる。

当該六言を特色づける有カキ一面は、アクセントであろう。そして、それは、語のアクセントのみならず、文アクセントにも言いうること



である。文アクセント上の特色傾向として、さしあたり次の三項があげられよう。

① 後上がり調その一（上昇調子）

たとえば

○ソーデス。 (そうですよ。)

○ジョーズニシタアリマシター。 (上手に(して)ありましたよ。)

○ボーシカブリヨッタ。キモノキテ。 (帽子かぶってた。～着ては。)

のように、文末を尻上がりに言い収める。この上昇調子は、あたかも、文末詞を用いて訴えたかのような表現効果を發揮する。頻用される。

これが、文末詞の上にも実現して、(きりに

○-----ハクセンカ°ハイッテナー。 (白線がはいってねえ。)

○イソカシーラシーデナーア。 (忙しいらしいからねえ。)

のような訴え方を見せる。

② 後上がり調その二（後オ卓立）

多く文末詞「ナ」でしめくくる文において、たとえば、

○タカツキデスカナ。 (ほら、高槻(じゃ)ないですか。ね。)

○マイニチオロシテモロテンデスンヤナ。 (毎日下ろしてもらわれるんですよね。)

○ソメモンヤカ°アツタンニヤナ。 (染物屋があつたんだよね。)

のように、「ナ」の直前の一音節だけが卓立する、有力な型がある。

○ソエダケノコリマスワナ。 (それだけ記憶に残りますわ。)

○オジゾーサンイツレテマイッテモライマシタナ。

こういうのもまた、問題のところで卓立して急下降する型とされる。

あいさつことばに、

○コンニチワ。(初老女→中男) <中男にこたえて>

とあるのも、同じ文アクセント傾向にのっとったものとみなされよう。

○ワタシノショーカッコーワアツチデスワナ。

では、この後オ卓立の型が一文中に二回おこなっている。

③ 連続高平調

上記例「オジゾーサンイ ～」のような 高音の平らに連続する文  
アクセント傾向もまたつよい。

○ ゴムノ ナカクツカ アル ワナー。

○ ナー。 オーイニ アルヤロ。

○ …… チョード ノーカッコーエ イットル ……。

など、随所に現われる。語の上に認められた注目型○○は、この文ア  
クセント連続高平調と なんらかの関連を有するのであろう。

### (三) 文法上の特色

#### ① 文末詞法

感声的文末詞としては、「ナー」「ノー」「ヤ」「エー」、非感 的文末詞  
には、「カ」「カイ」「コ」、転成文末詞としては、「ワ」「ワナ」「カナ」「ン」  
「デ」「モン」その他がある。

「ナー」は、なかでも、当方言生活の柱とみられる、要の文末詞  
である。これを使っているかざり安んじて物が言えるといった風の、  
程のよい品位を保持する。「ナー」「ナ<sup>↑</sup>」「ナ<sup>↑</sup>ア」「おま<sup>↑</sup>び」「……ナ<sup>↑</sup>」  
の四種の声調が認められる。

「ノー」は、外来者に対するような公的や物言いに使う。

「ヤ」は、「イケヤ。」のような勸励の表現にあらわれた。

「エ」は、たとえば次のように用いられる。

○ ジョー ブカ シランカ エー。(又天かしうまいがねえ。)

○ …… コレオ キトリマスガ エ。(これを着ていませうがね。)

助詞「ガ」のあとに立つのを常とする。

「カ」「カイ」「コ」

問いかたに諸相がある。「カ」の対応品位は幅広い。親しい問いにも  
ていねいな問いにも「カ」を働かせる。「カイ」は、親愛の情をもって問  
う文末詞である。「カイノー」という複合形も多用される。「コ」は、夫  
が妻に、姑が嫁に、というような、身内の目下に対する、ごくくだけ  
た問いこまげになっている。

○ ホンデモ ニカツ ノー オワリ ゴロヤッタ コ。(老男→妻)

「ワ」も盛んに用いられるものである。男よりも女に多い。「ワナ」複

合形も多用される。

「デ」もまた優勢な文末詞である。告知の文表現をつくる。

○ハヤカッタ デ。(早かったよ。)

## ② 敬讓法

もっとも注目されるのは、「て」敬語法である。

○ホンマー ソー ユーチャッタラ ソーカモ シレン。

ほんとに そう おっしゃれば そうかも しれない。

○ヒトツキヤ ソコラデ イッテー シト アレヘン。

一月程度(の交際で嫁に)行かれる人ってありゃしない。

助詞「て」を「じゃ」「や」「です」「の」などで受けて成り立つ敬語法であって、敬と親とを兼ねてあらわす日常的敬讓法である。対者をも他者をもこれで対遇する。共通語の「れる・られる」に言いかえては大げさすぎるが、常態では決してないという、独得の待遇感情をよく表現するのである。男女ともよく用いる。

命令・勸奨の表現には、下記のような「～ナハレ。」「～ナハイ」がある。

○コエ ムイドクナハレ。(これむいて食べて下さい。)

○モット ザックバラシニ カンガエテ ミタイ T。

## ③ 係結法

係結法の固定化したすがたが、なお次のように認められる。

○ジョーズヤ ナシニ ネ→。ソレヤッタラ コサレデス→。

お世辞じゃなしにねえ。それ(まじめ)だったればこそですわ。

○コッチワ シランデ コソアレ-----。

こちらは 知らずにいるけれど-----。

## ④ サ行イ音便法

○ナカグツ ホカイテ ハイタ -----。

○スズメノ スーヲ サカイタリ -----。

## ⑤ 断定表現法

「ジャ」がかかりよく聞かれる。同じ人の発言中に、ジャとヤとが並び用いられることもある。

○ヨイ ウチジャ。(いいお家なんだよ。)

○ソージャ　ナ。(そうだよな。)

④ 接続表現法 (接続助詞法)

a. 第一に、「ナリ」が注目される。

○ケド　マー　センソーチューナリ　アノー　ドエライ　オマエト  
フタリデ　アッテ　イキ　コッテ　イキー　シタ　コトモ  
ナカッタ　ノー。ホンデモ　アッテエ　イコニモ　キシヤノ  
キップモ　カエンナリ　-----。(老男→妻)

もともとが断定助動詞「ナリ」の中止形であろう。それが、ここでは、「であり、したがって」のような接続機能を果たしている。並立助詞風の。

○----　オナゴワ　オナゴラシー　ハカマナリ　オトコワ　フクナリ  
デ　シタンマ。

のようなものもあるが、これとて、その並立表現とほ趣を異にして  
いる。(一般の並立助詞「ナリ」には、いずれかを選択するの余意があ  
ると言われている。)

b. 「デ」

これがかなりよく聞かれる。「スクナイデ」(少ないから)、「アル  
デ」(あるから)など、その例は多い。

c. 「サカイデ」「サカエデ」「サカイ」「ハカエ」

○　マエワ　カタデ　モチヨッタサカエデ　イネモチスルンデモ  
ナニ　スルンデモ　ヤッタリ　-----。

のように、「サカイデ」「サカエデ」がよく行なわれる。

d. 「ケード」「ケン」

逆接続法には、「ケード」が多い。もっとも、文中に立つよりも、  
これが文末に立って、それで文が中止する場合が多い。

○----　ハデナ　シナフク　キタリナンカイ　スルケード。

文末詞「テ」の下接するときには、

○----　ソラ　ユワン　ナンケン　テ<sup>↑</sup>。(そりゃ言わねえやらん  
けどな。)

のように言うことが多い。

## ① 叙述態の表現法

継続態は「～トル」が用いられる。

「～ヨル」は、回想継続態とも言うべき表現法である。

○クツ ハキヨッチャツタヤロ。(靴をほいておいでだ、たでしよ)

## ② 禁止の表現法

一段活用動詞を活用して禁止の表現をすると、たとえば

○---- クチナワン ナルデ タバタ ヨ ユータ ----。

のように言う。「タバタ」でない点に注目される。

## ③ 形容動詞活用

○ジブンワ ケンコー ナシ。(自分は健康だし。)

連体形と同じ形が終止形になっている点に注目される。

## ④ あいさつとほ

「今日は。」を「コンニチワ。」(女はよく「コンチモ。」)という。

「今晚は。」は「バンテリマシタ。」「コンバンワ。」である。

○キゲンヨー モータ カイ。ヨイ ヨイ。

これは、息子夫婦が戻ったのを迎えての、老母の「おかえり。」のあいさつである。「ヨイ ヨイ。」は、「よかったよかった。」の意。)

## (四) その他

《地点選定の理由、協力者について》

京都府の方言を考えると、その代表をといえ、京都市の方言がまず考えられる。50年度の報告は、京都市郊外の一地点の方言をとりあげたものであった。京都市については、奥丹後の方言をとりあげたいし、またその中間の丹波をもとりあげたい。さしあたり51年度には丹波を、52年度には奥丹後を調査報告しようと考えた。ちょうど綾部市生まれで当市に現住する知人がいるので、丹波方言調査には便宜を与えられるであろう。

その知人とは、現綾部高校教頭、渋谷計二代である。事前準備から事後の聞き取りに至るまで、誠実親切な協力をいただいた。また、観音堂での調査では、収録話者でもある山室二郎代に、格別のお世話になった。幾度も事後の質問に、懇ろに指導下さった。ご家族あげ

てのジ親切をいただき、帰りにはジ子息に車で送っていただきなごした。

桜での話者渡辺信一代は、篤実の人であって、多忙の中、長時間積極的にお話し下さった。帰りにはりっぱな生椎茸をたくさんいただいて恐縮した。

## B 表記について

研究所指定の符号以外に、本報告書には、次のような符号を用いた。

(例)  $\overset{\textcircled{2}}{\text{—}} \overset{\textcircled{1}}{\text{—}} \overset{\textcircled{2}}{\text{—}} \overset{\textcircled{2}}{\text{—}}$   
○ドコイ イコトモ オモタ コト -----

○マ  $\overset{\textcircled{2}}{\text{—}}$  ハシリ、 $\overset{\textcircled{4}}{\text{—}}$  ハシルノカ、 $\overset{\textcircled{3}}{\text{V}}$  アー -----

○-----  $\overset{\textcircled{4}}{\text{—}}$  テーニモ  $\overset{\textcircled{4}}{\text{—}}$  ヒツツクシ -----

○-----  $\overset{\textcircled{5}}{\text{—}}$  シラセルヨーナ  $\overset{\textcircled{5}}{\text{—}}$  コトヤ -----

上例を用いて以下説明する。①～⑤は、説明のための指示か所。

### a. アクセント表記

アクセント記号を施した。自然な現実形を、簡約な高低二段の抑揚相として表示したのである。施線部が高音である。

なお、上例の①のように、施線が途切れているのは、後方の高音部位(「ト」)が、前の高音部位(「～コ」)よりも、さらに一段高いことを表わす。(この点からすれば、結果として三段階を表記し分けていることになる。)

### b. 呼吸段落の表示

呼吸段落—「音声のとぎれによってその前後を限られ、その中間にはとぎれを含まない音声連続を呼吸段落という。」(服部四郎氏『音声学』)—は、必ずしも文法構造に即応するとは限らない。むしろ構造を越えて自在奔放である。観察的立場からは、その呼吸段落の判定に困難をおぼえることがしばしばである。しかしながら、全体として見た場合、一気に発音された部分、いくらか区切りかげんに発音された部分、あるいは、思考を整理するためにしばらく休止する部分などの、おおよその判断はできる。そのかがそのような状態を呈するのであるから、その状態をできるだけ表示することが望ましかろう。

そこで、話部(文節相当)と話部との間(ま)の長短を判断し、比較

的短い場合、すなわちほとんど間を置かず(一息に言い続けられている)場合に「へ」印で連結し(㊸のところがそれ)、比較的間の長い場合、すなわち明らかに声を切って一休みしていると認められる場合には「V」印を記入(㊹のところがそれ)した。そして両者のほぼ中間と認められる場合には無記号(㊺のところ)とした。

これによれば、明らかに呼吸段落は、無記号ないし「V」印で区切られる一個ないし二個以上の話部連続(二個以上の場合は「へ」印で連結されている)ということになる。

### c. 母音の長呼・半長呼の表記

長呼一拍分(一の記号)には及ばないやや長めの発音は音韻論的には重要な意味を持たないと考えられるが、現実形尊重の精神を貫いて、これをまた、できるだけ表記したい。長音符号の半分の線分でこれを示した。(㊻のところ)がそれ)

### d. 応答文などの表記

「アー」「エー」「エン」「ウン」「フン」「ホン」「ウー」「ヘー」などの発音は微妙で表記がむづかしい。これらを精密な音声記号に表記し分けることには、それほど重要な意味はなからうと考え、いちいち注記していかない。類型化し典型化したのカタ表記だけに止めた。



## C 収録内容の概説

1. タイトル 1. 黒谷の紙すき
2. 録音年月日 1976年(昭和51年)2月22日
3. 録音場所 綾部市高槻町宇観音堂 山室二郎氏宅
4. 話し手  
A 山室二郎氏 男 明治31年生まれ 農業  
長く村役場に勤め、助役を勤めた。  
B 山室富江氏 女 明治41年生まれ 農業  
二郎氏の妻。隣接上杉町から嫁入り。  
C 坂本アイ氏 女 明治27年生まれ 農業  
D 坂本ヨシノ氏 女 明治36年生まれ 農業  
アイさん宅と親戚関係。

### 5. 録音環境、録音状況

同席者佐藤。録音環境良好。土地人同士の会話をと願いつつ、結果は佐藤がしゃべりすぎた。富江さんは話好きで、話しぶりも魅力的。声も若々しい。坂本アイさんは、歯が抜けて、発音しにくそうなところがある。最年長のおばあさんである。ヨシノさんは、発言が比較的少なかった。声もどちらかといえど低くつつましい。山室二郎氏は、一座のとりまわしを念頭に、外来者である佐藤への解説者的役割を果たされた。

1. タイトル 2. こどものころの衣服
- 2, 3, 4, 5 は 「1. 黒谷の紙すき」に同じ

1. タイトル 3. 小学校とこどもの遊び
- 2, 3, 4 は 1, 2に同じ
- 5 録音環境

途中、B氏が、孫が泣いているのに気付いて退席。他は変わらない。

1. タイトル      4. こどものおやつ
- 2, 3, 4 は      1, 2, 3 に同じ
5. 録音環境

B代は、孫を抱いて話している。途中に、外出から帰った嫁の梢さんがお茶を運んで来る。Fとする。F代は舞鶴出身である。

-----

1. タイトル      5. こどものころ
2. 録音年月日      1976年(昭和51年)2月20日
3. 録音場所      綾部市高槻町字桜 渡辺信一代宅
4. 話し手      A 渡辺信一代 男、明治43年生まれ、農業兼大工  
B 渡辺久子代 女 大正7年生まれ 農業

渡辺信一代は、軍隊は別として外住歴なく純粋の土地人。

渡辺久子代は、信一代の夫人。ただし、福知山から嫁がれた方で、純粋の土地人ではない。早口で聞きとりにくいところが多い。

司会者渋谷訂二代は、土地人であるが、年齢が48才。信一代と従兄弟の間柄

上記のゴとくであるから、純粋の土地っ子で老年層といえは信一代だけであるが、上記のような夫婦の対話もまた、具体的な農村家庭の言語生活の一相として貴重と考えられるので、ここに収録文字化することとした。

#### 5. 録音環境・録音状況

同席者佐藤は、できるだけうなずいて聞くだけにした。司会者の努力で、かなりうちとけた話になったと思うが、それでも同席者がいなければもっと自由になろうかとも思われた。久子夫人は、お孫さんを守りしなから時々移動されるので、声が遠くて聞きとりにくい部分がある。お孫さんのアーアーという声で話声が消されるところもある。

1. タイトル      6. 家族のこと  
2, 3, 4, 5 は 「5. 子どものころ」に同じ

1. タイトル      7. 結婚当時のこと  
2, 3, 4, 5 は      5, 6 に同じ

1. タイトル      8. 祭りの日のこと  
2, 3, 4 は      5, 6, 7 に同じ  
5. 録音還境

担当者佐藤は退席し、渡辺氏夫妻と渋谷氏だけで話してもらった。  
その他の状況は、前に同じ。

1. タイトル      9. 農家の主婦の苦しみ楽しみ  
2, 3, 4, 5 は 「8. 祭りの日のこと」に同じ

# 1. 黒谷の紙すき

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)             |
|------|-------|-----|------------------|
| A    | 山室二郎  | 男   | 明治31年生まれ <司会役>   |
| B    | 山室富江  | 女   | 明治41年生まれ         |
| C    | 坂本アイ  | 女   | 明治27年生まれ         |
| D    | 坂本ヨシノ | 女   | 明治36年生まれ         |
| (E)  | 佐藤虎男  | 男   | 大正15年生まれ <同席担当者> |

A ソーユー コト ユヨー タ デ。

そういう こと 言っていたよ。

B セヤケドー アノ オヨギワ トモカク アノー クロタニット  
 だけど あの 於与岐は ともかく あの 黒谷と

ユー トコワ エ アノ チカイ シンルイガ ナー。ヨケ アル  
 いう 所は あの 近い 親類が ねえ。た〜さんある

デ チートワ ソノ ケーコーガ アル デ。

から ずいとは その 傾向が あるよ。

C ソーデス。

そうですね。

B ナーア。ナー。

ねえ。ねえ。

C へー。ソラ アリマス。

はい。そりゃ ありますよ。

B ナー。オーイニ アルヤロ。  
ねえ。おいしい あるでしょ。

C ハー。アリマステ。  
ほあ。ありますから。

A ソラー チカイー (B ハー。) ナニヤラヤデヤナイ、ソノ ヨソ  
それは、近い (ほあ。) 親類だからではない。その、他所  
トノ ツケヤイガ スクナイデ ソーユー コトバガ ソノ ママ  
との つきあいが すぐないから、そういう ことばが その まま  
ノコルンノヤ。  
残るんだ。

B ラン ソレモヤシ-----。  
ふん。それもだし-----。

A ハイ。ヨソト ツケヤイ スルト ドーシテモ ヨソノ コトバオ  
はい。よそと つきあい すると どうしても よその ことばを  
ナロテ クデ ヨソノ コトバト イッショニ アッテ シマウ  
ならってくるから よその ことばと いっしょに ちって しまう  
ケードモ (C アー、ソーデス。) クロタニ ヤシロワ ソレガ  
けれども (ああ、そうですね。) 黒谷 ハ代は それが  
スクナイデー ドーシテモ ソノー  
すぐないから どうしても その-

C アノー キンシンケツコンカ<sup>(1)</sup> オーイサカイ ナー。 (A エーエー)  
あのう 近親結婚が 多いから ねえ。 (ええ、ええ。)  
ホンデ<sup>(1)</sup>  
それで

B アーエ<sup>(2)</sup> ワタシラ コドモン トツカラ ナー。 エンソクカテラ<sup>(2)</sup>  
あれ。わたしら 子どもの 時から ねえ。 遠足ついでに

イッテ、<sup>(E)</sup> へー。 ) <sup>xxx</sup> ミナ <sup>(3)</sup> ココニ、コノ <sup>(4)</sup> オバサン ウマ  
 行って はい。 みな ニニ、この おばさん 生ま  
レラレタ シト、コノ <sup>(5)</sup> オカタモ。 ワタシモ、ワタシワ マー コ  
 れられた 人、この おかたも。 わたしも、わたしは まあ  
ノ ココニ <sup>(6)</sup> ウマレタンヤ ナイ、ソコカラ キタンデスケド ミ  
<sup>xxx</sup> ニニ 生まれたんじや ない、ケンから 来たんですけど み  
ナ ココニ ウマレタ モンヤデ クロタニ エンソクニ イッ  
タ ニニ 生まれた ものだから 黒谷へ 遠足に 行っ  
テ コーシテ シテーワ、デ <sup>(7)</sup> シャンシャント コー シテ <sup>(8)</sup> ナー。  
て、この ふう に して、で、しゃんしゃんと こう して、はえ。  
<sup>(D)</sup> ア、ソヤ ナー。 ) シナ ハツテユツテテ シュツシュツ  
<sup>(あ</sup> あ、そうですね はえ。 ) それは もう、ほっちやっ という わけで、しゃっしゃっ  
シュツ テイントイデ <sup>(9)</sup> ナー。 <sup>(C)</sup> ラン。 ) ヘーン、ワタシラ  
しゃっ は ぶん。 ) はい。 わたしは  
イケヘンデ ナー、シナイケード ナー。(笑)

(そのふう)に) いかざいからはえ。 それは ないけれど はえ。

A ソデ スーツ テユユ モンデー ソノ トロトロノ アノ ザイ  
 それで 簞 という 物で その とろとろの あの 材  
リョー、ゲンリョーノ トロケター ナカエ ツケテ ホシテ コー  
料、原料の とろけた 中へ 漬けて そして この  
シテ アノ スキアケル シテス ワ、ソレオ スイタ カミカ  
ふう に あの すきあげる んですよ。 それを すいた 紙が  
スト マトモナ オンナジ チョーシデ アカッテ クル -----  
まともな 同じ 調子で あがって くる

E ソラ ムツカシ デショー ナー。  
 それは むっかしい でしょう はえ。

A ホデー テーノ コツダケナンデス ナー。  
それで きの ンツだけなんです ねえ。

E ナルホドー。 オンナノ シゴトデショー。  
なるほど。 女の 仕事でしょう。

A ウン、 オンナノ シゴトデス。 ソレガ ソノ ジュ ニサンカラ  
うん、 女の 仕事ですよ。 それが きのう 十二、三から  
ソレオ オボエナ ダラー エ トシガ モ ハタチニモ  
それを おぼえなかったら ああ 年が もう 二十にも  
ナツテカラ ヨメニ キテカラ オボエルツ チュ コトワ デ  
なつてから 嫁に 来てから おぼえる という ンとは だ  
キソチ ユーヨナ トコデ ムカシカラ キンシンケツコンカ オ  
きないと いうような ところで、 昔から 逆親 結婚が 多  
インデス ナー。 ンデ ソノ (E アー。) トコニ ウマレタ  
いんです ねえ。 それで きの ああなるほど) ところに 生まれた  
シトガ ソノ ブラクエ ケツコンスルツテ ユーヨナ (E ナル  
人が きの 部落へ 結婚すると いうような なる  
ホドー。 ) ジョ タイニ ナツトル トコナンデ タショ ソノ  
ほど) 状態に なっている 所なので 多少 きの  
ホ ゲンテキニ ソーユ トコガ ノコツトルンデスケン ナー。  
方言的に そういう ところが 残っているんですけど ねえ。

E ア ソーデス ネー。  
ああ、 そうです ねえ。

A ヨソトノ ツケヤイガ スクナイモンヤデ。  
よそとの つきあいが すくないものだからね。

E スクナイカラ。 (A エー。) チョ ード イ トコロ エ。 ソ ー  
すくないから(ですか)。 ええ。 ちょうど いい 所へ(来た)。)

ユー トコロカ イー。(笑)

そういう所が いいです。

C ホンマニ。(A ホイデ アノ----) ワタシモ ソンナ オモトツ  
ほんまに。 それで あのう--- わたしも そのように 思って

タンデス。 チョード アソコヤッタラ ヨイヤロケードツ チュー  
いたんですよ。 ちょうど あそこだったら よいだろうけれどと いうて

テ (E ハー。) ユートツタンデスケン ナー。  
はあ。 言っていたんですけどねえ。

E アッ、ソレワ クロタニテ ユー トコロデ。  
ああ、それは 黒谷と いう 所なんですな。

A ハー。ソーデス。  
はい。そうですね。

E ココジャ ナイ ワケ。  
ンジャ ない わけ(ですか)。

A エー。ココヤ ナイデス。  
ええ。ンジャ ないですよ。

E ドレクライ ハナレトルンデス。  
どれくらい 離れているんですか。

B エー、チョットデス ワ。  
ええ。ちょっとですわ。

A ソース ネー。 ジューヒチハツ チョー ハナレトリマスデス。  
そうですねえ。 十七、八丁 離れておりますですよ。

E ハー。  
はあ。

A オナジ コノ ヒガシヤタノ ムラウチナンデスケン ナー。  
同じ この 東八田の 村内 なんですけどねえ。



E ホー。 ココワ サクラテ ユーンデシヨ。  
ほう。 ンは 「桜」と言うんでしょ。

A イーエ。 ココワー タカツキ。  
いいえ。 ンは 「高槻」。

B タカツキ。  
高槻

E アッ。 ココワ タカツキデス カ。  
あ。 ンは 高槻ですか。

B タカツキデス カナ。 コノ キヘンノ。  
「高槻」さんですよ。 この 木扁の。

E キヘンノ ツキ。  
木扁の 槻。

B イー。 アノ タカツキシカ アリマシヤロ。 オーサカニ。 (E イー。  
ええ。 あの 高槻市が ありますでしょう。 大阪に。 ええ。  
イー。) アレト オンナシ タカツキチョーデス ン。  
ええ。 ) あれと 同じ 高槻町です の。

E ナルホドー。 (B ハー。) イー。 ソーデス カー。  
なるほど。 そうですか。 そうですか。

B アンタ。 オチャカ サメル。 ヨバレテ。  
あなた。 お茶が さめるわ。 召しあがって (ちょうだい)。

C イー。 ヨバレマス ワ。  
はい。 いただきますわ。

## 注記

- (1) Cの発言、重複して聞かれず。
- (2) Bは、外来者に対して、ときどき、この「ネー」を使う。
- (3) 言いつし。
- (4) Cを指してこう言った。
- (5) Dを指してこう言った。このあたり、言い急いで文辞整わず。
- (6) 上杉町は高槻町の東方にある。その方を指して。
- (7) 「それで」というほどの意。
- (8) 手振りをしながら。
- (9) 「テイントイデ」の意味詳。「ちんと置いて」か？

## 2. こどものころの衣服

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)             |
|------|-------|-----|------------------|
| A    | 山室二郎  | 男   | 明治31年生まれ <司会役>   |
| B    | 山室富江  | 女   | 明治41年生まれ         |
| C    | 坂本アイ  | 女   | 明治27年生まれ         |
| D    | 坂本ヨシノ | 女   | 明治36年生まれ         |
| (E)  | 佐藤虎男  | 男   | 大正15年生まれ <同席担当者> |

A キモノーデ ソノ ハカマモ ナンニモ ツケズニ キモノダケデ  
 着物で その 袴も なんにも つけずに 着物だけで  
 ース。  
 す。

E ハー。 オーバーチャンモ ソー ナンデショ。 ミナ。  
 はあ。 おばあちゃんも そう なんでしょ。 みな。

C ソーデス。  
 そうですよ。

D ソーデス。<sup>(1)</sup>  
 そうですよ。

E ハー。 オトコモ オンナモ。  
 はあ。 男も 女もね？

C オトコノ コーワ ホンデモ ドヤロ。 ソ ドコヤラ ホドカラ オ  
 男の子は それでも どうでしょ。 どのあたりほどから

トコノ コーワ フクキ、 フクヤ ナイ ワ。 アノ、 ハカマ ハ  
 男の 子は 服を着、 服じゃ ない ね。 あの、 袴 は  
 キダシタノデ オナゴノコーワ- アノ- ナニ ソリャー マー  
 き始めたので 女の子は あのう なに それは まあ  
 フクヤ ナイ、 ハカマヤケードー ウンナシ フクデワ ド  
 服では ない。 袴だけけど 同じ 服では フジ  
 モナラン、 ハカマデワ ドモナランデ オナゴワ オナゴラシ  
 うがわるい、 袴では フジウが悪いから 女は 女らしい  
 ハカマナリ (E ハー。) オトコワ フクナリデシタンヤ。  
 袴だし ええ。 男は 服だし、 たったんですよ。

E ハー。 (C ハー。)  
 はあ(そうですか)。 はい。

D アレカ モー シキカ コートー イケヘナシダラ (C シキカ...  
 あれが もう 式か 高等(小学校)へ行かざらたら 式か...  
 ハカマジャ ナイ ン。 ジンジョー ジブンワ キモノバーツ  
 袴では ないのね。 尋常(小学校)時分は 着物ばかり  
 カリ----(笑)

A ソラ キモノバツカリイヌ。 ウン。  
 ソリャ 着物ばかりですよ。 うん。

B ウン、 パンツナー ハケヘナシダデ ナー。 アンタ。 オコシデ  
 うん、 パンツなど はきしなかったからねえ。 あんた、 おこして  
 ナー。 デルモンデ (笑)  
 ねえ。 出るもんじから

D コナイダモ ウンドーカイニ  
 こないだも 運動会に

C モー(ダンダン)トシガ(ヨル)チュート(ミンナー)オマイラー  
 もう だんだん 年が 経るといふと みんなが「おまえら  
 (ガッコ)ドナイ(シテ)イッチャッタ(ンジャ)イナ(ユー)テ  
 学校へ どのようにして 行ったんだい、(いったい)」と 言つて  
 (ユー)グライ(ナ)リマシタ(ナー)。 (E(ハ)ー。) エー。  
 言うぐらゐに なりました ねえ。 (はあ。) ええ。

B ワタシ(ノ)シ(ツ)ツオ(ボ)エ(ワ)ネ(ー)。 (E(ハ)ー。) ワタシ(イ)マ  
 わたしの 一つおぼえは ねえ。 わたし 今  
 コ(ン)ナ(ア)ノ(シ)マ(ノ)キ(モ)ノ(キ)トル(ケ)ード。<sup>(2)</sup>  
 こんな あの 縞の 着物を 着てるけど。

C テ(ー)デ(オ)ツ(バ)ツ(カ)シ(ヤ)ユ(テ) (笑)  
 手で 織つたばかりだと 言つて

B (ハ)ー。 コ(レ)ム(ス)メ(ガ)ア(ノ)ツ(ネ)ニ(キ)ー(ユ)ー(テ)モ(テ)キ(テ)  
 はい。 これ 娘が 不断着に 着よと 言つて 持つて 来て  
 ホ(シ)テ(コ)レ(オ)キ(ト)リ(マ)ス(カ)エ(ー)。 コ(ノ)コ(ン)ナ(シ)マ(オ)。  
 そして これを 着ていますが ね。 この こんな 縞を。

(E(ハ)ー。) コ(ノ)シ(マ)ノ(ネ)ー。 コ(ノ)ア(イ)タ(ト)コ(ナ)イ  
 (はあ。) この 縞の ねえ。 この 空いた 所 ない

ヤ(ツ)デ(ス)ワ(ナ)。 (E(ハ)ー。) コ(ン)ナ(ン)ノ(キ)ツ(ツ)ケ(ツ)ツ(ヰ)  
 分です わよ。 (はあ。) こんなもの ひっかけ 続い

タ(ヤ)ツ(ノ)コ(レ)ワ(マ)ー(ウ)ール(ヤ)ケ(ード)ア(ノ)モ(メ)ン(デ)  
 た ものの これは まあ ウールだけれど あの 木綿で

(ハ)ー。 (E(ハ)ー。) コ(ン)ナ(ン)オ(イ)ツ(タ)ン(カ)イ(マ)シ(テ)ネ(ー)。<sup>(3)</sup>  
 ねえ。 (はあ。) こんなのを 一反 買ひまして ねえ。

xxx ア(ノ)ハ(ハ)ガ(ハ)ホ(シ)テ(ア)ノ(ナ)ン(デ)ス(ワ)ナ。 キ(モ)ノ(ワ)  
 あの 母がね。 そして あの なんです わよ。 着物は

マー ヨツミヤデ<sup>(4)</sup> デキルケド ソレカラ カバンモ ソレデ シ  
 まあ 四ッ身だから できるけど それから かばんモ それで 作ッ  
 テ ネー。カバン ユーヤカ ザツノー ユーヨッテ テー。チー  
 て ねえ。かばんと言うのか 雑囊 と言っていて ねえ。ねえ。  
 ア。ヘー。

ほい。

- D フルシキ ツカイヨッタ デ。 ウチラ。  
 風呂敷を 使っていたよ。 わたしたち。
- A フルシキヤ。 モトワ。  
 風呂敷だ。もとほ。
- C モトワ イチバン モトワ フルシキヤ。 ( <sup>A</sup> フルシキ バックリ )  
 もとほ いちばん もとほ 風呂敷だよ。 ( 風呂敷 ばかり )
- B ウチラワ。 ラクロオ チー。 コーシテ モーテ.....  
 わたしたちは 袋を ねえ。 こうして もらって.....
- D フルシキ コー オーテ カサオ コー サゲテ。  
 風呂敷を こう 負って 傘を こう さげて。
- B ホテ マタ ゾーリ イレル ラクロモ ソノ ノコリデ シテ  
 して また 草履を 入れる 袋も その 残りです して  
モロテ マンダ<sup>(5)</sup> アノー モシモ アノ ナンド モッテカン  
 もらって また ああう もしも ああ。 なんか 持って行かぬ  
ナン トキカ アッタア ゾリカ ヤブレル ユーデ モッテ イッ  
 ばならない時が あったら 草履が 破れる 言うから 持って 行  
テン コーモ アリヨッタケド ワタシトコワ ヨー ツクッテ  
 く 子も あったものだけど わたしとこほ よう 作られ  
チカッタ サカイテ ホンデ アノー ヘラコヤッタケド ソノ  
 なかったから それで ああう へらんだったけれど その

ヘラコー アシタ<sup>↑</sup> テンキガ<sup>↑</sup> ミン<sup>↑</sup> ナンサカイ<sup>↑</sup> ヒックリカヤス  
 へらん、 あした 天気が 見ほぼならないから、 ひくソかえす  
 ト ワレル<sup>↑</sup> トキガ<sup>↑</sup> アリヨリマシテ<sup>↑</sup> ナー。 ホンデ<sup>↑</sup> ソリモ<sup>↑</sup> (笑)  
 と 破れる 時が あつたりまして ねえ。 それで 草履モ  
 トキューノ<sup>↑</sup> オバハンニ<sup>↑</sup> モロタ<sup>↑</sup> コトガ<sup>↑</sup> ワタシ<sup>↑</sup> アリマスガ<sup>↑</sup>  
 途中の おばさんに もらった ことが わたし ありますが  
 エー。 クボ トーッテ。 ホンマニ、 ヨー<sup>↑</sup> アンナ<sup>↑</sup> コト<sup>↑</sup> シテ イッ  
 ねえ。 久保を 通って。 ほんとに ようこそ あんな ことを して 行ッ  
 ター<sup>↑</sup> オモイマス。 (E<sup>↑</sup> ナー。) ワタシガ<sup>↑</sup> ゴネンノ<sup>↑</sup> トキニ<sup>↑</sup>  
 たし と思います。 (ああ。) わたしが 五年の 時に  
 ハジメテ<sup>↑</sup> コンニャクノ<sup>↑</sup> クツガ<sup>↑</sup> デキタンデス<sup>↑</sup> テ。  
 はじめて コンニャクの 靴が できたんです よ。

E ナンデス<sup>↑</sup> カ。 コンニャクノ<sup>↑</sup> クツ<sup>↑</sup> ユーノ。

なんですか。 コンニャクの 靴 というのは。

B コンニャクノ<sup>↑</sup> ヨーナー<sup>↑</sup> ナーア。 アメイロノ<sup>↑</sup> シター。

コンニャクの ような ねえ。 飴色を した(靴)。

A ナマゴム<sup>↑</sup> チュー<sup>↑</sup> ゴムノ<sup>↑</sup> イマー<sup>↑</sup> ゴムグツ<sup>↑</sup> ユーノワ

生ゴム という ゴムの。 今 ゴム靴と いうのは

C イマノワ<sup>↑</sup> カワミタイニ<sup>↑</sup> ミエルケード。

今のは 皮のように 見えるけれど。

A ミナ<sup>↑</sup> キレーニ<sup>↑</sup> サイセーシタ、ア、 ゴムデスケン<sup>↑</sup> ナー。 (E<sup>↑</sup>

みな きれいに 再製した。 あー。 ゴムですけど ねえ。

ハー、 ソーソーソー。 ハー、 ソーデス<sup>↑</sup> カ。) ソノ<sup>↑</sup> イチバン

はあ。 そうそうそう。 はあ。 そうですか。 ) その いちばん

ハジメニ<sup>↑</sup> ゴムグツガ<sup>↑</sup> デキタ<sup>↑</sup> ジブソニワ<sup>↑</sup> エー、 ナマゴムデ

はじめに ゴム靴が できた ころには。 ええ。 生ゴムで

レデー ケッキョクー イロノ アノ クロインジャ ナシニー  
で、 結局 色の あの 黒いのでは なしに

チョット アメイロミタイナ イロノー クツオ ハイタンデス。  
ちょっと 飴色のような 色の 靴を はいたんです。

E ハーア。ソーデス カー。  
はあ。 そうですね。

A ソレガ イチバン ハジメデス ワ。ゴムグツノ。ホイデ ワタシ  
それが いちばん はじめなんです。 ゴム靴の。 それで わたし

ドモノー イク ジブンニワ ミナ ソーソデス ワ。 (E ハー) (↑)  
どもの (小学校へ) 行く ころには みな 草履なんです。 (はあ)

ハキモンワ。

はきものは。

E アー。ソーデス カ。ソノ ゴーリ チュノワ ナンス カ。ソノ  
ああ。 そうですね。 その 草履 というのは なんですか。 その

イエデ ユー  
家で ンう (作ったものですか。)

A エー。ツクッタ。エー。  
ええ。 作った(もの)。ええ。

B へー。ワラ ウツテ。  
はい。 藁を 打ってね。

E ワラ ウツテ。  
藁を 打って(ですか)!

A エー。ミナ ツクッタ モンデス。  
ええ。 みな 作った ものですよ。

E アー。ソーデス カ。  
ああ。 そうですね。



B ソレガ<sup>ア</sup>ネー。ワタシトコノ<sup>ア</sup>イエノ<sup>ア</sup>シタナシワ<sup>ア</sup>オジーサンガ  
 それが ねえ。わたしとこの 家の 下の(家)は おじいさんが  
 アッテ<sup>ア</sup>マイニチ<sup>ア</sup>コー<sup>ア</sup>シゴトニ<sup>ア</sup>ゾーリ<sup>ア</sup>ツクッテデ<sup>ア</sup>マイ  
 あって 毎日 ンう 仕事に 草履を 作られるから 毎  
 ニチ<sup>ア</sup>オロシテ<sup>ア</sup>モロテンデスンヤ<sup>ア</sup>ナ。ケナリテ<sup>ア</sup>ケナリテ<sup>ア</sup>ワ  
 日(新しいのを)おろしてもらうんですのよね。羨しくて 羨しくて わ  
 タシ<sup>ア</sup>ソレワ<sup>ア</sup>ケナリカッタ<sup>ア</sup>。イマデモ<sup>ア</sup>オモイマス<sup>ア</sup>デ<sup>ア</sup>ンデ<sup>ア</sup>  
 だし それは 羨しかった。今でも 思いますよ。それで  
 コナイダ<sup>ア</sup>キョネン<sup>ア</sup>ハジメテ<sup>ア</sup>ワタシラーノ<sup>ア</sup>ツレガ<sup>ア</sup>ヨリマシ  
 せんだって、去年 はじめて わたしたちの 同僚が 寄りまし  
 テ<sup>ア</sup>ナー<sup>ア</sup>。アノ<sup>ア</sup>ソノ<sup>ア</sup>セーフクジノ<sup>ア</sup>。ホッテ<sup>ア</sup>ワタシガ<sup>ア</sup>ユーモ  
 て ねえ。あの どの 施福寺の。そして わたしが 言うも  
 ンヤデ<sup>ア</sup>ホンマニ<sup>ア</sup>トミエサン、ソノ<sup>ア</sup>ゾーリノ<sup>ア</sup>コトワー<sup>ア</sup>ケナ  
 んだから、「ほんとは 富江さん、その 草履の ことは 羨し  
 リカッチャッタ<sup>ア</sup>ナー<sup>ア</sup>ユーテワ<sup>ア</sup>ユーテーヤッタカ<sup>ア</sup>。

がられました ねえ。」と言っは (みずさんが) 言っておられたけど。

E イヤ。ジツニ<sup>ア</sup>イマノ<sup>ア</sup>.....  
 いやあ。(っは) 今の.....

C ユキー<sup>ア</sup>フルト<sup>ア</sup>フカグツ<sup>ア</sup>ユーテ<sup>ア</sup>ナー<sup>ア</sup>。 |<sup>E</sup> ハー、ハイ。 |  
 雪が 降ると 深靴と 言って ねえ。 | はあ、はい。 |

コレクライノ<sup>ア</sup>セーノ<sup>ア</sup>アノー<sup>ア</sup>ワラデ<sup>ア</sup>コシラエタ<sup>ア</sup>モンオ<sup>ア</sup>  
 これくらいの 背丈の あう、葉で 作った ものを  
 ナー<sup>ア</sup>。 |<sup>E</sup> ハー。 | アノ<sup>ア</sup>ハキヨッタ<sup>ア</sup>ンデス<sup>ア</sup>ワ。  
 ねえ。 | はあ。 | はいていたものですね。

B ジョーズニ<sup>ア</sup>シタ<sup>ア</sup>アッタ<sup>ア</sup>デー<sup>ア</sup>。アレ<sup>ア</sup>。  
 上手に して あったよ。 あれ。

C ジョーズニシタアリヨリマシター。  
上手にして ありましたよ。

E コノヘンワユキガフカインデショ-ネ-。  
このへんは 雪が 深いんでしょうねえ。

C エ-。  
ええ。

A エ-。サンジャクグライワフリマシタ。  
ええ。三尺ぐらいは 降りましたよ。

E コトシモ。  
今年も(ですか)。

A イヤ。アノ-マエニ。  
いや。あのう 前にてす。

E マエニ。(A エ-) ハ-。  
前に(ですか) はあ。

C ワタシノアニラーモアヤベエカヨタンデスカナー。アヤベ  
わたしの 兄たちも 綾部へ 通ったんですがねえ。綾部  
ノショーカッコーエ。ホンマカワイソーデシタ。ウチノコ  
の 小学校へ。ほんと かわいそう でした。うちの  
ノシタノホ-デスケ-ド。カヨタンデス。  
の 下の ほうですけど。通ったんです。(その雪の中を)。

B ウチノシタノシタデス。  
うちの 下の 下ですよ。

A ソエ。コート-ショーカクチュ-ノア-アヤベニシカナカッ  
そう 高等小学 というのは 綾部に(か)なかつ  
タンデス\*。ホエデー ジンジョ-ショーカッコーワ ココデ  
たんです。それで 尋常小学校は ココで

オワッタ<sup>(9)</sup>ンダケードモ アノー コートーショーガク<sup>(10)</sup> チューノワ  
終わったのだけれども あのう、高等小学 というのは

モー<sup>(11)</sup> チョーソンガッペーノヨナー チョーソンリツ<sup>(12)</sup> ガ<sup>(13)</sup>  
もう 町村合併のよう な 町村立

リツデ アノー モー ゴカソンモ<sup>(14)</sup> ロッカソンモ<sup>(15)</sup> デ<sup>(16)</sup> コートー  
立で あのう、もう 五か村も 六か村もで 高等

ショーガク<sup>(17)</sup> チュー<sup>(18)</sup> モノオ<sup>(19)</sup> モッタ<sup>(20)</sup> モンデス。 (E ネー。ヤリ  
小学 という ものを 持った ものです。 ねえ。ヤリ

マシタカラ<sup>(21)</sup>ネー。 ) ホイデ<sup>(22)</sup> ソコエ<sup>(23)</sup> ミナ<sup>(24)</sup> カヨータンデス。  
ましたから ねえ。 ) それで そへ みず 通ったんですよ。

E ハーア。

はあ。

B ホシテ アノ<sup>(25)</sup> ワタシラーノ<sup>(26)</sup> ゴネソノ<sup>(27)</sup> トキ<sup>(28)</sup> カイナー。トメハ  
そして あの。わたしたちの 五年の 時 かねえ。とめサ

ンカ<sup>(29)</sup> タ<sup>(30)</sup> アノー<sup>(31)</sup> ウ<sup>(32)</sup> ウンドーカイニ<sup>(33)</sup> クル<sup>(34)</sup> フクオ<sup>(35)</sup> ナー。  
んか あのう、 運動会に 来る 服を ねえ。

アノ<sup>(36)</sup> ドーヤ<sup>(37)</sup> イナー。アノー<sup>(38)</sup> スカワラノ<sup>(39)</sup> ミチダネヤ<sup>(40)</sup> ナイ。  
あの。どうかしらねえ。あのう、菅原の 道真<sup>(41)</sup> じゃ ない

ショートクタイシノ<sup>(42)</sup> ヨーニ<sup>(43)</sup> アノー<sup>(44)</sup> コー<sup>(45)</sup> ココデ<sup>(46)</sup> ククッテ<sup>(47)</sup> フ  
聖徳太子のよう な あのう、 とう<sup>(48)</sup> ニて 括って ぶ

アット<sup>(49)</sup> コーシテ<sup>(50)</sup> ヨーナンオ<sup>(51)</sup> ナー。 (D ラー。) トメハンカ。  
わっと とうした<sup>(52)</sup> ようなのを ねえ。 ふんふん。 とめさんが

オボエトッテ<sup>(53)</sup> ナイ<sup>(54)</sup> カ。

おぼえて いない?

D オボエトラン<sup>(55)</sup> ナー。

おぼえてないわねえ。

B ラクオ<sup>ハ</sup>ナー。 ( <sup>D</sup> ウン。 ) ラクユーダカッ---- ( <sup>D</sup> \_\_\_\_\_ )  
服を ねえ。 うん。 服と 言ったって

ユー<sup>ハ</sup>ンカイ。 ) ヘー。 ラクユーダカッテ<sup>ハ</sup>ナー。 ( <sup>D</sup> ヘン。 )  
いなの？ はい。 服と いったって ねえ。 はあ。

アノー ジジ~~ジジ~~ ジジツワ<sup>ハ</sup>ナー。 テンジクモメンヤ。 オボエトツ  
あの方。 地質は ねえ。 天竺木綿です。 おぼえてお  
テ<sup>ハ</sup>ナイ<sup>ハ</sup>ン。 ウチラー<sup>ハ</sup> ヤハリ イチバン ハジメニ コーテ  
られないの。 ちらは やはり いちばん はじめに 買って  
クレチャッタ<sup>ハ</sup>デ。 ソノ コンニャクノ クツモ<sup>ハ</sup> イチバン ハ  
くれた わよ。 その コンニャクの 靴も いちばん は  
ジメ コートクレタシ ミンナー ケナリカッチャッタ<sup>ハ</sup> モン。  
じめに 買ってくださったし みんな 羨しがりましたもの。

C ヨイ ウチニ イヤハン<sup>ハ</sup>ノ。 ソレヤッタラ。  
良家においでなのよ。 それだったら。

B エー。  
ええ？

C ヨイ ウチジャ。  
よい お家なんだよ。

B セヤケド ウチワー ラダン ゾーリガ ナイテ シヨナイ ワー。  
だけど ちらは 不断 草履が ないから しかたがないわよ。

ホンデモ。 サキエ カワント<sup>ハ</sup>ナー。 (笑)  
だけど。 先に 買わないと ねえ。

C ホンマニー。  
ほんとにねえ。

B オボエトツテ ナイ ンナ。 アンター。 コーシテ ココオ ナー。  
おぼえておいてじゃないの？ ああ。 今のうちに こんを ねえ。

タブント コー コレカ° フクヤロ。 コーシ……  
たぶんと こう これが 服でしょ。 こうし……

D アンタラワ マンダ° ワカイデヤケド° ワタシラワ° ソンナー°  
あんたたちは まだ 若いからだけれど わたしなんかは そんな  
コレオ コー オロシテ シマワント ナー。 オバハン エ。  
これを こう おろして しまれないで ねえ。 おばさん。 ね!

(<sup>c</sup> ラン。) ココオ (<sup>d</sup> カキアウス° ジバンダケシカ°  
ぶん。) こを かきあわす 襦袢だけしか

(笑) ココオ コー ククッテ アノ シタ ウラカラ° キテ°  
こを こう 括って あの。 裏から 着て。

ココ° ククッテ° ホイテ° コレオ° コー° オロシヨットンヤ。 ソレ  
こを 括って そして これを こう おろしていたんです。 それ  
か° イチバン° ハジメフク。

が いちばん はじめの服。

C モー ノーカッ コーイ° イクヨーン° ナッタラ° ナー。 オナゴノ°  
もう 農学校へ 行くように なったら ねえ。 女の  
コーラ° アノ° アカイ° ケットーキシカ° (13) アノ° コー° キヨットン°  
子らは あの 赤い 毛套 あの、 こう。 着ていたん  
デス° フ。

ですの。

D ハー。 アタシラモ° ケットーヤ。 (<sup>c</sup> ケットーヤラ……°)  
はあ。 わたしたちも 毛套です。 毛套やら……°

B ハー。 (<sup>c</sup> アノ……°) ワタシラーフー° イチ° チサイ° トキワ°  
あの……° わたしたちは 小さい 時は

イチ°  
一年生の 時は 兄ちゃんらの 古いの

ナ。ケーサツノ シトノ ショーコーマントカ、コレグライノ  
 ねえ。警察の 人の 将校マントカ、これぐらいの  
 ミジカインオ キテ イキヨツタケドモー アレ ナンネンセーヤッ  
 短いのを 着て 行ってたけれども あれ 何年生だっ  
 タヤロ。ヨネングライヤッタ カ。ウ ウチダッテ アノ シッ  
 たでしょ。四年ぐらいだったか。わたしだけ あの  
 シマノ ナー。マントノ テーカ デル トコノンオ コーテ モ  
 縞の ねえ。マントの 手が 出る ところの(あるの)を買って  
 ロタラ ハイカラヤ ハイカラヤ ユワレタ ナー。ソーユー コ  
 もらったら ハイカラだ ハイカラだと言われたねえ。そういう  
 ト ヨー オボエトル。ワタシ。

とを よく おぼえてる。わたし。

D ワタシラ アマエタヤッタハカイ <sup>(14)</sup> ロクネンマデ ユキャ フツタ  
 わたしらは 甘えていたから 六年まで 雪が 降った  
 ラ オクリムカエ (笑)  
 ら 送り迎え

B ワタシラモヤ。  
 わたしらもです。

D オーテ モロテ。ミンナニ ワラワレモッテ。ヘッヘ。  
 (背に) 負ってもらって。みんなに 笑われ笑われて。ほほ。

B ワタシモ オクリムカエ <sup>(15)</sup> ハラシチャッタヤ デ。ニーチャン  
 わたしも 送り迎えを たんですよ。兄ちゃん  
 ト ア、エーチャント。アサ オクッテ イッタ モノワ  
 と、あ、栄ちゃんと。朝 送って 行った ものは

A ガッコー イク アノー ユキカキデモ アノー ムラデー カキ  
 学校へ 行く あいう。雪かきでも あいう。村で 掻い

ヨッタ<sup>ン</sup>デスケン<sup>ナ</sup>。イマワ<sup>ー</sup>コ<sup>ー</sup>ミチ<sup>イ</sup>ッパイ<sup>キ</sup>レ  
 ていたものですけどねえ。今はこう道<sup>い</sup>っぱい<sup>き</sup>れ  
 ニ<sup>ジ</sup>ドーシャカ<sup>ト</sup>ールヨ<sup>ニ</sup>ユキハネ<sup>シ</sup>マスケン<sup>ナ</sup>。  
 いに自動車<sup>が</sup>通<sup>る</sup>ように雪<sup>は</sup>ね<sup>し</sup>ますけどねえ。  
 モ<sup>マ</sup>エニワ<sup>ユ</sup>ッカキニ<sup>イ</sup>ッテモ<sup>ア</sup>ン<sup>ト</sup>ールダケシカ<sup>カ</sup>  
 もう以前<sup>には</sup>雪<sup>掻</sup>きに<sup>行</sup>っても<sup>あ</sup>の<sup>通</sup>るだけ<sup>しか</sup>  
 カカ<sup>ナ</sup>ンダス<sup>ワ</sup>ナ。  
 掻か<sup>な</sup>かった<sup>で</sup>す<sup>よ</sup>ね。

E ア<sup>ー</sup>ソ<sup>ー</sup>デス<sup>カ</sup>。  
 ああ、<sup>そ</sup>う<sup>で</sup>す<sup>か</sup>。

A ホ<sup>デ</sup>ソ<sup>コ</sup>モ<sup>ー</sup>ク<sup>ツ</sup>ー<sup>ナ</sup>ン<sup>ツ</sup>ー<sup>モ</sup>ノ<sup>ア</sup>ア<sup>レ</sup>ヘ<sup>ン</sup>シ<sup>ゾ</sup>  
 それ<sup>で</sup>ソ<sup>ン</sup>を<sup>も</sup>う<sup>靴</sup>ぞ<sup>と</sup>い<sup>う</sup>もの<sup>は</sup>あ<sup>り</sup>は<sup>し</sup>ない<sup>草</sup>  
 ソ<sup>ハ</sup>イ<sup>テ</sup>エ<sup>ー</sup>タ<sup>ビ</sup>ノ<sup>ー</sup>ウ<sup>エ</sup>ニ<sup>ゾ</sup>ー<sup>リ</sup>ハ<sup>イ</sup>テ<sup>ホ</sup>シ<sup>テ</sup>  
 履<sup>を</sup>は<sup>い</sup>て<sup>足</sup>袋<sup>の</sup>上<sup>に</sup>草<sup>履</sup>を<sup>は</sup>い<sup>て</sup>そ<sup>し</sup>て  
 ソ<sup>ノ</sup>ヘ<sup>ン</sup>デ<sup>ハ</sup>シ<sup>ッ</sup>テ<sup>イ</sup>キ<sup>ヨ</sup>ッタ<sup>モ</sup>ン<sup>デ</sup>ス<sup>ワ</sup>。  
 その<sup>へ</sup>ん<sup>で</sup>走<sup>っ</sup>て<sup>行</sup>っ<sup>た</sup>もの<sup>で</sup>す<sup>よ</sup>。

B イゴキモドーモ<sup>セン</sup>。  
 動<sup>き</sup>も<sup>ど</sup>う<sup>せ</sup>し<sup>ない</sup>。

D スソカア<sup>ユ</sup>キニ<sup>ツ</sup>イ<sup>テ</sup>(笑)  
 裾<sup>が</sup>あ<sup>雪</sup>に<sup>つ</sup>い<sup>つ</sup>

E <sup>ネ</sup>ー。キ<sup>モ</sup>ノ<sup>デ</sup>ー  
 ねえ。<sup>着</sup>物<sup>で</sup>

D ユキガコ<sup>ナ</sup>イ<sup>モ</sup>ン<sup>デ</sup>ー<sup>コ</sup>ノ<sup>ス</sup>ソ<sup>カ</sup>キ<sup>モ</sup>ユ<sup>キ</sup>ニ<sup>ニ</sup>  
 雪<sup>が</sup>こ<sup>ん</sup>な<sup>だ</sup>も<sup>ん</sup>だ<sup>か</sup>ら<sup>こ</sup>の<sup>裾</sup>が<sup>雪</sup>に  
 ツ<sup>カ</sup>エ<sup>テ</sup>。  
 つ<sup>か</sup>え<sup>て</sup>ね。

- C ワタシラー(モー シモヤケノ ショー デシタサカイデ ナンデシ  
 わたしなどは もう 霜やけの 性 でしたから なんでし  
 タ、モ タビ(ハイテ ナー。 クツカ(ナイモンジャデ。(Eハ一。)  
 た、もう、足袋を けいて ぬえ。 靴が ないもんですから。 (はあ。)  
 ホイテ(アノー アレデシタ(ガッコ(イクンデシタカ(ホシタ(  
 して あつ。 なんです、学校へ 行くんですけど。 したら  
 シモヤケカ(モー ヒドイ(コト(タダレテ(ナー。 イタイデシタ  
 霜やけが もう ひどく ただれて ぬえ。 痛いでした  
 (ワ(ソノ(ヘンデ(モー(アノ(タライン(ナカイ(アシ(ツッ  
 れ。 その、それで もう あの、たらいの 中に 足、つ  
 コンデ(ナー。(Eエ一。) アシオ(ヌクメナ(シアナイモンジ  
 こんで ぬえ。(ええ。) 足を あたためぬほ(しょうがないも  
 ヤデ( Eハ一。) ホンマニ(イマノ(コトオ(オモッタラ(ナン  
 の(から(はあ。) ほんとに 今の ことを 思ったら 難  
 キシマシタ(ナー。  
 儀(ました(ぬえ。  
 E ソーデショー(ナー。  
 そう(しょう(ぬえ。  
 C へー。 イマデワ(アンマイ(モンデスケン(ナーア。(笑) イマデ  
 かい。 今(では(甘い(もの(ですけど(ぬえ。 今(で  
 ワ(ホンマニ(ウマイ(モンジャケード(ナンギシトリマス(ナー。  
 は(ほんとに(甘い(もの(だけ(けど(難儀(しています(ぬえ。  
 ショーカッコージダイワ。( Eネ一。) モー(ハチジュースンネ  
 小(学校(時代(は。(ぬえ。) もう(八十三年  
 シニモ(ナルンジャカ。(笑)  
 に(も(なる(んだ(が。



A ソレカラ トチューニ モンペー チューノカ デケテ コレ  
 それから 途中に モンペい というのが できて、これ  
 モンペー チューノワ アーノー コノ ヒカシヤタデモ オヨギ  
 モンペい というのは あのう、この 東八田でも 於手岐  
 ホカラ クロタニノ ホームノ シトワ アノー トシノ イ  
 それから 黒谷の 方面の 人は あのう、年の い  
 ッタ オンナノ シトモ オトコノ シトモ ミナ ハイトルンデ  
 った 女の 人も 男の 人も みな 歩いてるんで  
 スケン ナー。モトカラ ハヨーカラ ハキヨッタンスケードモ  
 すけど ねえ。もとかから 早くから 歩いてたんですけれども  
 コノ ヘンデワー モンペー チュモナー ヨッポドー オソー  
 ンの へんでほ も ぺい というものは よほど 遅く  
 ナッテカラ ハイッタ モンデス。ソシテ コドモモ モンペー  
 ってから 歩いてた ものなんです。そして ンどもも モンペいを  
 ハイテ ガッコ イクヨーニ ナリマシタケン ナー。  
 歩いて 学校へ 行くように 変りましたけど ねえ。

E ア、ソーデス カ。 (A、へー。) へー。  
 あ、そうです か。 (はあ。 へえ (そうですか)。

A デ モンペーオ ハイテ イクトー キモノカ スソカ マトマリ  
 ず、モンペいを 歩いて 行くと 着物が 裾が まとまり  
 マスデ。 (E、エー。ソーソーソーソー。) ソイデ エキン ナ  
 ますから。 (ええ。 そう そう そう そう。 それで 雪の 中  
 カーナンデモ タイヘン ツゴーカ エンデスケン ナー。 (E  
 さんがでも たいへん 都合が よいんですけど ねえ  
 アー。) ケド ソンナ モンワー ナカッタエス。コドモノ ジ  
 ねえ。 ) けど そんな ものは なかったですな。 子どもの こ

ブンニワ。

ろには。

### 注記

- (1) 「デス」の「ス」が「サ」に近く聞こえる。
- (2) こう言いながら、着物の襟元をひっぱって見せる。
- (3) 「ネー」を言おうとして、地ంతぼの「ナー」が出たため、混じってんのふうな ([neə]) 音になったものか。
- (4) 「ソレカラ」以下数話部は笑いながらの発言。
- (5) 「マング」を力をこめて一段高い声で。
- (6) 「ヘラコ」は、ほまのまい日和下駄。
- (7) 「ケナリテ ケナリテ」、力をこめて同情的に。
- (8) 地名。上杉の隣部落。
- (9) この「ダ」、断定助動詞にちがいないが、地ంతぼではない。
- (10) 「ロックソソモ」と言って、改めて「ロックソソデ」と言いなおすところ、それを簡約に助詞だけを言いかえた。
- (11) 「道真」を「ミチダネ」と言っている。
- (12) 手まね。洞のあたりを指示して。
- (13) 「キシカ」の部分意味不詳。
- (14) 「アマエテヨッタハカイ」のつもりであろう。
- (15) この部分も意味不詳。
- (16) 「ウマイ」は、ここでは「楽み」の意。「アンマイ」というのがすぐ前にあったが、これも同じ語。

### 3. 小学校とこどもの遊び

話(手)

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)            |
|------|-------|-----|-----------------|
| A    | 山室二郎  | 男   | 明治31年生まれ<司会役>   |
| B    | 山室富江  | 女   | 明治41年生まれ        |
| C    | 坂本アイ  | 女   | 明治27年生まれ        |
| D    | 坂本ヨシノ | 女   | 明治36年生まれ        |
| (E)  | 佐藤虎男  | 男   | 大正15年生まれ<同席担当者> |

E オヨギ<sup>^</sup> チュタラ<sup>^</sup> ~~チカ~~<sup>xxx</sup> ~~チカ~~<sup>xxx</sup> インデシヨ。  
 於与岐 といったら 近いんでしよ。

A へー。 ( <sup>c</sup> オヨギー... ) コツカラ<sup>^</sup> イチリホド<sup>^</sup> アリマス。へい。  
 はい。 於与岐 ... ニンから 一里ほど ありますよ。はい。  
 ソコエ<sup>^</sup> ヤマノー アノー ナカデステ<sup>^</sup> ナー。  
 そんへ 山の あのう、 中ですから ねえ。

B ナンセー<sup>^</sup> アノー コノ<sup>^</sup> ヒカシヤダ<sup>(1)</sup> チューンワ<sup>^</sup> ナカヤマカ<sup>(2)</sup>  
 せにせ あのう、 ンの 東八田 というのは 中山か  
 ラ<sup>^</sup> コー<sup>^</sup> ハイリマシテ<sup>^</sup> ネー。 コー<sup>^</sup> ニホンレット<sup>^</sup> ノヨーナ<sup>^</sup>  
 ら こう はいりまして ねえ。 こう 日本列島の ような  
 カタチデ<sup>^</sup> コー<sup>^</sup> ナカインデスヤ<sup>^</sup> デ。 ンデ<sup>^</sup> オーマタデワ<sup>(3)</sup> ダ  
 形で こう 長いんですよ。 それで 大又までは タ  
 イブ<sup>^</sup> アリマスヤロ<sup>^</sup> デ。  
 いぶん ありますでしょうよ。

A ソラ<sup>↑</sup> ニリグライ<sup>↑</sup> アル<sup>↑</sup> ナ<sup>↑</sup>.

それは ニ里ぐらい ある ね。

B ナーア<sup>↑</sup>。ニリ<sup>xxx</sup> ニリワ<sup>↑</sup> シツカリ<sup>↑</sup> アルヤロ<sup>↑</sup>。

ねえ。 ニ里は じゃうぶん あるでしょ。

C アルヤロ<sup>↑</sup>。モー<sup>↑</sup> イマー<sup>↑</sup> ヨー<sup>↑</sup> アルカンケド<sup>↑</sup> ニリグライ<sup>↑</sup>

あるでしょ。 もう 今ほ よう 歩かないけど ニ里ぐらい

B ホデ<sup>↑</sup> オクノ<sup>↑</sup> シトト<sup>↑</sup> ダイブ<sup>↑</sup> チカウンデス<sup>↑</sup> デ<sup>↑</sup>。コノ<sup>↑</sup> エキノ<sup>↑</sup>

それで 奥の 人と だいいぶん 違うんです よ。 この 駅の

ヘンノ<sup>↑</sup> モントワ<sup>↑</sup>。 ( E ア、ソーデスカ。 ) ヘー。ホデ<sup>↑</sup> ワ  
あたりの ものとは。 あ、そうですね。 ええ、それでね

タシモ<sup>↑</sup> ソー<sup>↑</sup> オモイヨリマシタ<sup>↑</sup> モン。ヨメニ<sup>↑</sup> イクンヤッタラ

たしも そう 思っていました もの。 嫁に 行くんだったら

コンダケ<sup>↑</sup> ホンマニ<sup>↑</sup> ドッコイ<sup>↑</sup> イチジカンモ<sup>↑</sup> カカッテ<sup>↑</sup> イカ

これだけ ほんとし どのへ 一時間も かけて 行か

ン<sup>↑</sup> ナランヨナ、エキエ<sup>↑</sup> イチジカン<sup>↑</sup> カヨウンニ<sup>↑</sup> カカルヨーナ

はげならないような。 駅へ 一時間 通うのに かかるような

トコエ<sup>↑</sup> コドモガ<sup>↑</sup> イネチナイサカイ<sup>↑</sup> セメテ<sup>↑</sup> チービットデモ

所へ こんどもが かわいいそうだから せめて すしでも

ヨイデ<sup>↑</sup> アノ<sup>↑</sup> シモノ<sup>↑</sup> ホーエ<sup>↑</sup> デタイ<sup>↑</sup> オモイマシタ<sup>↑</sup> モン。

よいから、あのう。 下の ほうへ 出たいと 思いました もの。

マイニチ<sup>↑</sup> アンタ、セーフクジノ<sup>↑</sup> オクカラ<sup>↑</sup> アノー<sup>↑</sup> エキマデ<sup>↑</sup>

毎日 あんた、施福寺の 奥から あのう、 駅まで

テーテーテンテン<sup>↑</sup> ハシラン<sup>↑</sup> ナリマヘンヤロー。ホッテ<sup>↑</sup> ジテン

とっ とっ とっ と 走らねば なりませんでしょう。 そして 自転

シャニ<sup>↑</sup> ヨー<sup>↑</sup> ノランモンヤサカイ<sup>↑</sup> コワ<sup>xxx</sup> コワショーデ<sup>↑</sup>。ホンマ

車に よう 乗らないものだから こわがりやだね。ほんとし

ニ。 (E アー。) ワタシワ モチート シモエ ハンブシ エキエ  
 ああ。 わたしは もすし 下へ 半分(でも) 駅へ  
 ハンブシ チカイ トコロエ イカン ナアン オモッ、ソレ  
 半分(でも) 近い 所へ 行かぬば ならないと思つて、それ  
 ダケワ オモイマシタ。 ドコイ イコトモ オモタ コト チカッ  
 だけは 思いました。 どこへ 行こうとも 思った こと なかつ  
 タケド。(笑)

たけど

D アンター リソーノ トコエ キチャッタ。(笑)  
 あんた、理想の 所へ 来られた。

A オアエサンノ<sup>(4)</sup> ショーカッコーワ ドコヤ<sup>(5)</sup> エナ。  
 おあいさんの 小学校は どんなんです。

C ワタシノ ショーカッコーワ アッチデス ワナ。  
 わたしの 小学校は あちらです わな。

A ンメザコ<sup>(6)</sup> カ。  
 梅迫?

C エー。  
 ええ。

A へー。 (B アハハ。) シナ メザコノー-----  
 へえ。 はああ。 では 梅迫の -----

C メザコッテー アノー -----  
 梅迫って あのう -----

B チョト イッテ コカ。 (D ウ、ウン。) ナイトット。<sup>(7)</sup>  
 ちょっと 行って 来ようか。 う? うん。 注いでるわ。

D ハイ、アーノ ココイ イッチャッタヤ ナイ ンカ。 (B エー。)<sup>(8)</sup> <sup>(9)</sup>  
 はい。 あの ここの(の学校)へ 行かれたのじゃ ない の? (ええ?)

ココノ<sup>↑</sup>ガッコー<sup>↑</sup>エ。

この 学校へ。

C ココノ<sup>↑</sup>ガッコー<sup>↑</sup>エ。~~~~~ (10)

この 学校へ。

A エーットー。<sup>↑</sup>アレガー -----

ええっと。 あれが-----

C ~~~~~ ロクネン<sup>↑</sup> ロクネン<sup>↑</sup> ワタシワ<sup>↑</sup> イットラン<sup>↑</sup> ワ。

六年 六年(までは) わたしは 行ってないわ。

D アー。<sup>↑</sup>ヨネン<sup>↑</sup>マデ。

ああ、四年まで(なんですわ)。

C ウン。<sup>↑</sup>ヨネン<sup>↑</sup>マデ。

うん。四年まで。

A ヨネン<sup>↑</sup>マデ。

四年まで(だよ)。

D アー。<sup>↑</sup>ソーデス<sup>↑</sup> カ。

ああ、そうですか。

B ナイトッテヤ<sup>↑</sup> ワ。

泣いてる わ(やっぱり)。

C ソー<sup>↑</sup> カ。

そうか。

A エーットー。イマノ (B ゴメン、ゴメン、~~~~~) アーノ<sup>↑</sup> ヨー

ええっと。 今の

あのう。 幼

チエン<sup>↑</sup> ナットル<sup>↑</sup> トコロニ<sup>↑</sup> アッタ コーシャ<sup>↑</sup> エス カイ。

推園に なってる 所に あった 校舎ですかい。

C ソーデス<sup>↑</sup>。

そうですよ。

A ヘー。 アレワー エーット。

へえ。 あれば、 えーっと。

D アレワー モット コッチニ タッテ ( サンジュー ..... )  
あれば。 もっと こっちに 建て

ホッテ コッチノ アノ ジュータクノ ホーニ アッタンヤ ナ  
そして こっちの あの 住宅の ほうに あったんではな  
い カイター。

いでしょうかえ。

A ウン、 アソコニモ アッタンニヤ、 アソコー

うん、 あそこにも あったんだね。 あそこ

C ジュータクノ ホーワー モー アレワー ホシューカノ ホーニ  
住宅の ほうは もう あれば 補習料の ほうに  
アットタンヤ。

あったんだよ。

A コッチノ ジュータク アノ ウンドージョーノ シタノ  
こっちの 住宅、 あのう、 運動場の 下の

ジュータクワ アソコワ タイソージョー ウテンタイソージョー  
住宅は あそこは 体操場 雨天体操場

が アッタンジャ。

が あったんだ。

C アッタンジャ、 モトワ。

あったんだよ。 もとは。

D エー、 ソーデス カ。

ええ。 そうですか。

A モトワ アソコノ シトムネワー ウテンタイソージョー ト ソ

もとは あそのの 一棟は 雨天体操場と ン

シテ ショクインシツト (C ヘー。) <sup>(15)</sup> ダケ アツテ ホシテ マ  
 17 職員室と (ヘい。) だけあって、そしてま  
 シナカニ- ヨンキョーシツ アツテ ソレダケガ- ショーカッ  
 んなかに 四教室 あって、それだけが 小学  
 コーノ- コーシャヤツタンヤ。 (C フン。) ホイテ ムコーカ°  
 校の 校舎だったんです。 (ふん。) そして 向こうが  
 ワパー- ホシューガッコ-、ア- ノーガッコ- ヤ ナー。イワユ  
 わが 補習学校、ああ、農学校だ なあ。いわゆ  
 ル ホシューガッコ- チュー- ヤツヤツタンヤ。  
 る 補習学校 という ものだ、なんだ。

C ヨーザンシツヤラ。  
 養蚕室やらね。

A エン。ヨーザンシツカ° アツテ。ソエカラ- シトキョーシツ°  
 ええ。養蚕室が あって、それから 一教室  
 アツタンニヤ。アソコニ。アリヤ ホシューカッコ-ノ キョーシ  
 あったんだ。あそこには、あれは 補習学校の 教室。  
 ツ。(C ホシューガッコ-) <sup>(16)</sup> キテ、アノ コーシャガ° サン  
 して、あの校舎が 三  
 ジューニネングライニ デキトル ハズヤケード  
 十一年くらいに できてる はずだけど。

D メージデス カ。 (A フン。) ヘー。《沈黙ク紗》  
 明治ですか。 (ふん。) へえ！

A ホスト オアエサンワ アノ キョーシツヤツタ°ン。  
 そうすると おあいさんは あの 教室 だったの。

C ソーデス。ヨネンマデ ナカッ ナカッタデ ナー。  
 そうですよ。四年まで(しか) なかったから ねえ。



- A エー、ヨネンマデシカ ナインニャ、エー。  
ええ、四年までしか ないんだね。ええ。
- C ヨネン ソツギョーシタラ ホシューカエ イッテ (A エー)  
四年 卒業 したら 補習科へ 行って  
(D ラン) ノーガッコウエ イッタンマデ テ。  
農学校へ 行ったんですから ねえ。
- D ラン、イヤ、ヨネンマデデ マタ ニネン ホシューカ ユーン  
ぶん。いや(ちょっと待って!)。四年までで また 二年 補習科 という  
が アッタ ンカ。(C イチネン) ア、ホシテ ノーガッコウ  
のが あったんですか (一年です) ああ。そして 農学校  
カ。(C ラン) ア、ソー カ。  
ですか。ぶん。あ。そうか。
- E オンナノ シトデモ ヤッパリ ソノー ノーガッコウエ イカレ  
女の 人でも やっぱり その、 農学校へ 行かへ  
タンデス カ。  
たんですか。
- A エー、イッタンデス。  
ええ。行ったんです。
- E ホー、ア、ソーデス カ。  
ほう。あ、そうですか。
- A エー モー ショーガッコウ ソツギョーシテ (E ラン) カラ  
ん、もう 小学校を 卒業して から  
トクベツニ イク シトダケ イッタ モンジャハカエデ カズ  
特別に 行く 人だけ 行った ものだから、 人数  
ワ スクナイスケン テ。(E ハー) ノーガッコウ イッタ  
は すくないですけど ねえ。(はあ) 農学校へ 行った

シトワ スクナイスケードモ。

人は すくないですけども。

E ハー。デ、ノーガッコーワ ニネンデス カ。

はあ。ぞ 農学校は 二年ですか。

A ノーガッコー、ホシューガ イチネット ホレカラ ノーガッコー

農学校、補習(料)が 一年と、それから 農学校  
が ニネン アッタデショ。 (E ニネンデス ナ。)  
が 二年 あったんでしょう。 二年です ね。

E アー。ソーデス カ。 《沈黙5抄》

ああ。そうですね。

A ノー ウンドーカイナンテ ユーノワ ドーユー コト ヤット

あのう、運動会などというのほ どういう こと やって

リマシタ カ。

いましたか。

A ウンドーカイ チューノワー ケッキョク ショーガッコーノ  
運動会 というのほ けっきょく 小学校の

ウンドーカイ チュー -----

運動会 という

E ウンドーカイワ ドーユー コトオ ヤットッタデス カ。

運動会ほ どういう ことを やっていたんですか。

A サ。マーソ ベツニ タイシテ カワッター ウンドーカイ

さあほ。まあ、ん、ベツン 特別 かわった 運動会

ーデワ ナカッタケドモ マ ハシリ、ハシルノガ<sup>V</sup> アー アイガ

では なかったけども 「走り」 走るのが ああ 間

<sup>(18)</sup> デ アトー ソノ ショーガイブツトカ イロイロー アーノ-----

で そのほか その、障害物(競走)とか いろいろ あの-----

E オバーサンタチワ<sup>ハ</sup> ホイデ<sup>ハ</sup> ソノ<sup>ハ</sup> ウンドーカイノ<sup>ハ</sup> トキニワ<sup>ハ</sup>  
おばあさんたちは それで その 運動会の ときには  
ドーユー<sup>ハ</sup> カッコ<sup>ハ</sup> シテ ヤッタ<sup>ハ</sup>ンデス。  
どうい<sup>ハ</sup>う か<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>う して (したんですか)。

C キモノ<sup>ハ</sup> キーテ -----  
着物 着て-----

A キモノ<sup>ハ</sup> キタママデ<sup>ハ</sup> ハシルンデス。(笑)  
着物 着たままで 走<sup>ハ</sup>るんです。

D ヌイダラ<sup>ハ</sup> アノー ----- オコシ<sup>ハ</sup> マイテ。  
脱いだら あのう 煙巻 巻いて。

C ドーシテ<sup>ハ</sup> ハシッタジャローカ<sup>ハ</sup> ユーテ。  
どうして 走<sup>ハ</sup>った<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>うか と 言<sup>ハ</sup>って。

D ハシ<sup>(19)</sup>ソヨッタ。(笑)  
走<sup>ハ</sup>った<sup>ハ</sup>もの。

C センドモ<sup>(20)</sup> オーワライデシタンジャ<sup>ハ</sup> ホンマニ。  
大笑いでしたのよ。 ほんとし。

A キモノ<sup>ハ</sup> キタママ<sup>ハ</sup> ハシッタ<sup>ハ</sup>ンデス。ソリヤ。(笑)  
着物 着<sup>ハ</sup>た<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>ま 走<sup>ハ</sup>った<sup>ハ</sup>ん<sup>ハ</sup>です。 そりゃ

C パンツ<sup>ハ</sup>ガ アッタ<sup>ハ</sup>ジャ<sup>ハ</sup>ロカトカ<sup>ハ</sup> ナントカ<sup>ハ</sup> ユーテ  
パンツが あ<sup>ハ</sup>った<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>うか とか ざんとか 言<sup>ハ</sup>って

D シーン。 ----- ホイタラ<sup>ハ</sup> オトコノ<sup>ハ</sup> シトガ<sup>ハ</sup> ----- ナ  
ん。 そしたら 男の 人が ぢ

カッタリ -----  
か<sup>ハ</sup>った<sup>ハ</sup>り

A パンツ<sup>ハ</sup> ナイ。ソリヤ。  
パンツ(なぞ) ない。 そりゃは。

C アッタッ<sup>(21)</sup> チュー モント ナイツ チュー モントデ ナー。  
あった という ものと ない という ものとで ねえ。

コレ。

これ。

D エー。アンナ モナー ワタシラ オボエテカラ デケタ モン。(笑)  
ええ。あんな ものは わたしなどが ものジウついでからできたもので。

C オーワライデシタ。

大笑いでしたよ。

E アー、ソーデス カ。(笑)

ああ、そうですか。

C ソノ コト オモタラ イマー ヤット チガイマス ワナー ナ  
その ことを 考えたら 今ほ ずいぶん 違います わねえ。マ  
ソニモー。(笑)

にもかも。

E ナー。ホントニ ナー。アノー アレデス カー。ソノ、ムラノ  
ねえ。ほんとしに ねえ。あのう なんですか。その、村の  
シトー ソノ オトーサンヤ オカーサンタチワー ソユー ウン  
人、その、お父さんや お母さんたちは そういう 運  
ドーカイノ トキニワ ドシタンデス カ。

勤会 の ときには どうしたんですか。

A イマホド イットリマヘン。(E ア、ソーデス カ。) イマー  
今ほど 行ってません(昔はね)。 あ、そうですか。 今ほ

モー コドモノ ウンドーカイ チュータラ コドモヨソワ オヤ  
もう こどもの 運動会 といったら こどもよりは 親  
ノ ホーガ アノー ウンドーカイ タノシミニ シテ イクン  
の ほうが あのう、運動会を 楽しみにして 行くん

デスケン<sup>ハ</sup>ナー。マエニワー \*  
ですけどねえ。以前には

E デ、アノー、タトエバ<sup>ハ</sup>テマリウタ<sup>ハ</sup>ネ。(D<sup>ハ</sup>ヘー。) アレワードー  
で、あのう、たとえば<sup>ハ</sup>手まり歌<sup>ハ</sup>ね。 あれは どう  
ユー<sup>ハ</sup>フーニ<sup>ハ</sup>ウタッテ<sup>ハ</sup>イマシタ。オバーサン<sup>ハ</sup>オボエトラレマ  
いうふうには歌っていました？ おばあさん おぼえておられ  
ス<sup>ハ</sup>カ。

ますか。

D アノ<sup>ハ</sup>オバーサンラー<sup>ハ</sup>ヨー<sup>ハ</sup>シットッテヤロ。テマリウタ。  
このおばあさんなどはよく知っておいででしょ。手まり歌を。

C テマリウター。(E<sup>ハ</sup>エー。)(D<sup>ハ</sup>ウン。)<sup>(22)</sup> テマリウタモ<sup>ハ</sup>シツツア  
手まり歌？ (ええ。)(うん。) 手まり歌も  
ー<sup>ハ</sup>シラン<sup>ハ</sup>ガエナー。

知らないよねえ。

E アレ<sup>ハ</sup>ナンテ<sup>ハ</sup>ユーンデス<sup>ハ</sup>カ。コノ コー ナンカ ナカニー  
あれなんと言うんですか。この、こうなんか中に

アズキカ<sup>ハ</sup>ナンカオ<sup>ハ</sup>イレタ<sup>ハ</sup>コー<sup>ハ</sup>フクロー<sup>ハ</sup>コー  
小豆かなんかを入れた、こう袋を こう

D アー。オジャミ -----  
ああ。おじゃみ ----

A オジャミ<sup>ハ</sup>チュー (D<sup>ハ</sup>ウン。)  
おじゃみ という (うん。)

C アーアー。アリヤ<sup>ハ</sup>オジャミデス<sup>ハ</sup>ネ。オジャミデス<sup>ハ</sup>ワナ。コー  
ああ、ああ。あれはおじゃみですね。おじゃみですね。こう

シテ<sup>ハ</sup>ウエ<sup>ハ</sup>ホリャケテ。

して上に投げ上げて。

E オジャミ ユンデス カ。 (A.D. エー。) ハー。アレオ コー  
おじやみ と言うんです か。 ええ。 はあ。 あれを こう

ヤル トキニ ウタ ウタウデシヨ。

する 時に 歌 歌うでしょ。

A エー。ウタ ウトテフ。

ええ。 歌を 歌ってほ (したものです)。

C ウトタンデス。

歌ったんです。

E ソノ ウター オバーサン キカシテ クダサイ。

その 歌 おばあさん 聞かして ください。

C オジャミー チュンヤ ナイー

「おじやみー」って言うんじゃない

D エド ドッコイ ユーテ ショッチャッタヤ ナイ。エド ドッコ

「えど どんい」と言って しておいででなかったの。 「えど どん

イ エドシマ フユカラ フユカタラ<sup>(23)</sup> ナンタラ ユーテフ。

い 」とやら なんとやら 言ってほ。

C ウン。ホンマニ。ホンナ コト イーヨッタ ナー。

うん。ほんといね。ほんな こと 言っていた ねえ。

E ハー。ドーデー。コー テマリーノ ホーモウ タカ アリ ア

はあ。 どうぞ。 こう 手まりの ほうも 歌が あ

リマスンデショー カ。

リますんでしょう か。

A エー。アリマス ナー。 エー。

ええ。 あります ねえ。 ええ。

C アリマス ナー。 (A エー。)

あります ねえ。 ええ。

- E ホー。 モー オホエトラレマセン カ。 オーバーサン。  
ほう。 もう おぼえておられませんか。 おぼえん。
- C アリヤ ヒーラーミーヨーイツヨ ユテ スルヤロ。 (D ヘーン)  
あれは「ひいぶうみいよういつよう」と言ってするんでしょ。 へい。  
ソレワ スルヤケード。  
それは するのだけけど
- E ソレ オソナノ オソナノ アソビッテ ユーノア ホイジャ ホ  
それ、 女の 遊びって いうのは それじゃ ほ  
カニ ソーユー オジャミガ アッテ テンマリガ アッテ。  
かに そういう おじゃみが あって 手まりが あって。
- A ソレカラ メンコ チュー -----  
それから めんこ という -----。
- D エー。 アノ イシノ コンナ マルコイ。 (C ヘー)  
ええ。 あの 石の こんな 丸い。 へい。
- E ア。 コレ イシノ  
あ、 これ 石の
- C ハジキ チュンカ (A ウン ハジキ) コー シトイ  
はじめ というのか (うん。はじめだ。) こう しておい
- テワ コーヒテ トリヨッチャッタ。 (C エー)  
ては こうして 取ったりしていた。 ええ。
- E ハーハー。 コノ ヒラベッタ イ。 (A.C エー) (D ヘー) ア  
はあはあ。 この 平らな。 ええ。 へい。 ああ
- アレ メンコ チューンデス カ。 (A.C.D エー) ア コー チ  
あれ めんこ というんですか。 ええ。 ああ、 こう ち
- ント ハジクンデシヨ。 (A ヘー) (D ソーヤ) ア ア ア  
んと へじくんでしょ。 へい。 そうそう。 ああ。 あ。

ソーデス<sup>カ</sup>。

そうですか。

A オハジキ<sup>チュー</sup>。

おはじき という。

D ウン。オハジキヤ。

うん。おはじきだ。

E アー。ナルホド<sup>ネー</sup>。アー ソーユー<sup>モノトカ</sup> <sup>ネー</sup>。マ<sup>コレー</sup>

ああ。なるほど ねえ。ああ。そういうものとか ねえ。ま

コレ<sup>アノー</sup> キセツニ<sup>ヨリマス</sup> <sup>ヨネー</sup>。タトエバ<sup>ショー</sup>

これ あのう 季節に よります よねえ。たとえば、正

カツダッ<sup>タラー</sup> アノー ハネ-----

月 飛べたら あのう はね-----

A.D ハネツキ。

D ソンナ<sup>モンモ</sup> <sup>ネツカラ</sup> ヒドク (笑)

そんな ものも ねっから ひどく

A エー。ソリヤー<sup>ハネツキモ</sup> マエニワ<sup>ナカッタデス</sup>。

ええ。それは 羽根つきも 前にほ なかったですよ。

E ア。ココン<sup>ナカッタデス</sup> <sup>カ</sup>。

あ。ここに なかったです か。

A エー。タコワー<sup>アリマシタケン</sup> <sup>ナー</sup>。ワリアイ<sup>ハヨーカラ</sup>。

ええ。飛は ありましたが ねえ。わりあい 早くから。

C イマデモ<sup>モー</sup> <sup>ヒドク</sup> <sup>ナイデス</sup> <sup>ナー</sup>。ハネモ。 ハネツキモ。

今でも もう ひどく ないです ねえ。羽根も 羽根つきも。

E ア。ソーデス<sup>カ</sup>。

あ。そうですか。



A ヘー。イマ<sup>ー</sup>ワ<sup>ー</sup> アノ<sup>ー</sup> ハゴイタワ ( チツ<sup>ッ</sup>ア<sup>ァ</sup> アルケ<sup>ー</sup>  
 はい。 今<sup>は</sup> あの<sup>う</sup> 羽<sup>子</sup>板<sup>は</sup> す<sup>っ</sup>い<sup>は</sup> ある<sup>け</sup>  
ド。 ) ナカ<sup>ナ</sup>カ<sup>カ</sup> ヨ<sup>ー</sup>ケ<sup>ー</sup> デ<sup>ト</sup>ル<sup>シ</sup> ソ<sup>ノ</sup>、ハ<sup>ネ</sup>ツ<sup>キ</sup>ワ<sup>ー</sup>  
ど。 ) な<sup>か</sup>な<sup>か</sup> た<sup>く</sup>さん 出<sup>て</sup>る<sup>し</sup>、 そ<sup>の</sup>、 羽<sup>根</sup>つ<sup>き</sup>は  
ヤ<sup>ラ</sup>ナ<sup>ン</sup>ダ。

やらなかった(昔は)。

E ホ<sup>タ</sup> オ<sup>ト</sup>コ<sup>ノ</sup> コ<sup>ノ</sup> コ<sup>ン</sup>ダ<sup>ハ</sup> コ<sup>マ</sup>マ<sup>ア</sup>シ<sup>ワ</sup> ド<sup>ー</sup>デ<sup>ス</sup>カ<sup>。</sup>  
 そ<sup>し</sup>たら、 男<sup>の</sup> 子<sup>の</sup> こ<sup>ん</sup>ど<sup>は</sup> 独<sup>楽</sup>ま<sup>わ</sup>い<sup>は</sup> どう<sup>で</sup>す<sup>か</sup>。

A ホ<sup>コ</sup>マ<sup>ワ</sup> ヤ<sup>リ</sup>マ<sup>シ</sup>タ<sup>。</sup>  
 独<sup>楽</sup>(ま<sup>わ</sup>い)は や<sup>り</sup>ま<sup>し</sup>た<sup>ね</sup>。

C ア<sup>レ</sup>ア<sup>ヨ</sup>ー チョ<sup>ッ</sup>チョ<sup>ッ</sup>ト キ<sup>ー</sup>ノ<sup>キ</sup>ー<sup>デ</sup> コ<sup>ン</sup>ナ<sup>ー</sup> コ<sup>シ</sup>  
 あ<sup>い</sup>は よ<sup>く</sup> ち<sup>よ</sup>ち<sup>よ</sup>と 木<sup>の</sup> 木<sup>で</sup> こ<sup>ん</sup>な<sup>の</sup> こ<sup>し</sup>  
ラ<sup>エ</sup>テ ショ<sup>ッ</sup>テ<sup>デ</sup>シ<sup>タ</sup> ナ<sup>ー</sup>。  
 ら<sup>え</sup>て し<sup>て</sup>お<sup>い</sup>で<sup>で</sup>した<sup>ね</sup>え。

A ミ<sup>ナ</sup> コ<sup>シ</sup>ラ<sup>エ</sup>ーヨ<sup>ッ</sup>タ<sup>ン</sup>デ<sup>ス</sup>。ジ<sup>ブ</sup>ン<sup>デ</sup>ー。  
 み<sup>な</sup> 作<sup>っ</sup>て<sup>い</sup>た<sup>も</sup>の<sup>な</sup>ん<sup>で</sup>す。 自<sup>分</sup>で<sup>。</sup>

E ジ<sup>ブ</sup>ン<sup>デ</sup>ー。  
 自<sup>分</sup>で<sup>ね</sup>え!

A.D ヘー。  
 はい。

C コ<sup>ノ</sup> コ<sup>ロ</sup>ワ<sup>マ</sup>タ<sup>オ</sup>ー<sup>キ</sup>ナ<sup>ハ</sup>ネ<sup>カ</sup> ア<sup>ノ</sup>ー ナ<sup>ニ</sup>ヤ<sup>ー</sup> シ<sup>タ</sup>  
 こ<sup>の</sup> こ<sup>ろ</sup>は <sup>(24)</sup>また <sup>(24)</sup>大<sup>き</sup>な 羽<sup>根</sup>が あ<sup>の</sup>、 な<sup>ん</sup>で<sup>す</sup>  
ノ<sup>ゴ</sup>イ<sup>ダ</sup>イト オ<sup>ー</sup>キ<sup>ナ</sup> ナ<sup>ー</sup>、 ( エ<sup>ー</sup>。 ) セ<sup>ン</sup>エ<sup>ン</sup>モ<sup>ダ</sup>ス<sup>ヨ</sup>  
 大<sup>き</sup>な、 ねえ ( ええ、 ) 千<sup>四</sup>も 出<sup>す</sup>よ

ーナ<sup>ン</sup>オ<sup>コ</sup>ー<sup>テ</sup> シ<sup>ト</sup>リ<sup>マ</sup>ス<sup>ナ</sup>ー。  
 う<sup>な</sup>の<sup>を</sup> 買<sup>っ</sup>て<sup>し</sup>ま<sup>す</sup> ねえ。

A イマ<sup>ア</sup>セーヨーダコ<sup>ア</sup> チューノヤカ<sup>ア</sup>アーノ、<sup>セ</sup>セーヨーダコカ  
今、西洋風 というのだが、あの、<sup>セ</sup>西洋風か  
(<sup>シ</sup>シラン。) ナニヤラガ、カミカ<sup>ア</sup>カワッテ<sup>ア</sup>キテ。  
しらん。あれが。紙が かわって きてね。

E ホントー。  
ほんとに。

D ナイロン<sup>ア</sup>ナッタ。  
ナイロンに なった。

A ウン。ナイロン<sup>ア</sup>ナッタケド。マエワ<sup>ア</sup>カンバツカデシタ。ヤッコ  
うん。ナイロンに なったけど。以前は 紙ばかりでした。奴  
ダコ。タコモ<sup>ア</sup>コシラエヨッタ<sup>ア</sup>ンエス。<sup>ジ</sup>ジブンデ<sup>ア</sup>ネー。  
風。風も 作っていたんです。 自分で ねえ。

エー。  
ええ。

E ソーソーソーソー。ムカシワ<sup>ア</sup>ソーデシタ<sup>ア</sup>ネー。  
そう そう そう そう。昔は そうでした ねえ。

A コマ<sup>xxxx</sup> コママ<sup>ア</sup>ーシ<sup>ア</sup> チューナー<sup>ア</sup> アレデ<sup>ア</sup> カッツケゴマ<sup>ア</sup> ユター  
独楽まわし というのは、あれで かつげゴマ と言って  
(<sup>ホ</sup>ホーマニ。) ムコーニ (<sup>エ</sup>エー。) コマニ コ カッツケテ  
(<sup>ホ</sup>ほんとに。) 向こうに (<sup>え</sup>ええ。) 独楽に こう かつげ  
ワ ソシテ ショーブ<sup>ア</sup> ショッタンス<sup>ア</sup> ナー。(笑) マー<sup>ア</sup>  
は そして 勝負 していたんです ねえ。あれ。 まあ  
カクレンボニ<sup>ア</sup> オニゴト。ソーユー マ<sup>ア</sup> アソビデス<sup>ア</sup> ナー。アソ  
かくけんぽし 鬼ジーン。そういう まあ、遊びです ねえ。遊  
ビ<sup>ア</sup> チュー<sup>ア</sup> タラ。  
びと いったら。

E ア。

ああ。

D ン、ナフトビワ アリヨリマシタ ナ。

ん、縄飛びは ありました ねえ。

E ア、オンナノ コワ ナフトビ ナ。 (D ウン。) オンナノ コデ

あ、女の 子は 縄飛び ね。 (うん) 女の 子

→  
シヨ。

でしょ。

D エ。 オンナノ コ。 \*

はい。 女の 子。

C モー ホンマニ ウンドー カイワー タイシタ モンデス ワ。

もう ほんとに 運動会 は (それはそれは) すごい ものです ね。

モー フジンカイノ ナニモ モー ミンナー スルヨー ナツテ。

もう 婦人会 の 人たちも もう みんなが する ように なる。

E イマワ ネ。

今は ね。

C ヘ。 イマワ。

はい。 今は ね。

E ムカシワ ソーヤ ナカッタ ワケ。 (D ヘ。) アー、ソーデス

昔は そうでは なかった。 わけで。 (はい) ああ、 そうです

カ。

か。

D ホシカイ ユーンガ アルンデモ メツタニ ソノイ ミンナー

母子会 というのが あるのでも (あっても) めったに そのように みんな

キヨッチャー シマヘナンナ。 (E アー、ソーデシヨ ネー。)

来られたりは しませんでした ね。 ああ、 そうでしょう ねえ。

- C ドエライ コッテス。  
(今は) たいへんです。
- A コエ ムイドクンナハレ。  
これ むいて下さい。(どうぞ)。
- E ハー。アリガトー ゴザイマス。  
はあ。ありがとう ございます。

## 注記

- (1) 旧村名。
- (2) 地名。
- (3) 地名。於与木の北、舞鶴に最も近い。
- (4) 名はアイである。それがこう聞かれる。
- (5) 小学校時代を語るという主題がA氏の念頭に生きていて、ここで話を元に戻した。
- (6) 「ウメザコ」がほとんど「メザコ」に近く聞こえる。すぐ次には、「メザコ」とある。
- (7) この発話は、離れの方で孫の泣き声ができるのに気づき、隣に座っているD氏に声をかけたもので、上来の話の展開とは無関係である。
- (8) この応答は、直前のB氏の声に対するもの。こう答えておいて、すぐにこの場の話にたちもどっている。
- (9) D氏の問いかけが自分に対するものと思い、立ち上がりながらこう聞き返した。
- (10) ここで、ドアを閉める音。B氏退室。
- (11) これは、室外に出たB氏が室内のD氏に対して(と思われる)言ったことば。
- (12) B氏のことばに室内から応答した。ドアをへだてて。
- (13) B氏遠ざかりつつ言うことば。孫に対して。
- (14) 「デス」が「エス」に聞こえる。A氏の発音に多い。
- (15) 文法的には「ショクインシット」に付属すべきものであるが、音声的には大きく切れた。あたかも、「ダケ」が自立語であるかのように。本来接続助詞である「が」が、文頭に接続詞として自立するのにも似たものと考え、ここには分かち書きをした。
- (16) 「ホシテ」であろうが、どうしてもこう聞こえる。
- (17) 「デス」の「ス」の母音、丸口の明確な[u]。
- (18) 「アイカデ」の意不詳。A氏も首をかしげられる。文脈から、「間で」と解しておく。
- (19) この短文、内容的には、前の「----- マイテ。」に続く。

(20) ついに未詳。

(21) これも、前の自分の発話に続く。このあたり、話がはずんで輻輳している。

(22) 未詳。「そいつは」か？

(23) この歌、記憶のみがえらす。

(24) 未詳。

## 4. こどものおやつ

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)            |
|------|-------|-----|-----------------|
| A    | 山室二郎  | 男   | 明治31年生まれ<司会役>   |
| B    | 山室富江  | 女   | 明治41年生まれ        |
| C    | 坂本アイ  | 女   | 明治27年生まれ        |
| D    | 坂本ヨシノ | 女   | 明治36年生まれ        |
| (E)  | 佐藤虎男  | 男   | 大正15年生まれ<同席担当者> |
| F    | 山室 梢  | 女   | 昭和18年生まれ<山室家の嫁> |

E ダイイチ ソノ コドモノ アレデ コノ オヤツカラシテ  
 だいいち その、 こどもの あれで この、 おやつからして  
コユ ----- (笑)

こういう -----

B ナニカ モア ヤラン ナランデ カイマスデ ナー ヒャクエ  
 なにか もう やらなくてはならぬから 買いますからねえ。百  
シグライデモ カイ シマヘンヤロ カナー。 (E ナー。)  
 田ぐらいでも 買いは しませんでしようかねえ。 (ねえ(ほんとに))

ソレガ ワタシラーノ コドモノ トキワ アノ サツマイモオ  
 それが わたしなどの こどもの 時は あのう、 さつまいもを  
ゴンゴロクルマデ モッテ イッテ ネー。 アノ オテラノ  
 ぶんぶん車ウで 持って 行って ねえ。 あのう お寺の  
シタマデー。 ホシテ アノ イモセンベオ シテ モロテ コ  
 下まで。 そして あのう、 いもせんべいを して もらってニ

ドモア モロツタラ ネー。ホイテ ヤ アノ タベサスナリ、ア  
 どもが モどつたら へえ。 そして あの、食べさせるし、あ  
 ノー ワタシラー アノー シュジンガ ツトメトリマシタモンジ  
 のう、わたしなど あのう、主人が 勤めておりましたものだ  
 ヲデ デ ワタシア キバツテ シトリデ シゴトセン ナンモヤ  
 から、で、わたしは かんぽって 一人で 仕事しなげればならぬ  
 デ ガッコーカラ モドツタラ フロタキサセルンニ ネー。  
 ものだから、学校から モどつたら、風呂たきさせるのに へえ。  
 ソノー ウラ イッテ ホツテ イエタル オイモサン トツテ  
 そのう、裏へ 行って 掘って、植えてある おいもさんを取って  
 キテワ ヤイテ ホイテ ミンナ、ア、ココラヘンワ イマコソ  
 オフは 焼いて そして みんな、あ、こいらあたりは 今日ンヤ  
 コノ、オンナノ コヤケド オトコノ コバッカシデシタガ オト  
 ンの、女の子(が多い)けど、男の子ばかりでしたが、男  
 コノ ナー。(<sup>D</sup> うん。) シタノ カズオチャンヤラ オカメチ  
 の へえ。 うん。 下の 和夫ちゃんやら お亀ちゃ  
 ヲトコノモ ミンナ オトコノ コーデ。アンタトコノモ ナー  
 んとこのも みな 男の子で。あんたとこのも へえ。  
<sup>ア(ウ)</sup>  
 ア。マサシチャンモ オトコバッカシデ アノ ア  
 まさしちゃんも 男ばかりで あの、  
 スンデ、アソブ ユータカッテ ヤネオ ハシッテ アルイテ  
 遊んで、遊ぶと言ったつ 屋根を 走って 歩いて  
 来ズ アノ スズメノ スーヲ サカイタリ ソンナ コトバッカ  
 あの、雀の 巣を探したり、そんな ことばか  
 シ シテ アソンデ モ イマワ ボールナゲヤラ シテヤケド  
 ソ して 遊んで、 今ほ ボール投げやら してるけど



チーア。ムカシト チカウシヤ。  
ねえ。昔と 違うんです。

A ムカシノ オヤツワー ソラマメノ イツタンカ ソレシカチ ナ  
昔の おやつは そら豆の 煎ったのか。それしか ち  
カッタ モンスワ。(笑) ヒャクショーヤノ コドモア モー……  
かった ものですよ。百姓屋の ンどもは もう……

C ナニカ スキジャ シランカ オマメサン タベト  
好きなのかしらないが お豆さんを 食べ  
ッテヤ ナ。  
いますよ。

A ソラマメノ イツタンクライカ モー オヤツヤツタンデス。(E  
そら豆の 煎ったのぐらいが もう おやつだったんです。

チー。) イマ ミナ オカシオ オヤツニ モロトルケードモ。  
ねえ。) 今 みな お菓子を おやつに もらっているけれども。

E アノー ボクノ ネー。チーサイ トキニワ コノ ナンテ ユー  
あのう。ぼくの ねえ。小さい 時には この 子んと言  
カ、アレア ナツゴロデス カナー。ムギワラデー コー ナ  
か。あれは 夏ごろです かねえ。麦わらで ンう ち  
ンカ カゴオ ツクリマシテ ナー。  
んか 籠を 作りまして ねえ。

D ギスカゴツ。  
ギスカゴツだね。

B フン。  
ふん？

E ネー。(5)  
ねえ。

B ギスカゴイ <sup>(b)</sup>ケ。  
ギスカゴイに か。

E ホテ ナンカ コー アカイ ミオー ソン ナカエ イレマシテ  
そして なんか こう 赤い 実を その 中へ 入れまして  
ネ。 ( <sup>D</sup> ランラン。 ) ソレオ タバタ。 アレワ イスラウメト  
ね。 ( ふんふん。 ) それを 食べた。 あれば いすら梅と  
ボクワ イッタト ~~~~~  
ぼくは 言ったと

A アー。 イスラウメ チュノワ アリマス。  
ああ。 いすら梅 というのは ありますよ。

C アー。 イスラウメ カ。 ( <sup>D</sup> ウン。 ) アー。 ソーソー。 イスラウ  
ああ。 いすらうめ か。 ( うん。 ) あ。 そうそう。 いすら  
メンテ アリマス ナー。  
梅って あります ね。

E アリマシタ ナー。  
ありました ねえ。

D エー。 アリマシタ。  
ええ。 ありました。

E ナンカ コノ ヘンデモ ヤハ ソーユーノワ.....  
なんか この へんでも やはり そういふのは.....

A エー。 アリマス。  
え。 あります。

C アリマス。  
あります。

B アリマス デ。 ウチニ。  
あります よ。 うちに。

E ジャー アノ ホイデ アノ コー カゴモ ヤッパイ アイマ  
ば あの それで あの こう 籠も やっぱり  
アミマス カ。  
編みます か。

A カゴワ ヤリマヘンデス ナー。  
籠は しませんです ねえ。  
(7)

B リスオ イレルンノニ アーノ (A アノ ギス...) キヨーナ シ  
きりぎりすを 入れるのに あの (あの きりぎり...) 器用な 人  
トワ ネー。 アミヨツテシタ。  
(8)  
は ねえ。 編んでおられました。

A ア ムシオ ネー。 アー ギス ユー、アレア ギリギリスッ  
あ、虫を ね。 あ、「ギス」という、あれは きりぎりす  
チュンカ シランカ ムシオ トツテ キテ ソノ カゴ イレテ  
と いうのか 知らないが 虫を取って 来て その 籠に入れて。  
デ アノー ナカシテ ミヨリマシタケン ナー。  
で、あう 泣かして 見ましたけど ねえ。

E アー、ソーデス カー。 (9) コノ ヘンデスカラ ソノー (B マエデ  
ああ、そうですか。 この へんですから その 前で  
ゴメンクダシャイ イー。) オカシオ ウル ベツニ オミセカ  
ジめん下さい と言います。 お菓子を 売る、別に お店が  
アル ワケジャ ナシ ネー。 ムカシワ。 オソラク。  
ある わけでは ない ねえ。 昔は。 おそらく。

D ハー。  
はあ。

A ヘエー。 ソーデス。  
はい。 そうですよ。

B オナミサンワ<sup>↑</sup> ワタシカ<sup>↑</sup> キタ<sup>↑</sup> トキワ<sup>↑</sup> シトツチャッタ<sup>↑</sup> デ。  
おなみさんは わたしが(嫁に)来た時は(店を)してあげられたよ。

C ナニオ<sup>↑</sup>。  
なにを?

B オナミサンカ<sup>↑</sup> センベー<sup>↑</sup> ウットツチャッタ<sup>↑(10)</sup>。  
おなみさんが 煎餅 売っておいでだったというのよ

C ウットツチャッタ<sup>↑</sup> テカ<sup>↑</sup>。  
売っておいでだったって?

B ヘーイ。  
はい。

A マー<sup>↑</sup> マメイリ。ソレカラ<sup>↑</sup> アーノー<sup>↑</sup> グミッチ<sup>↑</sup> ユー<sup>↑</sup> チョード<sup>↑</sup>  
まあ 豆煎り。それから あのう。ぐみという。ちゅうど  
アカイ<sup>↑</sup> ミーガ<sup>↑</sup> ロクカツコロニ<sup>↑</sup> ~~~~~。  
赤い 笑が 六月ごろし

E グミカ<sup>↑</sup> アリマシタ<sup>↑</sup> ナー。(A<sup>↑</sup> ヘー。) グミツテ<sup>↑</sup> イーマス<sup>↑</sup>。  
ぐみが ありました ねえ。( はい。 ) ぐみと 言いますか。

ヤッパリ。(A<sup>↑</sup> ヘー。) アレワ<sup>↑</sup> ヒョーマン<sup>↑</sup> ツルツル<sup>↑</sup> シタ。  
やっぱり。( はい。 ) あれは 表面が つるつる したね。

(A<sup>↑</sup> ヘイ。) ア、ソーソーソー。 \*  
( はい。 ) あ、そうそうそう。

A ソレカラ<sup>↑</sup> ソーユー<sup>↑</sup> ミーガ<sup>↑</sup> アル<sup>↑</sup> トキワ<sup>↑</sup> グーミ<sup>↑</sup>。ソレカラ<sup>↑</sup>  
それから そういう 笑が ある ときは ぐみ。それから  
カキ。

柿

B ツルシカキ<sup>↑</sup> ヨ<sup>↑</sup>。  
つるし柿 よ。

A ツルシカキジャラ<sup>^</sup> アマカキヤラ。  
つるし柿やら 甘柿やら。

B クシカキ。  
串柿。

A イマー アノー アマイ<sup>^</sup> カキデモ コー<sup>^</sup> チサイ<sup>^</sup> カキヤナンカ  
今ほ あのう あまい 柿でも ough 小さい 柿さんどほ  
ワ<sup>^</sup> ホトンド<sup>^</sup> クーマヘン<sup>^</sup> ナー<sup>^</sup> コドモワ。  
ほとんど 食べません ねえ。 ンどもほ。

D アッちゃんラー<sup>^</sup> ナー<sup>^</sup>。アノ クカツノ<sup>^</sup> ツイタチニ  
あっちゃんら ねえ。 あの、 九月の 一日に  
チャッタ。  
ておいでだったよ。

B エー。<sup>→(11)</sup>  
ええ？

D ツイタチガ<sup>^</sup> コンサキニ<sup>^</sup> タベヨツチャッタ。  
一日が 来ないうちに 食べておいでだった。

B ホンマニー。  
ほんとにねえ！

A カキオ<sup>^</sup> ヨー<sup>^</sup> クタ<sup>(12)</sup> モンジャケード イマ<sup>^</sup> カキモ<sup>^</sup> クイマヘン<sup>^</sup>。  
柿を よく 食べた ものだけけども 今ほ 柿も 食べませんね。  
イマノ<sup>^</sup> コドモワ。  
今の ンどもほ。

B へー。 ナッテモ<sup>^</sup> ナー<sup>^</sup>。 ワタシトコノ<sup>^</sup> ココニ<sup>^</sup> イシクボ<sup>^</sup> ユー<sup>^</sup>  
ほい。(柿が) なくても ねえ。 わたし(の家)の ニニに い(くほ) という  
カキデモ ダーレモ<sup>(13)</sup> ユーテ<sup>^</sup> ナイ<sup>^</sup> ワー。(笑)  
柿でも だれ一人 くれとも 言われないわ。

ジューネンモ マ ノボレヘン ナー。ダレモ。 (D・E ハー。)  
十年も ま (柿の木に) のほりませんねえ。だれも。 (はあ。)

アンナンナラ キッタラ エーワ。  
あんな木なら 切ったら いいね。

E アー、ソーデス カ。シゼンニ デキタ モノオ タベテマシタン  
ああ、そうですね。自然に できた ものを 食べていましたん  
ヤッ。  
ですね。

A ソーデス ナー。  
そうですね。

B ハー。ソーデス デー。ソラ アノー オカシー ハナシヤケード  
はい。そうですね。そりゃあもう、おかしな 話だけれど  
ワタシガ<sup>××××××</sup> ワタシノ オヤモト、ワタシノ ママ<sup>△</sup> マレタ イエワー  
わたしが わたしの 親元、わたしの 生まれた 家は  
カキノ キガ ヤット ナカタンデスンヤッ。ホンデ ワタ  
柿の 木が たくさんほ ずかたんですのよね。それで わた  
シャ ヨメサンニ イクンヤッタラ カキノ キノ ヤット アル  
しほ 嫁さんに行くんだったら 柿の 木の たくさん ある  
イエー (E ハー。) イカン ナン オモテ。(笑)  
家へ (はあ。) 行かしゃない と思って。

E ナカナカ オクサン オモシロイ。(笑) チャント カキノ キガ  
ずかずか おくさん おもしろい。ちゃんと 柿の 木が  
アリマシタ。(笑)  
ありました。

B ハー。コノ イエヤッタラ モー ヤット ヤット ナンボデモ  
はい。この 家だったら もう たくさん たくさん いくらでも

アノハタ イッテモ イマデモ ナンボデモ オジーサン、ドコ  
 あの、畑へ 行っても 今でも いくらでも 「おじいさん、どん  
 ノン カキ モッテ キタテ ユータラ アソコノヤー。ソーカ。  
 のを 柿を持って来た。」と言ったら 「あそこのだ。」 「そうか。  
 マタ モー アカナンダケド メーガ デテ イッパイ ナットル  
 「また もう だめだったけど 芽が 出て いっぱい 芽ってる。」  
 ユーテ、ユーテ ヤットー ウチア アッテ、ホテ モー シト  
 と 言って、 言って、 たくさん うちほ (柿が) あって。 そして もう ーフ  
 ツワ アノ コー カエル 下キニ アノー カクマチャン ユー  
 ほ あの、 ふう、 (学校から) 帰る 時に あのう、 かくまちゃん という  
 テ ワタシヨソ シトツ オーキー イエノニ コー ナニヤラガ  
 わたしより ーフ 大きい (人の) 家に ふう、 牙にヤラガ  
 アッタンデス ワナ。 ナツメノキガ。 (E ハイ。) ホシタラ  
 あったんです わ。 芽つめの木がね。 はい。 そしたら  
 ナー。 ソレガ ミチエ オチトルサカイ キタナイデ ヒロテ タ  
 ねえ。 それが 道に 落ちてるから またないから 拾って、 食  
 ベラレン ユーテ ワタシノ テテオヤデ キビシー シトヤッタ  
 ベてはいけな い と言って わたしの 父親で まじしい 人だった  
 デ ソンナ モン タベタラ モー クチナワン ナルデ タベナ  
 から そんな もの 食べたら もう 蛇に 牙るから 食べるな  
 ヨ ユーテ ホイテ シカラレヨッタデ ホンデ マー ワタシ  
 よって 言って、 そして 叱られたりしたから それで まあ わたし  
 モ ヨメサンニ イクンマッタラ ナツメノキガ アル イエー (笑)  
 も 嫁さんに 行くんだったら 芽つめの木が ある 家へ  
 D ソレワ ナカッタ カイノー。(15)  
 それは 芽つめた かねえ。

B キテ ウエタンヤノニ。ホンデ ワタシカ。ナエ モロテ キテ。  
来て 植えたんですのよ。それでわたしが。苗を もらって 来て。  
アー オッカ。ホタ イマ ダーレモ タベヘシ。ヒトツツモ。ホ  
ああ。おもしろ。そしたら 今 どれも 食べやしない。ちっとも。ほ  
ンマニ オモシロイ。

んとし おもしろい。

A モー コドモワ ソーユー モノオ タベンヨン ナリマシタ。  
もう こんどもは そういう ものを 食べないように なりましたよ。

E ソーデス ネー。  
そうですね。

B シトツツモ タベシマヘン ナー。モー シヤナイデ オジーサン  
ちっとも 食べやしません ねえ。もう (ほうがよいから、おじい  
モ ダンネンシマスデ キッテ クダサイ ユーテ キッテ  
さん、もう 断念しますから 切って 下さい) と言って、切って  
モータンデスが ナー。(笑) ハー。

もらったんですが ねえ。 ほうい。

A ムカシワー ヤマ イッテ イタドリ チュー ----- (B エー。)  
昔は 山へ 行って いたどり という ----- (ええ。)

E アレ イタドリテ イーマス カ。 (A へー。) ナンテ ユーン  
あれ いたどりと 言います か。 (ほうい。) なんと 言うん  
デス カ。  
ですか。

A イタドリ チュー。  
いたどり と言う。

E イタドリ チーマス カ。 (A エー。) アー ソーデス カ。  
いたどり と言います か。 (ええ。) ああ。そうですね。



アレ コー ナンカ スポット コー キッテ (A ハエ。) スッパ  
あれ こう なんか すぽっと こう 切って (はい。) すっぱ  
い (A ハエ。) ネ。ソーソーソー。  
い (はい。) ね。そうそうそう。

A アレオ トッテ ヨー クイマシタシ ナー。(笑)  
あれを 採って よく 食べましたし ねえ。

B ホイテ アノー カエリニデモ ジノト<sup>(16)</sup>デモ トリヨッター。(笑)  
そして あのう、帰りにでも 「じのと」でも 採ってたものです。  
ジノトノ トーオ ナーア。  
「じのと」の とうを ねえ。

A イマワ ソンナ モンワ ゼンゼン クワンヨーニ ナッシモタン  
今は そんな ものほ ぜんぜん 食べないように なってしまったん  
ヤデ (E ナー。)   
だから。 (ねえ。)

B モー アンタ、アー シテ オカヤサンイ キテ ミ ダ ドコノ  
もう あなた、ああして 岡屋さんが 来て どの  
コーデモ コーテ モラウンニ シトリマスデ ナーア。オヤモ  
子でも 買って もらうんとし していますから ねえ。 親も  
コーデ ヤルンニ シトッテヤ シー  
買って やるんとし しておられるし。

E ソーデス ヨネー。  
そうですね。

A マー アーノ サンサイーデ フキトカ ワラビトカ ユー モノ  
まあ、あのう、山菜で、 露とか わらびとか いう もの  
ワ ミナ トッテ タベマスケン ナー。ソレワ モー ショクリ  
は みず とって 食べますけど ねえ。それは もう 食料

ヨーニ スル ワケデスシ。

に する わけですし。

E ソーデス、ソーデス。アノ ショーカツーニ アノ オモチオ  
そうです。そうです。あのう、正月に あの お餅を

ツイ、イナカ ヨク オモチ ツキマス ヨネ。 (A ハエ。)  
つい、田舎は よく お餅を つきます よね。 (はい。)

デ ソノー オモチオ ツイタ トキニ カキモチオー ツクッタ  
で、その、お餅を ついた 時に かきもちを 作った

り、 (D アー、ソーデス ナー。) ネッ。アラレオ ツクッタリ、  
り (ああ、そうです ねえ。) ねえ。あうれを 作ったり、

ソレワ ヤッパリ。

それは、やっぱり。

A ヘー。ヤリマス。ケド ダイブ スクノ ナリマシタ。

はい。やりますよ。けど だいぶん すぐなく なりましたよ。

B ソレデモ タベシマセン ワナー。ワタシトコノ キョネン アレ  
それでも 食べやしませんわよ。わたしのとこの(家は) 去年 あれ

フダウス シタンカ シランカ コトシモ ツイトキマヒョ カッ  
ニ 白 (たのか しらないが 今年も ついておきましょうか

チュテ アノ ヨメニ トータラ マンダ

と言って、あの 嫁に 問うたら まだ

## 注記

- (1) 大八車の小さいもの。輪金のほまつた荷車。
- (2) 隣に座っているD代に対して。
- (3) [su:wo]
- (4) 声をひそめてB代に。「ギスカゴ」は、チリチリすを入れる籠。当地では麦わらで作ったという。直前のEの発言は、麦わらで編んだ籠に、ぐみ・いすう梅の実を入れた昔の子どものおやつにまつわる話である。
- (5) 「ギスカゴ」の意味がわからないうまま、自分の説明が理解されていると思ひこんで、念を押している。
- (6) 「ギスカゴイケ」の「イ」はよくわからない。いちおう助詞の「に」と解した。「ケ」は問いの文末詞にちがいないが、当方言では、「ケ」は言わないという。
- (7) 「ギス」が「リス」と聞こえる。チリチリすを「ギス」という。
- (8) 「アミヨツテデシタ」の熟した言い方。
- (9) 孫さんが立ち上がって歩くので、こう言った。
- (10) C代の耳元で、声をひそめて。
- (11) D代に対する聞き返し。すこし耳が遠い。
- (12) 明かな短呼である。
- (13) 「ダーレモ クレートモ」の話部頭。ダとクに強勢。
- (14) 「ソナナ」の「ソ」、「クチナワン」の「ク」に強勢。
- (15) 老女間にも「カイナー」文末詞が使われる。
- (16) 「じのと」は草の名。いたどりに似た植物。

## 5. こどものころ

話(手)

| (略号) | (代名) | (性) | (生年)           |
|------|------|-----|----------------|
| A    | 渡辺信一 | 男   | 明治43年生まれ       |
| B    | 渡辺久子 | 女   | 大正7年生まれ        |
| C    | 渋谷計二 | 男   | 昭和2年生まれ <司会役>  |
| D    | 佐藤虎男 | 男   | 大正15年生まれ <同席者> |

C シカシ アレヤ ナー。アノ ワカイ トキカラ デオトルケドモ  
 しかし なんぢがねえ。 あの 若い 時から 出会ってるけれども  
 チットモ カワレヘン ナー。 オタガイニ。  
 ちっとも 変わらないうねえ。 おたがいに。

A カワラン ナー。<sup>(1)</sup>  
 変わらないうねえ。

C チョット コー シロイ モンガ フェルグライデ ナー。  
 ちよっと こう(頭に) 白いものが ぶえるぐらいでねえ。

A ソージャー。ワシガ アノ ヒガシマイズルエ カヨトル ジブン  
 そうだよ。 わしが あの 東舞鶴へ 通ってる 時分  
 マンダ アンタ チューガッコノ セートヤツタンジャカラ。  
 まだ あんたは 中学校の 生徒だったんだから。

C ソーヤ。フン。アレ ドーヤ イナー。ソノー ホンナンヤツタ  
 そうそう。ふん。(とこうぞ) あれ どうなんだろうね。その、そうすると  
 ラ ボクトワ ダイブ チガウ ワケデ ヒトマワリイジョー ナ  
 ぼくとは だいぶん 違う わけで、一回り以上

〆ガウ 〆ワケヤケン 〆ナ。 〆チガウ 〆ワケヤケドモ。 〆マー 〆ボクワ  
 〆違う 〆わけだけどもねえ。 〆違う 〆わけだけども。 〆まあ 〆ぼくは  
 〆ボクノ 〆コドモジダイニ 〆マー 〆チョット 〆アル 〆テード 〆オボエ  
 〆ぼくの 〆子ども時代は(ついて) 〆まあ 〆ちょっと 〆ある 〆程度 〆覚えて  
 〆トル 〆ワケヤケド 〆マ 〆ボクノ 〆コドモジダイト 〆シンチャンノ<sup>(2)</sup>  
 〆いる 〆わけだけど、 〆ま、 〆ぼくの 〆子ども時代と 〆信ちゃんの  
 〆コドモジダイトワ 〆コー 〆ダイブ 〆チガウ 〆オモウンヤケン 〆ナ。  
 〆子ども時代とは 〆こう 〆だいぶん 〆違うと 〆思うんだけどねえ。

A 〆ソーヤ 〆ナ。 〆ダイブ 〆ニジュ 〆ネンカラ 〆チガウンニャロデ。  
 〆そうだねえ。 〆だいぶん 〆二十年以上も 〆違う

C 〆ロクジュ。 〆ソヤ 〆ナ。 〆オーカタ 〆ニジュ  
 〆六十。 〆そうだね。 〆ダイトニ 〆二十。

A 〆ネ 〆ネーチャン 〆ネーチャントー 〆チョード 〆ヒトマワリ 〆チガウ  
 (あなたの) 〆姉ちゃんと 〆ちょうど 〆一回り 〆違う  
 〆ンカト。  
 〆んかま。

C 〆アネカ 〆ドーヤ 〆イナ。 〆アレ。  
 〆姉が 〆どうだろうかなあ。 〆あれ。

A 〆フタマワリ 〆チガウ 〆ンカイター。  
 〆二回り 〆違うんかねえ。

C 〆ヒトマワリ 〆ユータラ 〆ジュ 〆ニーヤ 〆ワナ。  
 〆一回りと 〆いったら 〆十ニだ 〆よねえ。

A 〆ジュ 〆ニー。  
 〆十ニだ。

C 〆ネーチャント 〆ヒトマワリ 〆グライヤ 〆ナ。 〆アレカ 〆イマ 〆ゴジュ  
 〆姉ちゃんと 〆一回りぐらいだねあ。 〆あれ(姉)が 〆今 〆五十

一シーカ。ゴジュ一シーヤカラ ヒトマ……  
四か。五十四だから一回り

A ウン。チョード ロクジュ一ロクヤデ。  
うん。ちょうど 六十六だから。

C ヒトマワリヤ十。  
一回りだね。

A ヒトマワリヤ<sup>(3)</sup>十。  
一回りだね。

C ヒトマワリヤ十一。ハ一。(Aハ一。) ソヤ十一。シンチャ  
一回りだねえ。はあ。(はあ。) そうだねえ。信ちや  
ンラノ コドモジダイ チュノワ ド一ヤ一。モ一 コン一  
んらの ンども時代 というのは どうなんだね。もう ンんち  
ヨーフクテナア アッタ一ンカ。  
洋服というのはいったいかな。

A トテモ トテモ ソンナー ヨーフクワ一 ナカッタ一。  
とても とても そんな 洋服は なかったねえ。

C ア一、ソ一カ。  
ああ そうかね。

A ハ一。ワシラン コドモジブンワ アノ一 ソレコソ アノ一  
はあ。わしらの ンども時分は あのう それんや あの  
イトオ ツムイデ一。ワタ一 ツクッテ。  
糸を 紡いで ねえ。綿を 作ってね。

C ジブントコノ イエデ。(A イエデ。) ハ一。  
自分ちの 家で? (そう。家で。) あ。そう。

A イト ツムイデ。(C ハ一。) ホイデ ソノ一 イト一オ  
糸を 紡いで。(はあ。) そして その 糸を

ケツキョク<sup>一</sup>ー アノ<sup>一</sup>ー ハターニ<sup>一</sup> シタテテ (C フン。) <sup>一</sup>  
結局 あのう 機に 仕立てて (C フン。)

ソレオ<sup>一</sup>ー アノ<sup>一</sup>ー チャンコラコン<sup>一</sup> チャンコラコン<sup>一</sup> オツテッ。  
それを あのう ちゃんらんん ちゃんらんんと 織ってね。

C イエデ<sup>一</sup> オル<sup>一</sup> ワケ<sup>一</sup> カ。  
自宅で 織る わけ か。

A イエデ<sup>一</sup> オツテ<sup>一</sup> ホイデ<sup>一</sup> コーヤイ<sup>一</sup> モツテ<sup>一</sup> イツテ<sup>一</sup>。  
自宅で 織って、そして 紺屋へ 持って 行って。

C ドコエ。  
どこへ？

A コーヤ<sup>一</sup>。 コーヤ<sup>一</sup> ユテ<sup>一</sup> ソメモンヤカ<sup>一</sup> アツタンニヤ<sup>一</sup> ナ。  
紺屋。 紺屋と いうて 染物屋が あったんだよね。

C アー、ナルホド。(A へー。) フー。  
ああ、なるほど。(はあ。) ふん。

A ソデ<sup>一</sup> チョード<sup>一</sup> アンコクジト (C フン。) ホエカラー ア  
で ちょうど 安国寺と (C フン。) それから あ  
ノ マキ<sup>一</sup> セーゴハン<sup>一</sup> ナ。(C ウン。 マキ<sup>一</sup> セーゴハン<sup>一</sup> ハ  
の 牧 整吾さん ね。(C うん。 牧 整吾さん。ほ

ーハーハーハー。) アソコーカ<sup>一</sup> コーヤデ<sup>一</sup> ナー。(C ホー) <sup>一</sup>  
あ、はあ、はあ、はあ。(C はあ) あそんが 紺屋で ねえ。(C フーん) <sup>一</sup>

アソコ<sup>一</sup> イツテ (C ホン。) ソメテ<sup>一</sup> モロトイテ (C ホン) <sup>一</sup>  
あそんへ 行って (C ほう。) 染めて もらっておいで (C ほう) <sup>一</sup>

ホイテ<sup>一</sup> ソマツタラ<sup>一</sup> モツテ<sup>一</sup> カイツテ (C ホー) ホテ<sup>一</sup> ソ  
そして 染まったら 持って 帰って (C ほう。) そして

レオ<sup>一</sup>ー ハハオヤカ<sup>一</sup> ヌーテ<sup>一</sup> (C フン。) <sup>一</sup> ~~キモノ~~ キモノ  
それを 母親が 縫って (C フん。) <sup>一</sup> 着物に 着物

オ コー ナンヤラ<sup>(4)</sup> シテ モーテ ナー。ヌーテ (ウん。)   
 を ンう なんか 仕立ててもらって ねえ。纏って (うん。)   
 ソレオ キタ<sup>ン。</sup>   
 それを 着たんた。

C アー、キモノバツカリ カ。   
 ああ、着物ばかり か。

A キモノバツカリ。   
 着物 ばかりだよ。

C ハハ。 (A ハン。) ボクラノ トキワ モー ゼンブ フ   
 ははあ。 (そう。) ぼくらの 時は もう 全部 服   
 クヤッタ<sup>デ。</sup>   
 たった よ。

A ソージャ ナ。ホンデ ワシラカー チョード ノーカッコーエ   
 そうだ ね。それで わしらが ちょうど 農学校へ   
 イットル ジブンニモ マンダ アノ ノー チョード ハカマ   
 行ってる 時分にも まだ あの ちょうど 袴を   
 シキヤラ ナンヤカイニ ハカマ ハキヨツタヤロ。 (ウん。   
 式とか なんか(の所)に 袴を ほいていただろ。 (うん。   
 フーフーフーフー。) アノ ハカマオ ツケルンデ ナー。ウレ   
 うん。うんうんうん。 あの 袴を つけるので ねえ。うれ   
 シテ。   
 くて。

C シキノ トキワ ソノ コドモ (A ソノ) モ ハカマ ツケヨツ   
 式の 時は その こども も 袴を つけて   
 タンカ。   
 たのかい。



A ツケヨッタ。ラン。 ( <sup>C</sup> ハバーン。 ) <sup>V</sup> ホシテ ソレオー アノ  
 つけてた。 うん。 ぶん。 そして それを あの  
 ノーカッコー イッタラ マー イチダン ウエン ナルサカ  
 農学校へ 行ったら まあ 一段 上に なるから  
 エデ ンデ モー ツーカクフクガ カスリノ キモノニ ( <sup>C</sup> ア。  
 それで もう 通学服が 紺の 着物に あ。  
 カスリヤ ( ナー。 ) カスリヤ。 ( <sup>C</sup> ア。 ソヤソヤソヤソヤ。 )  
 紺だ ねえ。 紺なの ず。 あ、 そうだ、 そうだ、 そうだ、 そうだ。  
 ソエカラー シマヤラ ( ナー。 ) ( <sup>C</sup> ウーブン。 ) ソレーデ アノ  
 それから、 縞とか ねえ。 うん。 それで あの  
 ハカマー モー セーフクニ ナットッタ ワケヤ ナ。 セーフ  
 袴は もう 制服に なっていた わけだね。 制服  
 ク チュンカ、 マー セーソーニ。  
 というのか、 まあ 正装に。

C アー。 キモノ ( <sup>A</sup> ツーカクノ。 ) アー ( <sup>A</sup> ラン ) ソー カ。 ハー  
 ああ。 着物 ( 通学のね、 ) ああ。 そうか。 ほか。  
 ハーハー。  
 ほか ほか。

A ホイデ ボーシカー アノ ハクセンカ ハイッテ ナー。  
 そして 帽子が あの 白線が はいって ねえ。

C ア、 ボーシモ カブリヨッタ。  
 あ、 帽子も かぶってたの。

A ボーシ カブリヨッタ。 ( <sup>C</sup> キモノ キテ。 ) キモノ キテ。  
 帽子を かぶってた。 ( 着物を 着てか！ ) 着物を 着てさ。

( <sup>C</sup> アッハハ (笑)。 ) ボーシ カブッテ。  
 あっはっは。 帽子を かぶってさ。

- C ハハー。ハキモンワ ドンテンヤ。  
ははあ。履物は どんなのだい。
- A ハキモンワ アノー オヤカ ツクッテ クレタ ワラゾーリ。  
履物は あのう 親が 作って くれた 葉草履。
- C ワラゾーリ。 (A ヘン。) ハハー。  
葉草履か。 うん。 ははあ。
- A ワラゾーリオ ハイテ (C ハーハー。) ホシテー ナニ (5) シチ  
葉草履を 歩いて (はあはあ。) そして あれ した  
マッタンヤ。 ツーカクシチャッタンヤ。  
んだね。 通学したんだ。
- C ハハー。ホンナヤッタラ ドーヤイト。ホノ フク~~xxxx~~ フクオ ハ  
ははあ。 そんなら、 どうなんだい。 その 服を は  
ジメテ キチャッタ ユータラ イツゴロヤ。  
じめて 着たすたというのほ いつごろなの。
- A ワシカ フク キタンワ<sup>V</sup> (6) サー タイショー<sup>V</sup> サンネンゴロヤ  
わしが 服を 着たのは 大正 三年頃では  
ナイ カナ。  
ない かな。
- C タイショー サン……。ア、ヨー オボエトツチャ ナー、ハー。  
大正 三……。 あ、よく 覚えておいでだねえ。 はあ、  
フーン。  
ふーん。
- A ソイデ ソレマデワ ナンヤラ シテ、ソーヤ (7) ナー。 フク キタ  
それまで それまでほ なんやら して そうだ なあ。 服を 着た  
ッ チュンワ ソレグライヤ ナー。  
と いうのほ それぐらい(のころ) だねえ。

C タイショー サンネンゴロ。 (A エー。) ホタ ソノ フク フ  
 大正 三年ゴロ。 ええ。 そしたら その 服を  
 ク キタラー ホ トーゼン クツ ハク ワケヤケド (A ン。  
 服を着たら それ 当然 靴を ほか わけたけど ン。  
 ソノ ジブン ン...) マー ソノ ジブン カ。  
 その 時分 ま。 その 時分 か。

A ソレワ ナー。 モット ハヨー、 サ、 タイショーノ ハジメゴ  
 それは ねえ。 もっと 早く、 であて 大正の はじめゴ  
 ロニ アノー ゴムクツ ユーテ ナー。 (C ラン。) アノー ゴ  
 ろに あのう ゴム靴と いうて ねえ。 うん。 あの ゴ  
 ムバツカリデ コシラエタ (C ハン。) コン シート、 アレヤ  
 ムばかりで ころえた はあ。 ええーと あれば

コンニヤククツ ユーテ アカイノ イマ アノ ペンペラノ ク  
 こんにゃく靴と いうて 赤い靴、 今 あの 薄手の  
 ツガ アルンヤ ナ。 ハヤリダチノカ。 フツノ イマノ カワク  
 靴が あるんだよね。 はやりはじめのが、 普通の 今の 革靴  
 ツシキノ (C ラン。) アノー ソレオ (C カッコ----)  
 式の (ふん。) あの それを (かこう----)

ゴムデ コシラエテ。  
 ゴムで ころえてね。

C カッコワ カワクツデー。  
 形 は 革靴で。

A ウ、 ウン。 イヤイヤ。 カッコワ カワクツシキノ。 (C シキノ  
 う、 うん。 形 は 革靴 式のね。 (革靴の式の  
 ヤツデ。) イマ アノ ゴムノ ナカクツガ アル ワナー。  
 やつで。) 今 あの ゴムの 長靴が ある よねえ。

アレオ<sup>レ</sup> ミジコー シタヨーナ<sup>ナ</sup> モンデ  
あれを 短く したような もので。

C ハー。 (A<sup>A</sup>ヘン。) ア<sup>ア</sup> ソー<sup>ソ</sup> カ<sup>カ</sup> ウン。  
ははあ。 ええ。 あ、そうか。 うん。

A ソレカ<sup>カ</sup> アノー ウメダ<sup>(9)</sup>コニ ニケン<sup>ン</sup> クツヤハンカ<sup>カ</sup> アッテ  
それが あの 梅垣に ニ軒 靴屋さんが あって  
ハジメテ<sup>テ</sup> ソレオ<sup>オ</sup> ハカシテ<sup>テ</sup> モロテ<sup>テ</sup> ナー。 (C<sup>C</sup>ハー。)  
はじめて それを はかして もらってねえ。

ゴムグツオ。 (C<sup>C</sup>ハー。) ホデー チョード<sup>ド</sup> イマノ<sup>ノ</sup> カワグツ  
ゴム靴と。 それで ちょうど 今の 革靴

シキノ<sup>ノ</sup> モンデー (C<sup>C</sup>ラン。) アノー ソレカ<sup>カ</sup> ゴム<sup>ム</sup> ゴムセー  
式の もので (ふん。) あのう、それが ゴム製  
xxxxx

ヒンデ<sup>デ</sup> サイショワ<sup>ワ</sup> アノー アンタラー<sup>ラ</sup> ノ<sup>ノ</sup> ホシ<sup>(10)</sup> ガッコ<sup>コ</sup> イ  
品で 最初は あのう あんたらの ちょうど 学校へ

キーヨッタ<sup>タ</sup> ジブンニ<sup>ニ</sup> アノー<sup>ノ</sup> ガッコ<sup>コ</sup> ノ<sup>ノ</sup> センセーラ<sup>ラ</sup> カ  
行っていた ころに あのう 学校の 先生達が

シキノ<sup>ノ</sup> オリニ (C<sup>C</sup>ラン。) ヒモノ<sup>ノ</sup> ツカン<sup>ン</sup> クツ<sup>ツ</sup> ハキヨッ  
式の 時に (ふん。) 紐の 付かない 靴を はいて

チャッタヤロ。

なあったらろ。

C ワシャー ソソヤ オボエトラン<sup>ン</sup> ナー。 (笑)  
わしは、それは 覚えていないなあ。

A リョーワキニ<sup>ニ</sup> コー ゴムカ<sup>カ</sup> ツイテ<sup>テ</sup> ナー。 ホイテ<sup>テ</sup> コー マエ  
両側に こう ゴムが 付いてねえ。 そして こう 前

ト<sup>(11)</sup> ウラトワ<sup>ワ</sup> チョット<sup>ト</sup> タカイナリ。 イマノ<sup>ノ</sup>  
と 裏とは ちょっと 高いし。 今の

C ソーカイナー。

そうかねえ。

A ウン。(<sup>c</sup>フーシ。) ソーユーシキノモンデ。(<sup>c</sup>ラン。)  
うん。ふん。 そういう 式の もので。

ソレオハイテ イキヨッタヤナ。

それを 歩いて 行ってたんだね。

C ホッタラドーナヤナ。ホノラクヨリモ ソノー、ゴムグツ  
そしたら どうなんだね。 その 服よりも そのう ゴム靴  
ノホーガハヨーデケタツチューワケカ。ソナコト  
の方が 早く できたという わけか。 そんな こと  
ワナイ。

ほ ないか。

A マー イットキクライヤナ。

まあ 同時 ぐらいだねえ。

C イットキクライ。(Aヘー。) アーソーカ。  
同時 ぐらい (ほあ。 ああ、そうか。

A イットキクライニデケテ。

だいたい 同時に できて。

C フー。フーシ。

ふん。ふん。

A ベンリナモンカデキタユーテ コドモゴコロニホシテ ソ  
便利な 物が できたと言って、子ども 心に ほしくて、そ

レモナカナカ コーテ モラエンナリ、ソレマデアノー チョ  
れも なかなか 買って もらえない。 それまで あのう ちよ

ード ガッコウ イク ジブンニワアノー、ワラゾーリニ  
うじ 学校へ 行く ころには あのう 葉草履に

ユキガ<sup>ハ</sup>フルト<sup>ハ</sup>アノー フカグツ<sup>ハ</sup>ユーテ<sup>ハ</sup>ワラデ<sup>ハ</sup>コシラエタ。  
雪が 降ると あのう 深くつと 言って、 藁で ニラえた。  
イマノ<sup>ハ</sup>ナカグツシキノ<sup>ハ</sup>モノ<sup>ハ</sup>ナ。

今の 長靴式の 物ね。

C アー、イマデモ<sup>ハ</sup>ヤットルヤロ。アレ。マシダ。 (A エー。)  
ああ、今でも 使ってるだろ。あれ。まだ。 (ええ。)  
ナーア。

ねえ。

A アノ<sup>ハ</sup>シキノ<sup>ハ</sup>モンオ<sup>ハ</sup>ナー。 (C ラーファー。 (12) ) アノー ハイテ  
あの 式の 物を ねえ。 (ふんふん。) あのう はいて  
イキヨツタンヤ。ホンデ<sup>ハ</sup>ホン<sup>ハ</sup>オヨギカラ<sup>ハ</sup>オヨギノ<sup>ハ</sup>ア  
行ってたもんだ。それで、つい 於与岐から 於与岐のあ  
ノ<sup>ハ</sup>タニニ<sup>ハ</sup>ナー。アソコカラ<sup>ハ</sup>クル<sup>ハ</sup>ヒトラ<sup>ハ</sup>ワー<sup>ハ</sup>ワラジガ<sup>ハ</sup>  
の 谷に ねえ。あそこから 来る 人たちは わらじが  
ケデー<sup>ハ</sup>キタ<sup>ハ</sup>コトガ<sup>ハ</sup>アルンヤ<sup>ハ</sup>デ。  
けで 来た ことが あるんだよ。

C アー、ソーカ。  
ああ、そうか。

A コドモノ<sup>ハ</sup>トキニ<sup>ハ</sup> (13) <sup>ハ</sup>ホン (C ハー。 ) アノー、コドモジ  
ほんまの (はあ。) あのう、こどもの  
ブンワ<sup>ハ</sup>タイショーノ<sup>ハ</sup>ロクネン<sup>ハ</sup>ヒチネンゴロヤ<sup>ハ</sup>ナー。  
ころは 大正の 六年 七年ごろだねえ。

C ナルホド<sup>ハ</sup>ナー。フー<sup>ハ</sup>ウ。ホタ<sup>ハ</sup>マイニチ<sup>ハ</sup>ソノ<sup>ハ</sup>ワラゾーリ<sup>ハ</sup>  
なるほどねえ。ふん。そしたら毎日 その 藁草履を  
ハイテ<sup>ハ</sup>キモノ<sup>ハ</sup>キテ<sup>ハ</sup>ガッコ<sup>ハ</sup>イキヨツチャッター。  
はいて 着物を 着て 学校へ 行っていたの。

A ソーヤ<sup>ナ</sup>。(笑) エー。ホンデ<sup>オ</sup>デンキ<sup>ノ</sup>オリガ<sup>ソー</sup>  
 そうだよ。 ええ。それで お天氣の ときが そう  
 スルナリ、アメガ<sup>フ</sup>ツタリ<sup>ナン</sup>カイ スル<sup>ト</sup>キニワ<sup>ア</sup>ノー、  
 するし、 雨が 降<sup>リ</sup>た<sup>リ</sup>なんか する ときには あ  
 ゲタ<sup>ユ</sup>ーテ<sup>ナ</sup>。 (らん) イマ<sup>ア</sup>ル<sup>ゲ</sup>タ、アレオ  
 下駄<sup>ト</sup>いって ねえ。 (らん) 今 ある 下駄、あれを  
 ハイテ (らん) ホイテ<sup>カ</sup>ヨイ<sup>ヨ</sup>ッタヤ。  
 はいて (らん) そして 通<sup>っ</sup>て<sup>い</sup>た<sup>ん</sup>だよ。

C アー、ゲタ<sup>ハイ</sup>テ、アメリ<sup>ワ</sup>ー。(ハエ) アー、ソー<sup>カ</sup>  
 ああ、下駄を はいて。雨降<sup>リ</sup>(の日)は。 ああ、そうか。

A ホイデ<sup>タ</sup>カ<sup>ゲ</sup>タニモ<sup>タ</sup>カゲ<sup>タ</sup>ト (らん) チュー<sup>ゲ</sup>タト  
 で。 下駄<sup>ニ</sup>も 高<sup>下</sup>駄<sup>ト</sup> (らん) 中<sup>下</sup>駄<sup>ト</sup>  
 (らん) ホレ<sup>カ</sup>ラー<sup>ア</sup>ノー ヒク<sup>ラ</sup> ユー<sup>テ</sup>ナー<sup>ア</sup>  
 (らん) それから あ  
 (らん) ひくらと 言<sup>っ</sup>て ねえ。

C ヘコ<sup>ラ</sup>カ。  
 ヘン<sup>ら</sup>か。

A ヒク<sup>ラ</sup> ヒク<sup>ラ</sup> ヒ、ク、ラ。  
 ひくら。

C ヒク<sup>ラ</sup> ヒク<sup>ラ</sup> ユー<sup>ン</sup>カ。ア、ソイツ<sup>ア</sup> シラン<sup>ナ</sup>。 (ボ)  
 ひくらと 言<sup>う</sup>のか。 あ、そいつは 知<sup>ら</sup>ない<sup>ね</sup>え。 (ボ)  
 クア<sup>ー</sup>。  
 くは。

A エン。 ヒク<sup>ラ</sup> ユー<sup>タ</sup>リ ヒキ<sup>ズ</sup>リ<sup>ユ</sup>ー<sup>タ</sup>リ。(らん)  
 うん。 ひくらと 言<sup>っ</sup>た<sup>リ</sup> ひき<sup>ず</sup>り<sup>と</sup> 言<sup>っ</sup>た<sup>リ</sup>。(らん)

ヘー。ホン<sup>ヒ</sup>ク<sup>イ</sup> イマ<sup>ア</sup>ノー ハイ<sup>ト</sup>ルヤロ。(らん)  
 はあ。 まったく 低<sup>い</sup>、今 あ  
 (らん) はい<sup>て</sup>る<sup>だ</sup>ろ。(らん)

ア—ユー ソノ ヒクラ ヒクラ ユ—テ (ハ—。) ヨイ  
ああいう、その、ひくら ひくらと言って (はあ、) 言って  
ヨツタンヤ<sup>ト</sup>。

いたんだぞ。

C フ—ン。ヒサカハンラノ<sup>(4)</sup> トキモ、マ— ヒサカハンワ ナンネ  
ふ—ん。 久子さんらの 時も、まあ 久さんは 何年  
ソウマレ—。 シツレ—ヤケド キョ—ワ ユ—テ—<sup>ト</sup>。 キョ—ワ。  
生まれ? 失礼 ださど 今日ほ 言って下さい。 今日ほ。  
(笑)

B ワタジ。 タイショ— シチネンウマレヤ。<sup>(5)</sup>  
私? 大正 七年 生まれ。

C タイショ— シチネン。 ハ— ダイブ ホンオラ、ア— ソ—モ  
大正 七年。 はあ だいぶん せんなら、ああ、そうでも  
ナイ<sup>カ</sup>。 ランラン ウチノ<sup>オ</sup>バーチャン<sup>ト</sup>— チカウ<sup>ユ</sup>  
ないか。 ふん、ふん。 うちの おぼあちゃんと十歳 違うといッ  
トツタカラ マ<sup>スク</sup>ナイ<sup>ホ</sup>—ヤノニ。 ホイジャー。(笑)  
ていたから、ま 少ない 方だよ。 せんなら。

マ ヒサカハンラノ<sup>ソ</sup>ノ<sup>ショ</sup>—ガッコージダイノ<sup>ト</sup>キモ  
ま、久子さんらの その 小学校時代の 時も  
ヤッパイ ソノ<sup>ゾ</sup>—リヤッタ<sup>ン</sup>。  
やっぱり 草履 だった?

B イエ。 ワタシワ— ワタシノ<sup>ガ</sup>ッコーガ<sup>チ</sup>カクデシテ<sup>ネ</sup>—。<sup>(6)</sup>  
いえ。 私ほ 私の 学校が 近くでして ねえ。

ソバヤッタデ<sup>ネ</sup>—。 (フン。) ホッテ<sup>ア</sup>ノ— ゲタバッカリ。  
すぐ近くだったのですね。 ふん。 それで あのう 下駄ばかりでした。



C ゲタバッカリ。

下駄ばっかリ(か)。

B ハイ。ゾーソワ ハケヘン ゲタバッカリ。クツ ハキタイ オモ

はあ。草履は ほかないで、下駄ばっかリ。靴を ほしいと思っ

タ コト アリマシタ。 (C ハー。フナ...) ウサギカリヤトカ

た ことが ありましたよ。 (はあ。そんなら) 兎狩り だとか

ネーエ。 (C ウン。) エンソクヤトカノ トキワ クツ ハキ

ねえ。 うん。 <sup>(17)</sup>遠足 だとかの 時は 靴を ほしい

ヨッタケド タイカイ ゲタバッカリ。

いたものだけれど たいいてい 下駄ばっかリ。

C ゲタバッカリデ。 ハハー。 ソエ、シー。

下駄ばっかリで。 ははあ。 それ、ん。

B ワタシカ ハジメテ ホントニ ワタシモ キモノバッカリデス。

私 が はじめて ほんとうに 私 も 着物ばっかリです。

ラクワ ヒドク キタ コト ナカッテ ネー。 (C ラン)

服は ひどく 着た こと なかったものでねえ。

ハジメテ キモノ ラク ラク コート モーテ キタンガ

はじめて 着物、服、服を 買って もらって 着たのが

チュウガク アノー シューガクリョコーノ トキ。

中学、 あのう、 修学旅行の 時。

C イアーン。 ドコ イッチャッタンヤ。 チ (B エー。) シューガ

やあ。 どこへ おいででしたの。 (ええ?) 修学

クリョコーワ。

旅行は。

B キョートノ オミヤカ ナラカ <sup>(18)</sup>ネーエ。 (C ホン。) イッタリ。

京都の お宮か 奈良か ねえ。 (はあ。) 行ったリ。

(<sup>C</sup>ラン。) ソレダケ ハジメテ。  
ぶん。

C ホタ<sup>ソノ</sup> ゾーリバキッ チュー ケーケンワ<sup>モー</sup> ゼンゼン  
そしたら その 草履ばきという 経験は もう 全然  
ナイ ワケ。  
ない わけか。

B イヤ、ホラ <sup>モー</sup> アノ ハイトリマスケド。ガッコイキワ。  
いえ。そりゃ もう あの。はいてますけどは。学校行き(の時)はは。

C <sup>ア</sup> ガッコイキワ。 (<sup>B</sup>ウン。) <sup>イエ</sup> カエッタラ <sup>モー</sup>  
ああ。学校行きは。 (そう。) 家へ 帰ったら もう  
ゾーリト。  
草履と(いうわけだね。)

B <sup>エ</sup> イエデワ <sup>モー</sup> ワラゾーリ、ムカシワ ワラゾーリ バック  
ええ。家では もう 藁草履。昔は 藁草履ばかり  
リデー、ホイテ アノー セキダ ユエ ネーエ。 アノ ゴム ノ  
で、そして あのう 雪駄と言って はえ。あのゴムの  
ツイタ ヤツオ ネ。ガッコノ ウワバキニワ コーテ モー  
付いた ものを は。学校の 上履きには 買って もら  
タ コトワ アルシ。 ソレオ ハイタ コトワ アルケド ワタシ  
た ことは あるし、それを 聞いた ことは あるけど 私  
ノ ウチャー ハッキリ ナンネンゴロカラ ハイタ ユ コト  
の 家は、はっきりと 何年ごろから 聞いたということは  
ワ オボエトリ シマセン。  
おぼえていやしませんわ。

## 注記

- (1) 感情をこめて、同感の意をあらわしている。
- (2) Cによれば、「シンイッチャン」と言っているつもりだという。一回りも年上をチャンで呼ぶのは、親しい間柄である。小さい時からの呼びかたを年とってからでも変えずにいるのが注目される。Aさんも、Cの姉を「ネーチャン」と呼んでいる。通常の間柄の場合は、「—ハン」をよく言う。
- (3) 「ネ」か「ナ」かははっきりしない。共通語意識がそうさせたのか。
- (4) Aさんの発言には、「ナンヤラ」が多い。名詞や動詞の代りにこれを使う。聞く方には、話脈上から理解しうるのであるが、権化の効果もなくはない。
- (5) 話のすじから、菓尊履をほいて通学したのは、自分をもふくめた当時の小学生一般である。自分もその一人である点からすれば、「チャッタ」ことばを用いるのはおかしいけれども、話者の意識では、今は老人になっているあの人の人を頭に思い浮かべて言ったために、「チャッタ」を用いたのであろう。
- (6) [s̄aː:]
- (7) 「ソーヤ ナー。」全体が、声をひそめて発音されている。
- (8) 「ペンペラ」は、薄くて張りのある感じをいう。
- (9) 「ウメザコ」という地名である。ザをダと発音している。
- (10) 「ホン」は「ホン ハジメ(いちげん初め)」のように使う。ここでは、いくぶん拡張された用法になっている。
- (11) 「ナリ」は、接続助詞と見られる。もと断定助動詞「ナリ」の中止形であろう。それが、「～だし」に相当する意味機能をもって、いま当方言でよく聞かれるものとなっている。
- (12) 地名。高槻の東5kmほどにある集落。
- (13) 不明。重複して聞きとりにくいから、いちおうこうしておく。
- (14) 「ヒサコハン」と言ったつもりだと、話者は言う。
- (15) 遠くの声で語尾不明係。
- (16) 話者Bは、この「ネー」をかなりよく使う。地ことばではない。

(17) [ɛnsoku]

(18) よく聞きとれない。C代の聞きとりに従って、こうしておく。

## 6. 家族のこと

話し手

| (略号) | (氏名) | (性) | (生年)           |
|------|------|-----|----------------|
| A    | 渡辺信一 | 男   | 明治43年生まれ       |
| B    | 渡辺久子 | 女   | 大正7年生まれ        |
| C    | 渋谷計二 | 男   | 昭和2年生まれ <司会役>  |
| D    | 佐藤虎男 | 女   | 大正15年生まれ <同席者> |

C シンチャン<sup>^</sup> ヨー<sup>^</sup> オボエトツチャ<sup>^</sup> ナー<sup>^</sup> アンター<sup>^</sup>。  
信ちゃんは よく おぼえておいでだなあ。 あんた。

A ウン。 マ<sup>^</sup> ダイタイ<sup>^</sup> ナニヤ<sup>^</sup> カナ。 (ハハ<sup>^</sup>。 ) エン。  
うん。 ま だいたい なんだよね。 (ははあ。 ) ええ。

C ソンダケ<sup>^</sup> オボエトコ<sup>^</sup> オモタラ<sup>^</sup> ホノ<sup>^</sup> ケーモ<sup>^</sup> シロ<sup>^</sup> ナル<sup>^</sup>。  
それだけ 覚えておこうと 思ったら その 毛も 白くなる  
ワ。(笑) ナーア。 ホンマヤ<sup>^</sup>。  
よね。 ねえ。 ほんとナジ。

A ケーワー<sup>^</sup> ショーブンヤデ<sup>^</sup> コレワ。  
毛は 性分だから。 これは。

C ダイタイ<sup>^</sup> ケートーヤ<sup>^</sup> ナー<sup>^</sup> コレ<sup>^</sup> ホクモ<sup>^</sup> シロイ<sup>^</sup> コレ。  
だいたい 系統だねえ。 これ。 ほくも 白いよ。 これ。

D ウン。 シロイ<sup>^</sup> ナー<sup>^</sup>。  
うん。 白い ねえ。

C ソメトンヤケン<sup>^</sup> ナー<sup>^</sup>。 (ウ<sup>^</sup> ウン。 )  
染めてるんだけどねえ。 うんうん。

B アーソーカナ。

ああ、そうか。

A オマエ オマエソメトンガ<sup>(1)</sup>ヨーワカルケンチー。

おまえ、おまえは染めてるのがよくわかるけど へえ。

C ワカルカイ。(A ウン。) ワシワカランヨーニイッショウ

わかる かい。 うん。 わしはわからないように 一生

ケンメイニヤットッテンヤガアカンカ。

懸命に やってたんが ためか。

B ワカル<sup>(2)</sup>。

わかるとも。

A アノ オジーサンガ マンスケジーサンガ ザーットコーヒゲ

あの おじいさんが 政助 じいさんが ざーっと こう 鬚を

ノバシテ モー マッシュロヤッタガチー。(C ラン。)

伸ばして もう まっ白だったか へえ。 ぶん。

オマエトコノ オトサンワ ソノドエライ アノ シロイ

おまえとこの お父さんは その ひどく あのう 白い

トワ オモエン。

とは 思われなかった。

C アレヘナシダ。 ケーガ。 ソーソー。(笑) ウーン。(A ウン。)

ありやしなかった。 毛が。 そんなにも。 うーん。 うん。

B ダイブ シロ ナリマシタ。

(主人の頭) だいぶん 白くなりましたね。

C ウン。 シロ ナッチャッタチー。 ホンマニ。 ~~ア~~ アンマリ

うん。 白く かなりなりました へえ。 (ほんまに)。 あまり

A シンパイガ<sup>(3)</sup> ヨケナンカモ シレン。(笑)

心配が 多いのかも (れない)。

C ダイジニ<sup>(4)</sup> シタゲトクンナハエ<sup>→</sup>ヤ。  
大事に してあげて下さいよ。

B ハイ。ダイジニ<sup>(5)</sup> シトンデステー。  
はい。大事に してるんですから。

C ソラ<sup>→</sup> ヨー<sup>→</sup> ワカッテマスケドー<sup>→</sup>。  
そりゃ よく わかってますけどね。

B ネー。エー。コノヒト<sup>→</sup> タヨリヤデ<sup>→</sup> ワタシワ。  
ねえ。もう。この人(主人)が 頼りだから。わたしは。

C オタガイニ<sup>→</sup>。 ( <sup>B</sup>ヘー。 ) ソラ<sup>→</sup> ソーヤ<sup>→</sup>。  
おたがいにね。 ええ。 ) そりゃ そうで。

B コノヒトニ<sup>→</sup> エー ハタライテ<sup>→</sup> モラワナ<sup>→</sup> クビツラン<sup>→</sup> ナラン<sup>(6)</sup>。  
この 人に もう 働いて もらわなければ 首吊らねばならない。  
(笑) オカゲデ<sup>→</sup> ホッテモ<sup>→</sup> ジョーブン<sup>→</sup> ナッテ<sup>→</sup> ネー。( <sup>C</sup>フン。 )  
おかげで それでも 丈夫に なって ねえ。(ふん。)

ウン。  
ええ。

C ソーラシカッタ<sup>→</sup> テー。アレ<sup>→</sup> ホク<sup>→</sup> エライ<sup>→</sup> シツレー<sup>→</sup> シトッタ  
そうだったそうだねえ。あれ ほく たいへん 失礼 していた  
ンヤケド。ホンマニ。  
んだけど。ほんとに

A イヤイヤ。ソレホド<sup>→</sup> ドエライ<sup>→</sup> ヒトニ<sup>→</sup> シラセルヨナー<sup>→</sup> コト  
いやいや。それほど おおげさな 人に 知らせるような こと  
ヤ<sup>→</sup> ナイシ<sup>→</sup> ナー。ソレワ<sup>→</sup>。  
じゃない ね。 それほ。

B シンパイシマシタ。

C ホヤケド アレワ チョット ユワナ イカン デ。  
たゞけど あれば ちょっと 言わにゃ だめだよ。

A イヤ。 ユ ユワナー ッテ ナニヤラ ヤッタ モンジャ テ チー。  
いや。 言わにゃって(あんた言うけど) なんだったもんだからねえ。

アノー ワシモ ツ インスル ツ モリ デ イッタン ヤ ナ。 (C  
わしも 通院する つもりで 行ったんだよ。 (C

ウン。) ホシ タラ アノー ソノ ハヤシ センセー ユーン ガ  
うん。 そしたら あのう その 林先生 というのが

ドエ ライ タカ ツキ ニ ナジ ミノ アル センセー デ。 (C アー)  
たいへん 高槻に なじみの ある 先生で (ほう)

ホ デ カル テ ミ テ アー コレ ワ モ カル テ タカ ツキ  
それで カルテを見て、「ああ、これはもう カルテ、高槻

ノ ヒト カト オモ タラ アノー ナニ ガ デ ケン ト。 (C ウフ  
の人かと 思ったら あのう なにが できないうてさ。 うふ

フフフフ。) ミノ ガシ ニ デ ケン サ カイ ソツ コク ニュー イン  
ふふふふ。 見逃しに できないから 即刻 入院

セ デ チー。

しろ」でねえ。

C ア ソー カー。

あ、そうかい。

D ドコ ガ オ ワ ル カ ツ タ ン デ ス ガ。

どこが お思からたんですか。

A イ カ イ ヨ ー ヤ ツ タ ン デ ス。 (D アラ アラ ソー デ ス カー。)  
胃潰瘍を 患ったんです。 (あらあら、そうですか。)

へん。

ええ。



C チョット コレ ヨバレマス デ。  
ちよっと これ ご馳走になりますよ。

A ハイ ドーズ。  
はい。どうぞ。

B デモ ヨカッタデス。ハヨー。  
でも よかったです。早く。

A センセーモ ハヨー ナンヤラ シテ (C フン。) オクレテ  
先生も 早く あれこれ処置して (ふん。) 下さって  
ナー。ホンマニ シンミニ ナッテ ナー。 (C フン。) アノ  
ねえ。ほんとに 親身に なって ねえ。 (ふん。) あの  
シトオクレテ。マー ホンデ センセーニ (8) ユーテンヨーニ ナニ  
して下さって。ま それで 先生が 言われるとおりに養生  
(C フン。) シトツタンヤケド。  
(ふん。) していたんだけど。

C セヤケド アンタ イトコデヤ ナー シナン アンタ ニューイ  
だけど あんた。従兄弟でだねえ。そんな あんた、入院  
ンシトツテヤ コトモ シラント、シナ、デオタ トキニ バツガ  
しておいでだじというんとも知らずに、そんな。出会った時に、ぼつが  
ワルテ、ホナン カナン ワー。ンナー。(笑)  
悪くて、そんなの。かなれないよね。そんな。

B ソイデモ シュジュ ツシタリナンカイ シテンヤッタラ ネー。  
でも、手術したらりなんか するんでしたら ねえ。  
シンパイシマスケド。ソレワ アンタ ヤッパリ。  
心配しますが。それは あなた、やっぱり。

A シュジュ ツシテ (C ハー。) ナンヤ スルンジャッタラ ソラ  
手術して 早にかと するんだしたら そりゃ

ユワン<sup>ハ</sup> ナンケン<sup>ハ</sup> ナー。 ( <sup>C</sup>ソーヤ。 ) オタガイニ<sup>ハ</sup> ソノー  
言わにゃ ならないけどねえ。 そうだよ。 おたがいに そのう  
ゲツカデー<sup>ハ</sup> ドノイ<sup>ハ</sup> ナッテ<sup>ハ</sup> チーオ<sup>ハ</sup> モラワン<sup>ハ</sup> ナン<sup>ハ</sup> ワカラン  
結果で どのように なって 血液を もらわねばならないか  
シー。

らないし。

C ソーヤ。

そうだよ。

B ウン<sup>ハ</sup> ソーデス<sup>ハ</sup> ヨ。 ソーユー<sup>ハ</sup> トキヤッタラ<sup>ハ</sup> エーケド。

うん。 そうですね。 そういう 時だったら よいけど。

C チーテ<sup>ハ</sup> アンタ<sup>ハ</sup> ケツエキカタ<sup>ハ</sup> ナンヤ<sup>ハ</sup> ナ。 シンチャンワ。

血って あんた。 血液型は なんだね。 信ちゃんほ。

A ワシ<sup>ハ</sup> カ。 ( <sup>C</sup>ラン。 ) エーカタ。

わしかね。 ( ぶん。 ) A型だ。

C ア<sup>ハ</sup> ボクト<sup>ハ</sup> オンデジャ<sup>ハ</sup> ワ。 ボクモ<sup>ハ</sup> エーカタヤ<sup>ハ</sup> ワ。 ( <sup>A</sup>エー。 )

あ。 ぼくと 同じだね。 ぼくも A型だよ。 ( ええ。 )

ハ。

はあ。

B ンデモ<sup>ハ</sup> トーカホドワ<sup>ハ</sup> ソラ<sup>ハ</sup> ドッチニ<sup>ハ</sup> ドー<sup>ハ</sup> ナル<sup>ハ</sup> シラン<sup>ハ</sup>

でも 十日ほど そりゃ どちらに どうころぶかしらんと

ユーテ<sup>ハ</sup> シンパイシマシタケン<sup>ハ</sup> ナー。 チョットデモ<sup>ハ</sup> ヨイカ<sup>ハ</sup>

いって 心配しましたけど ねえ。 すんでよいか。

ドーヤロ<sup>ハ</sup> オモテ。

どうだろうと 思ってね。

C ソア<sup>ハ</sup> ソーデショー<sup>ハ</sup> ナー。

そりゃ そうでしょうねえ。

B エー、ソノ カン シンパイシタケド マー ヨージョーダケデ  
 ええ。その間、バ配でしたけど まあ、養生だけで  
ヨ カッタケド。 ホンデモ ヨンジューニチ オラン  
 かったけど。それでも 四十日 いない  
 ト ナルト ネーエ。  
 と なると ねえ。

C ネー、ホンマニ。  
 ねえ ほんとし。

B カ イマセンダ。 ホンナ マー オカゲデ ショ イチカ チカク  
 やりきれませんでしたよ。でも まあ おかげで 昭一が 近くに  
ニ オツテ クレタデ。  
 いてくれたから。

C ア、ソレワ ヨ カッタ デス ナー。  
 あ。 良かったです ねえ。

B アー、オカゲ デー ヨー キ バッテ クレ マシタ イナー、ア キモ  
 ああ。おかげで よく がんばって くれました ねえ。秋の収穫  
 ー。 (C ハー。) ア リヤー ハヤ シ セン セイノ ア ノー コー ユ  
 期もね。 あれば、 林 先生の こういう  
コト ガ ナ カッタ ラ コー モ キテ クレ ヘン ワイ ネ。(笑)  
 ンとが なかったら ンどもモ (もじって) きてくれやしないわよね。

D ア、ム スコ サン ガ。  
 あ、息子さんが？

C ン、ム スコ サン。(D アー。) シ ヤク ショ。  
 ん、息子さん。(ああ。) 市 役 所。

D アー、ソ ー デ ス カ。(C ウン) コ ソ ヤ コ ソ ヤ。  
 ああ、そうですか。 ければ ければ。

A チョー<sup>ド</sup> コッ<sup>チ</sup>ー カエラシテ モー<sup>テ</sup> ナンヤ シト<sup>ッ</sup>タデ<sup>デ</sup>  
ちょうど こちらへ 帰らして もらって なんか(仕事を)して  
ヨカ<sup>ッ</sup>タヤ<sup>ヤ</sup> ナー。

だから よかったんだね。

C ヨカ<sup>ッ</sup>タ<sup>タ</sup> ナー。 ソエガ。 ホン<sup>マ</sup>ヤ。 フン。  
よかつた ねえ。 それが。 ほんまだよ。 うん。

B ソエガ<sup>ガ</sup> ヨカ<sup>ッ</sup>タ<sup>タ</sup>デス。 ソヤ<sup>ヤ</sup> ナカ<sup>ッ</sup>タ<sup>ラ</sup> ニシワキカラ<sup>ラ</sup> ユート  
それが よかつたです。 そうでなかったら 西脇から という  
チョ<sup>ッ</sup>ト ナンボ<sup>ー</sup> シテヤロ<sup>ト</sup> オモ<sup>テ</sup>モ カエ<sup>レ</sup>シマ<sup>ヘ</sup>ン<sup>ン</sup>  
ちょっと いくら(仕事を)してやろうと 思っても 帰られや(ません  
デ。

からね。

C ソラ<sup>ラ</sup> ソヤ<sup>ロ</sup> ナー。  
そりゃ そうだろうねえ。

B エー。 ヨナベバ<sup>ッ</sup>カリ シマシ<sup>タ</sup> デ。 イネコキ<sup>オ</sup>。  
ええ。 よなべばかり しました よ。 稲こきを。

C ショーイ<sup>ッ</sup>チャンガ。  
昭一 ちゃんがね。

B ヘー。 ヨナベバ<sup>ッ</sup>カリ ヒト<sup>ソ</sup> シマシ<sup>タ</sup> イ<sup>ナ</sup>ー。  
はい。 よなべばかり 一人で しましたよねえ。

C フーン。  
ふーん。

B ウーン。  
うん。

C マー コマメ<sup>ナ</sup> コヤ<sup>カラ</sup>。  
まあ、まめに働く子だから。

B イヤー。ソナ コト ナイデスケン ナー。ホンデモ マー シヤ  
 いやいや。そんなとは ないですけどねえ。 でも まあ ほう  
 ナイトモタンデヒョ カイト。 (C フン。) シテ クレマ  
 がないと思っただけしょうか、ねえ。(きつと) (ふん。) (仕事を) してくれ  
 シタデ。 マー コノ チカクニモ オルシ ネー。イサチャンガ。  
 ましたから。まあ、この 近くにも いるしねえ。 いさちゃんかね。  
 チカクニ。  
 近くにね。

C フーン。  
 ぶん。

B ホデ ~~ばん~~ バンバツカリ ミマイニ イキヨツタンヤ。オトーサ  
 それで 晩 晩ばかり 見舞に 行ったものでした。お父さん  
 ノ ミマイワ。ホシテ。(10) (C ハー。) ハー。バン。シモテ。ホシ  
 の 見舞は。そしてね。(まあ) はい。晩に。仕事を仕舞って。  
 テワ カイツテ キテワ イネコキシタリ シテ ネ。  
 そして 帰って 来ては 箱を開けたらしてね。

C フーン。ショーイッチャンノ ヨメハンノ ナマエ ボク ワス  
 ぶん。 昭一ちゃんの 嫁さんの 名前 ぼく 志  
 レタケド ドー ユーンヤッタ ナー。  
 れたけど どう いうことだったかねえ。

A ハルコ。  
 春子。

C アッ、ハルコハン。ドコイ ツトメトツテヤ ナ。イマ。  
 あっ、春子さん。どこへ 勤めておいでなの。今。

A アノー。オーツキジビカ ナー。  
 あのう。大概耳鼻科 ねえ。

C ハーア。アノー ミヤシラヤ<sup>(11)</sup> ナイワ。オカノ。  
はあやう。あのを 宮代 じゃ ないや。岡の。

A エー、マー オカッ チュンカー (B イノクラ。) イノクラー……  
ええ。まあ。「岡」と言うのか 井倉……

B ホク~~ク~~アノ ニットーノ<sup>(12)</sup> マエデス<sup>V</sup>カ。  
保険 あの 日東の 前ですか。

C ウン。ニットーノ マエ。 (A へー。) イノクラ ユー シン。アソ  
うん。日東の 前。 (はあ。) 井倉と言うの。あや  
コ。 (B ハー。) オカヤ テイ シン。  
こは。 はい。 「岡」でいいの？

B オカデス<sup>V</sup>カ。イノクラヤ。  
「岡」ですか。井倉だね。

A アノー オカ~~ク~~ オカト イノクラノ サカイグライヤ テー。  
あのを 岡と 井倉の 境ぐらいだ ねえ。

C サカイヤ。オーツキジビカ イットッテ シン。ア。ソラ エー ワ  
(そう) 境だ。大概耳鼻科へ 行っておいでなの。あ。そりゃ さいほ  
ナー。へー エ。ホタ イキカタ ショーイッチャン クルマデ  
ねえ。 そしたら 行きの際は 昭一ちゃんが 車で  
オクッテ。  
送って。

A ソーソー。  
そうそう。

C ホデ カ カエソモ ショーイッチャンノ クルマデ。  
それで 帰リモ 昭一ちゃんの 車で(というわけだね。)

B エー。カエッタリ。  
ええ。(車で) 帰ったリ。

A エー。カエツタリ、アノー ショーイチラガー アノー ツゴーニ  
ええ。(車で) 帰ったリ。あのう 昭一らが。あの。都合に  
ヨツテワ ザンギョーシタリ。(C ラン。) ナンカイ スル一ト  
よってば 残業したリ。(ふん。) なんか すると  
キシャデ カイツタリ。  
汽車で 帰ったリ

C A. キシャデ カイツ  
あ、汽車で 帰。

A ホテ マター ショーイチラー ハヤイ トキニワ (C ラン.)  
そしてまた 昭一が 早い 時には (ふん)  
アノ コーモ チョット ナニヤラ スルモン ジャデ チー。  
あの子(嫁)も ちよと あれなれ するものだから ねえ。

(C ラン。) アノー ツゴーデー ザン ザンギョー ニツ チュー  
(ふん。) 都合で 残業 という

コト ナイ デド (C ハーハハ。) アトデ イノコリ セン ナ  
んと ないけど (はあはあ。) あとで 居残りを せしやな

ンサカイ (C ラン.) ソノ トキワ アノー キシャデ カ  
らないから (ふん。) その 時は あのう 汽車で

イッテ ウメ ザ コノ エキ マデー (C ラン.) ジド ー シャデ  
帰て 梅造の 駅まで (うん。) 自動車で

ムカ エニ クン ノヤ ナ。  
迎えに 来るんだよね。

C ア ー ソ ー カー。(A ラン。) フ ー ン。 ソ ラ エ ー ナ ー。  
ああ。そうか。 うん。 ぶん。 それや いいねえ。  
シ カ シー。 ヨ イ ネ ト コ ロ モ <sup>(13)</sup> タ ツ タ シ、 モ ー ユ ー テ ン コ ト  
しかし。 いい 離れも 建ったし。 もう。 おっしゃると

チイワ。

ないわ。

A ソンナ<sup>ハ</sup>コト<sup>ハ</sup>ナイ。

そんなことないよ。

B アンマリ<sup>ハ</sup>セバイサカイデ<sup>ハ</sup>タテタンヤ<sup>ハ</sup>ナ。(笑)

あんまり狭いもんだから建てたんですよ。

C アレ<sup>ハ</sup>シカシ<sup>ハ</sup>ソッパナ<sup>ハ</sup>モンヤ<sup>ハ</sup>ナ。

あはは。しかし。ソッパなもんだねえ。

A ガイソクワ。(笑)

外側はね。

C イヤイヤ。ソナ<sup>ハ</sup>コト<sup>ハ</sup>ナイケド。ホーシ。ワカイ<sup>ハ</sup>オバーチャ

いやいや。そんなことないけど。ほうー。若いおばあちゃん

ンヤケド<sup>ハ</sup>ホンナ<sup>ハ</sup>イッショウケンメイ<sup>ハ</sup>コモリシテ<sup>ハ</sup>マタ

んだけど、そんなら一所懸命子守してまた

ホンマニ。) アノ<sup>ハ</sup>ニットー<sup>ハ</sup>ヤット<sup>ハ</sup>モロトクンナハレ<sup>ハ</sup>ヨ。(笑)

ほんとに。) あの 日当を たんと もらって下さいませよ。

B ミルクダイカセギニ<sup>ハ</sup>イットリマスシ。(笑)

ミルク代かせぎには 行っていますから。(嫁はね。)

C アソコモ<sup>ハ</sup>ヨー<sup>ハ</sup>ハヤットルサカイ<sup>ハ</sup>イソガシーヤロ。オーツキジ

あそんも よく はやってるから 忙しいだろう？ 大槻耳

ビカモ。

鼻料も。

B イソガシーラシーデ<sup>ハ</sup>ナア。

忙しいらしいからねえ。

A ナカナカ イソガシーラシー<sup>ハ</sup>ナ。

なかなか 忙しいらしいなあ。



- B カンシャクモチラシー ナー。 アノ ヒト。 アノ センセー。  
 癩癩もちらしい ねえ。 あの 人、 あの 先生。
- C ア。 ソー ナ。 ( ウン。 ) ボクア シラン ノエ。  
 あ、 そうかね。 ( うん。 ) ほくは 知らないんだよ。
- B スグ オコッテラシー。  
 すぐ 怒りなするらしい。
- C オコッテ ン。  
 怒んなするの。
- B ムツカシ ラシー 。  
 むつかしいらしいよ。
- A マー。 ショクギョー テキデ ソー ナルン ジャ イナ。  
 まあ 職業的で そう なるんだよね。
- C ソヤ ナー。  
 そうだねえ。
- A ジブンワ ケンコー ナシ。  
 自分ほ 健康だから。
- C ソヤ ナー。 ビョーニン バツカリ ヤカラ 。  
 そうだねえ。 病人ばかりだから。
- A クル モンカ ビョーニン ヤデ。  
 来る 者が 病人だから。
- C ヘー。 ソラ ソーヤ。  
 へあ。 そりゃ そうだ。

## 注記

- (1) Bの発言、重複し、かつ遠くて聞きとれない。
- (2) これも遠い声。
- (3) 「マサスケ」のつもりという。
- (4) 「ナハレ」と言っ たつもりだという。
- (5) 不明僚。C氏の聞きとりによってこうしておく。
- (6) 「ナラン」は「ナン」に近く聞こえる。
- (7) [tsu:in]
- (8) この「ニ」助詞の使い方はしないと、C氏は言う。受身の言い方をしようとして「ニ」を使いながら、「ユートンヨーニ」と敬意の表現をした一種の誤用か。
- (9) このところ、Bの発言が重複して聞きとれない。
- (10) この「ホシテ」(そして)は、ずっと前にあるべきことば。それがここに出ている。
- (11) 地名。「ミヤシロ」と言っ たつもりだという。
- (12) 工場名。
- (13) 「ネットコロ」は、いわゆる「離れ」の建物。寝室の意にも使う。

## 7. 結婚当時のこと

話(手)

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生年)           |
|------|-------|-----|----------------|
| A    | 渡辺 信一 | 男   | 明治43年生まれ       |
| B    | 渡辺 久子 | 女   | 大正7年生まれ        |
| C    | 渋谷 計二 | 男   | 昭和2年生まれ <司会役>  |
| D    | 佐藤 虎男 | 男   | 大正15年生まれ <同席者> |

C シンチャンカ( ) センソーニ( ) イットッテン( ) アイ( )アー、センソー  
 信一さんが 戦争に 行ってられた 間、 ああ、 戦争  
 ニ( ) イットッテン( ) アイダワ( ) ヒサカハンワ( ) マダ( ) キトッテ( ) ナ  
 に 行ってられた 間は 久子さん( )は まだ( ) (当家( )) 来( )て  
 インヤ( )。ホニ。

は 良かったんだね。そうそう。

A ソーナンヤ( )デ。

そうなんだよ。

C キトッテン( )... ヒトリヤサカイ( )。

来( )ては ( ) ( ) 一人だからね。

A ウン( )。ワシャナー( )。 ( ( ) ウン( )、 ウン( ) ) ( ) カイッテ( ) ナー( )。アノー  
 うん( )。わい( )はね( )。 うん( )、 うん( )。 帰( )って ねえ( )。 あの  
 .....。

B ジューロクネン( )ノ( ) サンカツニ( ) キタンデス( )。(笑)

十六年の 三月に 来たんです。

A ワシラ<sup>(C)</sup> ジューロクネンノ ニガツ<sup>(C)</sup> ホノ イチガツ<sup>(C)</sup> 三  
 わいらは 十六年の 二月 その 一月に  
 フン。) アノー ゲンタイ<sup>(C)</sup> カイツテ キテ フクテヤマノ<sup>(C)</sup> ニ  
 ぶん。) あのう 原隊へ 帰って 来て 福知山の  
 ジューレントアイエ。 (<sup>(C)</sup> ハン。) ニガツノ カカリニ<sup>(C)</sup> マンキガ  
 ニ十連隊へ。 ぶん。 二月の 初めに 満期が  
 キタンヤデ<sup>(C)</sup> ナーア。  
 来たんだから ねえ。

C アー、ソー<sup>(C)</sup> カ。 フン。 ホラ アカン<sup>(C)</sup> ナー。<sup>(U)</sup>  
 あ。 そうか。 ぶん。 それじゃ だめだよあ。

B センチデ<sup>(C)</sup> モー オンナノ<sup>(C)</sup> ヒト カオ ミテタ コト ナイサカ  
 戦地で もう 女の 人の 顔を見ていた ことが ないもの  
 イニ<sup>(C)</sup> ネーエ。 (<sup>(C)</sup> ハン。) ホンジャサカイ ハジメテ<sup>(C)</sup> ミチマ  
 だから ねえ。 ぶん。 それで 初めて 見た  
 ッタヨナ<sup>(C)</sup> カオ<sup>(C)</sup> ンデ ヨカッタ<sup>(C)</sup> ナー。 (<sup>(C)</sup> アー。) ソヤ<sup>(C)</sup>  
 ような 顔が それで 良かったんですよ。 ぶん。 そうで  
ナカッタ。 (笑)

よかったら (わたしなんかをもらおうとは言わなかったわ。)

C アー<sup>(C)</sup> モー ゴッソ<sup>(C)</sup> モン キレーニ<sup>(C)</sup> ミエタ ワケヤ<sup>(C)</sup> ナー。  
 ああ、もう。 ものすごく もう きれいに見えた わけだよ ねえ。

B ソーソ。 センソーデー。 (笑) (<sup>(C)</sup> ホン。) ソーユー<sup>(C)</sup> コト。  
 そう。 戦争では。 ぶん。 まったく そういう ことよ。

C ホン。 ナルホド<sup>(C)</sup> ナー。 センソーニ<sup>(C)</sup> イットツ<sup>(C)</sup> チャッタカラ<sup>(C)</sup> シン  
 ほう なるほど ねえ。 戦争に 行っておいでだったから 信  
 チャンワ<sup>(C)</sup> ホンブラ<sup>(C)</sup> ケツコンガ<sup>(C)</sup> オソカタ<sup>(C)</sup> ユー<sup>(C)</sup> ワケ<sup>(C)</sup> カ。  
 ーちゃんはそのから 結婚が 遅かったと いうわけか。

A ケッキョク オソカッタヤ<sup>ハ</sup>テ。

結局 遅かったんだよね。

C オソカッタヤ<sup>ハ</sup>テ。 (B ハー。) ハー。テ。

遅かったんだ ねえ。 はあ。 はあ。 ねえ。

A モー ニジューハチデ ショーシュー ナッタデ<sup>ハ</sup>テア。 (C フ

もう 二十八歳で 召集に なったから ねえ。 (ふん)

ン。) モラワン<sup>ハ</sup>ナン<sup>ハ</sup>トキニ。 (C フン。) ケドー<sup>ハ</sup>テ。

ん。 嫁をもらわなきゃならない 時に。 (ふん) ケド ねえ。

ソエカラ サンネン トラレテ カエッテ キタラ モー カエッ

そへから 三年 (軍隊に) とられて 帰って 来たら もう 帰っ

テ キタ<sup>ハ</sup>トシニ<sup>ハ</sup>モロテ (C フン。) ヒトツキホドノ<sup>ハ</sup>ア

て 来た 年に 貰って (ふん) 一月ほどの

イダニ。

間に。

C フン。 ア<sup>ハ</sup>ソニ<sup>ハ</sup>ハヤカッタ<sup>ハ</sup>カイテ。

あ、そんなに 早かった かねえ。

A ハヤカッタ<sup>ハ</sup>デ。 (C ア<sup>ハ</sup>ソー<sup>ハ</sup>カ。) ヘン。 (C フン。)

早かったよ。 あ、そうか。 ええ。

チョード<sup>ハ</sup>トヨオカノ<sup>ハ</sup>オッサンガ (C ウン。) アノー<sup>ハ</sup>ナ

ちょうど 豊岡の 叔父さんが。 (うん) あいう。 な

ニヤラデ<sup>ハ</sup>アノー<sup>ハ</sup>コノ ムスメハンジャカ<sup>ハ</sup>ドーヤロ。 キョー

んですよ。(ほら、あいう、この 娘さんだけが どうだろ。 今日

ミニ イケヤッ<sup>ハ</sup>チュヨナ<sup>ハ</sup>コトデ。(笑)

見に行けよ、というふうな ことで。

C ア<sup>ハ</sup>トヨオカノ<sup>ハ</sup>オ<sup>ハ</sup>オ<sup>ハ</sup>オッサンガ<sup>ハ</sup>ソー<sup>ハ</sup>ユーテ<sup>ハ</sup>イヤハッタ

あ、豊岡の 叔父さんが そう 言って 言われた

ン。(Aウン。) アソーカ。  
のか。 うん。 あ、そうか。

A ホイデ (ウン。) アノー セワー ダレヤラ オマイ、チョ  
それで うん。 あのう 世話ほ 子にがしが あんた、ちよ  
ード コナイダー ノー ナッチャッタ アシダカツミサン (ウン)  
うど ンがいたじ 七くなられた 芦田勝美さん

ウン。) アノ イエー イカシテ モーテ ナー。  
ふん。 あの 家へ 行かせて もらって ねえ。

C アソーカ。 ミヤイ ユー コトデ。  
あ、そうか。 見合という ことでね。

A ウン。 ケツキョク ミヤイヤッタンヤロ。(ウン) (笑)  
うん。 結局 見合だったんだろ。 ふん。

キョードー アノー ワシノ ブンタイニ オツテ クレタンカ  
ちようど あのう わしの 分隊に 居て くれた人が

(ウン) コノー ヒサコノー キンジョニ ナー。(ウン)  
ふん。 この 久子の 逆所に ねえ。 ふん。

オツテ ナー。 アシダトシオハン ユー コーカ。(ウン)  
居て ねえ。 芦田としおさんという 子がね。 ふん。

ホイデ ソノ コワー<sup>(B)V</sup> ノトコヘ アノ マンダ ワシカ カイツ  
それで その 子は... のところへ あの まだ わしが 帰って

テ アノ カイツテクル ソノ アトニ ホジューデ キタモンジャ  
あの... 帰ってくる その後に 補充で 来たもんだ

デー (ウン) オツテ (ウン) ンデ ソノ イエ  
から ふん。 居て ふん。 それで その 家へ

コトズケ ユイガテラ マー ミセテ モライニ イッタ ワケナ  
ことづけを 言うついでに まあ 見せて もらいに 行った わけな

ンヤ<sup>ハ</sup>デー。  
んだがねえ。

C アー。 ソーカ。 (<sup>A</sup>エー。) ハアン。  
ああ。 そうか。 (ええ。) ほういほうい。

A ホイ<sup>ハ</sup>ラ ドエ<sup>ハ</sup>ライ ヨイ<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>ス<sup>ハ</sup>メ<sup>ハ</sup>ジャ、 キニ<sup>ハ</sup>イ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ハ</sup>タ カツ ユー<sup>xxxx</sup>  
そしたら「おいぶん よい 娘だ。 気に入ったか」と  
ユー<sup>ハ</sup>コ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ハ</sup>テ。 (<sup>C</sup>フン。) アノー アシ<sup>ハ</sup>ダ<sup>ハ</sup>カ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ハ</sup>ミ<sup>ハ</sup>サ<sup>ハ</sup>ン<sup>ハ</sup>マ<sup>ハ</sup>ラ  
いう ことだね。 (ぶん。) ああ。 芦田勝美さんや  
(<sup>C</sup>フン。) トヨ<sup>ハ</sup>オ<sup>ハ</sup>カ<sup>ハ</sup>ノ オッ<sup>ハ</sup>サ<sup>ハ</sup>ン<sup>ハ</sup>ガ マー アノ コレ<sup>ハ</sup>カ<sup>ハ</sup>ラ  
(ぶん。) 豊田の 叔父さんが 「これから  
ワシ<sup>ハ</sup>ン<sup>ハ</sup>ナ イッ<sup>ハ</sup>テ クル<sup>ハ</sup>サ<sup>ハ</sup>カ<sup>ハ</sup>イ ユテ。 ミヤ<sup>ハ</sup>イ<sup>ハ</sup>ニ イン<sup>ハ</sup>ダ ジ  
わし、それなら 行って くるから」と言って、見合いに 行った すぐ  
キア<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>デ (<sup>C</sup>フン。) アノー ソノ ヒー<sup>ハ</sup>ニ モー ハナ<sup>ハ</sup>シ<sup>ハ</sup>ガ  
あとで (ぶん。) ああ。 その 日に もう 話が  
キマ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ハ</sup>テ ナー<sup>ハ</sup>ア。 (<sup>C</sup>フン。) サー、 アレ<sup>ハ</sup>カ ドー<sup>ハ</sup>ヤ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ハ</sup>タ  
決まって ねえ。 (ぶん。) じゃあ、 あれが どうだったか  
シラ<sup>ハ</sup>ン<sup>ハ</sup>ジャ<sup>ハ</sup>ガ ホン<sup>ハ</sup>デ<sup>ハ</sup>モ ニカ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ハ</sup>ノ オワ<sup>ハ</sup>リ<sup>ハ</sup>ー ゴロ<sup>ハ</sup>ヤ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ハ</sup>タ コ。  
知らないんだが、 それでも 二月の 終り 3月 だった かい。  
イッ<sup>ハ</sup>タ<sup>ハ</sup>ン<sup>ハ</sup>ガ。  
行ったのが。

B イヤ<sup>ハ</sup>ー<sup>ハ</sup>ネ。 ソレ ヨー オボ<sup>ハ</sup>エ<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>レ<sup>ハ</sup>ヘ<sup>ハ</sup>ン<sup>ハ</sup>ノ。 ソン<sup>ハ</sup>ナ コツ<sup>ハ</sup>ター。  
いやいや。 それは よく おぼえていないの。 そんなことは。

C オボ<sup>ハ</sup>エ<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>ラ<sup>ハ</sup>ナ イカ<sup>ハ</sup>ン ワナ。 ソン<sup>ハ</sup>ナ コト<sup>ハ</sup>ワ。 (笑)  
おぼえていなくちゃ だめだね。 そんなことは。

A サン<sup>ハ</sup>カ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ハ</sup>ノ ジュー<sup>V</sup>ロ<sup>ハ</sup>ク<sup>ハ</sup>ニ<sup>ハ</sup>チ<sup>ハ</sup>ニ アノ キテ クレ<sup>ハ</sup>タ<sup>ハ</sup>ン<sup>ハ</sup>ヤ<sup>ハ</sup>ー。  
三月の 十六日に ああ 来てくれたんだね。

B ジューロクニチニ セワン アツタシヤ デ ワタシ。  
十六日に 世話に なったんですよ。わたし。

C ハーハー。ハーア。  
はあはあ。そうですね。

B イマ ソナ コト スル ヒト ナイ ワナ。  
今は そんな こと する 人は ないわねえ。

C フナ コト ナイ ワ。  
そんな こと ないよ。

B ヒトツキヤ ソコラデ イッテ シト アレヘン。(笑)  
一月あまりで 嫁にいくような人って ありゃしないわ。

C ソナ コト ナイト オモウケド。  
そんな こと ないと 思うけど。

B イマダー イチネンホド コーサイセンテナ。  
いまでは 一年ほど 交際しなればなりませんね。

A コーサイモ ナニモ セズヤ ホンデ。  
交際も 何も せずだ。そんなわけだ。

C シナ ダイタイ ホンナン コーサイラ セヘン ノニ ムカシ  
でも、たいたいにも 交際なんかは してないよ。昔な  
ラー。  
んかほ。

A ウン ムカシワ。  
うん。昔ほね。

B ムカシワー。  
昔ほね。

C ウン ダイタイ ミヤイヤシー。  
うん。たいたい 見合いたし。



A ムカシワ ソヤッタンヤ。 エン。 マー オヤカ キメタラ (ウ  
昔は そうだったんだ。 ええ。 まあ 親が 決めたら (う  
ン。) ナニヤラデ<sup>(5)</sup> ナーア。 (ウソ。) ホンデ ムコハンノ  
ん。) もうさんたじから ねえ。 (うん。) それで 婚さんの  
カオモ- ミンカチ-グライヤ<sup>(6)</sup>ッタンヤ<sup>ア</sup>。  
顔も 見ないままぐらいたったんだろう。

C ア- ソ- カ。  
ああ。 そうか。

A ラン。 ドエライ ミヤイモ セズ。 マ オヤカ イケッ チュ-ヤ<sup>(7)</sup>  
ぶん。 ちゃんとした見合いもせず。 まあ 親が 行けと 言われ  
タラ ヘ-ッ チュ-テ イク<sup>ク</sup>ライ<sup>デ</sup> (ウソ。) マ ワシ  
たら はいっと言って 行くぐらいで (うん。) まあ わ  
コソ アノ- バンケ<sup>(8)</sup> ミヘテ モ-タケ<sup>ド</sup> ナー。(笑)  
こそは あのう 晩 見せて もらったけど ね。

C コレワ ヨイ ムス<sup>メ</sup>ヤ。 ムス<sup>メ</sup>ハンヤト。 オモ<sup>チャ</sup>ツ<sup>タ</sup>ヤ<sup>ロ</sup>。  
これは よい 娘だ。 娘さんたじと 思われたでしょ。

A イヤ。 ソレ マエ<sup>ニ</sup> ユ-ヨ-<sup>ニ</sup> ナー。 ナガイ<sup>コ</sup>ト シナ<sup>ニ</sup>  
いや。 それ 前に 言うように ねえ。 長い間 支那に  
オッテ-。 アノ-。 シナ<sup>ワ</sup> ソレ<sup>コ</sup>ソ クロ<sup>イ</sup> アノ- シナ<sup>フ</sup>ク  
居て あのう。 支那は それこそ 黒い。 あのう 支那服  
ヤデ<sup>ナ</sup> アレ-。 (ランファン。) マ ドエライ ア  
たじから ねえ。 あれは。 (ぶんぶんぶん。) まあ 可愛いぶんあ  
ノ- ヨイ イエ<sup>ノ-</sup> ヒト<sup>ラ-</sup>ワ- マ ハデ<sup>ナ</sup> シナ<sup>フ</sup>ク キ  
あのう 良い 家の 人たちは まあ 派手な 支那服を 着  
タリ<sup>ナ</sup>ン<sup>カイ スル<sup>ケ</sup>エ<sup>ド</sup>。 (ファン。) ケエ<sup>ド</sup> アノ- コッ  
たりなんか するけど。 (ぶん。) けれど あのう ニッチ</sup>

チーノ マー フツイーカヤッタラー クロイ コー ウワギ キ  
の まあ、普通以下だったら 黒い こう 上着を着  
テ ズボン ハイテンヤ 丁。ミ丁。 (ハ。フン。) ホイテ  
ズボン はいてるんだね。みず。 はあ。そう。 そして

テンソク ユーテ コー アシオ ガーット コーユー フニ  
まん足と いて こう 足を ガーッと こういう ふうは  
モー クツイー ハカシター ウマレタ ジブンカラ (ウン。)   
もう 靴をはかせて、生まれた 時から うん。

チーサイ チーサイ アシ シトンカ ベッピンラシカッタ。  
小さい 小さい 足を してるのが 別嬪らしかったよ。

C アシカ チーサイノカ エーノカ。  
足が 小さいのが よいのか。

A チーサインカ ヨインヤッ テ。  
小さいのが よいんたって。

C ハハ。フン。  
ははあ。ふん。

A ホテ アルクンデモ アルキニクソーニ シテ チー。 (フン。)   
そして 歩くのでも 歩きにくそうに して ねえ。 (ふん。)

チョコチョコチョココシテ (フン。) チョード コド  
ちょん ちょん ちょん ちょん して (ふん。) ちょうど ンど

モノ アルクヨーナ カッコヤッタ エー。 (ハ。) ソンナ  
もの 歩くような カッコだったよ。 (はあ。) そんな

ン ミトウサカイ ナイチー カイツテ キタラー アノー モン  
のを見てるから 内地へ 帰って 来たなら あのう モン

ペースガタデ チー。 (フン。) イクー トキニワ アノー  
ペ姿で ねえ。 (ふん。) 行く 時には あのう

フツノー アノ コクボーフジンカイトカ ナントカ ユーテ  
 普通の 国際婦人会 とか なんか 言って  
 カイタ タスキニ シテ (ラン。) エプロン カケテ (ぶん。  
 書いた 襟に して ぶん。 エプロンを かけて  
 フン。) ホイテ ミオクリシテ クレタンヤ デ。カエッテ キ  
 ぶん。) して 見送りして くれたんだよ。 帰って 来  
 タラ モー モンパー ハイテ ナー。(笑) ソレコソ モー  
 たら もう モンパーを ばいて ねえ。 それんや もう  
 イサマシー カッコーヤ ナ。(アー。(笑)) モー ミル ヒト  
 勇ましい かんうだよ。 ああ。) もう 見る 人  
 カ ベッピンサンニ ミエテ。ヒロシマエ アカッタ オリヤ。(笑)  
 が(みな) 別嬪さんに見えて。 広島へ 上陸した 時だ。

C ミナ ベッピンサンニ ミエル ンカ。(笑)  
 みな 別嬪さんに見える のか。

B カイカブツトッテヤ。(アー。ナルホド。)  
 かいかぶっておいでなんだわ。 ああ。なるほど。)

A マー アノー カイカブツタカ ナンヤ シヤンケード ナニヤ  
 まあ。あのう かいかぶったか どうか 知らないけれど なんだ  
 ナー。  
 ね。

C カイカブツヤ ナイ。アノー ヨイ-----  
 かいかぶつじゃ ない。あのう よい-----

A ウン。マー アノ ワシト シテワ スギタ アノー ナンヤラヤ。<sup>(?)</sup>  
 うん。まあ あの わしと してほ 過分の あのう なんだよ。

C ヨイ ゴフーフヤ。ウン。  
 よい ジ夫婦だ。 うん。

A ウン。ト<sup>(10)</sup> オモトンヤケド ナ ア。

うん。そう思っているのだけれど、ねえ。

C ウン。ソノ トーリヤ。

うん。そのとおりだよ。

A ケド マー オタカイニ ジョーブデ ナー。 (ウン。) ナニ  
けど まあ おたがいに 丈夫で ねえ。 (うん。) あれ

ヤラ スルンカ イチバンヤサカエデ。

これ するのが いちばんよいから。

C ソーヤ。 (A フン。) V<sup>(11)</sup> タイヘン ヨイ アノ オクサン ユーテ  
そうだよ。 (ふん。) たいへん よい あの 奥さんだと

ユートツテヤケド (B アラー。) オ オクサンノ ホーワ ド  
言っておられるけど (あらあ。) 奥さんの ほうは い

ナイデス。ナンカ ヒトコト ユーテ モラワント ホイデモ  
かがずす? なんか 一言 言って もらわないと。だって

(B ホントヤ ネーエ。) バガ モテンノヤケド。(笑)  
ほんとうだよ。ねえ。 場が もてないのだけれど。

B ワタシモ ソレコソ (C ハー。) ナンニモ ワタシワー<sup>ワカ</sup>  
わたしも それこそ (はあ。) なんにも わたしは

ワカイ トキヤシ ドンナ ヒトノ トコイ イコトモ オモエ  
若い 時だし どんな 人の 所へ 行こうとも思いは

ヘンヤケド (C フン。) ワタシモ チチニ エランデ モロテ  
はいんだけれど (ふん。) わたしも 父に 選んで もらって

ネーエ。 (C ハーア。) コノ ヒトヤッタラー。 オトーサンワ  
ねえ。 (はい。) この 人だったら。 お父さんは

ネーエ。 (C フン。) アノ トニカク アノ アチコチニ ユー  
ねえ。 (ふん。) あの とにかく あの あちこちに 言って

テモロテ。 (フン。) キキアワセニ イッタリ ミーニ  
もらってね。 (ふん。) 聞きあわせに 行ったリ 見に

イッタリ ネー。チチガ。 (フン。) ワタシノ チチガ。 (フン)  
行ったリ ねえ。父がね。 (ふん。) わたしの 父が。

フン。) ドコヤカイ ミニ イッテ キタケド ドコイ ミーニ  
ふん。) あちこち 見に 行って 来たけど どこへ 見に

イッテ キテモ、サー ユーテワ ネツカラ ヨイ ヘンジオ  
行って来ても「さあ(どうか?)」と言っては いっこうに よい 返事を

シテ シチャ ナカッタ オトーサンガ ネーエ。 (フン。  
xxxx) ねえ。 (ふん。) ねえ。お父さんが

ドコヤラ ミーテ キテ ホイテ アー アレヤッタラー タマカ  
どこだか 見て 来て そして「ああ あれだったら まじめで安

ナ モンジャ チュー コトオ (フン。) ユーテ ハジメテ  
心算ものぢや」といふ。 (ふん。) 言って はじめて

アノ ユーチャッタ チューテ ハハガ ユーンデス ワナ。 (フン)  
言われた とって 母が 言うんですよ。

ホー。) ヤッパー ソコガ エンガ アッタナカ シランガ  
ほう。) やっぱソコが 縁が あったのか しらないけど

ネーエ。 (フンフン。) ホント ユーテ チチニ エランデ  
ねえ。 (ふん、ふん。) ほんと 言って 父に 選んで

モロテ ソレコソ ホンニンシュギデ。 (フンフン。) ケツキョク  
もらって それこそ 本人主義でね。 (ふん、ふん。)

キサシテ モロタンヤ。 (ナルホド。) エー。ホントニ。  
(当家へ) 来させてもらったんですよ。 (なるほど。) ええ。ほんとに。

C マー ヨイ.....  
まあ よい.....

B ソレガ イチバン デスケン ネ マタ。  
 それが いちばん (大切) ですけど は。 また。

C ソーソーソー。 (<sup>B</sup> ラン。) ヨイ ダンセー ツカン デデシタ  
 そう そう そう そう。 よい 男性を つかまえなすった  
 デ。  
 ですから。

B ヘー オカゲ デ ホ マー ホン デ モ ホン マニ ホン マノ コ  
 はい。 おかげで まあ でも ほんとし ほんとの  
ト アノ ネー エ。 アノ アレ デ ス。 タマ  
 こと あのう ねえ。 あのう なんですよ。 誠  
カ デ ネー エ。 (<sup>C</sup> フン。) ワル イ コト シタ コト モ ナイ  
 突で ねえ。 (うん。) 悪い こと した ことも ない  
シ マジ メ デ。  
 し、まじめで。

C ボク ト オン ナジ コト ヤ。 (笑)  
 ぼくと 同じ ことだ。

B オコ ッタ コト ナイ。 ホン デ  
 怒った ことが ない。

C ワル イ コト モ セント マジ メ デ ホン マニ。  
 悪い ことも せずに まじめで。 ほんとし。

B ソー。 ホン マノ コト。 (<sup>C</sup> ウン。 ウン。) ネー。 ジョー ズ ヤ  
 そう。 ほんとの こと。 (うん。 うん。) ねえ。 お上手 (お道従) (ヤ  
ナシ ニ ネー。 ソレ ヤ ッタ ラ コ サ レ デ ス。  
 ないに ねえ。 まじめであつたれば ンせ ですわ。  
 (13)

C ダイ タイ マー コノ ヘン ノ ケ ート ー チュ ー ノ ワ ソー ユー  
 だいたい まあ この へんの 系統 (の人々) というのは そういう

コトナンヤ。(笑) フン。  
ことなんだ。 うん。

B ジョーブデ。(<sup>c</sup>フン。) オコル チュー コト ナシニ ホン  
丈夫では。(ふん。) 怒る という こと なしに、ほん  
マニ オコル チュー コト ナカッタデス。  
とに 怒る という ことが なかったんです。

C ナルホド。  
なるほど。

B アタシガ オコトルグライデ。ホンマニ。(笑) マー アノ  
わたしが、怒っているぐらいで。ほんとし。 まあ、あの  
チャワント チャワントヤッタラ カッチンコスルンヤケン ネー  
茶碗と 茶碗と だったら かっちんこするんだけど ねえ。  
E。(<sup>c</sup>ハー。) ワタシガ チャワンナラ マー ケッキョク  
まあ。 わたしが 茶碗なら まあ 結局  
シュジンワー ワタツ チューーナ モノデ ウケトッテ クレタ  
主人は 綿 というような もので 受けとって くれた  
ンデヒョ カイチ。  
んでしょう かね。

C ハー。ナルホド。  
まあ。なるほど。

B ホンデ マー オカゲデ ケンカ ヒトツ セズニ (<sup>c</sup>フン。  
それで まあ おかげで 喧嘩 ひとつ せず。(ふん。  
イママデ ヤッテ キテ モー イマ イネ チューテモ ヨー  
今まで やって 来て、もう 今 去れ といっても よう  
イナン (笑) インデ コイ ユーテ ユイモ センヨウケド<sup>(15)</sup> ネ。  
去らない。 出て行っちゃえなどと 言いもしないだろうけど。

(笑) ユータラ ソンヤデ。(笑)

言ったら 損だから。

C ユータ ホーガ ソンヤ ユーテ。(笑)

言った ほうが 損だと言っただ。

B ユータ ホーガ ソンヤデ ユートテ ナイラシー デスケド ナー。

言った ほうが 損だから 言われたいらしいですねえ。

A イマ イヌンヤツタラ ヤシナイリョー オイトイテ モラワン

今 出て行くんだったら 養い料を 置いていって もらわな  
ナラン。(笑)

やらん。

B ソンナ コトデスネヤケド イマ ソー ソーバツカリヤ ナイ。

そんな ことですけど 今は そうばかりじゃ ない。

イマ イネ ユータラ ナンカー モロテ イナン ナン モン

今 出て行くと 言ったら なんか もらって 行かぬば やらないものが

ヤット アルケド ホンデワ モー イニタ ナイシ ネーエ。(笑)

たくさん あるけど それでは もう 出て行きたくないし ねえ。

A ヤシナイソノーノガ タコ ツクカモ シレン。(笑)

養い料のほうが 高く つくかも しれない。

B ソンナ コトデ マー オイトエ モーテ イマニ ナツタンデス。

そんな ことでは あ (んの家)に 置いてもらって 今に なったんですよ。

C ナルホド。モー ユーテン コト ナイ ワ。ネーエ。モー マゴ

なるほど。もう 言うこと ないわ。 ねえ。 もう

オマゴサンモ デキタシ。

お孫さんも できたし。

B へー。ソー。オカゲデ。

はい、そうです。おかげでね。



## 注記

- (1) 「話題にふらない」の意。
- (2) いちじるしく強く発音。
- (3) 「の」と言うべきを「は」と言い誤ったので、その助詞のところが言いかえた。
- (4) 問いの文末詞。男がよく言う。目下の者に対することば。女でも、姑が嫁に対して言うことがある。こどももよく使う。
- (5) 気持ちほ「しよがない」の意味。
- (6) 「ミンカチ」ほ「ともすれば見ることもしない」状態をいう。
- (7) 「チューヤッタラ」の「ヤッ」が未詳。
- (8) 「コレワ」の部分、強勢のある発音。
- (9) この「ナンヤラ」ほ「嫁」の意。
- (10) この「ト」ほ、直前のC代のことばを受けている。
- (11) 急にBさんに向けて言う。
- (12) 「タマカナ」ほ、誠実で身持ちがよく安心できる人の性向をいう。
- (13) 「コサレ」ほ、「こそあれ」係結法の名残りの形。
- (14) 「イヌ」ほ、ここでは離婚して実家にもどる意。
- (15) 「センヤロケド」に聞こえる、とC代ほ言う。

## 8. 祭りの日のこと

話（手）

| (略号) | (代名) | (性) | (生年)          |
|------|------|-----|---------------|
| A    | 渡辺信一 | 男   | 明治43年生まれ      |
| B    | 渡辺文子 | 女   | 大正7年生まれ       |
| C    | 渋谷計二 | 男   | 昭和2年生まれ <司会役> |

A ホーヤ。センサーチューワー アー ドコソコノ オミヤサンエ  
 そうす。戦争中は ドンヤンの お宮さんへ  
 ゴシャマイリタラ ナンタラ ユーテ ナンヤラ シヨッテ マー  
 御社詣りとか なんとか 言って お詣りなんかをしたりしてまあ  
 マツリワ トクニ ソー シテ アノー シュッセーカゾクノ  
 祭りは 特に そうして あのう 出征家族の  
 マー ブウンチョーキューオ イノルンニ ドコサントモー オミ  
 まあ 武運長久を 祈るために ドンのお家でも お宮  
 ヤサンエ マイッテ キレーニ シテ カミサンワ オガミヨッタ  
 さんへ 詣って きれいに して 神さんはおがんでいた  
 ケン ナーア。イマー ソノー ソーユー コトガ ノー ナッテ  
 ケド ねえ。今は その そういう ことが なくなって。  
 シューセンゴッ ノー ナッタナリ。マー センダリ ジダイモ  
 終戦後、 なくなりました。 まあ どんどん 時代も  
 カワッテイクンニヤデ ソラ シヤナイ。ワヤ。ソレワ。  
 変わって行くんだから それはしょうがないよ。それはね。

B ソーヤナー。

そうですねえ。

A エーン。マー。ホンデモ ムカシノ オモカケカナー。ナッタ  
ええ。まあ、それでも 昔の 面影が なくなっ  
た。マツリノ。エー。ソングケ カミシンジンオ スル ヒトガ  
なあ。祭りの。ええ。それだけ 神信心を する 人が  
スクノ ナッタ ンカ。マー。ココロデ ソー オモトツテモ  
少なくなっただろうか。まあ、心で そう 思っ  
てても ナンヤラ シテ マ イエカラー ナンヤ シトツテンカモ シ  
ぜんか あれんれして ま 家から 拜んでおられるんかも (れ  
レンシ。

ないから。

B ンデー。カミサン カミサンノ オマツリオ モー。ヒトノ ツ  
それで 神さんの お祭りを もう 人間の 都  
ゴーノ ヨイ ヒーニ キマルヨーニ ナッタ ンヤロ カイナー。  
合の よい 日に 決まるように なったんでしょうか。

A ア。ソーヤ。ソラ ドコトモ ソー ナツテ。

あ、そうですね。それは どんもみち そう なる。

B カワツタナー。

変わったねえ。

A アー。ホントナー。マー。

ああ、ほんとだね。まあ。

B モー。ニシヤター。デモ トーカヤ。ネー。

もう、西八田でも 十日だねえ。

A ソヤナー。(ソ……) ダイタイ トーカニ ナツトルナー  
そうですねえ。 たいたい 十日に なるねえ。

ア. ウーン。ココラデモ<sup>ハ</sup>コンダ<sup>ハ</sup>アノー トーカン<sup>ハ</sup>ナッテ<sup>ハ</sup>ソ  
 うん。 ニンラデモ ニンどほ あう 十日に ぎって け  
 レカ<sup>ハ</sup>タイイクノヒートモ<sup>ハ</sup>カネテ<sup>ハ</sup>ナニヤ<sup>ハ</sup>スルナリ、オキヤク  
 れが 体育の日とも 兼ねて おんぎわゆるし、 お客  
 サンモ<sup>ハ</sup>キーヘンナリシテ<sup>ハ</sup>ホンマニ<sup>ハ</sup>サミシー、マー<sup>ハ</sup>マエノ  
 さんも 来やしないして、ほんとし すごい、まあ 前日の  
 ヨミヤダケ<sup>ハ</sup>オチョーチンオ<sup>ハ</sup>ソナエニ、オヒカリッ<sup>ハ</sup>チュンカ<sup>ハ</sup>ソ  
 宵宮だけ お提燈を 供えに、おひかり というのか  
 ナエニ<sup>ハ</sup>イクヨーン<sup>ハ</sup>ナッテ<sup>ハ</sup>ナニヤ<sup>ハ</sup>ナー。  
 供えに 行くように ぎって なんだねえ。

C オカネオ<sup>ハ</sup>ナンボクライ<sup>ハ</sup>モロテ<sup>ハ</sup>ドュー<sup>ハ</sup>モノオー<sup>ハ</sup>ソノ<sup>ハ</sup>カ  
 お金を いくらぐらい もらって どういう 物を その 買っ  
 イヨッチャッタカ<sup>ハ</sup>キュー<sup>ハ</sup>コトオ<sup>ハ</sup>チョット<sup>ハ</sup>ハナシテ<sup>ハ</sup>モータ  
 ていたか という ことを ちよつと 話して もらった  
 ラ。フン。  
 ら。ふん。

A ソーヤ<sup>ハ</sup>ナー。ナー。  
 そうだねえ。 ねえ。

B コズカイワ<sup>ハ</sup>ソレコソ<sup>ハ</sup>ゴセン  
 小遣は それんや 五銭

A コズカイオ<sup>ハ</sup>ヨケ<sup>ハ</sup>モロタンデー<sup>ハ</sup>ニセンカラ<sup>ハ</sup>ゴセンマデーヤ<sup>ハ</sup>  
 小遣を たくさん もらったので ニ銭から 五銭までじゃ  
 (B ゴセン……) ナカッタ<sup>ハ</sup>カナ。  
 なかった かな。

B ウン。ゴセンホドヤ<sup>ハ</sup>ネー。  
 うん。五銭ほどですね。

A ウー。 ( B ウー。 ) トモカク ワシラーカ。 コドモジブンニワ  
 うん。 ( うん。 ) ともかく わしらが 子供時分には  
 イッセン<sup>(u)</sup> ダスト アメダマカ。 イツツボ モロタ<sup>(u)</sup> ナー。 ウー。  
 一銭 だすと 飴玉が 五粒 もらった なあ。 うん。  
 ソレモ ホンマノ アメデ コシラエタ テセーノ アメダマー  
 それも ほんとうの 飴で ころえた 手製の 飴玉  
 ヤ ナカッタ カナ。 ソエト アテモン チューンガ ヨーケ  
 じゃ なかった かな。 それと あてもん というのが たくさん  
 アッテ  
 あって。

B アテモン チュータ ナー。 ( A エー。 ) サンカクノ ラクロニ  
 あてもん といったわけねえ。 ( うん。 ) 三角の 袋に  
 ハイッタ。 ( A エー。 ) アレガ ウレシカッタカ。 (笑)  
 はいった あれね。 ( うん。 ) あれが うれしかったが。

A ショーガイタノ コンナ モンヤッタ デヨ。 コンナンニ イッセ  
 生姜板の こんな ものだった よ。 こんなのにも 一銭  
 ンダスト。 クレテ。 ヒトツ ムクッテ ミルト。 アタリト カイ  
 出すと。 くれて。 一つ めくって みると。 当りと 書い  
 タリ イットート カイタリ フンナ モンガ ヨーケ アッタヤ  
 タリ 一等と 書いたり そんな ものが たくさん あったんじゃ  
 ナイカ。  
 ないか。

B ホレカラ オミセヤサンノ オミヤケ カイニ イクンガ ウレシ  
 それから お店屋さんの おみやげを 買いに 行くのが うれし  
 カッタヤ。 ( A エー。 ) ホンマノ コト。  
 かったんです。 ( うん。 ) ほんとの こと。

A ソエト<sup>ハ</sup>ニツキスイト。(B ウン。) ビンニ<sup>ハ</sup>ハイッテ。  
それと 肉桂水と。 びんに、はいて。

B マー<sup>ハ</sup>ソーユー<sup>ハ</sup>トコワ<sup>ハ</sup>ヒド<sup>ハ</sup>チカエヘン<sup>ハ</sup>チー。(A ウン)  
まあ そういふ 点は ひどく ちがいはいないわねえ。 ウん。  
オンナシヨーナ。  
おなじようだね。

A ソラ<sup>ハ</sup>ドッコトモ<sup>ハ</sup>コドモジブンヤシ。 オンナシ<sup>ハ</sup>コトヤロ<sup>ハ</sup>チ  
それは どんもみな 子供時分だし。 同じ ことだろう  
ー。 ミヤゲ チェーンジャカ オミセヤサン<sup>ハ</sup>ユー<sup>ハ</sup>テードデ<sup>ハ</sup>  
なあ。 みやげ というんだらうか。 お店屋さんという 程度で  
カタカタグルマニ ノセテ キタリ。 カタデ<sup>ハ</sup>ミノテ<sup>ハ</sup>キタリ シ  
がたがた車に 乗せて 来たリ。 肩で 荷がた 来たリし  
チャッタ<sup>ハ</sup>ジブンヤサカイデ。  
た ころだから。

### 注記

(1) この格助詞「ガ」は、後の「モロタ」と照応しない不整表現。

9. 農家の主婦の苦しみ楽しみ

話し手

| (略号) | (氏名) | (性) | (生年)         |
|------|------|-----|--------------|
| A    | 渡辺信一 | 男   | 明治43年生まれ     |
| B    | 渡辺久子 | 女   | 大正7年生まれ      |
| C    | 渋谷計二 | 男   | 昭和2年生まれ〈司会役〉 |

A ソラ<sup>1)</sup>ムコハンガ<sup>1)</sup>ヨカッタデジエー。(笑)  
 そりゃ、むじののがよかつたからだよ。

B ソラ<sup>1)</sup>ソーユータラ----(笑) ホヤケド。  
 それほ、そう言ったら----。 だけど。

A ケド<sup>1)</sup>マー ( B ホンデモ---- ) アノー タカイ<sup>1)</sup>タカイ<sup>1)</sup>ユー  
 けど まあ だけど ----) あの 高い 高いと言う  
 ケードー アノー ヤシロノ<sup>2)</sup>ホーヤラー マタ<sup>1)</sup>アノー<sup>1)</sup>シモノ  
 けれど あのう 八代の ほうやら また あのう 下の  
 ホーノ<sup>1)</sup>オガ<sup>1)</sup>オガエノ<sup>3)</sup>チカクノ<sup>1)</sup>アノー オンナシ<sup>1)</sup>オガエ  
 ほうの 小貝の 逆くの あのう 同じ 小貝  
 デモー コッチノー クリムラノ<sup>4)</sup>ホーノー<sup>1)</sup>ドエライ<sup>1)</sup>タカイ  
 ども うちの 栗村の ほうの ひどく 高い  
 トコモ<sup>1)</sup>アルシ<sup>1)</sup>ノー。 オヨ<sup>1)</sup>オヨギラーデモ<sup>1)</sup>エライ<sup>1)</sup>タカイシ  
 所も あるしほ。 於与岐なんかもずいぶん高い。  
 マー タカイト<sup>1)</sup>イエバ<sup>1)</sup>タカイモンノ<sup>1)</sup>チート、ノー、タカイ  
 まあ、高いと 言えば 高いものの、すん、はえ、高い

グライデ、ソレワ、エー、マー、ホンデ、ビャクショー、スルンニワ  
ぐらいでず。それほね。 まあ、それで、百姓するためには

アノー、マエワ、カタデ、モチヨッタサカエデ、イネモチスルン  
あのう、以前は、肩で、持っていたから、 稲持ちする

デモ、ナニ、スルンデモ、ヤッタナリ、マー、オマエカ、キテカラ  
にも、なに、するにも、たつたし、 まあ、おまえが、来てから

アノ、リヤカーモ、アリ、ナヤカイ、スルデ、ホラ、リヤカー、  
リヤカーも、あり、あれこれ、するから、そりゃ、リヤカーを

ヒッパッタリ、ナンカエ、スルンニ、アノー、オクノ、ホーデ、タ  
ひっぽったり、あれこれ、するために、あのう、奥のほうで、(土地が)

カイデ、マー、タカツキデモ、タカイ、トコヤサカイデ、エライ  
高いから、まあ、高槻でも、高い、所だから、つらいとは

トワ、オモツタケ、オモトルケード、ヤッパ、ソレニ、ガ、イ  
思っているけれど、やっぱり、それに、(それ)が

チバン、クルシカッタヤ、ナイ、コ。  
いちばん、苦しかったんじゃないかい？

B ソーヤ、フン、(A フン。) ホシテ、アノー、コノ、ターニ、ヒ  
そうです。ええ、(ふん。)、そして、あのう、この、田に

ルガ、ヤット、オツタンガ、イチバン、コワカッタ、ナントモ、イ  
蛭が、たくさん、いたのが、いちばん、こわかった、なんとも、い

エン、ソレワ、モー、コワカッタデス、ターニ、オヒルマエン  
ええ、(くらいに)、それほ、もう、こわかったです、田にね、お昼前に

アッタラ、ドーニモ、コーニモ、ヒルデ、ヒルデ、ブル、ターニモ  
なったら、どうにも、こうにも、蛭で、蛭で、手にも

ヒツクシ、ポスト、オヌイチャンガ、オヌイチャンガ、アノー  
くっつくし、そうすると、おぬいちゃんが、おぬいちゃんが、あのう



イヤシンボスルノワ ヨケ テーニ ビツツクノヤ デッテ ユー  
 「いやしん坊をする者はそれだけたくさん手にくっつくのだよ。」って 言って  
 テ ユーチャツ タクライデ テーニ ヤット ビツツキヨッタデ。  
 言われたくらいで 手に たくさん くっついてたりしたものだから。

A ソー ジャ。 マー アノ ジブンニワ  
 そうだ。 まあ あの ころには

B モー ホンマニ ナワデ サラエタイホド ベルガ オッタカ ワ  
 もう ほんとし 縄で さらえたいほど 蛭が いたが  
スレヤセン-----  
 忘れられない-----

A ナカグツモー ナカッタシ。  
 長靴も なかったし。

B ワタシトコワ アツタンデスケド。(A ラン。) ホンデモ ハジ  
 わたしの実家は(それが) あったんですけど。 それでも 初め

メー ニサンネソワ ハイタケド オヌイチャン カタズイチャテ  
 ニ・三年は ほういたけど おぬいちゃんが 嫁に いかれて

カラ モー ワタシ シトリ シゴト センヨーン オッタラ  
 から もう わたし 一人 仕事を (しげりや) ならなくなったら

モー ヨクモ オソニ ヨーニ ソナ クワイカ ナンジャ  
 もう 欲も とても そんな くらいとか なんとか

ユー コトワ モー ワスレテ ナカグツ ホカイテ ハイタ  
 いう ことは もう 忘れて 長靴を 投げ捨てて (田に) 入った

ユーンワ ノコリマス。 キョービ。(A ラン。) ソレワ ソレ  
 ということは (記憶に) 残ります。 今日でも。 ふん。 それは それ

ダケ ヨー オボエトリマス。(A ラン。) ラン ソレダケ ワ  
 だけは よく おぼえていますわ。 ふん。 わ

タシニモ<sup>(8)</sup> ヨクガ<sup>(8)</sup> デキタカ<sup>(8)</sup> ドージャ シランケード。ソラ コ  
たしモ 欲が 出てきたか どうか しらないけれどね。それは  
ワイ トコヤッタデス。  
これい 祈だったですれ。

A フン。マー アレ。アレモ イシバイ マイタソナンカイ スルトー  
ふん。まあ あれ。あれも 石灰を 撒いたりなんか すると  
ヒルモ ナニヤラー スルジャロケード (B マー エビガニカー  
蛭も いなくなるんだらうけれど まあ えびがにが  
----- ) エビガニカー デカケテカラ スクノ ナッタ ノー。  
えびがにが 出はじめから すくなく なった。ほえ  
オイ。ヒルワ。<sup>(9)</sup>ヘー。ソラ オマー。エビガニモー ナニヤロ ガ  
おまえ。蛭は。うん。そりゃ おまえ。えびがにも なんだらうかね。  
イヤ。アノー タタミ ニマイジキホドニ バケツニ ハンブンホ  
あのう 畳 ニ枚敷くらいに バケツに 半分ほど  
ド タマルホドー エビガニカー オツタンヤデ ノー。ソラー。  
たまるほど えびがにが いたんだから ほえ。そりゃ。  
(B ウン。) ハジメワ ドエライ エビガニモー サガシター  
うん。 はじめは とても えびがにも 探して  
チョーホーナ モンジャツタンヤケード ナニヤガナー。モー イ  
重宝な ものだったんだけれど なんだほえ。もう 今  
マデコソー ミネ<sup>(10)</sup> キツタソナンカイ シテカラニ ダイブ メー  
ゼンヤ 箱を 叩いたりなんか して それで たぶん迷  
ワクニ ナルケド アノ ジブンニヤー ドエライ メズラシカッ  
感に なるけど あの ころには ひどく 珍らしかっ  
タツヤ ノー。アレ。  
なんだほえ。あれ。

B メズラシカッター。 (<sup>A</sup>ウン。) ウチ オッタラ エーノニトオ  
珍らかった。 うん。 うちに いたら いいのにと

モ  
思っ

A エー。 ジャコカ ナカッタリ ナンカイ シタデ アエ シタノ  
ええ。 (じゃんが) なかったりなんか したから、あれ 下の  
オジーカ カタ カイノ。 アノ ダシニ ショー ユーテ ムシッ  
おじさんの家 かねえ。 あのう だいに しょうと 言って むして  
トイテ ホシテ ナンヤ シタン ジャカ アノ ダシニ カワリ  
おいて きて なんか したんだが、 あの、 だいに かわり  
ニ ツコタリ ニワトリノ エサニ トツテ キテ ヤッタリ シ  
に 使ったり にわとりの 餌に 取って 来て やったり し  
タ コトカ アッタ ノー。 アレ。 (<sup>B</sup>ウン。) ウン。 マー ナ  
た ことが あった のね。 あれ。 うん。 うん。 まあ、 な  
ンヤロ カヤ。 アノ ヒルニ ワ オマエモ ヨワツタ ヤロ。 (<sup>B</sup>ウン)  
んだろうかね。 あの 蛭には おまえも 困っただろう? (うん)

<sup>V</sup>ケド マー センソ センサー チューナリ アノ ドエライ  
けど まあ 戦争中だし あのう ずいぶん  
オマエト フタリデ アッチ イー コッチ イー シタ  
おまえと 二人で あっちへ 行き コっちへ 行き した  
コトモ ナカッタ ノー。 ホンデモ。 (<sup>B</sup>笑) アッチ エ イコ  
んとも なかった ね。 だけど。 あちらへ 行  
ニモ キシャノ キップモ カエンナリ  
うにも 汽車の 切符も 買えないうだし

B オジゾー サンイ ツレテ マイッテ モライ マシタ  
お地蔵さんへ 連れて 詣って もらいましたわね。

ナ。ホシテ<sup>ハ</sup>カエリニ コームリ<sup>ハ</sup>マーッテ  
 そして 帰路に 河守に 廻って  
 テ。 ) エーガイ<sup>ハ</sup> イッテ<sup>ハ</sup>カイツタ。  
 て 映画へ 行って 帰った。

A コームリ<sup>ハ</sup>マーッ  
 河守へ 廻っ

A ソヤソヤ。  
 そうそう。

B ソエダケ<sup>ハ</sup>ノコリマス<sup>ハ</sup>ワナ。(笑)  
 それだけ(記憶に)残りますわよ。

A ウーン。(笑) エーガ<sup>ハ</sup>ミテ。 マタ<sup>ハ</sup>ノー。<sup>(1)</sup>ソレモ -----  
 うん。 映画 見て。 またねえ。

B ソノトシカラ デケタンデス デ。アレ。ホンマニ。  
 その 年から できたんですわ。 あれ。ほんとに。

コドモガ。  
 子供が。

A カミシンジンヤッタ<sup>ハ</sup>ノー。アレモ。(B ウン。アレワ ホイデモ  
 神信心だった ねえ。 あれモ。

----) ニネンメヤッタ コ。  
 二年目だったかい？

B ハジメデシタ ノーオ。<sup>(2)</sup>ニネンメ。  
 初めてした ねえ。 二年目

A ヤッパリ<sup>ハ</sup>ホンデ<sup>ハ</sup>カミシンジンモ<sup>ハ</sup>セン<sup>ハ</sup>ナン<sup>ハ</sup>ワイヤ。 ホデ<sup>ハ</sup>  
 やっぱり それで 神信心も (なくちゃならぬわい。 て

ドヤ イノー。キョートノ アノー。 ドーブ ドーブツエンエ ヤ  
 どうかねえ。 京都の あのう。 動物園へ

スコヤッタ<sup>ハ</sup>カイノー。<sup>ハ</sup>ツレテ<sup>ハ</sup>イッタンワ。  
 康子だった かねえ。 連れて 行ったのは。

## 注記

- (1) C氏は、「ジャー」だろうと言う。
- (2) 集落名。
- (3) 集落名。
- (4) 集落名。
- (5) 言い誤りを言いなおした。
- (6) 夫信一代の妹。
- (7) 「しなければならなくなつたら」の意であるはず。しかし「セン  
ヨーンナッタラ」と聞こえる。
- (8) 家に対する執着心を言うか。
- (9) Bの発言重複して聞こえず。
- (10) 「ミネ」の意味不詳。イネ(稲)といちおう解しておく。
- (11) 「またそのうち二人で旅行することもあるぞ」の意。
- (12) 主人に対して、妻が「ノー」を使っている。
- (13) 「マサルさん」が「マザルサン」に聞こえる。
- (14) 「ネヤ」という文末詞はないという。C氏は「ジャ」だと教示す  
る。

III. 島根県<sup>に た</sup>仁多郡<sup>よこ た</sup>横田町大字<sup>おお ま き</sup>大馬木

収録・文字化担当者 広 戸 惇



## A 収録地点とその方言について

1. 収録地員 島根県仁多郡横田町大字大馬木小字日向原々〇3番地

### 2. 収録地員の概観

横田町は島根県の東南端にある。収録地員は旧馬木村であり、大馬木と小馬木に分かれています。東隣りは旧八川村であり、今は共に横田町と合併した。従って収録地員は一山越えれば広島県であり、旧八川村は東は鳥取県日野郡と境を接しています。この地方は出雲の最も奥深い地員であり、収録地員の旧馬木村は鉄道が通っていない。今日でも横田駅からバスまたはタクシーを利用しなければならぬほどの僻地である。出雲の最も山間部といえよう。合併後の今日の横田町は総戸数2,314戸、人口9,958人、そのうち、大馬木、小馬木(旧馬木村)の総戸数471戸、総人口2,314人である。収入は水田と林業のみであり、この水という産業はなし。だがこの地方は、昔砂鉄を産したこともあり、この方面は、かなりの資料もありそうである。

### 3. 収録した方言の特色

#### ① 方言区画上の位置、隣接諸方言との関係

隣接した広島県、鳥取県の方言の影響はほとんど受けを「ない」と思われる。だが出雲地方北部にくらべ、行キヨツタ、行キョツタなどの進行形が、北部よりも頻度が高い。これはあきらかに広島県の影響ではな「か」とも考えられる。もっとも出雲地方は、行キヨル 行キョル と現在形は用いられず、常に「タ」を伴った過去形のみで現われる。収録地員も同様である。音便形の「貰ッタ、払ッタ」を仁多郡のみがモウータ、ハラータというが、これは隣接する鳥取県日野郡にも行なわれる。これは鳥取県の影響ではなくて、出雲地方の音韻の歴史からみれば当然のことであり、北部のように促音便を用いることが、却って新しい「おろし」、この地方こそ、出雲の古い姿を保持しているといえることより。

#### ② 音韻上の特色

出雲市の音韻について、かつて国広哲雄氏の調査が、島根県方言辞典にある。仁多郡も同じと思われるので、国広氏の表を示すことにする。



|                |                |                |       |       |       |       |        |        |                |
|----------------|----------------|----------------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|----------------|
| ウ <sub>ɛ</sub> | ワ              |                | オ     | ア     | エ     | イ     | ヨ      | ヤ      | ウ <sub>ɛ</sub> |
| We             | wa             |                | o     | a     | e     | i     | jo     | ja     | wja            |
| {we}           |                |                | {o}   |       | {e}   | {i}   |        |        | {wjæ}          |
|                |                | フ              | ホ     | ハ     | ヘ     | ヒ     | ヘ      | フ      |                |
|                |                | hu             | ho    | ha    | he    | hi    | ho     | hu     |                |
|                |                | {ɦu}           | {ho}  | {ha}  | {ɦe}  | {ɦi}  | {ɦjo}  | {ɦju}  |                |
|                | ク <sub>ɛ</sub> | ク <sub>ɛ</sub> | コ     | カ     | ケ     | キ     | コ      | カ      | ク <sub>ɛ</sub> |
|                | kwɛ            | ku             | ko    | ka    | ke    | ki    | ko     | ka     | kwja           |
| {kwɛ}          |                |                |       |       |       |       |        |        | {kwjæ}         |
|                |                |                | ロ     | ラ     | レ     | リ     | ロ      | ラ      |                |
|                |                |                | ro    | ra    | re    | ri    | ro     | ra     |                |
|                |                |                | {ro}  |       |       |       |        |        |                |
|                |                |                | ツ     | ツ     | テ     | チ     | ツ      | ツ      |                |
|                |                |                | tsɔ   | tsa   | te    | ci    | tsjo   | tsja   |                |
|                |                |                | {tsɔ} | {tsa} | {te}  | {tsi} | {tsjo} | {tsja} |                |
|                |                |                | ト     | ダ     | デ     |       |        |        |                |
|                |                |                | to    | da    | de    |       |        |        |                |
|                |                |                |       |       |       |       |        |        |                |
|                |                |                | ト     | ダ     | テ     |       |        |        |                |
|                |                |                | to    | da    | te    |       |        |        |                |
|                |                |                |       |       |       |       |        |        |                |
|                |                |                | ゾ     | ザ     | ゼ     | ジ     | ゾ      | ジャ     |                |
|                |                |                | zo    | za    | ze    | zi    | zjo    | zja    |                |
|                |                |                |       |       | {dʒe} | {zi}  |        |        |                |
|                |                |                | ソ     | サ     | セ     | シ     | ソ      | シャ     |                |
|                |                |                | so    | sa    | se    | si    | sjo    | sja    |                |
|                |                |                |       |       | {se}  | {si}  | {sjo}  | {sja}  |                |
| ン              | ン              |                |       |       |       |       |        |        |                |
| N              | n              |                |       |       |       |       |        |        |                |
|                |                |                | ノ     | ナ     | ネ     | ニ     | ノ      | ジャ     |                |
|                |                |                | no    | na    | ne    | ni    | njo    | nja    |                |
|                |                |                |       |       |       |       |        |        |                |
|                |                |                | モ     | マ     | メ     | ミ     | モ      | ジャ     |                |
|                |                |                | mo    | ma    | me    | mi    | mjo    | mja    |                |
|                |                |                |       |       |       |       |        |        |                |
|                |                |                | ポ     | パ     | ペ     | ピ     | ポ      | ジャ     |                |
|                |                |                | po    | pa    | pe    | pi    | pjo    | pja    |                |
|                |                |                |       |       |       |       |        |        |                |
|                |                |                | ボ     | バ     | ベ     | ビ     | ボ      | ジャ     |                |
|                |                |                | bo    | ba    | be    | bi    | bjo    | bja    |                |

以上の国本哲弥氏の表で見られるように、出生地の特色は「ズーズー」并有り、五十音圖の少段の「う、す、し、つ、ず、す、ず」を欠く。また柳音の「う、す、し」の柳音を欠く。したがって、仮名表記は「ずと「つは「ず、しと「すは「ず、じと「ずは「ずで示すことにした。なお、司会者であり杉原清一氏(D)は、他県に於て教育の一部を受けたこともあって、「ズーズー」并加はほとんど認められず、「ず、す」の表記はしなかつた。

今一つ音韻上の特色が、仁多郡のみ認められたものがある。これは拙著「小陰方言の研究」の40頁—42頁に述べてあり、これに引用する。それは子音「エ」中心として前後に母音がくると次のようになる。

(1)  $eru \rightarrow jae$

例、寝る ( $neru$ )  $\rightarrow njae$ 。減る ( $neru$ )  $\rightarrow hjae$

(2)  $iru \rightarrow ja:$

例、着る ( $kiru$ )  $\rightarrow kj:$ 。生きる ( $ikiru$ )  $\rightarrow ikj:$

(3)  $iri \rightarrow ja:$

例、着物 ( $kirimon$ )  $\rightarrow kj:mon$ 。散りまつ  $\rightarrow tsaj:$   
 $masu$ に近く、知りませし  $\rightarrow sj:masen$ といわず、 $saj:masen$ という。したがって、 $iri$ は $ja:$ に変化するところ、定着しているように見える。

(4)  $uri \rightarrow sa:wa:$

例、釣る ( $tsuru$ )  $\rightarrow tsaj:$ 。これは仁多郡では $tsu$ (「つ」)がなく、「つ」り ( $tsumi$ ) であるため(3)に合致するべきもので、散りまつの散り(「つ」り)と同じと見えてもあろう。降りまつと例にたとえ  $Furimasu \rightarrow Faj:masu$ となる。

(5)  $eri \rightarrow jae$

例、蹴りまつ ( $kerimasu$ )  $\rightarrow kj:emasu$ 、減りまつ ( $herimasu$ )  $\rightarrow hje:masu$ 。但し、照りまつは  $tsaj:masu$ に近い。

(6)  $uru \rightarrow wa:$

例、来る ( $uru$ )  $\rightarrow kwaj:$ 。降る  $\rightarrow fwaj:$ 。但し「<sup>す</sup>降る」は、 $swaj:$ といはれず「 $sa:$ 」という。例外が多少のように見えても、

シとス、チとツとの区別を持っていなかつたが、*i* *r* *u* も *i* *r* *u* も同じものとして取扱うべきであつたかも知れない。ともかく *r* *e* はさんで、母音が前後に来る時、特殊を變化とする。これは出雲地方でも、この仁多郡にのみ見られる現象である。この(1) — (6)は、広瀬惇著、山陰方言の研究(昭和25年)に既述してある。

ラ行のうち、リ、ル、レ、ロは長音になりやすい。とくにリ、ルは殆ど長音化する。アリマス → アーマス、アル時 → アートキ、コレマデ → コーマデ、トコロ → トコーのように前行母音を長音とする。これは出雲全域がそうである。出雲全域では、セ、ゼは<sup>シ</sup>、<sup>ジ</sup>と発音される。また、母音イはエ、ユはイに対応し、ヌも唾にノに対応する。エシ(石)、エノ(犬)、イキ(壁)などその例は多いし、ウはオに対応することも多い。オシ(牛)、オマ(馬)。また拗音のうちウ列の拗音は、ズーゾー弁の関係で直音化する。キーコー(急行)、ギーニー(牛乳)、チーガク(中学)。こうした対応関係は老人層に多く、若い世代には急速に減少してゐる。

### ③ 文法上の特色

この録音にあらわれたものを中心に述べる。

#### 1. 代名詞

オラ 最も広く用いられる。複數にオラダ、オラド、オララチ、オラヤチがある。

ワシ オラに比して尊大な言い方。身分のある人がいう。

オマエ 共通語のオマエより、敬意の度合が高。共通語のアンタぐらいに当る。

オマエサン 相手に対して敬意表現としていう。

オマハン オマエサンよりやや敬意が落ちる。

#### 2. 動詞

進行形の(所謂ツツアル)ヨルは中国地方で常に用いられてゐるが、出雲にあつては、不思議にも過去形にしかならない。しかも北部の出雲にはあまり現われなかつた。この仁多郡ではかなり用いられてゐることから、この録音によつても知られる。行キヨツタの形より、行キヨツク

の形が多い。テイルは、出雲の北西部はトルとなるが、仁多郡ではじめ、出雲全般はツール(チョー)が多い。

音便形にっりとは、貰った、払ったは、出雲地方に広く行はれすが、この仁多郡と隣接の鳥取県日野郡に限って、モラータ、ハラータとなる。出雲の音韻方針から言えばこれが正当であり、出雲や隠岐のモラッタ、ハラッタを説明する方が困難である。モラータ、ハラータは二音便である。モラウタ $\mu$ の $\gamma$ と $\alpha$ と $\alpha$ の二重母音 $\alpha$ は出雲では(鳥取県も同様)2:(アー)となるのが出雲の原則である。したがって、モラータ、ハラータが主する。例外として、北部出雲地方では、二音節語、会う、買う、這うは、テ・タに接続する場合には、カータ、カータ、ハータ(時として、アク、カタ、ハタとも)という。形容詞の音便形と同様で、高く $\rightarrow$ タカーテ、浅く $\rightarrow$ アカーテ(北部の出雲地方は、タカテ、アワテ)となる。

### 3. 形容動詞

アゲータ、コゲータ、ソゲータ、ドゲータは中国方言ソガイダの変化でアゲータラー、アゲータニ、アゲータツタ、アゲータ、アゲータラと活用する。出雲の北部はアゲダ、コゲダと短い。アゲダはあむだ、コゲダはこうだの意。

### 4. 敬語

ゴザイマス、ゴザエス、ゴザエス、ゴザイスなどがよく用いられる。ヤンスというのり方が、注(91)に出るが、古い言い方の一つである。ゴザエスがゴザエンスとなる場合もある。ゴザンスも時にいう。ナハルなごの敬語体がよく用いられる。松江市を $\mu$ ナルの形が多いよう石。出雲全域に用いられる。

### 5. 副詞

ケー ケー忘れたはつり忘れたの意。つりと誤せりか、間投助詞的に、意味もなく用いられる場合もある。

### 6. 助動詞

断定の助動詞ダは、中国地方に広くみられるが、日本海側は出雲を中心としてダを用いる。出雲の地方で $\mu$ を用いるのは、この仁多郡と隠

岐阜の一部に限られている。仁多郡も古い人にジャが多く、若い人達にはガが多くなったようである。

#### 4. その他

この地を選んだのは、昔話の最もよく残っている地帯であること。仁多郡、それもこの旧馬木村は、今日なお昔話の宝庫である。北部の奥雲部では、既に収集が困難である。また最も交通不便の地でもある。

今一つはここには杉原清一代のような、上手協力者があったためである。同代は、昭和11年の生れであるが、県立横田高校へ出、兵庫県立兵庫農業短期大学を終え、38年4月から40年3月まで母校の横田高校の農業科に講師として勤め、短大卒業後は、公民館農業参考室相談員、農業協同組合の営農指導員とも勤め、横田町誌編纂委員、馬木小学校百年誌編纂主幹、現在は自家農業のかたわら、横田町文化財専門委員、県文化財保護指導員(横田町担当)、県埋蔵文化財調査委員(仁多郡、飯石郡、大原郡を担当)という、顔の広し、かつ熱心な協力者があつたゆえである。

この度の録音について、話を引き出す司会者と年々、2貫、を。

## B 表記について

イとウは中舌母音である。従って、母音イ、ウのみならず、イ列、ウ列のすべてにわたって中舌母音の表記を行なうべきである。片仮名の表記の場合にはそれができない。また音声記号の場合もそれほど目立っていないからそそまでの必要はない。ただこのうちシとスは混同し、共にその中間音となり、古老は文字に書く際これととり違えることが多い。よってシとスは共にスと表記する。ナとツも同じように混同する。これをツと表記する。濁音のズ(ヅ)とジ(ヂ)も共にズと表記する。セ、セはシ、シと表記する。司会者の杉原清一代は、教育程度も高く、他県で大学教育も受けた人であったため、ズーズー弁はあつても僅少と見て、ス、ツは用いず、シ、ス、ナ、ツで表記した。

## C 収録内容の概説

### 1. タイトル

杉原清一氏の司会にて、話題を変えながら進行して行、その、次のような内容となる。

1. いつも<sup>ぼろ</sup>禮褻を着て欲のなか、本人の話
2. こってのにはへい
3. 田植、草取
4. 盆と祭
5. 楢刈
6. 亥の子さし
7. 膝塗り餅、とろへん、ほとほと
8. どんど焼、ひとひ正月、こと祭

### 2. 録音年月日

昭和50年8月20日

### 3. 録音場所

島根県仁多郡横田町大馬木403番地小字日向原 藤原安太郎氏。

### 4. 話し手の氏名、性、生年、職歴、居住歴、言語的特徴など

- A 藤原安太郎、(男)、明治27年生、馬木小学校卒、実業科4年卒、農業の傍、ソロバンの行商としたことあり。方言はかなり古いものを持つ。ア、ア、古来のア、ア、かなり聞きにくい。
- B 波谷徳右衛門、(男)、明治33年生、馬木小学校卒、農業、この村から出たことは有り。兵役2年は松江市。よく話す人。
- C 長瀬マサ子、(女)、大正元年生、布勢小学校卒、農業、ここから約16軒北の仁多郡仁多町布施の出身。嫁入りしてこの村に来た。同じ仁多郡にてここと方言は変わり有り。言葉がはっきりし、よく話す。
- D 杉原清一 (男)、昭和11年生、県立横田高校農業科を卒業、兵庫県立兵庫農業短期大学卒、馬木村小馬木に住む。ここに住む。公民館農業参考室相談員、農業協同組合営農指導員、県立横

田高校農業科講師、横田町誌編集委員、馬木小学校百年史編集主幹を経て、現在県文化財保護指導員（横田町担当）、県埋蔵文化財調査員（仁多郡、飯石郡、大原郡担当）。短大以外は現在地に居住。方言量も多し。この話を録音するに当り、話を引下した出下司会者として依頼した人。

5. こゝは昔話の宝庫の地であり、藤原代などは昔話を語り人であるので、こゝを避く。宿屋などより、くつろぎの所と思ひ、録音は藤原代宅で行なふ。こゝまでの案内は島根大学教育学部の田中瑩一助教授に依頼、同席者は以上の四人の外、田中瑩一代、広片博り五名。池に鯉が居り、水の落ちる音は止めようがなく、戸を開けて行なつた。話の進行は杉原代に一任。後半は話題をすすめず止めやむなく杉原代の発言が多くなった。我々を意識して、どうして敬語の形が多くなるよう否。今一つ、藤原老人はキセルによる煙草を吸う人で、話の途中よくキセルの音がする。止めるととりため話をしなくなるでもと恐れ、止めずこゝに加へてきた。この加減念であった。今後は、最初に十分言、さあ必要を認め、幸に司会者がよく話を下して下さつたこと、長時間の会話をとれぬ。

1. いつも襦袢を着て欲のなかった人の話

話し手

| (略号) | (代名)   | (性) | (生年)           |
|------|--------|-----|----------------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ       |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ       |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ        |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ (司会者) |

C ナカタンノ<sup>(1)</sup> オズーサンワ アノ ナンダエデスガ アノ ソラ<sup>(2)</sup>  
 中谷(家号)の オ爺エムハ あの なんをえでオガ あの 上の

ノ<sup>(3)</sup> ウツノ スイット マエノ ソラノトコロニ オマエカントコロ  
 家の ずと 前の 上の 所は あなを(の)所の

ハカガ ゴザエンスガ (B ハー) アノ ハカフ  
 墓が ゴじいまるか (ひあ) あの 墓は

アノ イトハラノ ダンナサンノ スーット マイトスイ マイリ  
 あの 赤原の 旦那エムの ずと 毎年 お参り

ナハリョツタダケン。 (B ハー) ソエデ アノ ドコ  
 をアッて いたのだから。 (ひあ) そゆて あの どこ

ダエタ<sup>(5)</sup> アノ カワガエオ ストラッシュルトダエデ (B ハー)  
 だったか あの 川変えを (ひあ) (ていぶしやるといふこと) (6)

コノ スイグタニノ カワガ アノ ナガレトコー マー ナオスイ  
 この 渋谷の 川が あの 流れの所 ずあ 直

テネ。 (B ハイ) ヨカスイ イマゴロノヤノ ブルヤナシカ  
 してね (ひい) 昔 今頃のようネ ブルヤなと



ブルトーダーヤナンカジヤ ナイデスヤケン。

ブルトーダーヤナンカジヤ ないですヤケン。

A ハー ソゲナモノ ナイデスヤケンネ。

はあ そんなもの ないですヤケンね。

C ソゲスヤテ マー アノ ツクサレタタメニ  $\left( \begin{matrix} B & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{matrix} \right)$  アノ  
 そうして ちあ あの つくされたために

マエトスヤ イトハラカラノ <sup>(9)</sup> ボンニ ハカマイリガ アリマシヨッタ  
 毎年 糸原(家)の 金に 差参リが ありました

デスヤ。  $\left( \begin{matrix} A & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{matrix} \right)$  エマワ アノ カイホーネナッテカラワ  
 です。 今 は あの (農地) 解放になってからは

アノ キナサランデスヤダドモネ。(問) アゲナハナスヤカナニスヤ  
 あの 来たらないですけれどもね。 あんな 話 かなんか

マッパ クワスエコト キイケリナハリヤ。

もって 詳しいこと 聞いておくれは。

B ヤー ダイタイニ アレフ キーチューマシエンワ。 ダイタイ トニカ  
 やあ だいたいは あれは 聞いておせんわ。 だいたいは どのく

ク <sup>(8)</sup> イー ナンデスヤワ。 アー イトハラエ ツクイタ。 イトハラ  
 なんですわ。 ああ 糸原へ つくした。 糸原

グタローハンニ ツクエタモンダデワ アーサネスヤワ。  $\left( \begin{matrix} C & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{matrix} \right)$   
 武太郎 さんに つくしたものでは ありようですわ。

イー イート ウーン アノ スヤタンノ アゴーサントコロカラ  
 うん あの 遊谷(小字名)の 阿合(さん) 村から

マエエ。 <sup>(9)</sup> ハーカラ カワガ ナカヤマエ ムケテ デ"チヨツタモシタ"  
 前へ。 それから 川が 中屋前へ 向って (流れ) 出ていたから

ラスエーデスヤワ。  $\left( \begin{matrix} C & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{matrix} \right)$  ソーデスヤワ ムカスヤワネ。  
 うしいですわ。 そうですわ 昔はね。

(10)

ソレオ カイコンスイテ カワオ オマハントコロノマエネ ツケテ。  
それを 開墾して 川を あはたの 前に かけて。

イー ソレカラ コノ ウーン コレオ スイブタニノ アノ ウ  
それから この うん には 渋谷の あの う

(11)

ー ジョーブエモ ゴット コスイラエタモンラスイデスイネ。(C ハー)  
う 上部へも 全部 作った もの でしょうね。(ハエ)

マー アノ コー ツィシェーソスイタモンダラスイデスイ。(A ウン)  
まあ あの 耕地 整理 したものでしょう。(うん)

(12)

ガ イー マー ダイタイ ソノ イトハラノ イーカラ アノ  
か まあ かいだい どの 絲原の あの

マツエノハン マツエハンカラ スカタ ツーテ ソノ ナクニング  
~~松江藩~~ 松江藩から 地方(役人)といって その 役人が

ムカスイ キョッタモンデスイワ。(C ハー) ソレオ ウン  
昔 来ていたものでしょう。(ハエ) それと うん

イー マー ドノテード オツタカスイランダドエ イー マー  
まあ どの程度の(人数) 居たか 知らないうちで ずあ

(13)

ツイズレオキテネ。(C ハー) ツィズレオキテ ソエカラ イー  
つづれ(織)を着てね。(ハエ) つづれを着て それから

(14)

ネングサゲテ モラウヤネ ゲンジュースイテモラーヤーネ ソノ  
年貢を下げた 貰うように 減税して 貰う ように どの

ヲノマレタダソーデスイ。(C ハー) トコロガ ソレガ トーテ  
頼まれたのだ そうですね。(ハエ) 戸数から なんか 通って

ネ。(C ハー) マー トニカク イー イトハラノ イー フ  
ね。(ハエ) ずあ じにかく 絲原の 故

タローサンワ スイブン ソノ トクオ スイラレタモンダノデーデスイワ。  
太郎さんは 随分 どの 得を されたものでしょうね。

( C ハアイ ) ( キセルの音 ) ソレデ エー ウーシ  
ほあい せせい ええ うん

マー ソーユー ツナギデ ソノ マー ハカマイリオステ  
まあ そういう 縁故で その まあ 屋敷り えて

(15)

エラウ。 トコロガ ソーユー ソノ イトハラエ ツクエタモン  
貰った。 とこが そういう その 縁原へ 尽したも

(16)

ダトモ イー ダエタエ ケー ボロバツカリ マトー<sup>4</sup>ヨツタ キ  
おけおども だいたい つい 襦袢ばかり まじっていた 着

ヨツタ。( C ハア ) アンマー コンナ ボロオキ<sup>4</sup>コータン ア  
ていた。 ほあ あんまり 級は 襦袢着まじりから あ

(17)

ノ イトハラノ ノ ダンナサン ダンナントコーカラ ダンナツ  
の 縁原の 旦那さん 旦那さん所から 旦那さん

ントコーカラ イー キモノオフトカサネダエラ ナンボダエラ  
とこから 着物とわく重ぬが いくらか

マ ガンズキルホド ソノ モラツタ。 オクツテモラツタ モツカソー  
ま しほしく 着るほど その 貰った。 送って 貰った ものがさ

デス。( C ハア ) トコロガ ムカスノコトダケン マーアー  
です。 ほあ とこが 昔の事だから マア

(18)

(19)

ワスライナンテイワーシエン オラダツ<sup>1</sup>イダケニ オラワ コゲナモノ  
おしらなど 言はしな ぶらぶらと いうのがから おらは こんもの

ワ イランツイデー オラワ ツイズレホドアリャーエーツイデー ソスライ  
は いらぬといふので おらは うづれほどあつたといふので として

(20)

ソノ イトハラカラ アー オクツテモラツタ ジョートーノキモノ  
その 縁原から ああ 送って 貰った 上等の 着物

(21)

オ イッサイ ケー イトハラエ モドエテスマーテ ( C ホーシ )  
と 全部 つい 縁原へ 戻して しまって ほあ

イー アゲナモノモラー<sup>4</sup>ョー<sup>ト</sup> ト ソノ オラガ イーコトガ  
あんまもの 貰っていろと と その 自分が いろこせか

(22)  
トーランケニ (C フーン) ナンダーモラワン。(A フーン)  
通らん かし ふうん なんにも 貰わん。(ふうん)

ソイカラ マー ソゲナコトイヤー ホンナラ オマエガ クーホ  
そいから まあ そんなこといろのたす せれなす お前か 会へりほ

(23)  
ダー トツイワケテセツ<sup>4</sup>クケネ (C フーン) イー トツイ イー  
どほ 土地を合けてやておくかし (ふうん) 土地

(24)  
ツイクレト ネンクワイランケン。(C フーン) オマエニ セー  
作れと 年貢はいろな<sup>4</sup>かし。(ふうん) お前に かし

ケンツイータラ エンヤ ソゲナモノ モラー<sup>4</sup>ユリヤー コトサラ エ  
かしと<sup>4</sup>ったす いろや そんなもの 貰っていろほ<sup>4</sup> こせ<sup>4</sup>たす いろ

ランケン ナンダー イランケン。(C エー) イー ナ テンイ  
すな<sup>4</sup>かし 何にも いろな<sup>4</sup>かし。(ええ) 下 天夜

ムホーデー イー ナンダエ イランケン。イー ホロノ イー ハ  
無<sup>4</sup>終<sup>4</sup>て 何も いろな<sup>4</sup>かし。 ぼくの

(25)  
ダコト ツイズイレデアリ<sup>4</sup>エーケン。ナンダエ エランズ<sup>4</sup>イテテ イッサ  
下着と っづ<sup>4</sup>れ<sup>4</sup>て あれほ<sup>4</sup> ま<sup>4</sup>かし。 何も いろな<sup>4</sup>よと<sup>4</sup>って いろな<sup>4</sup>

(26)  
イ ヨクオ<sup>xxx</sup> ガ ナカッタモンダ<sup>4</sup>ゲネス<sup>4</sup>。ソーユーモンダ<sup>4</sup>カラ ソ  
欲<sup>4</sup>と が な<sup>4</sup>か<sup>4</sup>つ<sup>4</sup>る<sup>4</sup>者<sup>4</sup>だ<sup>4</sup>と<sup>4</sup>いろ<sup>4</sup>こ<sup>4</sup>と<sup>4</sup>です。 そう<sup>4</sup>いろ<sup>4</sup>者<sup>4</sup>だ<sup>4</sup>かし そ

(27)  
ノ イー マ イツイギアル モノ<sup>4</sup>ダ<sup>4</sup>ツ<sup>4</sup>タ<sup>4</sup>ラ フイト<sup>4</sup>ダ<sup>4</sup>ツ<sup>4</sup>ク<sup>4</sup>ラ<sup>4</sup>ス<sup>4</sup>イ<sup>4</sup>ゴ<sup>4</sup>ザ<sup>4</sup>  
の ま いろぎ<sup>4</sup>ある も<sup>4</sup>り<sup>4</sup>だ<sup>4</sup>つ<sup>4</sup>た<sup>4</sup>す 人 <sup>4</sup>ろ<sup>4</sup>え<sup>4</sup> <sup>4</sup>し<sup>4</sup>ら<sup>4</sup> <sup>4</sup>こ<sup>4</sup>て<sup>4</sup>

イマスイフ。(C ハー) ワリアイニネ サイキンノ コトデスジエ。  
いろな<sup>4</sup>わ。(へえ) かりあ<sup>4</sup>に<sup>4</sup>ね 最近の こ<sup>4</sup>と<sup>4</sup>です<sup>4</sup>よ

イー オラガズ<sup>4</sup>イ<sup>4</sup>ガ<sup>4</sup> テンホークネン = オマレテ オーマスイケン  
私の 薪<sup>4</sup>が 天保 九年に 生まれ<sup>4</sup>て いろな<sup>4</sup>かし

ネ。ス<sup>イ</sup>ニアタルフトガ ソレガ ウマレタス<sup>イ</sup>ニ スインダ<sup>イ</sup>モンダ<sup>イ</sup>  
由。 籍に ある人か どのが 生きた年に 死んだもんか

ゲネス<sup>イ</sup>ワ。 ナナジュー ナナジュー ナナサエ タツタツ<sup>イ</sup>マ<sup>イ</sup>ス<sup>イ</sup>ネ。 イー  
いうことである。 セナ セナセマ<sup>イ</sup> だったと、いいますね。

トコロガ ソノ ウーン ソゲナモノノ イー どのツ<sup>イ</sup>ノモンダケ  
とこが どの うん どの者の 身の看どから

ンツ<sup>イ</sup>ーデ ソノ ウマレタス<sup>イ</sup>ブンニヤ タエス<sup>イ</sup>タ イー ヤッハ<sup>イ</sup>ス<sup>イ</sup>  
というので どの 生きた頃には 大変 せつぱり

イトハラサンノ コサクデ ビンボー ス<sup>イ</sup>キョツタモンダ<sup>イ</sup>ゲナド<sup>イ</sup>モ  
糸原さんの 小作で 貪<sup>イ</sup>していったものかということだが

ソノ イー ムカス<sup>イ</sup> <sup>(28)</sup>  
アコギツ<sup>イ</sup>ーダカ ヨロコビガ ト<sup>イ</sup>テモ  
どの 昔 あこぎ というのが 喜<sup>イ</sup>がが とて

ズ<sup>イ</sup>カタス<sup>イ</sup>ーツ<sup>イ</sup>モンダカラデス<sup>イ</sup>ネ。(C ホー ) ソーイー ハナス<sup>イ</sup>  
地方衆(者)というものがらびすね。(ハ<sup>イ</sup>) そういう 話<sup>イ</sup>は

ワ キイ<sup>イ</sup>ホーマス<sup>イ</sup>。マー トニカクネ。  
聞いています。 まあ どのかくね

A ソレワ オマエノ ナンダエマエノ ス<sup>イ</sup>ーカネ。  
それは お前の 何代 前の 人かね。

B ナンダエマエテラネ ウツ<sup>イ</sup>ネ マー ダエタエアノケーズ<sup>イ</sup>ワ ナン  
何代 前と、いって(え)ね 自分の家に まあ おいた、あの系図は 何か

ダエ ワカラ<sup>イ</sup>ンガネ (A ホー ) ブンケダ<sup>イ</sup>ラス<sup>イ</sup>ーゴ<sup>イ</sup>ガイマ<sup>イ</sup>ス<sup>イ</sup>ワ。  
(はく) 分<sup>イ</sup>からせ<sup>イ</sup>がね (ほお) 分<sup>イ</sup>家<sup>イ</sup>だ<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>し<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>こ<sup>イ</sup>せ<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>ます<sup>イ</sup>わ。

(A ホー ) ブンケダ<sup>イ</sup>ツ<sup>イ</sup>タ ソレデ<sup>イ</sup>  
(ほお) 分<sup>イ</sup>家<sup>イ</sup>だ<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>せ と<sup>イ</sup>か<sup>イ</sup>で

C ソンナラ ウマレルコトワ ウマレ<sup>イ</sup>ホーナハ<sup>イ</sup>ツ<sup>イ</sup>テモ (B ホー )  
そんなら 生<sup>イ</sup>きた<sup>イ</sup>こ<sup>イ</sup>は 生<sup>イ</sup>きた<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>ソ<sup>イ</sup>カ<sup>イ</sup>つ<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>も

ソノ ヨメサンオ モラフスイトニ。  
その 嫁さん 貰わずに。

B マー ケツキョク。  
まあ 結局 (どうです)。

C オズーオ<sup>(30)</sup> マー チョッコスィ フルー イフヤー (B ハー ドクスイン  
おじーを まあ 少し 悪く言えば ほん 独身  
ドクスイン) オズーオ サッシャツタヤナコトデ シェワバツカーナエテ。  
独身 おじーを 存じった ようなことで 傷とこはばかり 傷かいて。

B ドクスインデ クラエタモンデスィガ。  
独身で 暮した 存ですが。

C ハアーン。  
はあん。

B ソエデ ハカガ ワカレチョーマスィケンネ。(C ヘーン) スィタニ  
それで 墓が 別がれていそまらね。( へえん ) 下に

アツタデスィ。(C ヘーン) ソーデ ハカガ アンタ モー  
あつたです。( へえん ) それで 墓が あなた もう  
×××

フィットリ モー フィツィ アツタラスィイデスィガ ソーガ ガケフズイル  
××××× 一人 もう 一つ あつたらしいですか それか 産くずれ

デ ヌケテネ (C ヘー) イーソレ イマ イキ ナンダイスィキョル  
で 崩れてね ( へえ ) それ <sup>×××</sup> 今 今 何かしていい

アン ブンケワ ブンケダツタラスィー ゴザ インスガネ。マー イ  
ああ 分家は 分家 ぶらたすく ござりますか。 まあ

一 ケ ツィマモメトラスィ = フィトリホツ ツィデ ケー ソケナ イー  
つゝ 妻も めとらずに 独りぼっで つゝ せしな

ウーン ヨクノナイコトオ イーテカラネ イー イー ワーワー  
ううん 欲のないこと 言って 我々か

オ オモ - コト ホーラクニ イーチョック ホーラクナナンテ イ  
思うこと(E) ...を放題に 言っていた ほおしくみ きて ...え

ヤー マタ (笑う) ナンダエダガ スーブン イーチョックモン  
バ また (自分で笑う) 何カダガ すいぶん (...を放題E) いて

ラスイデスナ。 (A ハハー) ソエデ スーット カイホーニ  
いたものらしいです。(ハハア) それで すうっと 巖地 解放に

ナーマジヤ イ イトハラネ ノ ブタローハンカラ ダエガカワ  
なすまでハ 糸原<sup>xxx</sup> の 此太郎 じんから 代が変わって

ッテモ ヤッホリ ソノ ハカマイリオ スイテモラッ チュツタデス。  
やっほり その 墓 参り して 墓っています。

(A ウーン) ソレデ ゲンガエ シェキトーガ イー ニジュ  
うん それで 現在 石塔(墓石)が 二重

ーダエノ シェキトーデスィカ<sup>xx</sup> ガ ムカシ テンホー スィダエノ ニ  
台の 石塔ですが が 昔 天保時代の<sup>xxx xxx</sup>

ノ コサフ アゲナ ビンホーニンガ シェキトーデモ ニジューグエ  
小作 あんは 貧乏人が 石塔でも 二重台

ノ シェキトーツート ソリヤー アノ マー ツート ジュータクナ  
の 石塔とって それほ あの まあ 少し せいらくは

モンダッタラスィー ゴガイスィカ イー イトハラ ブタローサンカラ  
ものたらさしゅう ございますか 糸原 此太郎 じんから

イー キザンデモラッタモンダソデスィワ。  
きざんてもらったものらしいですわ。

A ナンツィー スーサンジャッタアエノ ナマエワ。  
何という名の 薪 じん ろうたかしの 名前は。

B スィブヤ シュ シュエキ ツィ (A ホー) シュエキ ツィ ツィー シュエ  
滋谷 しゅ 末吉 (ハハ) しゅえきち とりゅう しゅえ

(39)

キ ツイ シュエキ ツイ ツー ヨ ッ タ ソー デ スイ フ。  
き ち しがえき ち と い い よ た る じ ず わ。

A スイカイ ホンナラ スイキツイカ。 ( B マー ) スイテキツイカ。  
すいがい ほんなら すいきちか。 ( マー ) 捨吉か。

b イヤ スイレ スイレキツイ スイレキツイダエラ ソエツイ ( C ハハハ... )  
いや すれ すれきち すれきちだか そいつ ( ハハハ... )

イー スイレキツイ スイレキツイツーテテ イー タ デ シュー。 ( A ホー )  
すれきち すれきちとって いったでしょう。 ( ホー )

(41)  
ト イーヤナ ツイナド デ スイ フ。 ( A ホーホー ) (キセルの音)  
と いうような因縁ですわ。 ( ホーホー )

A ホーホー ソーデ (42) イトハララン ヤッパリ マイラレヨッタ。 ( b ハ  
ほあほあ それで 萩原には やはり 参られよた。 ( は  
あ )

C ホンニネ ( B ハー ) スー ッ ト アノ テマエノハカエ コゲー  
ほんにね ( はあ ) ずっと あの 自分の 墓へ こう

マイ ッ テ ホーカラ スー ッ ト コゲイキテ ウエノ ソラノトコー  
盒にね それから ずっと こう行って 上の 上の ところ

オ マワ ッ テ ホイカラ ナカントノ イマノ ソノ ハカエマイ  
を 廻って それから 中の谷の 今の その(男の)墓へ 参っ

ッテ グリー ッ ト マワ ッ テ コンダ ウツノニワエ アノ ウツ  
マ くるっと 廻って こんどは 私の家の庭へ あの 墓の 痕

マデモド ッ テ スイモ (43) アノ タバコスイテ オイデニナ ッ テ  
まで戻って 下 あの 休んで おいでになって

( B ソゲヤッタ デスイ。 ) ソエカラ イナシエラレヨッタ。  
そうであったです。 それから お帰りになられよた。



B ツーロガ チャント キマッ チョック。

通路が ちゃんと 繋がっていた。

(44)

C イマンゴ'ロノ ケンギ'サンモ ワカイトキワ ツイテゴ'ブ'シマツタ。

今頃の 果 識 せんも 若'時は ついて来られた。

13 ソーデス'アネ。  $\begin{pmatrix} C & \text{バー} \\ & \text{へえ} \end{pmatrix}$  ソエデ、マ ヲカス'ノ'フイト'ノ'ハナス'イ  
そうですわね。 それで ちあ 昔の人の 話。

ダ'ケン'ダ'ド'モ' ワカエス'イ'ブン'ニ'フ' フ' ソ'ノ' ウ'ー' カネ'ウ'リ'シヨ'ッ  
ボ'ダ'ラ'ダ'けれ'ど' 若'い'時'分'には' その 鉄'売'し'よ'った

タ'ダ'。 (キセルの音) マー テ'ツ'イ' イ'ト'ハ'ラ'ノ'カ'ネ'  $\begin{pmatrix} C & \text{バー} \\ & \end{pmatrix}$   
のだ。 ちあ 鉄 鉄'系'の'鉄' (E)

ウ'ッ'タ' モ'ン'タ'エ' ド'ゲ'ダ'エ' イ'ー'コ'ン'ダ' カ'ネ'ウ'リ'シヨ'ッ'チ'モ'ン'タ'ケ'イ'  
売'った'も'の'ど'か' どう'ど'か' と'リ'う'こ'と'だ' 鉄'売'り'し'た'も'の'ど'か'そう'です'。

ネ'ス'イ'。 ソ'ー'デ' ア'ッ' ツ'イ' カ'レ'ガ'タ'ノ'ホ'ー'エ' イ'キ'ョ'ッ'タ' ワ'カ'エ'ス'イ'ガ'  
それで あ'つ'ち' 上'方'の'方'へ' (帯)行'っ'て'い'た' 若'い'時'分'

ン'ニ'ネ'。  $\begin{pmatrix} A & \text{フーン} & \text{フーン} \\ & \text{ふうん} & \text{ふうん} \end{pmatrix}$  イ'ー' イ'ッ'フ'ン' マ'ー' カ'ネ'  
に'ね'。 一度 ちあ 鉄

ウ'リ'ネ'ワ' ショ'ー'ト'オ'エ'ー'グ'ライ'フ' ア'ー' モ'ン'タ'ケ'ネ' ボ'デ'ネ'  
売' (12)は' しょう'と'思'う'ぐ'ら'い'な' ちあ' 春'を'か'ら' ち'よ'と'も'

サ'ン'ニ'ョ'ー'ガ' ワ'カ'ラン'モ'ン'ジ'ヤ' ナ'カ'ッ'タ'ラ'ス'イ'。 タ'エ'ス'イ'タ' ナ'ラ'ー'タ'  
計算'が' 合'が'た'者'で'は' ち'か'ら'た'ら'しい'。 た'り'し'た' 習'った'

モ'ン'デ'ワ' アル'マイ'ケ'レ'ド'モ'ネ'。  $\begin{pmatrix} A & \text{ウーン} \\ & \text{ううん} \end{pmatrix}$   
者'で'は' あ'ら'ま'い'け'れ'ど'も'ね'。

## 注記

- (1) ナカニタンノは、ナカノタニノというところを、語中のノ、ニを鼻音化してンとなつてゐる。
- (2) ソラウエ(上)とソラということはお出雲の北部でもいうが、この地方は特に多い。
- (3) 自分の家族、家とウチと称するのほかに用ゐられてゐる。こゝで他人の家屋を指してゐる。
- (4) 糸原家の代々この附近の名門の家柄として、広く知られてゐる。
- (5) ドコダエダ どこだ、たかに当る。ドコダはそのたかでの疑問を持つ。ドコダエダッタカというべきところの簡略と考へる。
- (6) 五段動詞にはッシヤル、一段動詞にはサッシヤルという敬語表現がつく。出雲地方で最も多く用ゐられる言ひ方である。トダエデはあまり用ゐない表現で、文法的に説明しにくいが、ということでの意に当る。(5)と関連するが、ドコダがドコダエとたかたにたかに疑問は強まる。トダエデはトカデに近き言ひ方と考へられる。
- (7) 糸原家のことは(4)にのべてたか、出雲南部の名家から墓参をされたことは大変な名譽である。
- (8) この人のみの個人的な口癖。エーというべきところである。常にこの人は言つてゐる。
- (9) 屋号
- (10) オマエサンが時としてハンとなる。サンよりヤ、敬意が下る。オマエハンがさらにちぢまったもの。
- (11) カミ(上流)の方。
- (12) それからとも訳せようが、こゝでは間接助詞的な表現。
- (13) 綴織のこと。こゝでは、つぎはぎした粗末な着物。ぼろ着。
- (14) ようにの古い形はやうにである。出雲は出雲音最変化の規則にしたがつて、二重母音を以て短音とした。したがつてやうにはヤニ。出雲北部は短くヤニという。この地方も時としてヤニと短くする場合もある。
- (15) モラウは(14)と同じ規則による。ウ音便モラウはmottと

ゑと二重母音ゑに持つ。ゑはゑとゑから、モラータが発生する。但し、出雲の北部はどうわけか、モラッタと促音となる。モラータの地域は、この仁多郡と東側の鳥取県日野郡の二郡のみである。例外として、買う、這う、会うなどが二音節語に限って、出雲の北部もウ音便を用い、カータ、ハータ、アータとなる。

(16) 共通語でツイ コンナコトラシタ というの<sup>エ</sup>、出雲全域ではケークゲナコトヲシタ という。それが本義であるが、間投助詞的に無意味、または語のつなぎとして用いられる。

(17) ダンサンというの<sup>エ</sup>は、ある特殊な家門の家柄のみに用いられた。ここではダンナサン、ダンサンと二つあり、共に特別の家柄に用いられたといふ。

(18)(19) 自称のワシ、オラの二つを言いわけしている。一般の人はオラであり、ワシは身分の高い人の語、尊大な自称である。オラダはオラの複数、オラダナはオラ違ひであり、これも複数と表わす。ワシラ、オラダナも単数にも用いられた。次にオラワと単数に言い変えている。

(20) モラータは(15)に既出。

(21) ス<sup>エ</sup>マーテはシマッテの事。(15)(20)と同様にウ音便形。

(22) 一般にケン(理由を示す<sup>カ</sup>)であるが、この地方にはケニが現われる。時にケネともなる。

(23) ケン、ケニ、ケネ。(22)参照。

(24) (22)(23)を参照。同一人の三通りの言ひを示している。

(25) ス<sup>エ</sup> という終助詞は出雲地方で広く用いられる。

(26) ゲネス<sup>エ</sup>はゲナテスの略と思われる。トント<sup>エ</sup>昔加<sup>エ</sup>つたゲナのゲナは伝聞を表わす語であり、とかいうことだに当る。

(27) 一議とでも書くべきが、一物あるの意。

(28) あくどい、いじわるの意。このとに<sup>エ</sup>意味不明。

(29) ナハルという敬語は出雲では広く用いられている。ッシャルよりも軽い。

(30) 叔父と書くが、この場合は、生家<sup>エ</sup>一生独身<sup>エ</sup>で過し、嫁もめとらず、婿にも行かない男子をいう。

(31) 敬語表現(6)参照。

- (32) 前にも出てゐるが、テイルは仁多郡では<sup>7</sup>ヨルと作る。出雲市附近はトルと作る。
- (33) ゴザンス、ゴガインス、ゴダイマスなどの言ひが出雲地方にある。
- (34) イーテは言うてでう音便、カラネはカラニガりの変化。特に意味は無いが、よく用ゐる。シテカラネなどもよく用ゐる。念を押す意が。
- (35) 言ひすまゝの意が。
- (36) あんな、こんな、そんな、どんなは、アゲナ、コゲナ、ソゲナ、ドゲナという。この地方は長音が多く、アゲーナ、コゲーナ、ソゲーナ、ドゲーナが多い。
- (37) ゴガインスが、さらにちぢまった形。(33)参照。
- (38) ジャツタとダツタの両形が用ゐられ、若し層にはジャツタは嫌われられている。
- (39) ツーヨツタはト言うに、進行形のヨルのついたもの。仁多郡は北部の出雲地方より、より盛んに用ゐられている。
- (40) イーダは言ひタのう音便。(34)参照。
- (41) 注(14)に述べたが、ここではヤーニが短くなつてヤニとなつてゐる。元来南部の出雲は長音にし、北部の出雲は逆はつた言ひの。この地方も時としてヤーニとヤニと短かくする。
- (42) ソレテを長音としてソーテという。出雲地方全般がさうである。
- (43) シモーフノとも聞えるが、意味不明。シモーフノを印り離してみた。
- (44) 現当主の系原義隆氏を指す。
- (45) 砂鉄の産地であり、系原家の砂鉄。

## 2. こってのにへい

### 話し手

|   |        |   |                |
|---|--------|---|----------------|
| A | 藤原安太郎  | 男 | 明治27年生まれ       |
| B | 渋谷徳右衛門 | 男 | 明治33年生まれ       |
| C | 長瀬マス子  | 女 | 大正元年生まれ        |
| D | 杉原清一   | 男 | 昭和11年生まれ (司会者) |

A コッテノニヘー ツーモノがオック。  
こってのにへい という者がおった。

C コッテノヘーダエ (A オックゲナ) アノスイーノ  
こってのへーが、い おったとこな あの衆(人)の

A コッテノニバイジャッタダエラ<sup>(1)</sup> ニヘーツォー ナマエデ ソゲナ ナマ  
こっての(雄牛の)(大まが)にぼりおったのか にへいという名前が そんな 名前  
エジャッタダエノー。  
おったのかのう。

B ツイイ ソイツキヤースランガ<sup>(2)</sup> マー タイリキブソノー。  
つい そいつは 知らんが 子あ 太力無双の。

A オー (C フーン)  
おあ。 (ふうん)

A コッテオ<sup>(3)</sup> ニナータトダエ オータトダエ。  
雄牛も 荷ったとか 負うたとか。

C ナンダエ ウスイガスインデネ コッ テーノウスイガスインデ ソレ フトツ  
 なんだが 牛が 死んでね こっちの牛が 死んで それ(は) 一人

スイテオーテイキテ ウメタトダエラ オーキナ ハカガ オスイサン  
 で 買って 行って 埋めたとか 大まほ墓か お墓 さんの

トコニ アーマスガ。  
 とこに ありますか。

B イヤ ショーグツツィグンズィツィノ オビエタダ。 アノ スインダソーデスィ。  
 いや 正月 元日の びっくりしたよ。 あの 死んだそうです。

(A ウーン) トコロガ ウン キンジユエ ショーグツツィ テツィダ  
 ううん とこが うん 近所へ 正月 手伝

エオスイテ イー ゴシツィーテ ソノ フレダエタラ ショーグツツィグン  
 として くれって(牛を埋めた) その ぶんを出した 正月元

ズィツィヤナンカエネ ネ ヨー ラツィダエニエッテ マー ツィート  
 日やなどに よう 手伝に行って(やまにはでまかせ) もう けし

マテツィータラ イヤ ホンナラ タノマン アノ イー オラガ  
 待てとった iya それなら 頼まん あの 自分が

ドゲナト シュバンスィル ソレオ オーテ ケー ドコダエ スィテア  
 どんなど 処分する それを(死んだ牛を)買って つい とこがえ 捨て

ルイテ モッテテ スィテタツィーダ。  
 歩いて 持って行って 捨てたというのだ。

A ウーン アゲナモンダ ゲンキナモンダ オッタ ハナスイワ アーダ  
 ううん あんなものだ 元気な者があつた 話は あまけ

ドモ。(B ハイ)  
 けども。(はい)

C ソレワ イツィゴロノ ハナスイテシューカ。  
 それは 何時頃の 話でしょうか。

B カーネ。  
そうね。

A 4カス、ハナシダラージノ一。  
昔の 話だろうよのお。

B ソレモ アマリ フルイコトワ ナイデスイソ。コノ キンネンネ  
それもあり 古の事は なりますよ。 この 近年に  
(4)  
アート アレワ イー ホー スィ スィ テ アゲタケンネ。  
ああと あれは 法事して あげたからね。

C ハー ソゲテスイカ。  
はあ そうですか。

B ハー フルイスィーサンカ マー ホー スィーサー ツィー .....。  
はあ 古の爺さんが まあ 法事をするといい .....。

C ソリヤー オマエサントコーネ。  
それは あなたのところに。

B エンヤ コリヤー フルー .....。  
いいえ こねは 古う .....。

C スィブタニニ ( B ハー ) ホンネネ。  
渋谷に ( はあ ) そうですか。

B スィブタニトスィテモ ( A ホー ) ニヒクネンダッタグラカ ニヒク  
渋谷としても ( はあ ) ニ百 石つたろうか ニ百

7  
2x ヒクスィーネンダッタラーカ ニヒクネンダッタラーカ イー  
百十年 石つたろうか 二百年 石つたろうか

マ ララデ' ネンキガ ワカーマスィケン。 ( A フーン ) ハーカ  
キ 寺で' 年忌が わかりますから。 ( はあ ) それか

ラ ソレ イー ホー スィ スィ テ ヤラー ツィー テ' ( A ホー ホー )  
ら それ 法事としてやろうというので ( はあ はあ )

.- カラ ト-バコスイラエテ マー イー ホ-ズィスタコトガ ア  
 それから 塔婆 作って まあ 法事したことが あ  
 -マスイゲナ。 (A ホー ホー )  
 5ということです。 ( ほあ ほあ )

---

### 注記

- (1) ダエダは1.の注(5)に述べたが、ここではダエラとなっている。二倍だったのかの意。次の行にはダエノーの形で出ている。
- (2) チャースイランがとも聞える。これでは意味不明。
- (3) ダエダ、ダエラの原因はダエであり、前のトを受けて「とか」に当る。
- (4) アレトのレが長音化している。アレワもアーワとなってもよい。



### 3. 田植・草取

話し手

| (略号) | (代名)   | (性) | (生年)           |
|------|--------|-----|----------------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ       |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ       |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ        |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ (司会者) |

A マー イマゴロト ムカスィ イツィバンツカーコトワ タウエテスィネ。  
 まあ 今頃と 昔 (と) ちがはえ違ふことは 田植えて可ね。

( D ハイ ) マー タウエツィート タオスィナラスィスル。 ( D ハイ )  
 ( はい ) まあ 田植えというと 田を地なすしする。 ( はい )

ウスィノ サンビキカラ ゴスィキグラエ ( D ハイ ) エッ ショニツィ  
 牛の 三匹 かし 五匹ぐらゐ ( はい ) 一緒に連

レテネ トット トット ソノ トバシエテ ソエカラ <sup>(1)</sup> ダマッテ  
 れてね とっと とっと その 飛ぼせて それから 黙って

ソノ トバシエテネ ソエカラ スィロオカエテ ゴローツト コノ  
 その 飛ぼせてね それから (苗)代をガリて ぞろおと この

ナローニステ ソエカラ ソコエモツテエツテ コンド ソートメ  
 平らにして それから そこのもつていつて こんど 早乙女

(2)

ガ スイラー ット コー タンナカエ ハエル。サゲツィーモノガアッ  
が ずらっと こう 田の中へ 入る。佐下という者があって

テ タエコオタダエテ スィッホーンホーン スィッホーンホント タエコオ  
(居って) 太鼓をたたいて ちほんほん ちほんほんと 太鼓を

タダエテ (歌) 「コエスィクサーレ タスィネテゴザレ」 ナツィー  
たいて 恋しくあれば 訪ねて来い な という

(3)

オタヲオタ一テ ソートメガ コー オエタモンダ =ギヤカニ。  
歌を歌って 早乙女が こう 植えたもの にギヤカにの。

B ソー ソーデスィネ。  
そう そうですぬ。

A ソゲスィテ マー ソートメフ カサーノキヤモノ キテノ。(C フフ...)  
そうして まあ 早乙女は かわりのきもの 着ての。(ふふ...)

ワカエ モスィメカンヤナンカエガ ハリキッテ タオエオスィクモン  
若い せうじくやなどか 張リ切って 田植をしたもの

ダ。ニギヤカニ。 トコロガ ツィカゴロフ ナント ヨノナカガカ  
だ。 にギヤカに。 ところが 近頃は ちゃんと 世の中が変

フッテキテ (C ハハハ... ) (B ゃゃゃ... ) サ...ハロリ  
あつて来て (ほほほ... ) (んんん... ) さっぼり

タオエダツィーダテテ エツィノマニ タオエオ スィタダエシエンダエ  
田植を"というたて いつものまに 田植えを したのか(な)のか

ワケガワカラン。(B,C,D笑) イツィテモ ナンダエ (C ホホ...)  
わけがわかるん。 いつでも なんたい ( )

タンナカ アオーナッテ スィマーチョーダ。  
田の中 青くなって (まてい)のた。

B ナンダエ クルマノ ツィーサイガ グルグルマワスィガ (A オー)  
何か 車輪の 小さいが(のた) ぐるぐる廻すが

( B ホホ... ) アー アオー ナツテ スイマツテ。 ( A オー )  
 ほほ... ああ (8) 青くなってしまった。

キカエデ ウエテ スイマイマスイ。  
 機械で 植えて しまいます。

A フトムカスィノ (8) ソノ サゲダデー (9) イーヨツタ スィブンノ ソノ  
 ひと昔の その 佐下田で 植えていた 頃の その

ジョー4ヨツター モノワ サッパリ ナイヤーニナツテ スイマツタ。  
 情緒 といふものは ざっはり 無いようになって しまった。

C ンー アゲデスィネ。 ( A カー ) マー ワタスィヤ ツィモ ウツ  
 んん ああですわね。 ああ まあ わたし運も (この)家

ニ ヨモノクーマデワ アゲスィテ サゲデ ウエマシヨツタケンネ。  
 に 嫁に 来るまでは ああして 佐下で 植えていたからわね。

(10) ソエカラ キテカラワネ アノ キタトスィカラ ワカレテネ ( A  
 それが (この)嫁に来たからね あの 来た年から 別かれてね )

アー ) ヨーノー ウエニナツテ ホエデ カナイズィー スィテ ウエ  
 ああ ) 鏡々 植えになって ぞれで 家内中して 植え

マシヨツタ。  
 ました。

A ホーホー ケー アゲナズィブンニナツテカラ ウエヨツタダカ。  
 ほうほう つい あんね頃に ちってから 植えていたのか。

C ハー メーメー ウエデスィダケン ( A ホーホー ) カナイズィー スィ  
 ばあ 鏡々 植えですわから (ほうほう) 家内中し

テ ケー ( A ホー ) ウエマシヨツタドモ クーマデワ ( A ホ  
 て つい (ほうほう) 植えていましたけれど (嫁に) 来るまでは (ほう

(11) ) アツツィデネー ( A アー ) サゲダデー ウエマシヨツタ。 ( A  
 お ) あっちでねえ (ああ) 佐下田で 植えていました。

ホー ホー )  
ほあ ほあ

B ウーン アサ アサトーニオキ オキラネ。 ( D アサマ ハヨー  
ううん 朝 朝早く 起きてね。 朝を 早く

ゴザン ショーガ ) アー アサハヨーニオキテ。  
ございましょうが ああ 朝 早く起きて。

A マンダ クラエオツィネ ( B クラエウツィニ ) デカケテネー。  
まだ 暗い間に 暗い間に 出かけたねえ。

へー タンナカエハエツテ ナエオトル。  
へえ 田の中へはいてマ 苗を取る。

B マー イクト イクトネ コノホーシヤ サキー マ フィータキヨ  
まあ 行くと 行くとね この地帯では 先に ま 火をたいた

ツタダ ( C フフフ ... ) アサ アツィマルトネ テオ マー  
のだ。 不ふふ ... 朝 集まるとね 手エ まあ

イー ア フクメテヤートカ マー ナントカネ イー アサマ  
ぬくめてやるとか まあ 何とかね 朝ま

フータキョッタ。 ソエカラ ソレデ イー ソローテキタラ ハエ...  
火をたいた。 それから それで (人か) 揃って来る (田に)入っ

テ マンダ コグレヤーナニ イー  
て まだ 小暗いようなのに

C ナエトリ。  
苗取り。

B ナエヲトリ トリコスイテネ ソエデ マー ムカスィ モーダコーコト  
苗を 取り競争してね それで まあ 昔 圃いていふこと

(12)

チャー イー マ フトハエツィート イー フィル フィルマデト フィル  
には ま ひとへえというと 昼までと 昼

カラ イッカイタバコヲスイテ イー イッカイタバコダツタカエナ  
から 一回 休憩 として 一回 休憩 ぶったかいなあ

ー イツバタバコ ニバタバコツイッテ ショツタカエ マ トニ  
一番 休み ニ 番 休み として して いたのか ま とに

カク タバコマデフ フイトハエ ソエカラ マダ ソエカラノツイ  
かく 休憩 までには ひとへえ それから まだ それから 後

フイトハエ トイーファーニスイテ ヤリョツタダガ マ フトハエハン  
ひとへえ と いうふうにして やって いたのか ま ひとへえはん

フト マ ヌョード スイブタニラツシヤ フトハエハントート イー  
ひと ま ちょうど 波谷 などでは ひとへえはん と子と

イッ ツインツノ ナエガアーツーテテネ イッ ツインツナエガ アーツー  
一日(中)の 苗 がある としてね 一日 苗 がある として

テ  $\begin{pmatrix} D & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  ソエカラ イー マー タバコニワ アー 茶  
それから まあ 休憩 には ああ 茶

ドモモツテデテネ ホーラク オチャヨバレテ ソエカラ コンド  
など 持って 出てね 完全に お茶を よばれて それから こんど

イー ウエサバツテ イー ーカラ コンド ソノ サゲツィーモ  
植え 始めて それから こんど その 右下 といふ者

ノガ イマノウター カスラウタウ ウター。 サゲガ ツィマリ ソ  
か 今の歌 頭歌 (E) 歌う。 右下が つまり そ

ノフィノ イー カスラホスイデスイ。 イー ソーガ ケー シェンブ コ  
の日の 頭節です。 それが フリ 全部 こ

ー ソノ マワエテ オマエナニ シューコゲシュー コリヤー ドーニュー  
う その くり返して お前 何をせよ こうせよ こは どうしよう

ゴーシュート ハズメヨートカ カーハズメヨー タバコ アノ  
こうしようと (仕事E) はじめようとか まあはじめよう 休憩(しよう) あの

(14)

サバ…… トカナントカ タバコシヨ一 ハスイメヨ一 トイ一 ヤーナ  
トリカガヲウ トカなんとか 休憩しよう はじめよう というようは

コトオ シンゴ サゲガ アー ドーサ ツカサドッ<sup>ツ</sup>キョッテ ソーガ  
ニヒエ 全部 佐下加 ああ 動作(注) 司マッテ とかか

ヤリヨリマスイヲ。(キセルの音) ソエカラ ムカスイワ アー イ  
(指揮E)していました。 それから 昔は ああ

ー ナンダエ サケ一ノンマスイラネ。(D ハイ) マー ハスイ  
何が 酒Eのみましてね。(はい) まあ はい

(14)

マ マ イマンゴロトワツガ一テ コンド<sup>ゴ</sup>ゴ<sup>ニ</sup>ナ一ツイト ツイ  
ま ま 今頃とは違<sup>って</sup>て こんど 午後にはEというE 昼

ーハンク一テ一デ ソエカラ バンマデノアエダ<sup>ニ</sup>ネ イ…<sup>ン</sup> ショ  
飯 食うというので それから 晩(夕食)までの間に 一度 食

クスイオ スマシヨツタダ<sup>ハ</sup> スイマツ一ノオ。(D ハイ) ソーニヤ一ゴツイ  
事E してはただ<sup>は</sup>しまというのE。(はい)

ソーオスイテ イ一 カケダエタリ ナンカスイマスイラネ。 ヌ一カラ サ  
ごちそうして 酒(E)出したり ぞと<sup>し</sup>ましてね。 それから 鯖

(15)

バーツケテ タウエサバダ<sup>ン</sup>ツ一テカラネ スオサバー アノ  
(E)つけて 田植 鯖Eなどと<sup>い</sup>って 塩鯖 ああ

アー ニタヤツオツケテ イ一 (C 笑う) マー イ一 タ<sup>マ</sup>マニ  
ああ 煮たのEつけて まあ 食べまし

ツタ。(茶Eオテ<sup>る</sup>音、以下少し不明)  
た。

C ソエカラ アノ ヲドモワネ マタ ソコエ ヨバレニイヲマシタ。  
それから ああ 子供はね ねえ そこへ ごちそうに<sup>り</sup>に行<sup>き</sup>ました。

(D ハイハイ) (B ユドモワネ) ガッコーカラ<sup>デ</sup>モモド一トネ。  
はい はい 子供はね 学校からでも<sup>は</sup>使<sup>い</sup>とね。

( D ハイ ) ソエカラ (笑 ッケカス) フキノハネ ニスイメ  
ほい それから 露の葉ね 煮しめ

ツイツインデ ( D フキノハネスカ ハー ハー ) モラッテネ。 タブ  
包んで 露の葉ですか はあ はあ 貰ってね。 (お場子)

ント アノ ソノヨコニ ( B タバコノモンヤナンカエ ) コホ  
合がなとある その横に 休憩中の者ヤンカに 牛蒡

ーヤ フキヤ アノ ニスイメ コスラエタニ サバノニタウエ 4ヨッ  
ヤ 露ヤ あの(それで)煮染(を)作ったのに 鯖の煮た上(に) ちよと

トノシエテ モライマスイツネ。 ソーガマタ アノ ナンダエデスイカケ  
菜せて 貰いますわね。 それがまた あの 何石かですの石から  
(16)

ン ソレー モラーテ タブニヤ モラーテ フキノハニ ツイツインデ  
それと 貰って 合がねば 貰って 露の葉に包んで

モッテイニマシヨッタヨ。 コトモノトキニワネ。 マ イマンゴロ ( 歳に )  
(歳に) 持って 帰りましたよ。 子供の時にほね。 ま 今頃

笑 ッケカス ) ホンネ ハナスイニ ナーマシエン。

ほんとうに (今から思うと) 話になりません。

D コノハニツツインデ モラーコトモ アーデシユーネ。  
木の葉に包んで 貰う ことし あで(よう)ね。

B ハー ソーデスイネ マー イロイロトコロニヨッテ ( C ハー )  
はあ そのですわ ちあ いりいり 所(に) よって ( C ハー )

ダイブン ツィガー。  
大分 違(う)。

C オマエサンガタワ ツィータ シッ4ヨーナハーデシヨー。  
お前さん方は 少しは していな(ら)子で(しょう)。  
(17)

D マルデ キオクガナイデスワ ハー。 ( B \_\_\_\_\_ )  
まるで 記憶がな(ら)いですわ はあ。

C マー ソゲネ イツバネ ウツヤツニモ ヘー ワタスヤツカ  
 まあ そんなに 一番に 自分達にも へえ わたし達が

キタトキネ ソゲナコタ ナカッタデスヤケンネ。 マー アノ サト  
 来た(家)の時に そんなことは なかったのですから。 まあ あの 里(実

ネ オートキノ (A ? ウーシ) ハナスヤデスヤケンネ コ  
 家)に おる時の うん 話 ですからね 子

ドモノトキニ。  
 僕の時。

B ソーデ タウエサーテヤ マー エー オラフ エ .....  
 それで 田植するといえは まあ 自分は え .....

D ソーデ タウエヤナンカエノ ババワ ドレクライナモンダッタデ  
 それで 田植や なんかの ぼぼは どれくらゐなものだった

スカ トージ。  
 すか 当時。

B ソーデスネ マ ゲンザイヨカ スコス コマニウエケーマスヤガネ。  
 そうですね ま 現在よりも 少し せまく植えていますからね。

D ハイ。  
 はい。

A マー ロクシンヨホー ナンカイ イーヨッタクエン ジョーギガ。  
 まあ 六寸四方 存じと いらっしたから じょうぎが。

D インヤ アリャー ジョーギ イーマシヨッタカ ワクイーマシヨッタカ。  
 いや あれは じょうぎ(と) いらっしたか めく(と) いらっしたか。

A ジョーギ イマシヨッタ ジョーギ マトワリ。  
 じょうぎ(と) いらっした じょうぎ までわり。

B ジョーギトカ ワクトカ イーマシヨッタダ。  
 じょうぎとか めくとか いらっした。



D インヤ リョーホー キクモンダケン ドッサダエラ。  
いや 両方 聞くものだから どうするが。

B ハー ツー ソー。  
はあ そう そう。

A ドッ ツイモ イーマニョッタ。  
どっちも いいました。

B ドッ ツイモ イーマニョッタネ。( D ハー )  
どっちも いいましたね。( はあ )

A ジョーギダ ツー モンモオー スイ ワクダ ツー モンモオー スイネ。  
じょうぎだ」という者もいし わくら」という者もいしね。

D ナルホドネ。(問) ソノマエノ ツナジダイジエー アーマニエンテ  
なるほどね。 その前の 綱時代では ありませんで

スカ。( B インヤ ) ツナウエノ。  
すか。( いいえ ) 綱植えの。

B ツイノウエワ マー チョード ウツイブラクノ ホーデワ ツイノウエ  
綱植えは まあ ちょうど 自分の部落の 方では 綱植え

ワ アンマリ。( A アンマリ ヤラダッタ。 )  
は あまり あまり しなからた。

A ソーマデワ ケー イッサモツサデ<sup>(24)</sup> ナントナク オエユッタデネ  
それまでは っい 適当に なんとなく 植えていたです

ワ。  
わ。

D ボッヤボッヤデ。<sup>(25)</sup>  
ほッヤほッヤで。

C ソーデネ ワタス<sub>1</sub> コドモノトキニネ アノ ワタス<sub>1</sub> ツイオヤ  
それだね あたし 子供の 時にね あの あたしの 父親

が アノ グンヤクシヨニ デマシヨッタワネ。 ソーヂー アノ ソノト  
が あの 郡役所に 出ていましたよね それで あの その時

キノ アノ マー ブラクノスーガネ アノ マ ナンジューニタ  
の あの まあ 部落の衆(人)がね あの ま 陳情 のよう

イナコト グンチョーサニニサレタ テガニ アノ ガアツテ ソ  
ト コト 郡長さんにされた 手紙と あの があって そ

レヒッパードエテ ヨンデネ (A ホー ) ソエカラ キョーダエ  
れ(と)引っぱり出して 読んでね (ほあ ) それから 兄弟(で)

ダエラ ヨンデ アノ ナンダエ ショックコトガアツテ ソノ  
出して 読んで あの 何か (たこことがあって その

シージュウエ シューイー トキノ アノ <sup>xxxx</sup> グンカラ イー  
正条植 (と) せよ (と) 言う 時の あの 郡から 言う

コトドモアツタデスダラカ シージュウエシニエー イケン イート  
ことをだましたですらうか 正条植 (と) (なければ) いけない(と)言う

キ (A ア ア ) (B ソ ソ ) ソノトキノ ハ  
時 ああ ああ そう そう その時の

ンダエオ アノ ブラクガ アノ スイテ グンチョーニ ツインジュースイ  
反対と あの 部落か あの して 郡庁に 陳情し

テ (A ハー ) ホーカラ ナンダエラ ソノ ムンナラツガ  
て (ほあ ) それから 何か その みんな違か

マー ワタスイヤツガ ツイツオヤラツガ ホットーデ ソゲナコトオ  
まあ わたし達(か)の 父親達が 発頭で そんなこと

サッ シヤエ ツーヤナ フーナネ (A カ ) コトオイーテ  
したかい というような ふうに (ああ ) こゝを 言って

カクブラクカラ ハンオスイテ アノ ダエヲヤツィ ゴットモラーテ  
各部落から 判をたして あの 出したのを(郡庁に)全部もらって

モトッテネ (A ホー ホー) (笑) ナカス) グンチョーカン  
帰ってね (ほお' ほお')

ノゴサエテ ソレ ソーガ スイマーテアツタヤツ アノ イテ  
の 下って それ それが 蔵ってあつたやつ あの 見て

スイッチョーマスイヨ。 (A ホー) ソーテ アノ シュージョーウエカー  
知っていますよ。 (ほお' ) それで あの 正条植をす  
(27)

トキニャ マー コラホドナ ホンナラ ソーゾーガ アツタカラー  
時には 又も これほどの ほんなら 騒動が あつたらう

カノー オモテ アノ コトモノトキニ ショーマスイケン。  
かのう 思つて あの 子供の 時は 見ていますから。

A ハー イヤ ソードーガアツタネー ヤクバノホーカラ ソノ ツ  
ほあ いや 騒動があつたねえ 役場の方から その

ーツガアツテ ヤクバカラ シマワリノモンガキタモンダワネ。(C  
通知があつて 役場から 見廻りの者が来たものだわね。  
(28)

へー ) ズーットネー。(C へー) ソースイタトコロメガ ハナ  
へい ) ずうっとね。(へい) そうしてヒヨメガ 花屋  
(29)

ヤゲーツニ ヒョースイツイー インキョガオツラカラネ アノ カンガイ  
垣内(屋号)に 兵治という 隠居があつたね あの 電市

ツニ サワダカンガ ヤクバカラタノマレテ ソノ シュージョーウエ  
(地名)に 沢田さんが 役場から頼まれた その 正条植

オシェート (C ハハハ...) ウン ホエカラ コー ソノ ワ  
エせよ (ほほほ...) うん それから こう その 村

フーコスラエテ マクレ (C へー) タンナカエ ソゲナガ  
を 作つた ころがせ (へい) (部落の人達は) 田の中へ とん

エモクイレテ タオエガ デキアガーマンカー。(C フフ...)  
材木を入れて 田植が 出来たがるものがある。(ほほ...)

サワダサン スイコスィ ハナガ コークライ ハナヒクダツタ コナ  
沢田さん 少シ 鼻が このくらゐ 鼻低らった こな

(31)

ハナクター ツーヤナコト イー ケンクラー オイーテカラネ サエ  
鼻 腐れ というようきこと 言、 喧嘩 を言、て 細エ

クニナランダケン ( C ハハ ---- ) (笑、きお、さ) サワダサ  
にやさんのおから(収拾がつかん) (ハハ ----) のおから) 沢田さん

ン エンデ シマワーシヤツタ。  
帰って しまってた。

C ホンナラ ニタズィー ジョックモンダネ。  
ほんなり 仁多郡全部 右の人も右ね。

A ハー ニタズィー。  
はあ 仁多郡全部。

C ニタズィー ( A ハー ) ソーゾー スイタモンデスイネ。へへ... (笑)  
仁多じゃう ( はあ ) 騒動した もんで右ね。へへ...

A トコロガ ノツィーナッシャー ツノモノオマクラニャー オズィナイーテ  
ところが 後になつては 物の(枠と指)とところがなつては むずかしくて(困難で)

( C へへへ --- ) オエアートコーガ ワカラン ( C ハー )  
へへへ --- 植えよ とこが おからかい ( ハー )

オエラレンツィー ヤーナフーニ ナレテ スイマー トネ クシエガツィーテ。  
植えよ 水が... というようになつては 慣れたしもうとね 癖(習慣)が...  
(32)

( C フフフン ) ナンナ ショーギマフツテ イエヨッタモンダ。  
ふふふん なんとするあ 定規とこがして 植えよ、たものた。

C ホンナラ ケー マー ショーニ ケー エガンダヤーナユトニ  
ほんなり つい はあ 無性に つい 曲つたようなことに

コー ウエヨッタモンデスイネ。  
こう 植えよ、たものたね。(正条植以前は)。

A ハー ケー スィラー ット ナラン ショッ テネ ( C ハイ ) ホーカ  
 はあ つい ずらあっと ならんでいてね ( はあ ) ぞれから

ー ケー アノ \_\_\_\_\_。  
 つい あの

B ツィート ジョー スィナ モンガ アタマオ ( C ハー )  
 少し 上手な者が 頭を ( はあ )

アタマオ ウエダ スィガネ。 ( A アタマオ ) ( C ハー ) ソ  
 頭を 植えて出がね。 頭を ( はあ ) そ

ーガ ツィート ジョー スィナ モンガ ソレガ ( A オエダシ ) ウ  
 れが 少し 上手な者が それが 植えて出 植

エダ スィ ショッタ モンガ。 ( C ハー )  
 え 出ししよったもんが。 ( はあ )

A ダンダン ソケー スィラー ット ツィー テ ナラ ンデ ( C ハー )  
 次々に といへ ずらあっと ついて 並んで ( はあ )

(34)

シヨッ シヨッ ショ タエコニ アワシエテ ノー オター オタエ オタエ  
 しゃっ しゃっ しゃ 太鼓にあわせてのお 歌を 歌い 歌い

アトエ スィガ ッテ オエタ モンガ。 ( C ハー )  
 後へ 後退して 植えたものだ。 ( はあ )

D ソレデネ。  
 ぞれでね。

A ウン ソレガ ソノ オターニ アワシエテ テガ コー エッ ショニ  
 うん ぞれが その 歌に 合わせず 手か こう 一緒に

(35)

ユクカラノ ( C ハー ) ソーデ" ペン" ナマ ヨコ スィワ ト  
 行くからの ( はあ ) ぞれで" はあ" 横は

(36)

ーリヨ ッタ。 ( C ハー ハー )  
 通りよった。 ( はあ はあ )

B ソエカラ イマワ コーウンキヂヤルケニ スロカキナンツーテモ  
 それから 今ほ 耕うん機でやうから 代掻きなどといつて

ミヤスー コトデスィダドモ ムカスイワ タウエスィロニナーツート イー  
 たやさい ことですけれど 昔ほ 田植代に ろまといつて

アレ スィロオカクト ウエート ヤオーテヨロスー。 ゲンザイフ  
 あれ 代と掻くと 植えと やわらふと よしい。 現在ほ

マー ツート サキューカイケイテ イー ニバンツィンツィート ト  
 ちあ 少し 先に 掻いておいて ニ三日 しろいと と  
 (37)

ウン タイゲー キカイデ ウエニクーゴザンスィダケニ スィマスィ  
 うん ろまが、 機械で 植えにくう じやいほすから します

ドモネ。 ムカスイワ アー イ (咳) ソコオ スィロオカク スィダ  
 けいどもね。 昔ほ ああ といと 代と掻く ちあ

ウエマスィダケニ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  ソコエ ソエデ スィロカク  
 植えますのちから  $\left( \begin{array}{cc} & \text{はあ} \end{array} \right)$  ちあへ ちあて 代と掻く

ニ サンビキツケテカクト イー マエ マヨウスィ  $\left( \begin{array}{cc} C & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$   
 のに (牛E) 三匹 つけて 掻くと 前 前牛

マエオ カクモンオ マエウスィーテ イーヨウクモンダ。 ソーガ  
 前と 掻くものE 前牛と 言ふよつたものE。 ちああ

ソノ キヤント スィロノツィガ アーマスィダ。 ヤッパリ コーカ  
 その ちゃんと 代の道か あります。 ヤッぱり こゝ 掻  
 (38) (39)

クニ ミツィガアツテネ イー キークットカ ワークトカネ  $\left( \begin{array}{c} D \\ \\ \\ \end{array} \right)$   
 くに 道があつてね 切り鋏か 割り鋏かかね

ハー  $\left. \begin{array}{l} \\ \\ \end{array} \right)$  イー ナントカ コー ソノ .....  
 はあ なんとか こう その .....  
 (40)

D モー イッポン イーテゴサツシャイ。  
 ちあ いっぺん 言つて 下さい。

B イー キリクフネ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  フリクフ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  ソエカ  
 切り鋏ね  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  割り鋏  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{はあ} \end{array} \right)$  それか

ラネ オラドンツィガ キーヤーヤヤー イー キリクフ フリクフ ン  
 ね 私達が 南にいますよは 切り鋏 割り鋏 そ

エカラ タスキガケ ツーモンオ キーヤリマスヨ。(キセルの音)  
 ねから 袴掛 というものを 南にいますよ。

(41)  
 ハー ソレデ(咳) ソーデ コー マングフ イキマヌトネ カナラ  
 はあ それで それで こう 馬鋏 行きますとね 必ず

ス<sub>1</sub> ソノ イッ クオイ トーラトコロオ ニクオイワコー オナスヤ  
 その 一回 通ったところを 二回はこう 同じよ

ーネ コーイカンヤニ カナラス<sub>1</sub> コー イツタトコーワ コー  
 うに こう行かないように 必ず こう行ったところは こう

イフヤーナフーニ チャントネ イー ス<sub>1</sub>ロニ。  
 行くようにならうに ちゃんとね 代に。

A サカメ = モドス<sub>1</sub> ツィート。  
 逆目(逆に)にもどすと。

B ドツィガ キマツヤオーデスィダ  
 道が きまっちゃうです。

A ドロガ ヨートケー (B ハーカラ) オナス<sub>1</sub>ホーエ カエタジヤ  
 泥が 良く溶ける。 それから 同じ方向へ 掻いたでは  
 ドロガトケン。  
 泥が溶けん。

(42)  
 B ハバノ シェバイ フホヤナンカエフ ソゲナ リクツィガ イケンケニ  
 幅の狭い 窪やなどは せんは 理屈(が)では いけなリカダ

ハーカラ コー ヤッパリ ソノ コー マー アー コーエツテ  
 それから こう やぱり その こう まあ ああ こう行って

コゲナ モー ハツノス<sub>1</sub>ガター ヲタエナコトニ アルキマシヨッタ。  
こんな もう 八の字型 のようなことに 歩きました。

サンビキツケ<sub>4</sub>ヨーテ = アルキマシヨッタ。イー ゴ<sub>1</sub>ットガ ソノ  
(牛 E) 三匹つけ<sub>2</sub>いるから 歩きました。 全部 どの

ウス<sub>1</sub>ツ<sub>1</sub>カマエ<sub>4</sub>チョ<sub>1</sub>ト トソノ オナス<sub>1</sub>トコロアルカンパー = ネ。イ  
牛 E つかまえて<sub>1</sub>ると その 同じと<sub>2</sub>は<sub>2</sub>替<sub>2</sub>が<sub>2</sub>な<sub>2</sub>よう<sub>2</sub>に<sub>2</sub>ね。

ー エー ス<sub>1</sub>コーニ イー ソレデ マヨ<sub>1</sub>ー (マセ<sub>1</sub>の音) マ  
... 具合に それで ま

マエウス<sub>1</sub>ツ<sub>1</sub>ーダカ マヨウス<sub>1</sub>ガ ショー<sub>1</sub>ス<sub>1</sub>ナト ス<sub>1</sub>ロガ エス<sub>1</sub>コーニ  
前牛<sub>1</sub>というか まよ牛<sub>1</sub>が 上手<sub>1</sub>なと 代<sub>1</sub>が ... 具合に  
(43)

ナルス<sub>1</sub>ネ。ソレデ ウン フェ<sub>1</sub>タダト イー ナー<sub>1</sub>ダイト ヲカメ =  
なるしね。 それ<sub>1</sub> うん 下手<sub>1</sub>なと 換<sub>1</sub>で<sub>1</sub>と 逆目<sub>1</sub>に

イカンコン ナー<sub>1</sub>ダイト イケント コー<sub>1</sub>イーセナコトオ テ マ  
行<sub>1</sub>がなくて 換<sub>1</sub>で<sub>1</sub>と (い<sub>1</sub>け<sub>1</sub>な<sub>1</sub>い<sub>1</sub>と) こ<sub>1</sub>う<sub>1</sub>言<sub>1</sub>う<sub>1</sub>よ<sub>1</sub>う<sub>1</sub>な<sub>1</sub>こ<sub>1</sub>と<sub>1</sub>エ<sub>1</sub> で<sub>1</sub>マ

ス<sub>1</sub>ロガキヤーマシヨッタ。

代<sub>1</sub>換<sub>1</sub>(E)やり<sub>1</sub>ま<sub>1</sub>し<sub>1</sub>た<sub>1</sub>。

D サンビキテユーコトワ キヤント キマリグ<sub>1</sub>ッタワケデスカ。  
三匹<sub>1</sub>と 言う<sub>1</sub>こ<sub>1</sub>とは ちゃん<sub>1</sub>と 手<sub>1</sub>まり<sub>1</sub>お<sub>1</sub>つ<sub>1</sub>た<sub>1</sub>款<sub>1</sub>で<sub>1</sub>す<sub>1</sub>か。

B マ コノホー<sub>1</sub>ジヤ。

ま この地<sub>1</sub>方<sub>1</sub>では。

A マエゴロワネ ゴ<sub>1</sub>フ<sub>1</sub>キ<sub>1</sub>グ<sub>1</sub>ライマデ (D ハイ) シヨッタコトガ ア  
前<sub>1</sub>頃<sub>1</sub>は<sub>1</sub>ね 五<sub>1</sub>匹<sub>1</sub>ぐ<sub>1</sub>す<sub>1</sub>い<sub>1</sub>ま<sub>1</sub>で (はい) して<sub>1</sub>い<sub>1</sub>た<sub>1</sub>こ<sub>1</sub>と<sub>1</sub>が<sub>1</sub>あ

ーソ<sub>1</sub>ー<sub>1</sub>デ<sub>1</sub>ス<sub>1</sub>ワ。(D ハイ) ダ<sub>1</sub>ト<sub>1</sub>モ マー ダ<sub>1</sub>エ<sub>1</sub>ブン ノツ<sub>1</sub>ニ<sub>1</sub>ナ<sub>1</sub>ッ  
る<sub>1</sub>よ<sub>1</sub>う<sub>1</sub>で<sub>1</sub>す<sub>1</sub>わ。(はい) け<sub>1</sub>れ<sub>1</sub>ど<sub>1</sub>も まあ 右<sub>1</sub>い<sub>1</sub>ふ<sub>1</sub>ん 後<sub>1</sub>に<sub>1</sub>な<sub>1</sub>ッ  
(44)

テ メー<sub>1</sub>メー<sub>1</sub>ニ サー<sub>1</sub>マイ<sub>1</sub>ゴ<sub>1</sub>ガ タ<sub>1</sub>エ<sub>1</sub>ガ<sub>1</sub>エ サン<sub>1</sub>ビ<sub>1</sub>キ ド<sub>1</sub>コ<sub>1</sub>=<sub>1</sub>モ  
て 銘<sub>1</sub>々<sub>1</sub>に 尻<sub>1</sub>舞<sub>1</sub>子<sub>1</sub>が たい<sub>1</sub>がい 三<sub>1</sub>匹 どの<sub>1</sub>に<sub>1</sub>も



オーマシヨ ックモンテスィワ。

居りましたものですわ。

B スィント ムカスィワネ ナラベスィロテ イヨ ックモンテスィ。 ウスィカン  
ずと 昔はね ならべ代と いったものです。 牛三

ビキ ナラベタモンダエスィテンダドモ ゴフキ サン ゴフキデモ  
匹 並べたものだから(どい)知らね...ナカども 五匹 三 五匹でと

ロッピキデモ  $\begin{pmatrix} 0 & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  ウスィ ナラベテネ。  $\begin{pmatrix} 0 & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$   
六匹でと 牛 並べてね。

ソエカラ マンダガ ツィーサイテスィ ムカスィノワ。 ヤッパリ オツ  
それから 馬 鉄の 小ま...で... 昔のは。 ヤッパリ 社の

ラツィネモ コノキンネンマデ アリヨツタ。  
寂にも この 近年まで ありました。

D アー ロッホンズメノヤツガ アーマスガネ。  
ああ 六本爪のやつが ありますからね。

B マー ツィーサイヤツィガ ソーデ コー ウスィ ナラベクヨツテ カキョ  
まあ (鉄)小ま...のやつが それで こう 牛 並べておいて 怪

ックモンテスィワ。 マー ウー ン マ ドゲナフーナ ヒ...ホーデ  
いたものですわ。 やあ ううん ま どいね...の... 筆法で

カキョ ックモンダエラ アノ スィロヤリヨツクモンダエラ アー  
(代と) 怪しいものか あの 代(怪)と やっていたものか ああ

へー イー スィーフト メー スィノ ショキ  $\begin{pmatrix} 0 & \text{ハ、ハ} \\ & \text{は、はあ} \end{pmatrix}$  ワ ウー  
へえ ずと(昔) 明治の初期 は、はあ は うう

モット -----。

もつと -----。

A ソーデ ヒョットスィルト ソノ ナラベタヤツィオ ツィクヤ ツィガ オー  
それで ひょっとすると その 並べた奴(牛)と 突く奴が いる

グケンネ。 ( D ハイ ) ソーカラ アスイコエ ナラベマスタオ  
 のがからね。 ( はい ) せから あとこへ 並べましたわ  
 (45)

( D ハイ ) ツノボーシ ツートコロエ  
 はい 角帽子 という とこへ。

D ツノボーシネ。  
 角帽子ね。

A アレオ チャント ハメテネ。  
 あれを ちゃんと はめてね。

B アレ <sup>ハ</sup><sub>xxx</sub> ハメマスタガ。  
 あれ(エ) はめますか?

A ヤリョッタモンデス。  
 やったものです。

B モー ナラベズイロナンツート ソリャー ナカナカ ソノ イーソー  
 もう 並べ代 などというを せから なかなか その 男が  
 (46)

ナ モンダッタソーデヤンステネ。アー ヨソカラ じーキョッタ  
 な ものがた そうでござりますね。 ああ 他の地方から 見に来た

ナー コノモンデ ヤリョッタモンデスワ。  
 という この辺で やったものですわ。

D ソーデ イワユル アノ ハナダウエノブント オーダウエノブニ  
 せから いわゆる あの 花田植 の合と 大田植の合

トワ マタ ナゴーデスカ ヤリカタガ。  
 とほ また 違うでかか 方法か。

B ハイ アノ ハナダウエ ツーブンワ ウスイクヨーノブンデニョーガ。  
 はい あの 花田植 という分は 牛飼養の合でしようか。

D ウスクヨーノブンデスガネ。  
 牛飼養の合ですがね。

B ハー コリヤー ツイガイマ スヨ。  
はあ これは 違ちがいますよ。

A アレフネー アリヤー -----。  
あれはねえ あれは -----。

B アリヤー シェンシェン ツイガイマ スイ。  
あれは 全く 違ちがいます。

A タオエノ マツリデスィガケンネ。 ( B ハイ ) ソーダケン アリヤ  
田 植の 祭 びすたがたね。 ( はい ) それがから あれは

ー アノ ビンゴノホー ジャ ホソイ マンダツケテ ヤーファーデスィ  
あの 備後の方では 細い 馬鉄をつけて やりようです

ガネー。 ( D ハー ハー ) ココデ アノ ( D ココニヤ )  
かねえ。 ( はあ はあ ) ここで あの ここでは

ヤツタコトガ エツドアーデスィワ。 ( D ハイ ) アー ナンツィー  
やったことか 一度 あるですわ。 ( はい ) ああ 何という  
(47) (48)

クカネ アスィコノ メノコスィヤネ。  
とろかね あそこの 明の越 はね。

B アノ エボスィ。  
あの 井伏。

A ア エボスィノホー タフデネ ( D ハー ) ヤツタコトガ アー  
あ 井伏の方 峠でね ( はあ ) やったことか ある  
が。  
が。

(49)  
B アサヤマ。  
朝山。

A ウン アサヤマ。  
うん 朝山。

B カツイエモンツイー バクローガネー。  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{ハ} \end{array} \right)$  アーガ  
 勝右衛門という 博 勞がねえ。  $\left( \begin{array}{cc} & \text{ハ} \\ \text{ハ} & \text{ハ} \end{array} \right)$  あれが

ヤッタクトガアーデス。 コリャー スイロカクニモネー イー イロ  
 やった ことがあまです。 これは 代と搔くにもねえ 色  
 イロ メーズインガオッテ。  
 え 和人が 居って。

(50)

A ツァーノ スイゴモーダコトノネー ウグイスノ タニワター トカ  
 鷗の 樂ごもりおここのねえ 籠の 谷 渡り とか

イーヤーナ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{ハ} \end{array} \right)$  コノ スイロジツガアッテネー  
 言うように  $\left( \begin{array}{cc} & \text{ハ} \\ \text{ハ} & \text{ハ} \end{array} \right)$  この 代道があつてねえ

$\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{ハ} \end{array} \right)$  コー フトツノ タエモツテエツテ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{ハ} \end{array} \right)$   
 $\left( \begin{array}{cc} & \text{ハ} \\ \text{ハ} & \text{ハ} \end{array} \right)$  こゝ 一つ 田へもつていて

クオカクヤーナモンダネ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{ハ} \end{array} \right)$  ウスイオ クノカク  
 画と書く ようなもんね  $\left( \begin{array}{cc} & \text{ハ} \\ \text{ハ} & \text{ハ} \end{array} \right)$  牛を 画の型

ニ アルカセラレヨッタ  $\left( \begin{array}{cc} D & \text{ハー} \\ & \text{ハ} \end{array} \right)$   
 に あるかせた。

B ダケン ソゲサート ケー スイジエンテキニ  $\left( \begin{array}{cc} A & \text{ハー} \\ & \text{ハ} \end{array} \right)$  スイロテ  
 だから そうすると つい 自然的に  $\left( \begin{array}{cc} & \text{ハ} \\ \text{ハ} & \text{ハ} \end{array} \right)$  代で

モナースイネ。

も存子(搔ける)しね。

D ソレカラ ウシイレテ アルカシャーヨカッタ  $\left( \begin{array}{cc} A & \text{ハー} \\ & \text{ハ} \end{array} \right) \left( \begin{array}{cc} B & \text{ハ} \\ & \text{ハ} \end{array} \right)$   
 それから 牛を入れた 動かされればよかった。

A ソレ サン<sup>x+x+x</sup> サンスイーモ ゴスィーモテ ヤッタクラーズネ アルカシエ  
 それ 三つも 五つ(頭)もて やったであらうよわ 動かさ?

ルバカリ ~~~~~ ハー ソーダケニ ケー ソノ ソー  
 ばかり  $\left( \begin{array}{cc} & \text{ハ} \\ \text{ハ} & \text{ハ} \end{array} \right)$  それだから つい その それ

ニ スバフサイレテネ。 ( D ハイ ) タンナカ サエニョウ  
は 柴草を入れてね。 ( はい ) 田の中(は) 最初は

ソゲー スバノヤマーニタエナトコーニ ハエラシエテ ( D ハイ )  
そう 柴の山のようなところに (牛を)入らせて ( はい )

ハー トッ ドンドン フンコンテスィマーケニ ( D ハイ ハイ )  
はあ とんとん 踏み込んでしまつから ( はい はい )

ドローン ドローンスィラネ タオエガ オエラレン。 ( D ハー  
ビローン ビローンしてね 田植か 植えられる。 ( はい )

ハー ) ソエカラ ソノ タオエノ アノ タエコオ タタクモ  
はあ ) それから その 田植の あの 太鼓を たたく音

ンモ アノ フツイーノサゲダトフ ツィガーフネ ドーツケテネ ( D  
も あの 普通の 佐下田とは 違うわね どうしてね (

ハイ ハイ ) ソエカラ ドーン ドーン。  
はい はい ) それから ビーン ビーン。

D ハー ドーツカー。 ( C ハイ )  
はあ どうを使う。 ( はい )

B (52)  
ドーツカッテ ヤッパリ アノ イー コモリガヤル。  
どうを使って やはり あの 小森が行なう。

A アノ スィキヲヤマースィタガ アゲナフーネ。  
あの 式をやりましたか あんまりに。

B ウスィ ウスィクヨーモ アーテスィワ アー。  
牛 牛 供養し ああですわ ああ。

A アレガ アノ タオエマツィーツィーデスカ。 ( D ハイ ハイ )  
あれか あの 田植祭 というのである。 ( はい はい )

ヤリョッタ モンテスィワネ。

やったものですわね。

D ソレカラ マー イタネンノ キョージ タッタモ イーテイキヤー  
 とゆかさ まあ 一年の 行事 順々に 言って行けば  
 ソゲシテマー タウエガスト アー コンダ ナニニナー マスカ  
 そうしてまあ 田植が ずむと まあ こんどは 何になリマスカね  
 ネ ドロオトシガアーマスカ イー……、  
 どう落しか ありますか

B ハンゲツイモンガ。  
 半夏というものが?

D ハンゲマデ イキマスカ。ハー ハンゲワ マタ ムカシヤ ドゲナ  
 半夏まで 行きますか。まあ 半夏は また 昔は どのヤ  
 ヤーカタデ ショッタモンデスカ。  
 やりがたで していたものですか。

A ウ マー ハンゲノ マキー コスラエテ クーコター (C マフ……)  
 う まあ 半夏の ちまき(粽)を 作って 食うことは (かか……)  
 エマンガロモ カワーマシエンネー。(一両笑う)  
 今頃と (昔と) 変わりませんねえ。

D ソーデ ヤスミダダケン。  
 とゆで (田植もみ) やすみだかす。

A マ タウエー シマート タノクサガ ハエマシテネー。(D ハイ)  
 ま 田植を 終わると 田の草が 生えましてねえ。(はい)  
 タノクサトーガ ラクンナイデスケン。(D エー) ランキ  
 田の草取りが 楽 にないですか。 ( ) 天気  
 アツイニネー。(D ハイ) マー ソノ イワイグラージネ ハン  
 暑いにねえ。(はい) まあ その 祝石ころうどね 半夏  
 ゲニワ フトトリー マ タノクサ スマッテ。  
 にほ 一通り ま 田の草(も) 終えて。

(53)

C タグーマフ  $\frac{1}{x+1}$  イツゴロカラ マクーマニョッタダラーカネ。  
田車は 何時頃から ころがしたなろうかね。

A ソーノフネー (B ソーデスイネー。)  
それのわりー そうですわえ。

C タグマ マクリワ ----。  
田車 ころがわ ----。

(54)

A オソイト マッシヤイネ。  
遅いと 思いなさいね。

B オソイスイネ。 ( A ハー )  
遅いよね。 ( ほあ )

(55)

D イヤ タマタマネ ヨッタラ ソノ ハッタンズリガ アリマニ  
いや 左子左子ね 見ていさ どの 八反ずりか ありま  
テネ。  
えね。

B ハー ハッタンズリネ。  
ほあ 八反ずりね。

D コンド ハッタンズリト タグルマノ ファイノコガテラキマニラネ。  
こんど 八反ずりと 田車の あの子か出て来まね。

A エー。  
ええ。

C ドゲナモンガッタデシユカ。ハッタンズリドマ スッチョーマスワ。  
どしなものをらたでしよか。 八反ずりなとほ 知っていまわ。

D ハッタンズリノ ツメガネ ( C ハイ ) マエト ウシロニマッ  
八反ずりの 川かね ( ほい ) 前と 後にあって

テ ( C ハイ ) マナカエ タグルマヒトツワッコガ ハイッ  
 ( ほい ) 真中へ 田車(の)ひとつ棒が 入っ

トリマスワ。(C ハー。A ハー) ホテ イッポンエデスワ。  
ていませわ。(はあ はあ) それで 一本 柄ですわ。

ハッタンズリトイッショテ (A ハー) (C ハー) (B ハーハハー)   
ハ反オリと 一緒に (はあ) (はあ) (はあはあはあ)

(C ハーハハー) ソエカラ ソノ ツズキニ (C ハー) ニオ、  
(はあ はあ) それから どの 続きに (はあ) ニ本

ソノ トリイサンノ マクノ (b ハー) トッテノツイク タク   
の 鳥居の 梓の (はあ) 取手のついた 田

ルマニナッテ (A ハー) フターツ (C ハー) ワ ココエ   
車になって (はあ) ニッ (はあ) わ ニニハ

(C ハー) (B ハイ) フネガツイテ (C ハイ) トユー ドー   
(はあ) (はあ) 舟が ついて (はあ) と 言う どのも

モ ジュンバンニナッ、4ヨー (B ハー) ヨーデスガネ ノーキグカ   
順番になって、 (はあ) ようでるかね 畚桶具が

ラミルト。

さみさと。

A マー ソノタノクサトリガス、ント ハンゲガキテ (B ハー) ソノ   
まあ その 田の草取りが すむと 羊夏が来て (はあ) その

マキコス、ラエテ クベーフケデス、ワ。

さまき(正) 作って、 倉でるわけですわ。

D ハンゲマデニ ホンナラ タノクサトッテニマー ワケデスカ。   
羊夏まで、 それから 田の草 取って(もう) 言て可か。

C エンヤ ウソデス、ワ。 (A ハー) エンヤ ハンゲカラモ トー   
い、い、え 遠いませわ。(はあ) い、い、え 羊夏が来ると 取

マシヨ、ツタガネ。ド、ヨーノ ホンネ キューワ ス、ローゴローダナ   
つて、い、ま、し、ら、か、ね。土用の ほんとは 今日 四郎 五郎 石   
(56)



ンツィーデ トーマシヨッタガネ。

なぞと言って 取りましたかね。

(57)

A ウン ソゲナズイフンツ トリヨッタユトカカーカエネ。

うん そんなら 取っていたことかあるかね。

C ハー ソレデ オージースイテ オーグワ トリマシヨッタワ。 (A  
はあ それで 大勢して 大草(沢山の草) 取っていましたわ。

デデトルニャー ソゲニトリヨッタダラーカ ウーン。) イマンゴ  
手で取るには そんなに 取っていたらどうか ううん。 今頃

ロコソ マ ハンゲマデニ タエグエ トツテスィマーケレドネ。(A  
こそ ま 半夏までには たいして (草E)とって(もう)けね。

ハー ) ハタケモ シェニャーエケマシユンダケン ソノアエダデ。(A  
はあ ) 畑も しなけれは つけませんのだから その間で。

ハー ) ダケネ マー イツィバンクワドマ ソリャー ハンゲマデ  
はあ ) だから まあ 一番目の草をよ せよは 半夏まで(に)

トーマモスィレンガ マー ハンゲガ スィンデカラ。

取るかも知れんか まあ 半夏がすんでから (草E取った)。

D ナンバンマデ トリヨッタデシヨーカー。(C ハー ) ナンバンマデ  
何番(草)まで 取っていたで(よう)か。( はあ ) 何番まで

トリヨッタデシヨーカー。

取ったで(よう)か。

C ニバンクワマデ トーマシヨッタ。ニド トーマシヨッタケンネ。

二番草まで 取っていました。二度 取っていましたからね。

D サンバン。

三番。

C ソーデネ ワタスィ アノ マンダ アノ オカーサンノ マメデ

そうでね ね あの まる あの おおさんか ええで

オーナハートキニ キテオツタニ イー ケー アノ コマキノ  
帰られた時上 (嫁に) 来てもらったの つい あの 小鳥木の  
(58)

オーウエニヤ タ タズィー タズィネテモ クサガ イッホンモネー  
大上には 田の中全部 までしても 草が 一本もな...

ゲナ イーヤニ キキヨツクケン リーデ オマエワントコーフ  
どう (と) のように 廊下でいそがし ちねて あなたの片は

サンバンモ ヨンバンモトツテ ホンネ クサガナカッダ (笑)  
三番草も 四番草も 取って ほんとうに 草がなからた。

コマキノオーウエニヤ ホンネ タノクサガ (笑いなから) )  
小鳥木の 大上には ほんとうに 田の草が

イッホンガエ ハエケヨラン。  
一本も 生えていない。

D オメノハナシマデワ デテコートワ オモワダツタ。 ( C ハハハ... )  
私の家の話までは 出てこようとは 思わなかった。 ( ハハハ... )  
(一同笑う)

## 注記

- (1) ダマツテとリッ、ツリッか? 意味不明。無言で一竹懸命の意であるう。
- (2) 田植の指揮者、役名。
- (3) イエタモンダとも聞こえろ。
- (4) (5) 音韻に詳述したか? カスリ(餅)はk a s u r iであり、u r iはs a:をw a:と音変化、ここではk a s a:となり、着物はk i r i m o n o でありi r iはj a:となり、k j a: m o n o となる。
- (6) いつの間にかの意らしい。
- (7) 聞き取りにくい。グルグルであるう。
- (8) フトと聞えろ。
- (9) イーヨツタに聞えろか? ウエーヨツタ → イーヨツタであるう。
- (10) ホカテとも聞えろ。
- (11) 里(実家)を指す。
- (12) 休憩から休憩までの間を指し、作業時間の単位を示す語。
- (13) 取り付くとサバルという。子供が母親の着物にサバル。狐が人にサバル。ここでは植えはじめをいう。
- (14) サバリハジメヨ一と言いたるところ。
- (15) カラテは不要の語であるか? ソレテソーデカラニ、ソーデアラネなどという。
- (16) うれしがったと言いたるところ。
- (17) オマエサンは自上に対する言葉。
- (18) テヤはト言エバ(トイヤー → テヤ)と思われろ。
- (19) 株と株との間隔。
- (20) 田植定規。
- (21) 杵。
- (22) マトワリの意味不明。
- (23) 綱をばって目じるしとしての田植。
- (24) (25) 共に擬音語であり、寸法なしの適当な植え方を指している。
- (26) ミンナをムンナという。聞きなれぬ言葉。

- (27) ホンナラはそれなりという時に使う。この場合特に意味はない。
- (28) 強めによくメエつけた。トコロによくつけた。
- (29) 注(15)参照。
- (30) コナは人を指す場合は軽侮を含む。コノとか彼とかに当る。
- (31) 注(15)参照。
- (32) 音韻の部に説いたが 植え子 は  $u e r u \rightarrow u j a e$ 、それにトコロ  
がつま、ウヤエトコロ  $\rightarrow$  ウエアートコー と考えられた。
- (33) マクルはこまかすの意。出雲ではよく用いる。
- (34) 植え子音。
- (35) 不明
- (36) 進行形。出雲では過去にしか用いない。
- (37) ゴザンスはガザリ高い敬語。
- (38)(39) 共に代掻きのコース(通路)の名称。
- (40) 下まりの最も敬意ある表現。
- (41) 代掻きのコースの一つ。
- (42) 水田の畦にかこまれた一区画をクボという。窪の漢字があてはま  
るが不明。
- (43) 撫でる  $-n a d e r u \rightarrow n a d j a e$  であるがナーダに近しい。音  
韻の項(1)参照。
- (44) 仕事の後始末とする牛。
- (45) トコロエと聞かえ子。角にかぶせるものと角帽子
- (46) ございまちのやまくたけた言ひ方。ゴザンス  $\rightarrow$  ヤンス であろう。
- (47) クは区ととれ子か、本人はトコ(所)と言ったつもりの方であろう。
- (48) 明の越は地名。ヤネと聞かえ子か、ワネらし。次の行の井伏も地  
名。
- (49) 朝山は姓。畜産家で朝山勝右衛門という人。
- (50) 鷓鴣  $t s u r u \rightarrow t s w a :$  となるとのツカと化す。
- (51) 太鼓の一種、横から打つ太鼓。
- (52) 部落名。
- (53) 除草に使う道具。グルグル回して土を起す鉄製の小さい車。

(54) と思ふなごころは、ト思フツヤイ → トマツツヤイと名を、玄く出雲地  
方び用ひる。

(55) 四車の前身で、板に爪を付け、柄を付けて天際草機。

(56) 四日目、五日目の意。

(57) アーカネと念を入れ、アーカエネ。

(58) 司会者（杉原代）の家号。

# 4 盆と祭

## 話(手)

| (略号) | (代名)   | (性) | (生年)           |
|------|--------|-----|----------------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ       |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ       |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ        |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ (司会者) |

D ボンノギョー ジワ イマンゴロ アンマ リカワー マセンカ イマンゴロト。  
 金の行事は 今頃(と) あまり変わりませんが 今頃と。

B アー ボンノギョー ズナンカ カワランジュー アーマヘンカ。(D ハイ)  
 ああ 金の行事をどう 変あがせよのでは ありませんか。(は..)

A トクニ カワリヤー スイマシエンネ マー ボンノドリ エライスイマシエノ  
 特に 変わりほしきせんね ちよ 盆踊り(近年)大変しきせんね。

フ。ハー ハー ケー エマンゴロノヤーネ テレビガ アーシナ  
 ちよ ちよ つい 今頃のように テレビも ああのでは

(1)

スィネ スィマ スィダケネ バンニャー ワケーモノ テラ モー ミツノ  
かいね。 (ますのちから 眠には 若し者か) 出て もう 道の  
ハタデデモ ツィート ナルイト ロガアリャー スィキ ソノ ヤーハ  
端ででも 少し 平坦な所があれば すぐ その 「やあは

トナイテテ オドリ (C へへ... ) ショッタダケンネ。 ボンニャ テラ  
とみらとて 踊り (へへ...) してゐたからね。 盒には 寺

ノ ニワエエッテ スィーゴンツィニャー ショーコー スィノバンダ スィーヨ  
の 度へ行って 十五日 には 妙綱寺 の 晩が 十四

ツカニャー アンヨースィバンカイノ。  
日 には 安養寺 (の) 順番がりの。

B スィーロクンツィカ アンヨースィノバン。  
十六日か 安養寺 の 番。

A スィーロクンツィカ アンヨースィノバン イーヤナコトテ ソノ テラ  
十六日か 安養寺 の 番 (と) いろいろなことで その 寺

ノニワデ オドリョッタケンネ。 ダクン ボンノ ツィキニャリャー ケ  
の 度で 踊ってゐたからね。 ちから 盒の 月になれば つ

ー マイバン ソノ ウターゴエト ウタゴエガ キキヨッタ。 イ  
い 毎晩 その 歌う声と 歌声が 聞いてゐた。  
(2) (3)

マンゴラー アーマヘンフネ。  
今頃は 取りまかせわね。

B ボンマエニナートネ ツィマリ ソノ ケーコトカネ ナントカテ  
盒前には子とね つまり その 稽古とかね 何とかで

モー ウー ボンオドリノ イー ワ サカンデゴザンショッタワ。  
もう うち 盒 踊りの 盗んでございましてわ。

ボンダトイヤー ケー オドラーニャ イケンヤーナ ココロガ スィタツ  
盒 石と言えは つい 踊らなれば いけないうち 心かしてゐた。

テ。

(4)

D クドキノ ダシモンモ イロイロ アッダデシユーガ。(A ハー  
口説の 出し物も いろいろ あったでしょうが。 はあ)

(B ハー  
はあ)

A イロイロ アーマスタネー コナエダ テレビデモ フノ ヤーマ  
いろいろう めりましたねえ 先日 テレビでも あの ヤリネ

スタゴネー (D ハイ) マー オド... フーヤナンカエ ヤッ  
したがねえ (はあ) まあ 踊(りの) 格好やねど やほ

パー カワリマシマシエンフ。 ソーデモネ アカスト イマト (D ハ  
リ 変りはしませんわ。 それでもね 昔と 今と (は

い) ハー。  
はあ。

D コナエダ コマキノホーテ ナントカイーチヨーマシタヨ。 4ー  
先日 小馬木の所で 何とか言っちゃいましたよ。 へえ

コノゴロ オドリ ショーリヤクサーヤ = ナッダノーターテ (-同笑)  
この頃 踊(と) 省 略 する ように 変わったのとおっしゃって

(キセルの音) モー ナート イーテキカセンケン (笑... ちか  
もう 少し 言っし聲)かせはから

ら) ソーカラダグナ ナーヤーナコトデスタ。

それから(それか原因)にかな というようなことですね。

(5)

B コーノ コーノ インキョサンノ オトーサンガ コノホーデワ イ  
この人の この人の 隠居さんの お父さんと このほう(この地方)では

ー アノ オドリノ オンドトーノネ イー マ アドキトイーヨ  
あの 踊りの 音頭とりのね ね 口説と言って



ッタモンダガ アー オドリノウタノ イー マー イー タイテ  
いたものだから ああ 踊りの歌の まあ たいて

ー マ ジョーズ ツー ダイ ( D ハイ ) ダイタイ ハー コノ  
ハ マ 上手というのか ( はあ ) たいてい はあ たいて

ホー コノホーノ オドリワ タイラー ココノ コノ オトーサ  
ハ この方の 踊りは たいてい たいてい この この お父さ

ンガ スィショーサンデスィワ。

んか 師匠さんですわ。

D アー ソゲデスカ ( B ハー ) クトキオヤッテオラレウ。  
ああ そうですか ( はあ ) 口説きやっつておられた。

B ハー ハー コリヤー イロイロナ アー トテモ ソラ イー ンガ  
はあ はあ これは いろいろな ああ とても きれは よい 芸

ーガ ジョーズィダッタモンデスィズィ。 オドコトヤネ アゲナウタ ソ  
ハ 上手 だったものですよ。 踊るにやね あんな歌 たいて  
(6)

エカラ イー アタゴサニノ フェネ ( D ハイ ) コーガマー  
れから 愛宕さんの 笛ね ( はあ ) これが まあ

ジョーズィ コノホージマー。  
上手 この地方では まあ。

A フキ フキ タイコタタキナー インナコーノ ツイツィオヤダリョウタモン  
笛吹き 太鼓 たたきなあ 皆 このの 父親 ちんちん もの  
ダ。  
だ。

B コノオトーサンデスィ。 ホーダケン アー ギオンバヤスィ ツィー アノ  
この お父さんです。 きれいな ああ 祇園 囃子 という あの

フーノ フィ フィ フキカタワ コノホージマー ココノオトーサンホガ  
笛の ふふ 吹き方は この地方では この お父さんの外

スィシッヲモシワ ナカッヲモンデスィ。 ( D ハー ) ホーダケン  
知った者は ほかったものです。 ( はあ ) それだから

コーネ ツィイヲフーダモナー アノ フィエオ フーダモナー ウツィネ  
この人について吹いたものは あの 笛と 吹いた者は (和の)家(の)  
(8)

モ ギオンバヤスィモ スィツチュー。ヘー エマンガロノスィーフ アン  
(家族)も 社園 囃子も 知っている。もう 今頃の人は あま

マリ オーカク ………。  
り おおかた (知っていい)。

A アー エマンガロノモイワ スィランネー ( B ハイ )  
ああ 今頃の者は 知らんねえ。 ( はい )

D オーマキノ アタゴカンワ マ シチガツデスガ コマキハ ハチガ  
大馬木の 愛宕さんは ま 七月ですか 小馬木は 八月  
ツデスガネ。  
でつかね。

B ハイ ソーデスィネ。  
はい そうで可ね。

D ドゲネスカ ダシモンノ ジョーキョーヤナンカエワ カワッヲオリマ  
どうですか 虫と物の 状況や何かは 変わったおりま  
センデスカ。 ( B マー ) ヤッパリ ナンダエデスカ カシ  
せんですか。 ( はあ ) やほり 何んておか 頭  
ラウヤト。  
打ちと。

B コノホーワ カワッ チョーマスィワ。 ( A ハハ…… ) カイキニワ じ  
この方は 変わってまいりますわ。 ( はは…… ) 最近は  
ンコトニナッ チョー。(一同笑、ここのとこに子明) ヤランダケン。  
しほいことになつていふ。 やらねのだから。

A オーマキ サングラク = ワケテ マ...4ヨ = ネ。 ( D ハイ )  
大島木(と) ミツの部落に 合けて やりまののにね。 ( ほん )

サングラクノバンガキテモ セラヘンダケンネ。( D ハイ ) ココ  
三部落の 順着が 来ても やりまのののからね。 ( ほん ) この  
ンホーノモナー。  
地方のものば。

D ソゲイーユトダッタデスカネ。  
そういうことおら ちでるかね。

A ハー タンボト オートゲブラクガネ ( B ホクガ ) フタフ  
はあ 反保と 大崎部落かね 僕が 二部  
ラウ マーバツカーデ。  
落(が) やりまのかりで。

B テラノ ホンドーノ スィタニアー ヲー ツー ト モスホスィシエアー (9)  
寺の 本堂の 下にある もう ちよちよ 虫 齧(し)しなけれは  
イケンマーニナツキョー ( 不明 )  
いけりい ようになつていり

C サンネレ = イツイトドマー スィナハラニアー ホン = マタ ( B ワ  
三年に 一度でも (虫齧(し)した)ねは ほんに きた  
スィレー 。 D ワスレー ワスレー。 ) モー ワスレテ スィマーチ  
忘れた 。 忘れた 忘れた。 もう 忘れた しまよ  
ーニ ナーマスィケンネー。 ( 一同の語混雑不明 )  
うに たりまのからねえ。

A ファーフキドマー オランヤーニナー。  
望 吹 ちどは いちい ように なり。

B アゲダニエー。  
ああだね。

D フエフキ オラーシマセンヤニナツテ  
笛吹き 居らぬ。 ようになって。

(10)

A ハー ドータタキ オスエアーモンガ イスハラ (D ハイ) ナン  
はあ 胴たたき(太鼓たたき)教え子看が 石原、 (はあ) ない

ダエガノー アーガ フトリオーフ ドータタクユト マー スッ  
とかいふ あれか 一人おろわ 胴をたたきこと(そ)子あ 知。

ちー ナンナト。フエフクモナー スラン オラン。  
こい 何で。 笛を吹く者は 知らぬ。 居らぬ。

B ウメキサンガ ドゲトカネ。  
梅木さん(いさか) ぐんがね。

C フクサダサンノ マー フカレマヌサナ ワカイ ワカテデ。  
福定さん か 子あ 吹かれまじということぞ若。 若手ぞ。

A ダエニョードマ (C ハー マー) スットーラレーカモスレニネ。  
少しは (はあ 子あ) 知っていられたかもし知れぬ。

C ソエカラ ノバラフクサダサン ワカテデ。(A ハー) ソエカラ  
それから 野原 福定さん 若手ぞ。(はあ) それぞ

ウメキサンヤネ グラエナコトジナイダラーカネ スランワ。  
梅木さんやね ぐんをたきことではないうるうかね (ほかに) 知らぬわ。  
(11)

D ヨコガユーテ ナンデスガ ネット アタゴワンノトモモ ボツボツ  
横座言。て なんぞぞか 少し 愛宕さんの 行列も ぼつぼつ  
シナカンセニヤ (一同笑う) イケマセンジヨ。  
しなされぬは ・・・子せよ。

C ワタスィラツィツィイナ モンデモネ オナゴガ タンボノホーエデテ  
わたしたさつは ものでね 女子が 反保(地保)の方へ出て  
モ ホンネ フトノ タンボノホノシーノ アゲイワレマヌスィ。  
も ほんとに 人の 反保の方の人の ああ言われずよ。

マー ホンネ カワフガス、ノ ホーノニヤ オヤカタサンバツカー オ  
まあ ほんじに 川東(地名)の方の(人)には 親方さん ばかり ち

ラッ シェーダケネ ホンネ アゲナ アノ ナンダエ カ、 シェーシエン  
られ子のちがら ほんじに あんほ あの 何も (せじやない)

コトナンツイコトイテカラ (笑... げかす)  $\left( \begin{array}{l} D \text{ ハハハ...} \\ \text{ほほほ...} \end{array} \right)$  ホンネ  
ことなど、いうこと 言って ほんじに

ドマカサレテ。

ごまかされて。

A ワカエモンが オランヤーナツタカラ ヤメタデス。  $\left( \begin{array}{l} D \text{ ハイ} \\ \text{ほ...} \end{array} \right)$   
若...者が 居らぬ...ようになったから やめたです。

ソイツオ ケー イ...ア...ンヤマト ヨー クタンファーデスワ。  
それを つい 一度 やめると とう (二度と) 出来な...ふうですわ。

$\left( \begin{array}{l} B \text{ ハー ハー} \\ \text{ほあ ほあ} \end{array} \right)$

D トクニ ドクタクモン ガッコー コドモデスカラ  $\left( \begin{array}{l} A \text{ ハー} \\ \text{ほあ} \end{array} \right)$   
とくに 胴をたたく者(は) 学校(に行く)子供ですから

コレガ マタ ニンズーガ ソロワンデ。  
これが また 人数が 揃わなくて。

A ニンズーガ ソロワンデスワ。  $\left( \begin{array}{l} b \text{ ハー} \\ \text{ほあ} \end{array} \right)$  トコロガ ドーオ  
人数が 揃わな...ですわ。 と3か 月同

ソイツオラベラレケヤー フトツデモエーケン ヤレツイーダ オラネ  
三つ 道べられでは 一つでもよいかさ やれといふのた あたし

—  
ねえ。

B マー ソゲダワネー。  $\left( \begin{array}{l} A \text{ ウーン} \\ \text{ううん} \end{array} \right)$  エー。  
まあ そうだねえ。 ええ。

A ソゲスィテ テントー ノコエトキヤー。  
どうして 伝統(E) 残しておけば。

C ソゲカーカ ナンゾ ムラテ ホゾンクワイとタエナモノ コスラエ  
どうするの 何か 村で 保存会のようなもの 作。

テ (A アー) ケー ドッコモ ドッコラツモ ホンノコ  
て ( ああ ) っい どこも どの子供達も ほんとう

ター ウーン ナンダエデスィケンネー (A ウーン) ホゾンクワイ  
は ううん 何でおからぬえ (ううん) 保存会

ニスィテ マ カンネンニ イツドナート。  
にして 三 三年に 一度なりと。

A ニギヤカニ ヤーモンツ ホソータモエーケン (C フーン)  
にぎやかには やすものは 細くてもよから (ふうん)

デントー ノコエキヤー マタソレオ フツイーニ イクトキヤー  
伝統(E) 残しておけば きたよめ 普通に 行く時には

オーキンナツテ ニギヤカニナー。(B ソーダワネ)  
大きくなって (いつかは) にぎやかになる。 そうがわね

A ココンホーモ イツバンデ ヤリョッタユトガ アーダケン。(C エー)  
この地方も 一番目で やっていたよか ありのたから。(ええ)  
(12)

B エー ソー ソー (問) マ ムカスィワ イー コノイツブダンノ  
ええ そう そう ち 昔は この一合団の

ノ マタゴサンノ ダスィモノオ ヌーツイヤーナコトデ (C ハー)  
の 愛宕さんの 出し物と 見るというようなことで (はあ)

イツバンデ ヤリョッタユトガアー。  
一番目で やっていたよかある。

D カサホコノウエノ カザリワ カガリツケワ アヤツリヤナンカエ  
傘 鉾 の上の 飾りわ 飾りつけは 操り(人形)など

コマキノバヤイニアーマス。オオマキノバヤイニワ ドゲデスカエネ。  
 小馬木の場合には(は)あります。 大馬木の場合には どうですかえね。

B オマキノ バヤイニ アリョツツィラー アルアル ダイダイ (A  
 大馬木の 場合に(モ) あったであらう あるある だいたい

ホー ) ホンスイキニヤリヤー (A ホー ) アーマスイヨ。ハー  
 ほう ) 本式に やれば (ほう) ありますよ。 ほう

アノ オドーヤーナヤツィガネ。 (A ハー )  
 あの 踊るよう なのがね。 (ほう)

A マズ ソーサイコー スイトイーノワネ ハンマノ エマンゴロナンツ  
 ます 総裁 講師 と言うのわね 羊屋(屋号)の 今頃 なんという

カエノ アリヤー スィツチョーワ。 ハナーキーコトノ フンナート  
 かの あれは 知っているわ。 花を印することの 何でも

(B フーン ) フーン アーガ フトリオー。(問) ハー (問)  
 ぶん ぶん あれが 一人です。 ほう

ナンカ フェフキノ アノ カサノ フェリ スーニット コー ツィター  
 何か 笛 吹き の あの 傘 の ベリ(不才) ずうっと こう 行つた

ね (D ハイ ) アリヤー ナンツィーモンガエ。  
 ね。 あれは なんというものか。

D ナンターマスカ。  
 何と言いますか。

A ハー アノ。  
 ほう あの。

B ナンツィーカイネ  
 何と言いますか。

A ナンツィーカエノ アリヤー ハンマワ スィツチョー ホカニヤー ハー  
 何と言いますか あれは 羊屋は 知っている 外には もう

スワップ モンガ オランヤナガ。  
知ったしのか おらないうようだから。

B イヤー ネー。  
いやあ ねえ。

D ソゲシテ、リャー コマキノ アタゴウンノホーガ ナート ヨカシ  
そうしてみれば 小馬木の 愛宕 どの方が 少し 音流  
1/2-オ ヤッホー マスナー  
E や、エイヤナア。

B アー コリャー マー。 ( D ハハハ... )  
ああ なんか ずあ、 ( ハハハ... )

A ソリャー デントーテキニ マイネン ヤラッニャーケンネ タエン。  
それは 伝統的に 毎年 ヤリなってるから 絶えん。

B タエンガネ アーイーコトデ マタ シナラテネ マタ アノイ  
絶えんかね ああ 言うことで ずあ 見習ってね ずあ あつ  
(16)  
ー ハナデモツクーコト マタ アー オウ アトエムケテ オク  
花でも作ること ずあ ああ 後へ向けて 送

ー マナ ( D ハイ ) ナー マスガネ。 タバコ スイッチョート ケー グエ  
る ような (ハイ) (ふうに) なり ずあかね。 休んでいよと ずあ かい  
タエネ ナー ナッテシマー。  
えいに ちかくなってしもう。

D アノー カザグルマノ タケノホネエネ ( B ハイ ) コゲ マ  
あろう 風車の タケノ骨へね ( B ハイ ) ころ  
ゲルコトガ ワカランデネ。(笑いながら)  
曲ける ことが 合からないでね。

B ソーデスガネ。  
そうできね。



D (笑) ながら) ナンギシタデスカ (B ハイ) ケ アゲナコ  
難儀. したでスカ (は..) つい みんな?

トデスケンネ。ガモ... (問)  
とびすからぬ。でも...

## 注記

- (1) 理由と示すカラはこの地方ではケニ、ケネ、ケン<sup>ニ</sup>の三つが用いられる。
- (2) ウターゴエとウタゴエに言い直したと思われませんか？ ウタゴエがほらウゴエウ<sup>ニ</sup>であるべきがあります。
- (3) キキヨ<sup>ニ</sup>ウは進行形、キキヨ<sup>ニ</sup>ウにもなす。
- (4) 口説き。盆歌のリーダー、または歌詞を指す。
- (5) コレノがコーノと成ったもの。
- (6) 愛宕神社。
- (7) コレノ → コーノであるが、ここのコーノは自分の父親を指して使うが、ココノ<sup>ニ</sup>の意。
- (8) もう少しをへー少し<sup>ニ</sup>というのは、この地方でいうが、本雲北部は言わない。
- (9) ウシ(牛)はオシのようにウはオと成るが、ムシ(虫)はモシとなる。ムカシ(昔)はモカシ、時にムカシに近<sup>ニ</sup>対応関係がある。
- (10) オシエル(オシエール)は音韻変化にしたがってオシエール<sup>ニ</sup>となり、録音ではオシエアー、オシヤー、オシヤエなどと聞こえる。
- (11) いろりの横座から出た語。横がウロ<sup>ニ</sup>出すこと。
- (12) 地区の別名。
- (13) アリヨツツ<sup>ニ</sup>ラーはアリヨツタラーと同じ形。共通語のタロウは本雲、鳥取県ではタラーとなる。ツは文語の完ア<sup>ニ</sup>の助動詞の「つ」であり、石見ではツローの形で出る。
- (14) 総裁または総宰がろう<sup>ニ</sup>という。講師はついたら<sup>ニ</sup>の事。これ以上のことは合からず。
- (15) 切子はキ<sup>ニ</sup>イールでキ<sup>ニ</sup>ア<sup>ニ</sup>となる。司会者はキヤー<sup>ニ</sup>と言うが、キーコト<sup>ニ</sup>に聞こえる。
- (16) 作子は<sup>ニ</sup>スウクル<sup>ニ</sup> → <sup>ニ</sup>スウクワ<sup>ニ</sup>となる。

## 5. 稲刈

話(手)

| (略号) | (代名)   | (性) | (生年)     |
|------|--------|-----|----------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ  |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ |

- D イネカリノ 稲刈りの ハジメデスワネ。初めですわね。  
 (B ハイ) ハイ (B) ハイ) ネンチューー ツズケテ  
 年中 続いて
- イーマスト オハツホオアギヤ<sup>(1)</sup>ー イーヤナコトワ サレマセンデスカ。  
 言いますと お初 徳をあげる 言うふうなことは できませんですか。
- B ムカスワ ウツヤツ ヤリョツタガネ。  
 昔は 私の家など ヤって来たわね。
- D ダイコクサントコロエ。  
 大黒さんのところへ。
- B ダイコクサンニ コー (D ハイ) タバーニシテ アゲテネ。  
 大黒さんには こう (D ハイ) 東にして 上げてるね。
- (D ハイハイ) (C ハイハイ)
- D タバニシテ モッテ イカレヨツタデスカ。  
 東にして 持って 行きなさいってわね。
- B イヤ ア タバシ コー マー ツーサイ。  
 ..や あ 東では こう する 小ま。
- D ハイハイ ツーサイタバシ ハイ。(C ハイハイ)  
 小ま東で する。(C ハイハイ)

B ウツヤ ツニエー イー ウツノウラガ <sup>(2)</sup> ロースインガ アゲナコト  
 私の寂などでは 寂の寂の私(自)の 老人が あんまりこと  
 サシラヨッタニ  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハー} \\ \text{ほあ} \end{array} \right)$  イート スィーニカナカナニ ナ  
 ナせられていた ナニ株 <sup>(3)</sup> ほ"ガリに な  
 ーデ<sup>ニ</sup>スィ<sup>ニ</sup>デ<sup>ニ</sup>ネ。  
 ？ですぬ。

D シュニカナニ ハー。  
 ナニ株に ほあ。

B ハー スィニカナイヤー イマンゴラ コゲンナー。  $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハー} \\ \text{ほあ} \end{array} \right)$   
 ほあ ナニ株と 言えば 今頃は こんな(大抵に)な。  $\left( \begin{array}{c} \text{ほあ} \\ \text{ほあ} \end{array} \right)$   
 トー<sup>ニ</sup>スィ<sup>ニ</sup>フ コマイ コマイモング。  $\left( \begin{array}{c} C \text{ ハー} \\ \text{ほあ} \end{array} \right)$  スィニホン<sup>ニ</sup>シ  
 当時ほ 小ジい 小ジいものだ。 ナニ本では  
 ナカツタケン スィニカナ。  
 なかつたから ナニ株。

A カナダフ。  
 株だよ。

C スィニホン<sup>ニ</sup>シヤー アーマシニカネ ナンホモ コレクワイナヤツガ  
 ナニ本では ありませぬがね いくとも これくさ"りなやっか  
 $\left( \begin{array}{c} D \text{ ハイ} \\ \text{ほい} \end{array} \right)$  ナンネンモ スィスィレテ  $\left( \begin{array}{c} B \text{ ソー} \\ \text{そう} \end{array} \right)$  ホンネ  
 何年も 燃れて  $\left( \begin{array}{c} \text{そう} \\ \text{そう} \end{array} \right)$  ほいとろに  
 $\left( \begin{array}{c} B \text{ アゲデスィフ} \\ \text{あみですわ} \end{array} \right)$  エラエ エラエホド" クローニナツチノガ  
 ひどく ひどいほ"と 黒くまったのか  
 ナン<sup>ニ</sup>スィ<sup>ニ</sup>ーネンマエノガ コゲ<sup>ニ</sup>ズ<sup>ニ</sup>ー<sup>ニ</sup>ット  $\left( \begin{array}{c} B \text{ ホイカラネ} \end{array} \right)$  アー  
 何十年前のか こうすうっと それから あり  
 マショツタドモ。  
 ましたけれど。

B アー タケオユ<sup>xxxx</sup> コーワゲテネ サンバイワンニアギー メ<sup>ツ</sup>  
ああ 竹 玉 こう こう 曲げとね きんは<sup>い</sup>はく(田の神)にあげ<sup>さ</sup> 三つ

ホド<sup>い</sup> タテラカエテ アゲターナンカ スイマヒョツタ。ソエカラ イ  
ほど<sup>い</sup> 立てて あげたりせんか してしました。それから

一 ツカクノ ウー カ<sup>い</sup>ワントコーエ モッテエッテ イー ン  
近くの 神様の所へ 持って行って

ナエタリネ。ソエカラ イー マ ソエカラサキ ヤキゴメーツク  
供えたりね。それから ま それから先 焼米 作

ツテネ。  
ってね。

(4)  
D ン フライコメ  
ら ふ<sup>い</sup>米

B ア フラエコメ ( D ハイ ) フラエコメ ツクッテ イー カ  
あ ふ<sup>い</sup>米 ( ほう ) ふ<sup>い</sup>米 作って ...

ニサンニ ソナエタリ スイマヒョツタ。  
神様に 供えたり してしました。

D フライコメワ コリヤー キマツタダネージャラーガ タウエーネ セ  
ふ<sup>い</sup>米 これは 決まった(習慣)ではお<sup>い</sup>は<sup>い</sup>33か田植に

ワニナツタトコロネ クバーツタフンク ショツタキーフ キモサー  
世話になった所に 配ったりなど していたような 気がする

デスガ アギンコト ヤッバリ ショツタモシデスカ。  
ですか あんたこと せつぱり していたものですか。

B サー ネー イー ウツヤツ ツゲナコトオ スイマヒョツタ ムカ  
さあ ねえ 私の家など そんなことと してせんでした。昔

スイワネー ショツタカヒ スイレマシエンガ。( D ハー )  
はねえ していたかも 知<sup>ら</sup>ずせんか。( ほう )

A イマンゴラー フラエコメ アンマリ シェンシターネーカ。  
 今頃は 小さい米 あまり 知らないではないか。

C ソデーカモ スレマシェン。  
 そうかも 知らません。

D コマイトキ = ショウキョーダドモネ ( B ハイ ) タウエガ オセ  
 小さい時に 知っていたけれどもね ( B ハイ ) 田 木直(か)で おせ

ワニナツタトコーエ ( B ハー ハー ) ソノ ユンホーワテダドモ  
 話になった所へ ( B ハー ハー ) その 少しずつ石けんと

ソノ ハツドリダ イーコトデ ( B ハイ ) フライゴメニシ  
 その 初取り石(と) 言うことで ( B ハイ ) 小さい米にし

テ ( B ハイ ) モツテ エカシヨツタ ( B ハイ ) デスガネー。  
 て ( B ハイ ) 持って 行かせたは ( B ハイ ) できかねえ。

C ハー サンスィゴーフテネ アノ ハー オヤガ モツテ エカシヨ  
 はあ 三 四合 ずつね あの はあ 親が 持って 行かせ

ツタケン フラエゴメ ハー。  
 聞いたから 小さい米(と) はあ。

B アゲデ。  
 ああで。

C オマエサンツモ マンダ フーン ソゲンコト オボエチーナハー  
 あなたがたも また ふうん そんなこと 覚えていながら

か。  
 が。

D キートワネ。 ( C ハー )  
 少しはね。 ( C ハー )

C ワスィヤツィガ コドモノトキネ フラエコメ ツーダダ イマノハナスィ  
 私達が 子供の時に 小さい米 というで 今の話

ネ サンスイゴーフテ ( D ハイ ハイ ) スイー フラ スイー バコ  
ね ミ四合ずう ( ほん ほん ) じゅう 箱

ニイレテネ モッテイカシラレマシヨッタ。ドコエモッテエケ カネ  
に入れたね 持って 行かせられていました。どこへ持って行け かし  
コエモッテエケ。  
こへ もって行け。

D ソーダッイダラーカ。  
そうだったらどうか。

A エマンガロモ ヤッパー フラエゴメ サッシャーカ オマエントコロ。  
今頃も やっぱり ぶどう米 作りなすか あなをのころ

C へへ-----スィヤスィマシエン。(一同笑う)

D トント ~~~~~ シマセンネ。  
とんと しませんね。

B タマニネ タマニ コー ムナクツノ ヤオイコメガ イネーカー  
たまにね たまに こう 水口の やわらかい米が 箱をメリ

スィブンニャ ヤー オ ソノ イー オラカ ムカスィノ モンダダケン  
頃には やあ お その 私か 昔の箱だから

コスィラエテ コドモニ タベサシエ。( D ハー ) イマンガロ  
作って 子供に 合せて。 ( はあ ) 今頃

ワネー アレ アノ エッターナンカ スィマスィテモネ ( D ハイ )  
わねえ あれ あの 煎ったりねど しませんね ( ほん )

モ アノ コメニサーユトガ ケット フズィエーニスィテネ ( C ハー )  
も あの 米にすくことか ちよと 不自由にしてね ( ほん )

マー シェーマイキニイレテ ナンダゼモ スィヤー コメニャナーマスィ  
まあ 精米機に入れた 何度も すれば 米には足りませ

グッドモネ ムカス、ノヤーネ ス、イシヤデ<sup>テ</sup> ヲクトカ ナントカ イーヤ  
 けれど、もね 昔のように 水車<sup>で</sup> 搗くとか何とか 言うよ  
 ーナコトガ ナンガイ アーマヘン ス、マシエンダケン。 グッドモ マ  
 うな、こじか 何んにも ありません (ませんの、お)から。 けれど、ま  
 ホトンド ス、マシエンネ。  
 ほとんど しませんね。

D ディアリヤー フライコメフ アノ スルコメ ヒンシュガ キマッ、チョツ  
 で、あれは ぶら、い米は あの ずり米 品種が 決まっ、てい  
 タワケ マー ハヤ イケバン ハエーヤツニ ナーワケデ、ニョーカ  
 たわけ ねあ <sup>xxxx</sup> 一番 早、いやつ(米)に ぼ、いれ、て、し、ょう、か  
 っ。  
 っ。

B ハイ マー メズ、ラ、ス、ー、ガ エーデ、ス、ダ、ケン、ネ。 (D ハイ ハイ)  
 ぼ、い ねあ 珍、ら、し、い、の、お よ、い、で、す、の、お、から、ね。 (ぼ、い、 ぼ、い、)

フシトートサエ イーヨ、ツ、タ、モ、ン、ダ、ケン  
 早稲取りとてえ 言、っ、て、い、た、も、の、お、から

D ハー フシトリ、イーヨ、ツ、タ、ダ、カ (B ハイ) アレオ。(B ハイ)  
 ぼ、い 早稲取り(と)言、っ、て、い、た、お、か (ぼ、い) あれ、え。(ぼ、い)

ハー ハー。  
 ぼ、い ぼ、い。

B アー ハヤ、イ、ノ、ガ トク、チョー、デ、ス、デ、ネ。 ソエ、ダ、 イー ゴク、ワ、シ、デ、  
 ああ 早、い、の、か 特徴、で、す、で、ね。 それ、で 極、早、稲、で、

(D ハイ) トツテ マ メズ、ラ、シ、ー ス、イ、ン、マ、イ、オ ヲク、ツ、テ  
 (ぼ、い) 取、っ、て ね 珍、ら、し、い 新、米、を 作、っ、て

(D ハイ) ソエ、カ、ラ、 イー カ、シ、カ、ン、ニ ソ、ナ、エ、マ、ス、テ、ネ、 イ  
 (ぼ、い) それ、から 神、標、に 供、え、ま、し、て、ね



(5)

一 ソエデ<sup>レ</sup> テマエラツクワ アノ イトハラブタローサンノ (D ハ  
それで 叔達は あの 緑原 貞太郎さんの (ハ

イ) イー コサクダツクダケン マー スイヌスニモッテエッテ  
い) 小作らうただから 子あ 地主に持って行って

ソノ (咳) ソノ アノ モッテエッテ イー とヤゲニマニョ  
その その あの 持って行って 工産にしまし

ツタ (問) カニサンノ ツイスキワ アスコ ソエカラ コンド  
た。 神様 の 次は あは(緑原) せから 今度(ハ)

イー マー イマノハナスデ シエワニナツタトコロエナンカエワネ  
まあ 今の話で 世話になった所へ ねえへはね

チヨット イー とヤゲニ ヌスラニエダケンツレ イー タゲテ  
よっと 工産に 珍しいからだと言って 合で

そらいマニョツタ。

貰って来ました。

A ソーデ エマンガロフ スヨー イータトコロガ コ コー オア  
それで 今頃は 作ろう(と) 言っ たところか <sup>xx</sup> <sup>xxxx</sup> あん

エ トコロ シンバガ アーカ。(一同笑う)  
た(の)所 千歯か あまが。

B エーイヤ ソゲアモンダラ ナンダラ アーシェン。(C ハハハ... )  
いゝえ そんなものや 何にも ありはしない。(ハハハ... )

A ホンテラ シンバ / コッテララノ。  
そんな 千歯 残ってないのさの。

B エンヤ アーコトアー マダ シンバ アーコトアー フトツク  
いや あまこ(ハ)あま 子が 千歯 あまこ(ハ)あま 一ツク

マ / コエチマシダラー。  
残してあります。

A ソゲダラーノー ブンカガイガ / コッ<sup>レ</sup>ヤ<sup>ウ</sup>ー。  
そうなるうのお 文化財が 残ってる。

B アー アル。  
ああ あり。

D ホンナラ オラ マダ ソノ ウワテ<sup>ニ</sup> エキマスシ。 マダ ツカ  
えれえれ ね まだ その 上手に 行きますよ。 まだ 使  
ー<sup>レ</sup>ヤ<sup>ウ</sup>マス。  
っまいます。

A ホーン ソゲー<sup>レ</sup> デゴザス<sup>カ</sup>。  
ほおん そうでございませうか。

D (笑) (笑) ノーグ<sup>ヤ</sup>ニキテ アキ<sup>ン</sup>コト イー<sup>テ</sup> イケ<sup>ン</sup>ダ  
農具屋に来た あんなこと 言って いたやう

ドモ。(笑)  
けれども。

B タネー トッ<sup>タ</sup>ー ナンカイ スー<sup>ダ</sup>ネ ケ<sup>ッ</sup>キ<sup>ョク</sup> イマ マン<sup>タ</sup>  
種<sup>ト</sup>取<sup>リ</sup> 取<sup>ッ</sup>たり ねど するの<sup>ガ</sup>ね 結局 今 ね  
ツカワ<sup>レ</sup>トコ アーマ<sup>ス</sup>ヨ ホカニ。(A ホーン)  
使わ<sup>レ</sup>る所 ありますよ 他に。(B フラレ)

D タネトリ = ホリー ホリー。  
種<sup>ト</sup>取<sup>リ</sup>に ほりー ほりー。

B アー ソー ソー (D ダイジ<sup>ョ</sup>グ<sup>デ</sup>ス) (A ホーン) イー  
ああ、そう、そう 大丈夫です (ほおん)

イマンゴロノ<sup>ノ</sup> うー ナン<sup>デ</sup>ス<sup>ワ</sup> イー ダ<sup>ッ</sup>コ<sup>ク</sup>ニ カ<sup>レ</sup>チ<sup>リ</sup>ナ  
今頃の 何人ですか 脱穀(機)に かけたりの

ンカス<sup>ー</sup>ツ<sup>イ</sup>ト コメント<sup>ッ</sup>チ<sup>リ</sup>ネ ドー<sup>ワ</sup>レ<sup>ガ</sup>エ<sup>ッ</sup>チ<sup>ー</sup>ス<sup>テ</sup> イ  
どするといふと 米に 使ったりの 胴割れが 入ったりして い

ケンダケン イマ ムカス、ス、キオ アーテ、カーツ、ート ケー……。  
 けは、の、から 今 昔式、E あれ、で す、と、いう、と つい……。

D へ、ク、ソ、ダ、ダ、ケン  $\begin{pmatrix} B & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  (7) カガ、マ、タ、カ、 エ、ッ、ハイ、 デ、デ。  
 下、手、く、と、だ、だ、から カ、ガ、マ、タ、カ、 い、つ、は、い、 出、る。

B ハー ホ、ガ、キ、レ、マ、ス、イ、テ、ネ。  $\begin{pmatrix} D & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  (会話過程) ソー、デ、モ  
 は、あ、 穂、が、却、水、ま、し、て、ね。 それ、で、も

マー アン、ジ、ン、シ、ェ、ー、ガ、 アー、マ、ス、イ、ワ。  $\begin{pmatrix} D & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  タ、ネ、モ、ニ、ト  
 ま、あ、 安、全、性、が、 あ、り、ま、あ、わ、。 種、物、と

ス、イ、知、ー、ネ、ー、 アン、ジ、ン、シ、ェ、ー、ガ、 アー、マ、ス。 ソ、エ、カ、ラ、 ブ、ツ、ァー、 ブ、ツ、ク  
 し、て、は、ね、え、 安、全、性、が、 あ、り、ま、あ、。 それ、が、す、 ブ、ツ、ァー、ブ、ツ、ァー

ー コ、ギ、マ、ス、イ、ダ、ケン、ネ、 エー マ、ガ、ッ、ノ、 モ、ニ、ヤ、ナ、ニ、カ、エ、モ。  
 扱、ま、す、の、ら、が、ら、ね、 え、え、 混、っ、た、も、の、や、な、ど、も。

D ハイ ハ、ズ、セ、マ、ス、ケン、ネ、ー。  $\begin{pmatrix} B & \text{ハイ} \\ & \text{はい} \end{pmatrix}$  (2回) ソー、デ、マ、ー  
 はい、 は、ズ、セ、ま、す、が、ら、ね、え。 それ、で、も、あ

ム、カ、シ、ノ、 イ、ネ、カ、リ、キ、ー、ノ、ワ、 ソ、ノ、 カ、ル、イ、ッ、ホ、ー、デ、シ、ュ、ー、 ソ、ト  
 昔、の、 輸、入、り、り、と、い、う、の、は、 そ、の、 刈、り、一、方、で、し、ま、う、 外

デ、コ、イ、デ、 ナ、ン、キ、ー、ヤ、ー、ナ、ユ、ト、 ア、リ、マ、セ、ン、ダ、ケン。  
 で、扱、い、て、 左、ど、と、い、う、よ、う、な、こ、と、 あ、り、ま、せ、ん、の、だ、が、さ、。

B カー。  
 さ、あ、。

A ソ、ダ、ー、ワ、 ゴ、ダ、イ、マ、シ、ン、ツ、ネ、 キ、ー、カ、ッ、タ、ヤ、ツ、ァー、 ソ、ノ、 カ、キ、ー  
 そ、う、は、 こ、だ、い、ま、せ、し、わ、ね、 先、に、 刈、り、た、や、つ、は、 そ、の、 先、に、  
ソ、ノ、 カ、キ、ー、 ソ、ノ、 ゴ、リ、ゴ、リ、キ、ッ、テ、ネ、。  
 そ、の、 先、に、 そ、の、 こ、り、ご、り、扱、い、て、ね、。

D カ、キ、ー、 ヨ、ー、ナ、ダ、ニ、 マ、タ、 ボ、ツ、ボ、ツ、 キ、ッ、テ、ネ、 ソー、デ、 ハ、デー  
 先、に、 夜、任、事、に、 ま、ち、 ほ、つ、ほ、つ、 や、っ、て、ね、 それ、で、 稲、刈、け

ニカイ ツカーヤーナコトガ アーデスカ。  
(7) ニ回 使うよふなことが あるですか。

A ア ハデー アケテ マター ツギ カキ ツヤナ コチ アー  
あ 箱がけを 空けて また 次(の次の箱を)がけるときのような ことはあり

マヒョク ヲ  
ませんでした。

D ハー ソゲ デスカ ハー ハー。(8) ロー ナン デスカ  
はあ そうですか はあ はあ。 それで 何ですか  
タバモ オーキイタバテシヨウカ ミナギリ ハン  
東も 大まか 東でしょうか ミナギリ ハン

A ミナギリ ネ カリョク ヲ。  
ミナギリ 刈 っていました。

D ミナギリ デスカ。  
みなぎりですか。

B ハー ミナギ アテ ゴサ エ ス ヲ。(9) ( A ハー )  
はあ みなぎりて ございました。 ( はあ )

D ウチ ヤ ミナギリ ハン ダク ヲ。  
私の家は みなぎりハン だ。

B ハー ソゲ デ ス タ ハー。  
はあ そうでした はあ。

D テ タ ラ メ ニ ボク シヨウ ナ。(10)  
でたよめは 朴 性 だ。

B ハイ ソー デ ス ワ ネ ー。  
はい そうですかねえ。

D ヒト ナギ リ フタ ナギ リ ミナギ リ デ イ メ ワ ニ イ ワ エ ヨ ク ヲ  
ひとなぎり ふたなぎり みなぎりて イメワニ イワエヨク  
ひとなぎり ふたなぎり みなぎりて 一葉に 結んでいた。

B ハー コレガ ヒトナギリ コレ ミッ ツィ (問) スィ ソレデ……。  
 ほあ これが ひとなぎり これ 三つ し それで……。

C アンタト コーワ アー ソリャー イツノコト デスィカネ ミナギリハ  
 あんたのことは ああ それは 何時の事ですかね みなぎりは  
 ン。  
 ン。

D ドーリョク イレルマデデス ハツドーキデ ダ…コクサーヤーン  
 動力(力) 入るまでです。 発動機で 脱殻するように  
 ナーマデデスガ。 ( C ハーン ) エー テセンバデ コグジグイワ  
 なるまでですか。 ( ほあん ) ええ 千歯で 扱ぐ時代は  
 ミナギリハン。  
 ミなぎりはん。

C ハーン ホンナラ マエノ ハナスィデスィネ。 ( D ハイ )  
 ほあん それが 前の 話ですかね。 ( ほい )

D イネカリヤョーガ ノコッヤョツタモンダケン ソレー シラアテ  
 箱(外) 帖か 残ったものをから それを 詰めて  
 イキヨツタラ ソノ… ( C ハー )  
 行ったら その… ( ほい )

A (11)  
 ハー オラダン ミナギーネ カリョツタ。  
 ほあ 私達は みなぎりにか 刈っていた。

B ハイ タイラー アノ ミンナ ミナギラデ ゴザエスィ。  
 ほい たいてい あの みんな みなぎりにて ございます。

D (12)  
 ソーデ つりがケモ アノー シナガンニ<sub>xx</sub> ノ アリガケニ カケ  
 それで 割り掛けも あのの セミに の 割り掛けに 掛け  
 ……。  
 ……。

B ハイ ハイ ムカスィワ アゲテスィガ。  
ほい ほい 昔は ああですが。

D アゲテスカ ヤッパリ。  
ああですが やほり。

B イヤ ゲンザイワ オツィヤツィワ フタ ツィ=ワッテ ケー フツィニ  
いや 現在は 私の衣せどは ニつに割って ツィ ニつに  
ケー。(D ハイ ハイ ハイ)  
つゝ。 ほい ほい ほい

D マハンブンニ。  
眞半分ニ。

B ムカスィワ スィツィカン。  
昔は セ三。

D シチサンデスネ。(B ハー D ハー)  
セ三ですわね。 ほあ ほあ

B フリアイニ アーデモ <sup>カ</sup> ヨー カンソーサーツィー マスィタスィネ。  
割合に あれでも か よう 乾燥 する といりますよわね。

ゲンザイワ アゲナコトオ スィチコクト フィ ダッコクニ カケラ  
現在は あんな事をしてあくと あの 脱穀に かけら

レンヤーニ ----。

れないように ----。

D オジナーイーテスツネ。  
難儀、ですわね。

B オスィナイーテ イケマヘン。  
難儀で、いけません。

D ソーダ <sup>(13)</sup> ハデバフ ナンボ <sup>(14)</sup> ナナサオ ヤサオテスガ。  
それど ほでばは 七棒 八棒ですわ。

B アー マー ナナサオ。  
ああ まあ 七棹。

D ナナサオ。  
七棹。

B ナナサオデスィ コノホーフ ホトンド ナナサオデスィ。  
七棹です この地方は ほとんど 七棹です。

A タイゲー ナナサオデスィネ。 ( B ハー )  
たいてい 七棹ですね。 ( はあ )

D マンダー ヤサオノドーク ツカッ、キョーマスガ ダイタイ ジクガ (15)  
まを ハ棹の道具 使ってしまが おいた 軸が  
モターテ ヤレント オモイナサイマセ (笑)  
重くて やれぬと 思ひなすませ。

B コマキエイクト ヤサオガ (混線不明)  
小島木へ行くと ハ棹が

D オトコガ ホソーテ (混線不明) (笑)  
男が 小さくて

モターテ ヤレマセンケンネ。  
重くて やれませんかね。

B アンニョーズキンゲンノ ホーエ エ エクト マ ヤサオ ホトニ  
安養寺 近辺の 方へ え 行くと ま ハ棹 ほとん

ド ヤサオデスィ。タカエワ スイタカラ マー オナゴスィーガ ナゲ  
ど ハ棹です。 高いわ 下から まあ 女子最が 投げ

ーガ マ ツカエ エネ ドモ……。  
子が ま 短かい 稲 ほど……。

D ヨー ナゲマセンガネ。  
よう 投げませんかねえ。

B (16)  
マタデ<sup>ス</sup>カ。  
またですか。

D マタデネ。 ( B ハハー ) ワサオツ マタデカケーラ ニイデス  
まただね。 ( ははあ ) 上樟は またでかけたらいいです

ワ ( B ハハー ハイハイ )  
わ。 ( ははあ はいはい )

B マタ ウ ナラ ラ ラクネス<sup>ド</sup>モネ ( D ハイ ) ナゲーヤナラ  
また う なす す 楽ですけれどもね ( はい ) 程はよすよす  
ト、ラモ。  
ととも。

D イヤ、マタ ヲク = アーマセンガネ ラケアーカズ。  
いや また(も) 楽に 五リマセンかね 埒があかす。

B マー オツィ アー オツィヤツニワ マー マイズィー ウ ウーン  
まあ 私の家 ああ 表の家などには マー 前頃(は) う ううん

オナゴガ ヨロクン ダッタケニ ナゲヨッタダケニ モー ムマ  
女子か 弱くそ 石だったから 石けていたのがから もう 六

オデ ヤリマス。 ( D ハー ) ゲンガイワネ ナナサオニス  
樟で やりました。 ( はあ ) 現在 はね 七樟にし

ホーマスヨ ミンナ。 ( D ハー ) アー ハデカーガ タエギラ  
マりますよ 全部。 ( はあ ) ああ はで作りか 大儀で

エケマヘン イマンゴラー コタバニサーダテン ハデスィラ バ  
いけせん 今頃は 小葉にすのぶがら はでの面(面積)

ッーノー タクサン シンナラエデネ。 ( キセリの音 )  
ぼっがり 沢山 しなとほやらないね。

D ウキヤケー ソノ マー トーシノ ナンダエダックデスネ カー  
私の家ほど その まあ 当時の 何だえだったんですね 刈り



バツカシテ カット ケー カリス マイナー マテ カツテシマツテ  
 はかりで せつと つい くり終りにまで 刈つてしまつて

$\left( \begin{array}{c} B \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right)$  ソエカラ コンター ター ッタモ コグダンニナリ  
 それから 今度は 次に 扱ぐ段にそれ

— コグエッホーテスター。  $\left( \begin{array}{c} B \text{ ハイ ハイ} \\ \text{はい はい} \end{array} \right)$  シュ ッタモンダ  
 は 扱ぐ一方向である。 してゐるもの。

$\left( \begin{array}{c} C \text{ フーン} \\ \text{ぶん} \end{array} \right) \left( \begin{array}{c} B \text{ ハイ} \\ \text{はい} \end{array} \right)$

## 注記

- (1) 聞きとれぬ。発音者はアキヤーと、アキヤと、アキヤル  
→ アキヤアキヤとあり、アキヤにアキヤアキヤと、アキヤアキヤ
- (2) 広島県には俺をウラというところもある。元来出雲はウラオとあり  
勝つて、ウラは珍らしい。オラの言、違いかも知れない。
- (3) カナは株のこと。何故株をカナというか不明。
- (4) 二行前にヤキゴメがある。同じものをフライゴメという。フライ  
ゴメでは外来者に分かりにくいと思、まずヤキゴメと、アキヤアキヤ
- (5) 自分と卑下してアキエと、アキヤアキヤ
- (6) ナギで扱ぐ音。ナギは機械のナギ時代、穂から籾を落す道具。
- (7) 籾のまだついている穂先。
- (8) 三回にぎりのアキヤアキヤ
- (9) *minagiya* → *minagiya* → ナギヤー。ナギヤーに  
近く聞こえる。
- (10) 素朴なという意。
- (11) オラ → オラドエ → オラダ → オラダワ → オラダシと思われろ。
- (12) 束にした籾を割って籾架にかける。
- (13) 籾を割って架けるものがハデ、ハデバはその場所の本義だが、ハデ  
ラツクル、ハデバラツクルは同じことという。
- (14) 竹の桿を横に組む。出雲地方は、他地方よりかなり高い。七桿は竹  
の段が七、八桿はさらに一本多くとれるけ高くなる。
- (15) ハデはまず、長い木の束を何本か打さ込む。これを柱にして、横に  
竹を組む。軸とはこの木の束という。八段の竹を組めばとれる竹長  
杉の柱を要する。(松の外に、栗の木も用いる。北部の出雲地方は杉の木  
が普通)
- (16) 「また」は又のこと、木の先が二つに分かれていますもの、または先が  
又になって二つの金具をつけた棒。

## 6. 亥の子さん

話し手

| (略号) | (代名)   | (性) | (生年)     |
|------|--------|-----|----------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ  |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ |

A イノコサンツィーモノワ コッツイニャー アンマリ ヤッタコトワ ア  
亥の子さんというものが 55には あり やったことは あ

リマシエンワ ( D ハー ) ハー ウツワ ソノ スィンスーデ  
りませんわ。 ( ハー ) ハー 私の家は その 真宗で

スィンスーワ ナンダミダブツィツィーモンデ ナンダー フゲナフーナ  
真宗は 左むあみがぶつというもので なるも あんまりうま

キョーズィワ アンマリ シェヌ カレーデス、タダケンネ。  
行事は あり しない 寂例 でしたのだからね。

B ウツヤツ = ...  
私の家はどに...

C イノコサンイワイノ ジューイツィアツィノ イノヒデシユーガ  
亥の子さん祝の 十一月の 亥の日でしようか。

B ハイ ハ マ ハスィメテノ イノヒニャー  
はい は 子 初めての 亥の日には

C フーン ナンノ アレ イワレテ ( B コノホーシユー ) モツツィ  
ふうん 何の あれ 因縁で この地方では 餅と搗

ーテ イワフレルコトデスイカイネ。

いって 視ひなせることごとくがね。

A カトノホージャーネー イノコサンノバンニ イワワノモノワ ジャー  
平野部の方ではねえ 亥の子工の 晩に 視わぬ者は 蛇

ウメ コウメイーテ (C フーン ソー ソー) ソノ コドモガ  
生め 子生め(と)言つて ふうん そう どう その 子供が

アルクコター イー (C へー ) ハナスイワ キキョウタドモ  
歩くことほ へえ 話ほ 聞ッていたけれど

コノホージャー ソゲナコト ナイ。

この地方では そんなこと 無い。

C コノアンデモ アゲナコト イー マシヨッタヨ。 イノコサンノバンニ  
この辺でも あんまりこと 言ッていません。 亥の子工の 晩に

モツイツイテ イワワヌ (A ハー ) モノワ ジャウメコウメ (A  
餅搗ッて 視わぬ (はめ) 者は 蛇生め子生め

ウー ) ツノノハエタ コウメ (A ウー ウー ソラー ) イ  
角の生えた 子生め (うう うう せうは) 言

ーテ アノー イー マシヨッタケンネ。

って あのお 言ッてましたからね。

A イータコター イーヨッタドモ。

言ッたことほ 言ッていたか。

C ナョード イマンガラー。

丁度 今頃ほ。

A アルクコドモアー オラダーリョッタ。

歩く子供は ぶらなかつた。

C ナンダエ イワヤー シュンネー ナンダエ ツノノハエタコドモ (A  
何も 視ッもしないのに 何も 角の生えた子供

ハハ一 ) オマレタコト キキマシエンダケン (笑... ながら) ムカ  
 ははあ ) 生まれたこと 聞ておせんながら 昔

ス、ノ ハハ.....  
 の はは.....

B マー コノホーシヤー イノコサンヒニヤー アー ハタケデ ダエコ  
 まあ この地方では 亥の子さんの日には ああ 畑で 大根  
 トランナンツィーコトガネ ( D ハー ) マー ス、カンニナッ  
 取りたい などということがね ( はあ ) まあ 習慣になっ

チヨーマスィワネ。マー ムカスィカラ イーヨッタモンデスィガ。(C  
 っリおすわね。まあ 昔から 言っていたものですか。

ナンゾアッタモンデ ) イマワ ドゲナコトダエ  
 何かあったもので 今では どの子もね

ス、ランガ マー。  
 知らんか まあ。

C アリヤー イノコサンノフデスィカエネ アノ ダイコンノ オーキナ  
 ああは 亥の子さんの 日ですかね あの 大根の 大きな  
 オト オーキネナーオトオ キワト ス、ノーゲナコト ナン.....、  
 音 大きくなる音 聞くと 死ぬるようなこと なん.....。

A アゲーナコト イーヨッタヤーナキガ (1) ショーオ"  
 あんなこと 言っていたような気が すか。

C フーン ダイコヌキエ イキマシエンダケン。  
 ふうん 大根抜きへ 行きおせんのがから。

A アンマリ イノコサンナンツィーモンニヤ ノンズン モタダツタネ。  
 あまり 亥の子さんなどいうものには 関心を 持たなかったね。

B アゲテスィタネ。  
 ああでしたね。

A アー トクスイナギョースイワ ナカック。  
ああ 特殊な 行事は 無かった。

D イエニヨッテ イロイロ アックヨードスガネ ドーモ。 (A ハー)  
家によつて いろいろ あつたようですかね どうも。 (ア)

---

### 注記

- (1) す子は Sルトル → SWα: びま子か。一般には Sα: とする。こゝで  
は S'α: とする。たゞし甚だ聞きにくく下つまじしネ。同会  
者の杉原代の助言による。

7. 膝塗り餅・とろへん・(ほとほと)

話し手

| (略号) | (氏名)   | (性) | (生年)           |
|------|--------|-----|----------------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ       |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治30年生まれ       |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ        |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ (司会者) |

C シュー・グッツィノ ツイタツィデスタ。 フザノリ。  
十二月の ついたちでした。 膝塗り。

D アツキゾー = ニテ スルト (C ムー ) マクレテモ ケガセシ  
小豆雑煮 煮て 塗ると ( ムー ) 転んでも 怪我なし  
ヤー = 。 (B ハイ ソー ソー ) (P.M.)  
なように。 はい そう そう

C シュー・グッツィノ = ナー マストネー ホンネ アノ ヤマー ヤマエ イ  
五月に ぼりまるとねえ ほんじつに あの <sup>xxxxxxxx</sup> 山へ 行  
カレー スープ ヤマエキノ キョー・スィガ アー マスィダケン ムーカラ  
かれる人は 山行きの 行事が ありますのなから せうから

ツキジメイーテ アノ コメ イッ ショーホド ウスノナロエ イ  
搗き初め(と)言ッて あの 米 一升ほど 臼の中へ 入  
(1)

レテ マー ツクマネ スイテネ ソエカラ カミ アノ ナカオリオ  
ルテ まあ 搗く真似してね それから カミ あの 中折エ

ヘリノトコロ コゲ ヌーテ ソーカラ ソコンブカエ イレテネ  
ヘリの所 こう 縫うて それから その中へ 入れね

ソノ ツイタコメオ。ホエカラ 4.5ト マタ ヌーテ ソノ ダ  
その 搗いた米を。それから 5.5ト また 縫うて どの

エコクサンニ アゲ 搗キマシヨッタ。ソーガ ツキジメーダイーテ  
大黒さんに あげておきました。 それから 搗き初め(と)言ッて

ソエカラ マー スイゾメガアーマスイフネ。マー イロイロナ 色  
それから まあ 縫い初めがありますね。 まあ いろいろ 行

ースイガ アーマスイ。イマ ナンダリ アゲーナコト シャーニエンテスイ  
事が あります。 今(は) 何も あんまり しませんです

ケンネ。ソエカラ ナン -----。  
からね。 それから なん -----。

D タツタモ カジエテミテ クダサンセ ドゲナ キーゾク アリ  
順に 教えてみて 下さりませ どんな 行事か あり

マニタカネ。  
ましたかね。

A マー オラドマネー ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ (C  
まあ 私達などねえ じょうごん 十四日かかね

ナヌカネナリ アノ オカエサンオ ) ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ ズイ  
七日になれば あの お粥さんを 十五日の晩か と

ロヘンオ シヨッタエ。( 同笑 ) ワケチモンガ ソノ  
ろへんを していた。 若い者が その



ヨッテネ (2) ヲソノ ヲラグロノホー  
 寄ってね ( C ハハ— ) ソエカラ ヲソノ ヲラグロノホー  
 ははあ それから 他の家のおぢぐろのお

カラ ヲラーヌーテ マーコスラエタリ ソエカラ ジェニ ナニカ  
 から 菓を抜いて 馬(E) 作ったり それから 餅 なん

カエナ アノ ----。  
 だかな あの ----。

D ゼニツナ ----。  
 餅つな ----。

A ジェニツナギカ (3) イーヤーナモノオモツテ モツテエツテ ソノエ  
 餅つなギカ 言うようなものを持って 持って行って その家

--- (4) ---  
 エーノカドエ モツテエツテ トロレン トロレン ( C ハハハ  
 の 門へ 持って行って とろろん とろろん ははは

--- ) イーテ ソノ ソレオ ノツカスツット コンドウ ソ  
 --- (と) 言って その それを 差し出す(いうと) 今度は そ

ノエノモナー じスィカケケラ ートオモツテ ケント カクレケッ  
 の家の者は 水(E) かけてやろうと 思って ちゃんと かくれてい

テ パンヤット じスィーカケテ (一同笑) トロレン トロレン  
 て(来た) はらっど 水をかけて とろろん とろろん

ツィーテ トンデ ニゲーマナ マーナコト ヤツェツク。  
 と行って 飛んで 逃げたような ようなこ(E) やっていた。

B マー (咳) ソーデ イー (咳) イー モツドモ。  
 まあ 是れで 餅など。

A ウ ソレカラ マー (B咳) サキョーダエテ ゴスィトコロモアースィ。  
 う それから まあ 酒を出して くれるところもあるし。

C イレモンオ ダイケョク = ソレ イレモンネ ソノ ジェニツナギカ  
 入れ物E 出しておくと それ 入れものに その 餅つなギカ

ナンダエ ウマダエ ナンダエ イレテ オイテ (A オーマー  
なんか 馬か 何か 入れて おいて ああ まあ

ワラオマコスィラエヲナー ) アノー エンガワニ オクトネー  
茶馬(と)作ったなあ あのう 縁側)に 置てねえ

アー トロフンガ キター ハマー じスィカケ4pレー イーテ ホ  
ああ とろへんか来たあ 早く 水(E)おけてやれ 言って せ  
(5)

イカラ マー カクレキョート ヨー アノー じスィー マカキエ  
ゆから まあ かたれてりよと よう あのう 水E ま かける

テテ ナンデスィカネ ソコエ アノ モツィエレテネ ホエカラ タ  
といて なんですかね そこへ あの 餅(E)入れてね せゆから せ

エキョクト マタ モツテ インデスィケンネ。タツタ キンネンマテ  
しておくと また 持って 帰るですからね。たつた 近年まで

アゲナコト スィマニョッラ スィ。各ード ゴネンヤ スィーネンヤ シエ  
あんなこと してましたよ。丁度 五年や 十年や し

ンデスィダドモ モーシコスィマエゴロマテ。

ないておけゆども もう少し 以前と戻まで(してた)。

B アレフ スィーヨツカダツク。ソエカラ イー マスィ イー ナメカ  
あれは 十四日たつた。 せゆから ます 七日

ニ オカイオタベテ ソエカラ コンド スィーイツンツィニヤ アツチ  
に お粥を食べて せゆから こんど 十一日には 小豆  
(6)

ゾーニータベテネ タウツィーショツタダ。タウツィワ イー セトクワ  
雑煮(E)食べてね 田打(E)していった。 田打は ひと金銀

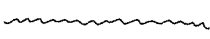
ニシエンゴク フタクワネ マンゴク じクニ カスィスィラスィツィーテ  
二千石 小豆銀で 萬石 千銀に 教知がす"と書いて

イー タウツィーショツタダ。アサマトーニ クライアイダ" = イー  
田打もしていった。 朝早く 暗い間 に

タンナカエ イレテネー。  
田の中へ 入れてねえ。

D ソレヲ マツカガリオ モッテエッテ。  
それは 松飾を 持って行く。

B ハー マツカガリオ ハー ソゲ オサメテ ソエヲ ---。  
はあ 松飾を はあ そう 収めて それから ---。

C  エマンガロ スナハーデスガ フーン。  
今頃 しなまいますですか ふうん。

B ソレガセント コンド マー トロヘンデモスガ ハーカラ コン  
それがすむと こんど 子あ とろへんをどして それから こん

ど スーゴンツノ (A ドンドマン) ドンドマン = オカエト  
ど 十五日の どんどん どんどんには お粥を

モクイテ やスヨッタ。  
ど食べて 休みました。

D マー オトコシーフ ソゲーシテ トロヘンデスカ オナゴシーフ  
子あ 男衆は そうして とろへんですが 女衆は  
(ク)  
ホトホトガ アリヤセンデスカ。  
ほとほとか ありませぬですか。

A ホトホトイモノワネー アンマリ アンマリ イヤー マイノヲ  
ほとほと(ヒ)言うものはねえ あり あり いやー 前の日

ニ ヤリヨッタデスワ アンマリ ユタカデナイトコーノストツギオ  
に やっていましたですわ あり 豊かでない所の 人達か

ネー モツヨケー ツーケランヤーナモンガ モツモウエニ ホト  
ねえ 餅沢山 搦っているような者が 餅(E)貰うには ほと

ホトガイーテ エキテモライヨッタネ。(D ハー) (間) ソリヤ  
ほとど(ヒ)言って 行って貰っていたね。(はあ) それ

一 アンマリ ワーサアソビヨーカ ツイート モツモラ一ツーコト  
は あまり 悪戯遊びよりか 少シ 餅(エ)貰うということ

ガ ソノ ホン ホンヌツタッタデス。 トロヘンワ ソノ アンビ  
カ その 本質 があるです。 とろへんは その 遊び

デ ワーサデ サワグが オモヌロカッソツケデス。フ。

で 悪戯で 騒ぐのが おもしろかったわけですね。

D ホトホトニヤ ナニモツテ イキョツタデスカ。

ホトホト には 何(エ)持って 行ったものですね。

A 釜ニツナギドモ モツテエツタモンジナエカ。 ( D ハー ) (問)  
鉄 つかずでも 持って行ったものではな。ク。

## 注記

- (1) 中折紙のこと。羊紙などまんなかと二つに折ったもの。
- (2) 水田の中に、刈り入れた後、積んである葉。出雲の北部はヌヌヌといふ。あらにお。
- (3) 銭さしともいふ。一文銭と通しておく小縄。
- (4) トロヘンの語義は不明だが、冬の一つの遊び。餅貰い。子供や若者が、貰った餅を食べることを楽しみにする。しかし、受取り時、その家の人から水をかけられる。
- (5) かける、kəkeryu → kəkjəe (カキヤエ)。
- (6) 田打ち行幸のこと。
- (7) 豊かでない人の餅貰い。

# 8. どんど焼, ひとひ正月, こと祭

話し手

| (略号) | (代名)   | (性) | (生年)           |
|------|--------|-----|----------------|
| A    | 藤原安太郎  | 男   | 明治27年生まれ       |
| B    | 渋谷徳右衛門 | 男   | 明治33年生まれ       |
| C    | 長瀬マス子  | 女   | 大正元年生まれ        |
| D    | 杉原清一   | 男   | 昭和11年生まれ (司会者) |

D ソーデ トンドサンニ ナリマスネ  
 それで どんどさんには なりませぬ

B ハー (問) (答エテアヒ音) トンドサンワ ムカスワ-----  
 ほか どんどさんは 昔は-----

A ソリヤー コノ クビスィー ヨツテネ。  
 それは この 組中(か)寄ってね。

B クビアーテ イー シューダエニ。  
 組合って 盆大に。

A シューグツツイ カガツタモノオ ゴツト モツヨツテ ハーカ タチ。  
 正月 飾ったものを 全部 持ちよって それから 竹

ーマンテカエ タテチエテ ぶータエテ ソノ タケノ カエツク  
 を真中へ 立てておいて 火をたいて その 竹の 倒れた

ホーガ マンガエーツィーコト ナンツィーテネ ( B ハー ) ヤ  
 方が 運がよいということ 何と云ってね ( ハー ) ヤ

マシヨッタワ。  
ってしましたわ。

B イー カキヅメヤナンカエ ス<sub>1</sub>キョッタ ヤツネ (A アー) モッ  
書き初めやなにか していた やつ(物)ね (ああ) 持っ

テエッテ コー イー スー ツケテ ハナス<sub>1</sub>ヨッタワ。  
て行って こう 火をつけて 放していった。

A タカーニ アガッタホーガ (B ハー) ジョーシニナー ツーパ  
高く 上がった方が (まあ) (字が)上手になる と言う

ーナコトエッテ マー ヤ ハズンデ ヤリョッタデスワネー。キネ  
ようなこと(と)言って まあ や 弾んで やっていたわねえ。近年  
ンワ アゲナコトモ ネヤネナーマスタワ。  
は あんなことも ないようになりましてわ。

D トンドカンオ カークボワ コーキマッ ヴーマシタデスカ。  
どんどんを する 田は こう決まっていたのです。

A ズー ゴンツィデス<sub>1</sub>。  
+ 五日です。

D イヤ タガ。  
いや 田か。

A マー ホボ キマッ ヴーマスタネ。クミズー ソノ ヨーコトデス<sub>1</sub>  
まあ ほぼ 決まっていたね。組中(か) その 寄りことです  
ケン マンナカアターノ イーホーノトコロエ。  
から 真中あたりの いい方の所へ。

D ソノ トンドークボ<sup>(1)</sup>ナンチテ キマッタトコーワ ナイワケデス  
その とんど(鐘)田などと言って 決めた所は ない話です  
ネ  
ね。

A ハー ホー ツヤナコトフ ケー マッタコター アーマヘノフ ナ  
 はあ (意味不明) つい やったことは ありませんわ な  
 ントナク ズーゴンツノ アサマニ。  
 んとなく 十五日の 朝に。

D イヤ イヤ ヨロシユゴザエンスケドモ ウケンホーシヤー トンドー  
 いや いや よろしくございませぬけれども 私の方では とんどう  
 クボダイーテネ ( B ハー ハー ) キマツクヨーデスワ。  
 窪ちと云ってね (はあ はあ) (田が) 決まっているのでわ。

B ハイ ソーデス。  
 はい そうです。

A クボガネー ホーホー ハハー ソクネマシヤー。  
 窪かねえ ほうほう ははあ そんなにまでは。

B ソクネマデワー ドーモ。  
 そんなにまではお どうも。

A ソーデ ナカッタヤーデスィネ ウツノホーシヤー。  
 そうで ながらたようにすね 私の方では。

D ソエカラ コンドウ (P6) (小田の戸で) ナニニナーマスカネ  
 それから こんどは 何になりますかね  
 ハツカシヨーグアツ……。  
 はつが正月……。

C ズーロクンツワ トキノ ショーグアツダエツテ ヤスイマシヨツタガネ。  
 十六日は 時の 正月 だ(と)言って 休みましたかね。

( D ハー ハー ) ホトケサンノニューグアツ ( D ハー ハー )  
 ( はあ はあ ) 仏さんの 正月 ( はあ はあ )

ヤスィン マシヨツタガネ コンヂ<sup>ニ</sup> ハツオシヨ-グ<sup>ツ</sup>ツィ ニスィ-ハ ツィニツィガ<sup>ニ</sup>  
 休みましたかね。 こんどは はつが正月 二十八日か  
 (2)  
 シア<sup>ツ</sup>マツリ。 (問)。 フテ-シヨ-グ<sup>ツ</sup>ツィ。  
 杓子祭。 ヴヒ<sup>ニ</sup>正月。

B フテ-シヨ-グ<sup>ツ</sup>ツィ。  
 ヴヒ<sup>ニ</sup>正月。

C ニグ<sup>ツ</sup>ツィノ ツィ<sup>ツ</sup>ツィガ ソーデ エ スィマ<sup>ツ</sup>スィ。 (問)  
 二月の一日か それで もう すみます。

D (小ま<sup>ツ</sup>声<sup>ツ</sup>) ニグ<sup>ツ</sup>ツィニ ハイッテカラワ ドケニナリマヌカエ  
 二月に 入ってからは どんなにナリますかね。  
 ネ。 (問)

C コトマツリ イ- イ-コトフ アノ イワレマシヨツタガ<sup>ニ</sup> アリャ-  
 ことまつり <sup>xxxx</sup> 言うことは あの 言っておられたか<sup>ニ</sup> あれは  
 (3)  
 ナンノコトデスィカ。 コト エワイツラネ アノ ナンナト アノ  
 何の事ですか。 こと祝と 言っ<sup>テ</sup>ね あの なんでも あの

シオケゴハンナト コスィラエテ スィボニスィテネ ホエカラ アノ  
 塩気御飯(まぜめし)なりと 作って 苞にしてね それから あの

ジュ-ニ (キセルの音) ジェンノ ヤナキ<sup>ツ</sup>デ<sup>ニ</sup> ハスィコスィラエテ  
 ナニ 膳の 柳で 箸(区)作って

ソレ アノ ツィナイデ<sup>ニ</sup>ネ ホエカラ フッカケケエタリナンカ ナ  
 それ あの つないでね それから ひっかけておいたりなど マ

ジュナハ-リヨツタ。 ソレ ナンノ ツィ-デスィ<sup>ツ</sup>ダ<sup>ニ</sup>エラ スィラン。 コトエ  
 せなま<sup>ツ</sup>ていた。 それ 何(の) というのでオヤサ 知らん。 こと祝

ワエダ<sup>ニ</sup> ツィ-テ (B ハ- ソ- ソ- ) アリャ- ニグ<sup>ツ</sup>ツィ<sup>ツ</sup>テ  
 だ と 言っ<sup>テ</sup> (ハ- ソ- ソ- ) あれは 二月で



スタカエネ。

したかね。

B アー ニグツィゴロデツ ナカツタカエネ。(問)

ああ 二月頃では なかたかね。

D ソースル ダイタイ ホンナラ ソーシマスト ショーガツキョージモ  
そうす(と) だいたい それなら そうしますと 正月行事も

オワリマスト コンタマタ ハルノ ナクノジュンビニ ナルワケ  
終わりますと こんどはまた 春の 農作の準備に なりわけ

デスネ。

ですね。

B ハイ アゲーデスネ。

はい ああですね。

A マー ニグツィ カンクチャー オーイキガフツテネー。マー コタツ

まあ 二月 三月は 大雪が降ってねえ。まあ 炬燵

で アタツテ モツドモ クーテ コタツで" ケー アタツター  
で あたって 餅でも 食って 炬燵で つい あたったり

チャドモ ノンダーシー タエガエ クラエコーマヌワ。

茶でも 飲んだりし(て) たしか、 暮していますわ。

D ~~~~~ (声小く不明)

B ハー マー ニグツィ カンクツワ ナニブン <sup>(4)</sup> フル コノホーフ  
はあ まあ 二月 三月は なにぶん 昼 この方は

アー イキガ オーゴザイスイダケン ナンダー ナーマニエノフ。  
ああ 雪が 多うございますから なんにも なりませんわ。

D ヤマコドマ サーモノワ ソーデモ ヤマエ エキヨツタモンデス  
山仕事など する者は それでも 山へ 行っていたものです

ドモ ソゲー ネーモナー ナニスイー モーケガ アーシエー アリア  
けれどモ そう(で) ないものは なにする(でもなく) もうけが あらで"は ありま

シズネ ドッコダリ ハハハ ----- (笑う) イマシゴロノ、セーネ。  
せずね どっこも ほほほ ----- 今頃のようにね。

ソノ スイゴトニ テルツイー コトニ イカンデスイケン。  
その 仕事に 出るといふことに はかなのですがら。

---

### 注記

- (1) 畦にかこまれた水田をクボという。窪の漢字でよいかは不明。
- (2) 石見ではヒテーショウガツ。出雲はフテーショウガツ。ヒテーは一日中をいう。この場合は二月一日をいう。
- (3) コトヨワイとも聞こえる。村中の行幸ではなく、一部に行なわれたものらしく、よく分らない。
- (4) 昼の間も雪で仕事ができないう意らしい。

昭和55年 1月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3丁目9番14号

電話 東京(900) 3111(代表)

国立国語研究所刊行書一覽

国立国語研究所報告

|      |                                   |         |        |
|------|-----------------------------------|---------|--------|
| 1    | 八丈島の言語調査                          | 秀英出版刊   | 品切れ    |
| 2    | 言語生活の実態<br>——白河市および付近の農村における——    | "       | "      |
| 3    | 現代語の助詞・助動詞<br>——用法と実例——           | "       | 2,000円 |
| 4    | 婦人雑誌の用語<br>——現代語の語彙調査——           | "       | 品切れ    |
| 5    | 地域社会の言語生活<br>——鶴岡における実態調査——       | "       | "      |
| 6    | 少年と新聞<br>——小学生・中学生の新聞への接近と理解——    | "       | "      |
| 7    | 入門期の言語能力                          | "       | "      |
| 8    | 談話語の実態                            | "       | "      |
| 9    | 読みの実験的研究<br>——音読にあらわれた読みあやまりの分析—— | "       | "      |
| 10   | 低学年の読み書き能力                        | "       | "      |
| 11   | 敬語と敬語意識                           | "       | "      |
| 12   | 総合雑誌の用語(前編)<br>——現代語の語彙調査——       | "       | "      |
| 13   | 総合雑誌の用語(後編)<br>——現代語の語彙調査——       | "       | "      |
| 14   | 中学年の読み書き能力                        | "       | 400円   |
| 15   | 明治初期の新聞の用語                        | "       | 品切れ    |
| 16   | 日本方言の記述的研究                        | 明治書院刊   | "      |
| 17   | 高学年の読み書き能力                        | 秀英出版刊   | "      |
| 18   | 話しことばの文型(1)<br>——対話資料による研究——      | "       | "      |
| 19   | 総合雑誌の用字                           | "       | "      |
| 20   | 同音語の研究                            | "       | "      |
| 21   | 現代雑誌九十種の用語用字(1)<br>——総記および語彙表——   | "       | "      |
| 22   | 現代雑誌九十種の用語用字(2)<br>——漢字表——        | "       | "      |
| 23   | 話しことばの文型(2)<br>——独話資料による研究——      | "       | "      |
| 24   | 横組みの字形に関する研究                      | "       | "      |
| 25   | 現代雑誌九十種の用語用字(3)<br>——分析——         | "       | "      |
| 26   | 小学生の言語能力の発達                       | 明治図書刊   | 2,100円 |
| 27   | 共通語化の過程<br>——北海道における親子三代のことば——    | 秀英出版刊   | 品切れ    |
| 28   | 類義語の研究                            | "       | "      |
| 29   | 戦後の国民各層の文字生活                      | "       | 400円   |
| 30-1 | 日本語地図(1)                          | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ    |
| 30-2 | 日本語地図(2)                          | "       | "      |

|      |                                                    |         |        |
|------|----------------------------------------------------|---------|--------|
| 30-3 | 日 本 言 語 地 図 (3)                                    | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ    |
| 30-4 | 日 本 言 語 地 図 (4)                                    | "       | "      |
| 30-5 | 日 本 言 語 地 図 (5)                                    | "       | "      |
| 30-6 | 日 本 言 語 地 図 (6)                                    | "       | "      |
| 31   | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究                            | 秀英出版刊   | 450円   |
| 32   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)<br>——親族語彙と社会構造——           | "       | 品切れ    |
| 33   | 家庭における子どものコミュニケーション意識                              | "       | 350円   |
| 34   | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (II)<br>——新聞の用語用字調査の処理組織—— | "       | 品切れ    |
| 35   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)<br>——マキ・マケと親族呼称——          | "       | 450円   |
| 36   | 中学生の漢字習得に関する研究                                     | "       | 5,000円 |
| 37   | 電子計算機による新聞の語彙調査                                    | "       | 品切れ    |
| 38   | 電子計算機による新聞の語彙調査(II)                                | "       | 2,800円 |
| 39   | 電子計算機による国語研究(III)                                  | "       | 700円   |
| 40   | 送 り が な 意 識 の 調 査                                  | "       | 1,500円 |
| 41   | 待 遇 表 現 の 実 態<br>——松江24時間調査資料から——                  | "       | 900円   |
| 42   | 電子計算機による新聞の語彙調査(III)                               | "       | 1,200円 |
| 43   | 動詞の意味・用法の記述的研究                                     | "       | 5,000円 |
| 44   | 形容詞の意味・用法の記述的研究                                    | "       | 3,000円 |
| 45   | 幼 児 の 読 み 書 き 能 力                                  | 東京書籍刊   | 4,500円 |
| 46   | 電子計算機による国語研究(IV)                                   | 秀英出版刊   | 700円   |
| 47   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)<br>——性向語彙と価値観——            | "       | 700円   |
| 48   | 電子計算機による新聞の語彙調査(IV)                                | "       | 3,000円 |
| 49   | 電子計算機による国語研究(V)                                    | "       | 900円   |
| 50   | 幼 児 の 文 構 造 の 発 達<br>——3歳～6歳児の場合——                 | "       | 品切れ    |
| 51   | 電子計算機による国語研究(VI)                                   | "       | 1,000円 |
| 52   | 地 域 社 会 の 言 語 生 活<br>——鶴岡における20年前との比較——            | "       | 1,800円 |
| 53   | 言 語 使 用 の 変 遷 (1)<br>——福島県北部地域の面接調査——              | "       | 2,500円 |
| 54   | 電子計算機による国語研究(VII)                                  | "       | 1,000円 |
| 55   | 幼 児 語 の 形 態 論 的 な 分 析<br>——動詞・形容詞・述語名詞——           | "       | 品切れ    |
| 56   | 現 代 新 聞 の 漢 字                                      | "       | 3,000円 |
| 57   | 比 喩 表 現 の 理 論 と 分 類                                | "       | 6,000円 |
| 58   | 幼 児 の 文 法 能 力                                      | 東京書籍刊   | 5,500円 |
| 59   | 電子計算機による国語研究(VIII)                                 | 秀英出版刊   | 1,300円 |
| 60   | X線映画資料による母音の発音の研究<br>——フォネーム研究序説——                 | "       | 2,500円 |
| 61   | 電子計算機による国語研究(IX)                                   | 秀英出版刊   | 1,300円 |
| 62   | 研 究 報 告 集 (1)                                      | "       | 1,700円 |

|    |                      |       |        |
|----|----------------------|-------|--------|
| 63 | 児童の表現力と作文            | 東京書籍刊 | 6,000円 |
| 64 | 各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1) | 秀英出版刊 | 2,000円 |

国立国語研究所資料集

|      |                       |         |        |
|------|-----------------------|---------|--------|
| 1    | 国語関係刊行書目(昭和17~24年)    | 秀英出版刊   | 45円    |
| 2    | 語彙調査——現代新聞用語の一例——     | "       | 品切れ    |
| 3    | 送り仮名法資料集              | "       | "      |
| 4    | 明治以降国語学関係刊行書目         | "       | "      |
| 5    | 沖繩語辞典                 | 大蔵省印刷局刊 | 3,500円 |
| 6    | 分類語彙表                 | 秀英出版刊   | 1,800円 |
| 7    | 動詞・形容詞問題語用例集          | "       | 1,700円 |
| 8    | 現代新聞の漢字調査(中間報告)       | "       | 500円   |
| 9    | 牛店安恩楽鍋用語索引            | "       | 1,500円 |
| 10   | 方言談話資料(1)——山形・群馬・長野—— | "       | 6,000円 |
| 10-2 | 方言談話資料(2)——奈良・高知・長崎—— | "       | 6,000円 |

国立国語研究所論集

|   |            |       |        |
|---|------------|-------|--------|
| 1 | ことばの研究     | 秀英出版刊 | 品切れ    |
| 2 | ことばの研究 第2集 | "     | "      |
| 3 | ことばの研究 第3集 | "     | "      |
| 4 | ことばの研究 第4集 | "     | 1,300円 |
| 5 | ことばの研究 第5集 | "     | 1,300円 |

国立国語研究所年報 秀英出版刊

|    |        |      |    |        |      |
|----|--------|------|----|--------|------|
| 1  | 昭和24年度 | 品切れ  | 16 | 昭和39年度 | 品切れ  |
| 2  | 昭和25年度 | "    | 17 | 昭和40年度 | 250円 |
| 3  | 昭和26年度 | 160円 | 18 | 昭和41年度 | 300円 |
| 4  | 昭和27年度 | 160円 | 19 | 昭和42年度 | 300円 |
| 5  | 昭和28年度 | 品切れ  | 20 | 昭和43年度 | 品切れ  |
| 6  | 昭和29年度 | 200円 | 21 | 昭和44年度 | "    |
| 7  | 昭和30年度 | 品切れ  | 22 | 昭和45年度 | "    |
| 8  | 昭和31年度 | "    | 23 | 昭和46年度 | 450円 |
| 9  | 昭和32年度 | "    | 24 | 昭和47年度 | 450円 |
| 10 | 昭和33年度 | "    | 25 | 昭和48年度 | 品切れ  |
| 11 | 昭和34年度 | "    | 26 | 昭和49年度 | 600円 |
| 12 | 昭和35年度 | 350円 | 27 | 昭和50年度 | 700円 |
| 13 | 昭和36年度 | 160円 | 28 | 昭和51年度 | 非売品  |
| 14 | 昭和37年度 | 220円 | 29 | 昭和52年度 | "    |
| 15 | 昭和38年度 | 250円 | 30 | 昭和53年度 | 800円 |

国語年鑑 秀英出版刊

|        |     |        |     |
|--------|-----|--------|-----|
| 昭和29年版 | 品切れ | 昭和34年版 | 品切れ |
| 昭和30年版 | "   | 昭和35年版 | "   |
| 昭和31年版 | "   | 昭和36年版 | "   |
| 昭和32年版 | "   | 昭和37年版 | "   |
| 昭和33年版 | "   | 昭和38年版 | "   |

|          |        |          |        |
|----------|--------|----------|--------|
| 昭和 39 年版 | 品切れ    | 昭和 47 年版 | 2,200円 |
| 昭和 40 年版 | "      | 昭和 48 年版 | 2,700円 |
| 昭和 41 年版 | "      | 昭和 49 年版 | 3,800円 |
| 昭和 42 年版 | "      | 昭和 50 年版 | 3,800円 |
| 昭和 43 年版 | "      | 昭和 51 年版 | 4,000円 |
| 昭和 44 年版 | 1,500円 | 昭和 52 年版 | 4,500円 |
| 昭和 45 年版 | 1,500円 | 昭和 53 年版 | 4,600円 |
| 昭和 46 年版 | 2,000円 | 昭和 54 年版 | 4,800円 |

### 日本語教育教材

|   |                         |                   |         |      |
|---|-------------------------|-------------------|---------|------|
| 1 | 日本語と日本語教育<br>——発音・表現編—— | 国立国語研究所<br>文化庁 共編 | 大蔵省印刷局刊 | 650円 |
| 2 | 日本語と日本語教育<br>——文字・表現編—— | "                 | "       | 850円 |
| 3 | 日本語の文法(上)               | ——日本語教育指導参考書4——   | "       | 450円 |
| 4 | 日本語教育の評価法               | ——日本語教育指導参考書6——   | "       | 450円 |

|                               |                      |       |        |
|-------------------------------|----------------------|-------|--------|
| 高 校 生 と 新 聞                   | 国立国語研究所<br>日本新聞協会 共編 | 秀英出版刊 | 280円   |
| 青年とマス・コミュニケーション               | 日本新聞協会<br>国立国語研究所 共編 | 金沢書店刊 | 品切れ    |
| 国立国語研究所三十年のあゆみ<br>——研究業績の紹介—— |                      | 秀英出版刊 | 1,500円 |

### 日本語教育教材映画一覧

(各巻16ミリカラー、5分、日本シネセル社販売)

| 巻    | 題 名                                | プリント価格  |
|------|------------------------------------|---------|
| 第1巻  | これはかえるです——「こそあど」+「は～です」——          | 30,000円 |
| 第2巻  | さいふはどこにありますか——「こそあど」+「が～ある」——      | "       |
| 第3巻  | やすくないです、たかいです ——形容詞とその活用導入——       | "       |
| 第4巻  | なにをしましたか ——動詞——                    | "       |
| 第5巻  | しずかなこうえんで ——形容動詞——                 | "       |
| 第6巻  | さあ、かぞえましょう ——助数詞——                 | "       |
| 第7巻  | うつくしいさらになりました ——「なる」「する」——         | "       |
| 第8巻  | きりんはどこにいますか ——「いる」「ある」——           | "       |
| 第9巻  | かまくらをあるきます ——移動の表現——               | "       |
| 第10巻 | おかねをとられました ——受身の表現1——              | "       |
| 第11巻 | どちらがすきですか ——比較・程度の表現——             | "       |
| 第12巻 | もみじがともきれいでした ——「です」「でした」「でしょう」——   | "       |
| 第13巻 | きょうはあめがふっています——「して」「している」「していた」——  | "       |
| 第14巻 | そうじはしてありますか——「してある」「しておく」「してしまう」—— | "       |
| 第15巻 | おみまいにいきませんか ——依頼・勧誘の表現——           | "       |
| 第16巻 | なみのおとがきこえてきます ——「いく」「くる」——         | "       |

(第1巻～第3巻は、文化庁との共同企画・VTR価格1/2インチオープンリール21,000円、3/4インチカセット20,000円)

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE PUBLICATIONS

SOURCE X-IV

TEXTS OF TAPE-RECORDED CONVERSATIONS  
IN JAPANESE DIALECTS

(Volume 4)

CONTENTS

**Foreword**

**Purpose and Outline**

**Text**

- Part 1 : HUKUI PREFECTURE (Town Simonakatuvara, City  
Takehu)
- Part 2 : KYÔTO PREFECTURE (Hamlet Kannondô and Sakura,  
Town Takatuki, City Ayabe)
- Part 3 : SIMANE PREFECTURE (Hamlet Ômaki, Town Yokota,  
District Nita)

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
TOKYO JAPAN

1980